



Title	古代ブルガリア語文法：語幹論
Author(s)	Dobrev, Ivan; 石田, 修一
Citation	大阪外国語大学学術研究双書. 1993, 8, p. 1-285
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80079
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古代ブルガリア語文法

語 幹 論

イヴァン・ドブレフ著

石 田 修 一 訳

1993

古代ブルガリア語文法

語 幹 論

イヴァン・ドブレフ著

石 田 修 一 訳

1993

Publications of Osaka University of Foreign Studies, No. 8 1992

OLD BULGARIAN GRAMMAR

Theory of the foundations

Ivan Dobrev

translated from Bulgarian by Shuichi Ishida

СТАРОБЪЛГАРСКА ГРАМАТИКА

Т е о р и я н а о с н о в и т е

© 1982 by Ivan Dobrev (Иван Добрев Добрев)

с/о JUSAUTOR, Sofia (С о ф и я)

This book is published in Japan with the permission of the Author.

訳 者 序

本書は、ソフィア大学教授イヴァン・ドブレフ氏による「古代ブルガリア語文法、語幹論」(Наука и изкуство 科学と芸術社、1982)の全訳である。

古代ブルガリア語 (старобългарски език, древнеболгарский язык, Old Bulgarian, Altbulgarisch) という名称は、わが国ではなじみが薄く、普通は古代教会スラヴ語 (Altkirchenslavisch, древнецерковнославянский язык, Old Church Slavonic) ないしは古(代)スラヴ語 (vieux slave, старославянский язык) の名称を以て知られている。どの名称が最適であるかは、「にわかには定め難いが、『古代ブルガリア語』はこの言語の行われた地域をあまりに狭く限定している点に、また『古代スラヴ語』は反対にあまり漠然としていて誤解をまねく恐れがある点に難がある」と木村彰一氏は述べられている(古代教会スラヴ語入門、白水社)。厳密には、これは、9世紀中葉にギリシャ語の福音書、祈祷書、典礼書等キリスト教会文献の翻訳に用いられたスラヴ文語である。その翻訳に用いられたスラヴ文語は、当時のブルガリア(マケドニア地方)方言を基盤としたものである。ただし、残存しているのは10-11世紀の写本であって、普通はこれらの写本やこの時期に書かれたオリジナル(翻訳ではない)も含めて上のタームを使っている。

以上に関連して、ここで若干用語の問題に触れておきたい。

鳥山成人氏は、黒海沿岸を芝居の舞台に喩えて、ここが「世界史の上でも、最も登場人物の多い舞台であり、その舞台に登場する人物の共通点は、必ず上手-東方から現れて、下手-西方に消えてゆく、したがって、下手の楽屋にあたるバルカン半島には、スラヴあり、アジアの遊牧民ありの複雑な国家形成が行われるに至った」と書かれている(大世界史 15、スラヴの発展、文芸春秋社)。スキタイ、サルマト、ゴート、フン、アヴァール、ブルガール、マジャール、ペチェネグ、ポロヴェツの興亡である。ブルガール族(原

ブルガール人)は、本来チュルク系の民族であって、終点バルカンに至る以前は、ヴォルガ下流のステップ地帯にあり、そこからハザールに追われて、一部はヴォルガ中流域にブルガール汗国を作り、もう一つの集団がドナウ河畔・バルカン半島にブルガール国を作ったのである(7世紀末)。アジアから来たブルガールは、バルカン半島に居住していたスラヴ人(スロヴェネ)を征服しつつ、一方では文化的・民族的に、次第に圧倒的多数のスラヴ人に同化されていったのである(9世紀の内に同化をほぼ完了した)。そして、ブルガールを同化・吸収したスラヴ人自らがブルガリア人を名乗り始めるのである。

ブルガリアの優れたスラヴィストであり、印欧学者であったムラデーノフ(Стефан Младенов, 1880 — 1963)はバルカン半島のスラヴ人が征服者から受容したのは、民族名と文化面の若干の単語と国家組織・規律の基本精神だけであって、冷静な立場でもって、ブルガリア語を純粋なスラヴ語と見なし得るとして、異民族語を自らの民族名に冠した二つの事例(フランス人とロシア人)を挙げたのである:「西にあっては、フランス人は、完全にロマンス方言を保存したのに、異民族のゲルマン名を受容したガリア・ロマンス人に起源を持つ。東にあっては、言語的にはブルガリア人と同じくスラヴ人でありながら、フランス人と同じくゲルマン名を冠したロシア人(русите・ルシ人)がある。古代ブルガリア語という場合も、古フランス語や古代ロシア語について述べるときに、常にガリア・ロマンス人や東スラヴ人の言語だけを想定するのと同じなのである。この名称の意味は、当然古バルカンのスロヴェネ(СЛОВѢНЕ)の言語のことでなければならない・・・アスパルフの率いたブルガール人の言語に対しては、『原ブルガール語』(първобългарски, Protobulgarisch)という立派な名称がある」(История на Българския език, София, 1979, Издателство на Българската Академия на Науките, стр. 32 [Geschichte der bulgarischen Sprache, 1929])。

フランスや旧ソヴィエトの学界は、古（代）スラヴ語の名称を好んで使ってきた。例えば、ハブルガエフ（Г. А. Хабургаев）は、「古代教会スラヴ語」という用語が、① キリスト教会の言語としてのこの言語の役割、機能を明確化し、② 「古代」（древне-）を冠することによって、後のローカルな教会スラヴ語との関係を明確化する点で評価できるが、この言語が、① 非常に早くから（10-11世紀に）教会の言語としてだけではなく、学術・文学の言語として利用され始めること、② 多数のスラヴ文語に長期にわたる深い影響を与え続けてきたこと、③「古（代）」（старо-）の付加によって、他のスラヴ諸語と区別し、かつその言語学的な意義を明示できること、④ 簡便であり、しかも後のローカルな教会スラヴ語という名称との混同を回避できる、という理由で、今日では、「古（代）スラヴ語」の名称を使うスラヴィストの方が多い、という自説を展開している（Старославянский язык, Москва, Просвещение, 1974, стр. 6 - 8）。ただし、この二つの用語とも、この言語が何れのスラヴ語群に属するものなのかという点、つまりこの文語の基盤となった当時の実際の民族語への分属を明示しないという点では問題があると思われる。その点では、「古代ブルガリア語」という名称は、スラヴ語南群への分属を明示できるのである。なお、訳者は、以上を勘案し、かつ菱山忍先生に倣って、「古スラヴ語」という用語を使っておきたい（ロシア語史概説—古代ロシア研究 4, 5, 8号、1964 - 1967）。

何れにしても、たとえブルガリアという名称自体が本来スラヴのものではないとしても、古スラヴ語の一切の原点がブルガリア（マケドニア）の地にある以上、ブルガリアの人々がこれを古代ブルガリア語と呼び慣わして来たのは当然のことである。古スラヴ語は、スラヴ世界の言語史と文化史の上に巨大な足跡を残し、スラヴ研究の原点であるべき重要な言語であり、そのためヨーロッパでは早くから研究が盛んであるが、わが国で公刊された古スラヴ関係の図書は、現在までに僅かに二書 — 小川利治「古代」教会スラヴ語文法 広文堂 1971（絶版）； 木村彰一 古代教会スラヴ語入門 白水社

1985 — を数えるのみである。しかも、これらは入門書であり、したがって印欧語との比較歴史的な観点は欠落している。本書は、印欧語比較文法の観点から、加えて近年の類型学的な印欧語研究の成果をベースにして、古スラヴ語の語と語形の成り立ちを解釈、論究したものである。したがって、先ず第一には、青年文法学派以来の研究の総括とラリンガル・モデルによる語(祖形)の設定・提示、第二に、活格構造言語としての印欧祖語と古スラヴ語におけるその痕跡の証明、が本書を貫徹している二大特徴である。

活格言語 (active languages) については、京都大学の山口巖先生が、日本ロシア文学会関西西部会で発表された「ロシア語の類型学」(1989)、次いで「アジアの諸言語と一般言語学」(三省堂 1990) に発表された論文「ロシア語の類型学的考察」において、その大要を知ることができる。すなわち、主述関係を柱にして言語構造を見ると、概して、印欧語等一連の言語が、活格言語 → 能格言語 (ergative languages) → 対格(主格)言語 (accusative [nominative] languages) という歴史的な連関性を持って発達してきた(印欧語は、この能格段階を外す)ことを知るのである。活格言語の大きな特徴として、① 名詞を有生 (animate) と無生 (inanimate) に類別し、② 名詞に形態の存在する場合には、活格 (active case) と絶対格 (absolute case) を区別すること、また③ 動詞もこれに対応して、有生に関係する活格動詞 (active verbs) と無生に関係する絶対格動詞 (absolute verbs) に分類されること、したがって、対格言語の自動詞と他動詞の大部分が活格動詞(行為動詞)に含まれ、自動詞に属する状態動詞は形容詞述語や名詞述語に属するものと共に絶対格動詞(状態動詞)を構成すること、④

有生は活格及び不活格の両方を取り得るが、無生の場合は絶対格しか取り得ないこと、活格は活格動詞の論理的主語として用いるだけであるが、絶対格は、活格動詞の論理的目的語と絶対格動詞の論理的主語として用いること、等を挙げることができる。さらに、これらのことから、活格言語は、第一次のシンタグマの構成法においては、能格言語と同じであり、すなわち「不活格(絶対格) + 動詞述語」であり、この第一次シンタグマに対する活格ない

しは能格の付加如何が、活格（能格）動詞か不活格（絶対格）動詞かの差異であること、これにたいして、対格言語では、[主格+動詞述語]が第一次のシンタグマを構成し、対格（目的語）の付加如何によって、他動詞と自動詞の類別を行うことが明らかになる。しかし、能格言語は、動詞（行為）を能動性の強弱の程度に応じて類別することから、目的語を伴う動詞は能格動詞に、状態を表すものは絶対格動詞に分属されることになり、活格言語の動詞分類よりは対格言語の動詞分類により近いという関係にある。

ステパーノフ（Ю. С. Степанов）は印欧語の発達段階は、ガムクレリーゼ、イヴァノフ期（活格構造の段階、ただし能格現象の混在期）→（いくつかの中間段階）→ウーレンベク期（活格構造の崩壊期、すなわちこの構造に特有の名詞と動詞の類別及び形態特徴の崩壊期であり、バルト・スラヴ的、ギリシャ・アーリア的なディアテシス・アスペクト・テンス体系の萌芽期）だとしている（Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов, Индоевропейский язык и индоевропейцы, 1984, Изд. АН СССР 及び С.С. Uhlenbeck, Agens und patiens im Kasussystem der indogermanischen Sprachen, 1901, Indogermanische Forschungen, Bd.12 の研究対象となっている時期のこと）。彼によれば、印欧語にかつて存在した文型は、最低限三種：Ⅰ. 不活性主体（物）+不活格動詞（例、雪が解けている。石が横たわっている^[1]、突き出ている。）、Ⅱ. 活性主体（人ないしは人に準ずるもの）+活格動詞（例、人が歩いて行く。熊が横たわっている^[2]。「ある」「横たわっている」「立っている」「座っている」の動詞には、主体が活性類か不活性類かに応じて2種類ずつ計8個の動詞が認められるという）、Ⅲ. 活性主体+活格動詞+不活性客体（例、人が石を置く。熊が石を置く。）であり、発達した主格・対格構造の言語においては、さらに、*Ⅳ. 活性主体+動詞+活性客体、**Ⅴ. 不活性主体+動詞+不活性客体、***Ⅵ. 不活性主体+動詞+活性客体（*印は出現可能性の程度を表す、また、活性主体=активный субъект、不活性客体=неактивный объект）

ект等)の文型が理論的に想定でき、この内Ⅰ～Ⅳ型までが、印欧祖語に可能であった基本文型 (major sentence types) であるという (Индоевропейское предложение, Москва, 1989, Наука)。

本書の内容も、こうした研究の基本方向を背景にしながら、またガムクレリーゼ、イヴァノフ等と同時期に記述されたものであると考えられる。本書の内容を簡単に要約することは難しいが、大きな柱としては、次のような動詞組織と名詞組織の発達過程の記述である：

① 古い動作態 (Aktionsart) の種類とテンス・アスペクトの萌芽・生成過程。印欧語の過去形・完了形と古スラヴ語の過去形・完了形の生成過程とそれらの関係 (疊音、加音の方法によって過去形を作った古典語との関係、古スラヴ語アオリスト内での第Ⅰ、第Ⅱシグマ・アオリストの関係等)。

② 名詞の文法性と格と数の生成過程とその意義 (男性、女性、中性名詞の類別の意義、一連の母音幹、子音幹名詞の幹母音の意義、集合名詞等)。

しかし、それにもまして著者が力を込めて書いたと思われるのは、いわゆる *nomina anomala* (変則曲用名詞、o-, jo-, i- 語幹の正常曲用を有する一方で、es-, er-, u- 語幹の子音幹曲用を行う男性、中性名詞) に秘められている古代世界のシャーマニズムと古い名詞曲用類の関連の問題である。すなわち、著者は、活格構造的な発想自体が持つ自然認識と世界認識、またそれとの関連での er 語幹の起源、スラヴ語等のアオリストや es 語幹名詞が包摂するシグマ指標と u 語幹名詞の裏に隠された認識論的な意義についてサスペンス的な推論を展開して行くのである。最近、ドブレフ氏自身より、「スラヴ祖語の子音幹及び二重音幹曲用の起源と意義」(Иван Добрев, Произход и значение на праславянското консонантно и дифтонгично склонение, София, 1982, Издателство на Българската Академия на Науките) [発行部数 600] という大変貴重な著書を恵与されたが、これは正にこの *nomina*

anomala を扱ったものである。特に、著者の手紙によれば、同書の約7割を占める第三章「スラヴ祖語 u 語幹の起源と意義（スラヴ新年祝い歌 [коледни песни] の真髄）」（注、коледни песни = ロシア語 コリャダーの歌 коляда, колядка）は、同氏の博士論文（1984年）となったものである（序文の他三つの章からなり、第一章は es- 語幹、第二章は er- 語幹の起源と意義がテーマである）。したがって、本訳書に見られる同テーマについての記述は、正に著者の得意とする分野であり、その意味で、ここには同テーマについて他書に見られない著者独自の見識が示されていると言えよう。訳者は、最近入手したばかりの同モノグラフを読破し得ていないが、我々は著者が次のように述べていることに留意しておきたい。「es, er, u の接尾辞は、nt, i の接尾辞とは違って、新しいスラヴ語語根には付加され得ないものである。このことは、恐らく、これが我々以前に死滅した曲用類であり、その存在は、紀元前1000年期後半にはもはやスラヴ人の世界観に基盤を持たなかったことを示唆したものである。しかし、かつての es-, er-, u- 語幹曲用は、多かれ少なかれ、他の古い印欧語族（ギリシャ、イタリア、古ゲルマン、一部インド・イラン）の言語の中にも散在している。これら諸族は、スラヴ人よりはるかに早くから地中海、黒海北部、近東文明に接触しているのである。全体的に見て、彼らの精神性には、バルト人と共に最も遅れてヨーロッパ史と世界史に編入された原始スラヴ人の世界観に比べれば、古めかしい特徴は希薄である。個々の印欧語族の宗教、信仰、慣習は個別的に取り上げれば、どれ一つとして、始原的な子音幹曲用、二重音曲用類のテーマ領域に対する鍵を提供し得ないのである。es-, er- そしてまた一部 u- 語幹名詞が属するテーマ領域は、はるかに古いユーラシア文化の歴史的脈絡の中でのみ確定しかつ解明できるのである」（同書 p.5 - 6）。

さらに同モノグラフの内容について、若干紹介しておきたい。例えば、本訳書 §. 20 にも扱われている s-praesentia の動詞語彙類の問題である。これらを並べてみる時、そこには古代世界のシャーマンについての一つの簡

単なシナリオができあがるほどだという。すなわち、これらの動詞類は、精神的興奮状態を表す動詞、(耳をそばだてて) 聴くことを表す動詞 (слухъ, слышати < *k'leu-s-)、動物的な鳴き声、うなり声を表す動詞、身にまとう、装うことを表す動詞、(全身が) 震えることを表す動詞、律動的に両手を動かし、振ることを表す動詞、引き裂き、引き破ることを表す動詞、凝視、注視することを表す動詞 (ラ visō 「正確に見る、観察する」)、恐怖、狂暴状態、怒髪天を衝く状態に陥ることを表す動詞、守り、擁護し、救うことを表す動詞、乗り物に乗って行く、旅に出ることを表す動詞であるという。ここから思い浮かぶシャーマンの情景は、次のようなものになるという — 先ず、強い精神的興奮状態に入って、次第に錯乱、驚愕、戦慄の様相を帯び、次いで痙攣状態に陥って身体は震え、金縛りの静止状態がやってくる、聴覚と視覚は研ぎ澄まされ、動物的ないななき、うなりにも似た意味不明の言葉を語り始める、ある特別な衣を纏い、鳥が飛ぶように両手を振り、何かの動物の背に乗って旅に出る、そして霊を追ひ払うように息を吹き付けて一族の人を救うのである。こうして、著者は、スラヴ祖語 (印欧語) の接尾辞 *es (*s) の意味は、「ユーラシアのシャーマニズムに照らして観察すれば、一層明白になろう」(同書 p.10) と主張するのである。したがって、著者は、古スラヴ語の es 接尾辞の中性名詞の大部分は類推によるものだとした、かつてのメイエ (A.Meillet) 等の主張に反対するのである (同書 p.32)。

また、著者は、スラヴ祖語の er 語幹名詞の語彙類が、非分離の所有 (属性) (неотделима принадлежность) 表現に関連があることを、§. 16 で述べているが、これらのカテゴリーもまた、メラネシア方言 (オーストラリア)、北アメリカ・インディアン族の一部の言語、ユーラシア (トゥングース・満洲諸語、アディゲ語 — カフカス山脈西北麓アディゲ自治共和国の主要民族) のいくつかの言語に類例が見られるという。非分離の所有 (属性) とは何か。ブルークマンの「印欧語比較文法」(K.Brugmann, Vergleichende Grammatik der indogermanischen

Sprachen, II, 1, Leipzig, 1906) による印欧語接尾辞 *er (*ter) の五分類を引用しながら、著者は、これらの共通の意味基盤は、ボアス (F. Boas, Handbook of American Indian Languages, Washington, 1911) のいう intransferable possession (譲渡不能所有) ないしは inseparable possession (非分離所有)、ヤコヴレフ及びアシハマフ (Н. Яковлев, Д. Ашхамаф, Грамматика адыгейского литературного языка, М., 1941) のいう неотчуждаемая, органическая принадлежность (分離不能的、有機的所有〔属性〕) である、としている。一序でながら、ガムクレリゼ、イヴァノフの前掲書にも同じ用語が使われている (I, p.289-290)。「非分離の所有範疇は、相互に密接かつ有機的に結びついている人、もの、事物に關係する範疇、すなわち肉体全体に対する肉体の部分や器官の關係、事物全体に対する事物の一部の關係、ある種の親族關係 (とりわけ眞の血縁的親族關係)、ある種の空間・時間關係、ある種の武器、衣服、切削器、事物である。非分離の所有は、専用の接辞 (affix) によって表されるが、それは通常の意味での所有接辞ではなく、本来的な恒常的連関性を証する接辞なのである。親族名称や肉体部分の名称の場合、この接辞は、むしろ人間と人間にとって分離不能な構成要素 (最も近い親族、肉体器官) 間の同一・一体性 (identity) の表徴である。レヴィ・ブリュール (L. Lévy-Bruhl) によれば、この接辞の意味は、関与 (participation) であって、所有 (possession) ではない、すなわち所有ではなくて、主体との不可分一体性を表す語である」(同書 p.35-36)。したがって、例えば、印欧語に多数見られる nomina instrumenti (道具名詞) や nomina agentis (行為者名詞) の接辞 *er (*ter, *tro, *dhro) は、本来、道具、行為者の意味を持つものではなく、生活必需品や人を取り囲む世界の現象の名称に非分離的な所有の表徴を与えた記号である (古ブ **КАМЪ** [自然の石] に対する 古高ド hamar 「ハンマー [加工した石、切削石器]」; ゴ fōn 「火 [自然現象としての]」に対する ギ πûρ 「火 [家庭の、炉の]」; 古

ブ **ДАНЫ**, ラ *dōnum* 「* 利用に供せられるもの」に対する ギ *δῶρον*, 古ブ **ДАРО** 「* 不変の、返済義務のない贈り物」等) という (同書 p.39)。また、シャーマンの宇宙観に関連する用語類を含んでいる (**СТВЕРЪ, ПЕШТЕРА, ЕЗЕРО** 等) (p.40)。さらに、上例のように非分離所有を表す接尾辞を有する諸言語にあって、この接尾辞が、中動 (不活格、非他動) 活用の接尾辞、すなわち「動詞の表す特質が、主体と不可分一体であり、主体の領分に留まり、他の対象に及ぼされないことを表す接尾辞」 (同書 p.7) と同一であることを確認するのである。

なお、この範疇一般については、フィルモア (Ch. J. Fillmore) 等も扱っているが (「格文法の原理」、活格構造全体を展望しながら、これを活格構造にこそ内包連係する現象として最も系統的に扱ったのは、クリモフ (Г. А. Климов) であろう (Типология языков активно о строя, М., 1976, p. 148-156)。そして、わが国で初めて、これを、活格構造の「包含事象」として論じられたのは、山口巖先生の「類型学」 (京都大学出版会近刊予定) である: 「活格言語は対象を活性と不活性に分類することを基本原理としており、また活性のクラスの名詞の方が社会的に重要な役割を持つ対象を表しているから、活性のクラスに属する対象の勢力範囲、あるいはこの対象の所属を示す必要が大きいのはよく理解できる。したがって活性のクラスの対象の所属の表示は、活格言語の包含事象の一つであるといえることができる。このような所属の表現は、非分離所有 *organic possessive* と分離所有 *inorganic possessive* とに分けられる」 (草稿、第一部 類型学の概念、内容類型学の進展 — I 能格言語、II 活格言語、より)。

さらに、スラヴ祖語の *u* 語幹名詞が、原始スラヴの天地創造神話に関連があることは、§. 25 において詳細に検討されているが、そのことを最も完全な形で立証できるのは、古いスラヴのコリャダー (新年祝い歌) であるという: 「スラヴ神話が反映されているスラヴのフォークロアを比較方法によって詳しく調べた結果、原始スラヴの *u* 語幹曲用の本質は、スラヴ・

コリャダーの祝祭に関連があるという結論に達した」(同書 p.41)。また、「ザカルパチエ・ウクライナとブルガリアのコリャダー歌の比較対照」を研究の中心に据えつつ、これらスラヴのコリャダー歌と古代北方(古アイスランド)の物語伝説の一部、すなわち「エッダ」のプロットの間には「疑うべからざる関連を確認した。このことは、スラヴのコリャダーの主題の一部は明らかに印欧起源であることを示唆している。私は、このフォークロアの分析を、u 語幹の神話的解釈全体の基礎に据える」(同書 p.7)としている。さらに、著者は、スラヴ民俗学が、これら歌謡の内容について「完璧に」紹介する一方で、その起源や本質についてはほとんど何の関心も示していないし、理解していないと指摘している(同書 p.7, 42)。こうした著者の発言からして、本書の u 語幹の記述は、比較民俗学的な研究の成果であることが判るのである。u 語幹の章については、訳者はこの訳業終了の段階でいまだ全てを読み終えることができなかったが、この読解には、スラヴや北欧のフォークロアの研究者の協力が必要であるように思われる。

さて、これら二つの著書の基底に流れる、ドブレフ氏の言語研究に対する態度には、共通のものがある。それは、語根が、形態素が、したがって音が全て意味を持って語られるという共通性である。上述の、山口先生の「類型学」の第四部「類型学の応用 — 比較言語学におけるガムクレリゼの試み」(草稿 §. 115)においても、音韻のレヴェルと言語類型の関係について指摘され、「少なくとも現在のところ、音韻のレヴェルに関しては、音韻体系の中の音韻相互の関係のあり方、その実現の一般的な可能性の問題に、研究が限定されているのが、現状であると思われる」とされているが、ドブレフ氏の仕事もまた、言語研究の本来あるべき方向に向けての一つの試案であろうと思われる。言語現象の細部についてのあれこれの研究は、総合的な視点で総括できなければ、すなわち真の意味での分析と総合がなければ、結局、群盲象をなでるが如き結果に終わるであろうからである。ドブレフ氏の手紙によれば、同氏は 1967 — 1968年及び1974年の二度にわたって旧レニングラード(現サンクトペテルブルク)とモスクワで研鑽を積んだという。一緒

に送られてきた同氏の論文「印欧語語根の子音構造」(Консонантната структура на индоевропейския корен, 1992, Език и литература XLVII)には、ガムクレリゼ、イヴァノフ論文が随所に引用されていることからみても、当然、ガムクレリゼやイヴァノフ氏等旧ソヴィエトのこうした研究の潮流には接触されていたであろうと思われる。興味深いところである。

ともあれ、本書は、ロシア語学徒を初めとするスラヴ学徒は勿論、他の印欧語を専門とする人たちにとっても大変興味深いものでであろうと思われる。訳者として、もし本書に副題を付けるとすれば、「印欧語比較歴史文法から見た古スラヴ語文法」ともいうべき豊かな内容を含んでいるからである。また、記述が具体的で、用例が豊富である。さらに、文化人類学的にみても上述のような極めて興味深い内容を含んでおり、人類が自然に対する畏れとそれによって立つ世界観の中で言語を生成して来たことが判るのである。日本のスラヴ学徒は、西欧や一部東欧(ロシア、チェコやポーランド)の文献は読むが、ブルガリアの文献を無視しがちである。しかし、考えてみれば、古スラヴ語研究は、ブルガリアの地においてこそ最も先進的であって当然であろう。

索引の欠落、翻訳文の的確さという点で大いに心残りであるが、こうした内容の著書がブルガリアの地で発行されていることに注意を喚起できれば、それだけでもう今回の訳者の使命は十分に果たせたであろうと考えている。

今回の翻訳を承諾され、加えて御自分の関係論文と関係著書を御恵送くださった原著者イヴァン・ドブレフ教授、そして版權問題で奔走してくださった在日ブルガリア大使館のゲオルギ・コスチャネフ氏、そのコスチャネフ氏に連絡を取ってくださった在ソフィア日本大使館の大嶋勝氏、大嶋氏をご紹介戴き、ヴェリコ・タルノヴォ大学の知人宛連絡を取ってくださった香川大学の山田勇先生の御好意に対して心から感謝する次第である。

1992年11月 奈良にて

凡 例

1. 頻出する略語は、以下の通りである。比較的頻度の低い語（例、ヒット、ドーリス等）については、略語を使っていない。

ギ	ギリシャ語	グ	グラゴール文字
ラ	ラテン語	1	1人称
ゴ	ゴート語	2	2人称
古イ	古代インド語	3	3人称
古プ	古プロシャ語	単	単数
ド	ドイツ語	複	複数
古高ド	古高地ドイツ語	双	双数
ア	アルメニア語	現	現在
リ	リトアニア語	過	過去
ラト	ラトヴィア語	未	未来
ブ	ブルガリア語	完	完了（パーフェクト）
古ブ	古代ブルガリア語	未完	未完了過去 （インパーフェクト）
ロ	ロシア語	アオ	アオリスト
古ロ	古代ロシア語	スピ	スピーヌム （supinum）
スラ祖	スラヴ祖語	能過分	能動過去分詞
セ・ク	セルビア・クロアチア語	受過分	受動過去分詞
ス	スロヴェニア語	不	不定詞
チ	チェコ語	命	命令法
スロ	スロヴァキア語	希	希求法
ポ	ポーランド語	接	接続法
古	古（代）	主	主格
能	能動相	生	生格
受	受動相		
中動	中動相		

男	男性	属	属格
女	女性	奪	奪格
中	中性	与	与格
完	完了体 (§.40)	対	対格
不完	不完了体 (§.40)	造	造格
		具	具格
		所 (処)	所 (処) 格

2. 例語、例文の後ろに示される日本語訳については、原著に現代ブルガリア語訳があるときには、「 」によって、現代ブルガリア語訳が示されていないときには、訳者が必要と考えた場合に、() によって、また時に [] によってこれを示した。

例、 **ЧЪТЪ, ЧЪТЕШИ**「読む」 と **КАЖ, КАЕШИ** (悔いる、告解する)

ИСПЛЪНЪ (スプラシル写本 136, **РЖЦЪ КРЪВЕ ИСПЛЪНЪ** [両の手は血に染まっている])

Rōmam tōta Italia convenit「イタリア中がローマに集まった」

сѣ-мрътъ「(逐語的には) 良き、自然な死」(cf. . . . *li sāvo smerčiū miṛti* [天寿を全うする])

3. 一連の文法用語等については、なるべく邦訳の後ろの () 内に英訳等を示したが、これは原著に示されていたものではなく、訳者が付け加えたものである。しかし、() 内に原著のブルガリア語をそのまま挙げた場合もある。

例、 過去現在動詞 (preterite-present verb, perfecto-present verb)

非完了 (infectum)

疊音、疊語法、語根重複 (reduplication)

中間後置詞 (м е д и е н з а д л о г)

一括多数性 (т о т а л н а м н о ж е с т в е н о с т)

ただし、概してラテン語による文法用語の指示は、原著者によるものであ

る。

例、 絶対単数 (singulāria tantum)

第Ⅱオリスト受動形 (aoristus secundus passīvi)

時量的加音 (augmentum temporāle)

音節的加音 (augmentum syllabicum)

4. 原注については () 付きアラビア数字によって、また、訳注は () なしのアラビア数字によってこれを示し、巻末にまとめた。なお、原注の中に必要であった訳注は、原注内の当該箇所ですべて「訳注 ……」ないしは「訳注 ……」のように示した。

5. 二重母音 (diphthong) の第二要素 (非成節母音) を表す符号、例えば、*oi*, *ou* 等の符号は全て *oi*, *ou* のように記載する。

本研究書は、古代ブルガリア語の理論的形態論である。本書には、古代ブルガリア語の文法形の起源が解明されている。主要テーマは、語幹 — 成り立ち、意義及び用法の点からみた名詞、代名詞、動詞の語幹 — である。古代ブルガリア語の母音、スラヴ祖語の語根に伴う変化、名詞及び動詞接尾辞、性、数範疇、時制、語尾、格、代名詞語根等が研究される。

本書は、上級水準の学生及び専門家向けである。

本書は、ブルガリア建国1300年を記念して執筆されたものであり、個人の全面的・調和的発展長期総合計画 — 哲人コンスタンティノス、キュリロス計画 — に関連して、上梓されるものである。

目 次

§. 1	青年文法学派の母音モデル	1
§. 2	古代ブルガリア語母音の起源	10
§. 3	ラリンガル（喉音）・モデル	27
§. 4	ラリンガル・モデルとスラヴ祖語アクセント問題	37
§. 5	延長階梯 ē 及び ō の形態的意義	45
§. 6	e : o 交替の形態的意義	48
§. 7	スラヴ祖語の語幹構造の変化	57
§. 8	スラヴ祖語の語根構造の変化	61
§. 9	始原的な名詞接尾辞と動詞接尾辞の統一性	67
§. 10	始原的な動詞、名詞語幹における一括多数性指標 H ₂	69
§. 11	語幹母音の延長階梯の形態的意義	75
§. 12	古代ブルガリア語過去語幹の起源	80
§. 13	古代ブルガリア語における過去語幹間の相関関係	87
§. 14	始原的な動詞非完了幹と完了幹	98
§. 15	始原的な活格活用と不活格活用	101
§. 16	古代ブルガリア語の -er 語幹の起源	104
§. 17	始原的活格活用動詞における動作態カテゴリー	108
§. 18	古代ブルガリア語における始原的な不活格活用の痕跡	118
§. 19	古代ブルガリア語時制の起源	126
§. 20	スラヴ祖語の動詞・名詞接尾辞 -s-	129
§. 21	青年文法学派の形態モデル	136
§. 22	古代ブルガリア語の女性の起源	141
§. 23	古代ブルガリア語の男性カテゴリー	149
§. 24	始原的な名詞接尾辞 H ₂	153
§. 25	古代ブルガリア語の u 語幹の起源	157
§. 26	古代ブルガリア語の男性及び女性前史から	172

§. 27	始原的な名詞接尾辞 -i-	178
§. 28	始原的な純粹語幹の文法的意義	184
§. 29	始原的後置詞（前置詞） *od (ot)	187
§. 30	中間的代名詞語根 *m-	190
§. 31	格語尾としての指示代名詞的小辞 i	195
§. 32	状況格的（具格的、共同格的、所格的、奪格的）意義を持つ古代ブルガリア語の格形の起源	198
§. 33	始原的代名詞語根 *s-	206
§. 34	古代ブルガリア語の3人称動詞形の起源	209
§. 35	古代ブルガリア語の1・2人称代名詞と動詞語尾の起源	216
§. 36	古代ブルガリア語の生格の起源	232
§. 37	古代ブルガリア語の複数形の起源	234
§. 38	古代ブルガリア語の対格の起源	239
§. 39	古代ブルガリア語の中性の起源	250
§. 40	古代ブルガリア語の動詞アスペクトの起源	255
原 注		263
引用文献		269
訳 注		271

本書は、大学の古代ブルガリア語の必修課程を修了し、さらに、古代ブルガリア語の形態の起源に特に注意を集中しながら、古代ブルガリア語形態論の学習を引き続いて行おうとする言語学徒のために執筆したものである。本書は、古代ブルガリア語の入門課程ではない。ブルガリア語学、スラヴ語学、ロシア語学（フィロロジー）専攻の上級課程の学生やとりわけソフィア大学やヴェリコ・タルノヴォ大学で言語学的な関心を持つ者あるいは古代ブルガリア学を専攻する者たちに推薦できるものである。本書は、また、国立古典語・古典文化中学校（Националната гимназия за древни езици и култура）を卒業した言語学徒にも利用できるものである。

したがって、著者は、古代ブルガリア語の基本的な形態的事項（文法範疇、曲用、活用）や、また、スラヴ祖語の最も重要な音声学的過程（口蓋化、先行子音及び後続母音に対するヨット [j] の影響、二重母音の単母音化、流音音位転換 [metathesis]）についても、すでに周知している読者を対象としている。本研究を通じて、読者は、古代ブルガリア語の文法的事実を引き出す基となるべき始原的形態組織についての知識を得ることができよう。この組織体系の助けを借りることによって、古代ブルガリア語及びスラヴ祖語の一連の文法形態の起源を設定し、かつまた、その、古い他の印欧諸語の文法形との同系的な相互関係を説明することができよう。記述は、伝統的な形態区分（名詞、形容詞、代名詞、動詞等）に従わず、具体的な形態資料とその解釈を基にして、一步一步徐々に読者を次段階の文法的論証に導くものである。基本的な形態的事項の追跡に必要な予備的音声学的知識は、最初の四節において与えられている。

§.1 青年文法学派の母音モデル

古代ブルガリア語の母音は、印欧語の母音と二重母音を継承したスラヴ祖語の母音ないしは二重母音に起源を持つ。印欧語学の青年文法学派時代（19世紀最終四半期）に、学者達は、古代ブルガリア語も含めたより新しい時代の印欧語の全母音種を引き出している。すなわち、5種類の原短母音（a, o, e, u, i）、それらに対応する原長母音（ā, ō, ē, ū, ī）、そしていわゆる下向き原二重母音（falling diphthong）、つまり、その第一要素に三種の広母音 a, o, e（長母音ないしは短母音）の何れか、第二要素にソナントたる、狭母音 u, i、ないしは流音（r, l）および鼻音（m, n）が来る二重母音である。

先行位置の母音 a, o, e（ā, ō, ē）と後続位置の構成素 u, i, r, l, m, n からなる計36組の下向き結合群が形成され得るが、本来的な下向き二重母音として青年文法学派が挙げているのは第二要素に u, i を有する二重母音だけである。しかし、a, o, e と流音、鼻音との結合群は、スラヴ祖語の歴史において重要な役割を演じて来ており、したがって、我々は下向き二重母音という用語を更に広い意味で使うことにする。多くの印欧語では、本来の長二重母音が短二重母音と対応関係を成すが（例えば、āu と au, ēi と ei 等）、長母音が残っているところでは（いくつかのインド・イラン語の例）、原則として第二要素、すなわち u, i が消失している。

語末閉音節にあっては、始原的結合群 -ōis は -ōs に短縮し、そこから後に規則的に -ŋ を得るのである（§.2）— 例、**ВЛЪКЪ**（複・造）*uľkʷ-ōis（-ōis を -ois に短縮する　リ vilkaĩs（複・造）；ギリ **λόκος**（複・与）< *uľkʷ-ōis と同類である）。語末閉音節の始原的結合群 -āns は -ans に短縮し、そこから後規則的に -ons > -ŋ を得るのである（§.2）— 例、**ЖЕНЪ**（複・対）< *gʷen-āns、cf. 古プロ **rānkans**「手」< *rañk-āns、クレタ方言 **τῖμας**「敬意、褒美」< *τῖμ-āns（-āns

> -ans への短縮を伴う)、またドーリス方言 $\tau \iota \mu \tilde{\alpha} \varsigma < * \tau \iota \mu - \tilde{\alpha} \nu \varsigma$ 、アッティカ方言 $\chi \acute{\omega} \rho \tilde{\alpha} \varsigma < * \chi \omega \rho - \tilde{\alpha} \nu \varsigma$ 、古イ āsvāh 「雌馬」 $< * \text{ek}'u\text{-āns}$ ($-\tilde{\alpha}ns > -\tilde{\alpha}s$ の短縮を伴う)。¹⁾

青年文法学派は、鳴子音 r, l, m, n が、二子音間、語頭子音前、語末子音後に来る時、母音化して成節ソナント ($\bar{r}, \bar{l}, \bar{m}, \bar{n}$) となり、またそれは長音 ($\bar{r}, \bar{l}, \bar{m}, \bar{n}$) にもなり得るとしている。それとは逆に、 u, i は二母音間、語末母音後、語頭母音前では子音化して、 $u(w), i(j)$ で記される子音に変質するのである。

青年文法学派によれば、印欧語の母音 e, o は独立母音ではなく、それぞれ e 階梯 (正常階梯)、 o 階梯 (対応階梯) と称する、同一の原母音の二つの階梯であると考えられる。 e 階梯、 o 階梯以外に、 e が弱い全く発音されない第三の階梯、すなわち低減階梯、ないしはゼロ階梯も存在する。同一の印欧語の語根、例えば、語根 $*p-t$ 「飛ぶ」にあつて、母音 e は正常階梯 ($*pet-$) にも、対応階梯 ($*pot-$) にも、また低減ないしゼロ階梯 ($*pt-$) にもなり得たのである。例、ギリ $\pi \acute{\epsilon} \tau - o \mu \alpha \iota$ 「飛ぶ」 (e 階梯、1・単・現), $\pi o \tau - \acute{\eta}$ 「飛行」 (o 階梯), $\acute{\epsilon} - \pi \tau - \acute{o} \mu \eta \nu$ 「飛んだ」 (ゼロ階梯、1・単・IIアオ)。ゼロ階梯に替わる低減階梯は流音前ないしは鼻音前に見られる — 例、 БЕР-Ж (e 階梯、1・単・現) : БЪР-ДТИ (低減階梯、不定詞) ; リ men-ū 「覚えている」 (e 階梯、1・単・現) : МЪН-ТТИ (低減階梯、不定詞)。古代ブルガリア語の文字に合わせて、我々は低減階梯を Ъ の文字を持って表すことにする。 $e : o : \text{Ъ}$ (あるいはゼロ階梯) の交替は質的 (音質) 交替と呼ばれる。

正常階梯以外に、母音 e は延長階梯、つまり $\bar{e}$ 階梯 (延長正常階梯) になることもある — 例、 БЕЗЖ (1・単・現) : ВЪСЪ (1・単・アオ) $< * \bar{u}eg'h-s-$ (cf. ラ vehō 「運ぶ」 (1・単・現) $< * \bar{u}eg'h- : \bar{v}ēxī$ 「運んだ」 (1・単・完) $< * \bar{u}eg'h-s$)。 o の延長階梯は $\bar{o}$ (延長対応階梯) である — 例、ギリ $\kappa \lambda o \pi \acute{\eta}$ 「窃盗」 : $\kappa \lambda \acute{\omega} \phi$ ($*klōps$) 「泥棒」。 $e : \bar{e}$ や $o : \bar{o}$ の交替は量的 (音量) 交替と呼ばれる。

青年文法学派は、 $\bar{e} : \bar{o}$ の交替以外に $e : o$ の交替も見られる語根を、その正常階梯の母音 e が短いものであるため、軽い語基 (л е к и б а з и) と呼んでいる。一方、彼らは軽い e 語基以外に、 $e : o$ の交替がなくて $\bar{e} : \bar{o}$ の交替が現れる重い語基 (т е ж к и б а з и)、すなわち $\bar{e}$ 語基についても述べている。重い語基の場合には、正常階梯もその対応階梯も常に長いのである。青年文法学派は、重い語基における $\bar{e}$ 母音の低減階梯を schwa と呼び (この用語は古代ヘブライ語文法からの借用)、それを $\bar{o}$ の記号を以て表している。したがって、軽い語基の母音の e は五つの階梯 — 正常階梯 (e)、対応階梯 (o)、延長正常階梯 ($\bar{e}$)、延長対応階梯 ($\bar{o}$)、低減階梯 ($\bar{y}$) ないしはゼロ階梯 — を持つことになる。重い語基では e の階梯は三つ — 正常階梯 ($\bar{e}$)、対応階梯 ($\bar{o}$)、低減階梯 ($\bar{o}$) ないしはゼロ階梯 — である。

母音交替は原語根だけではなく原接尾辞にも存在している。例、**рѡд-ѡ-мъ** (o 階梯、単・造), **рѡд-ѣ** (e 階梯、単・呼); **бер-ѣ-тъ** (e 階梯、3・単・現), **бер-ж-тъ** (o 階梯、3・複・現、グ **εἰς-ἑ-ων**, $\bar{e}=o$); **сѣн-ъ-мъ** (< *sūn-u-mi [接尾辞母音 e のゼロ階梯]、単・造), **сѣн-ѡв-ѣ** (< *sūn-eu-es [接尾辞の e 階梯]、複・主、§.2参照); **γ sun-au** (単・与 < 単・所 *sun-ēu、接尾辞母音 e の $\bar{e}$ 階梯); **γ ποι-μ ἐν-α** 「牧夫」(接尾辞の e 階梯、単・対), **ἡ γε-μ όν-α** 「領袖」(接尾辞の o 階梯、単・対), **ποι-μ ἡν** ($\bar{e}$ 階梯、単・主), **ἡ γε-μ ών** ($\bar{o}$ 階梯、単・主)。

青年文法学派の交替モデルによれば、語根は通常両子音構造を持つ — 例、**бер-ж** (1・単・現), **сѣ-бор-ъ** (単・主), **бѣр-ати** (不); **нес-ж** (1・単・現), **нос-ити** (不、反復相 [iterative]、§.6 参照)。最初の子音に対しては、第二子音としての s が後から前へ続けて置かれることがあるが、語根に応じて可変性を持つ (現れたり、消えたりする) — 例、ラ **teg-ō** 「被う」(1・単・現), **tog-a** 「上着」; **γ τεγ-ος**, **σ τεγ-ος**; **τεγ-η**, **σ τεγ-η** 「屋根、家」。長母音で終わる語根 (例、不 **αἶτ**

И < *dhē-, **СТА-ТИ** < *stā-, **АД-ТИ** < *dō-) は、語頭母音を持つ語根 (1・単・現、**ЕС-МЬ** 単・主 **ОК-О** ; ラ 1・単・現 ag-ō「導く、駆る」) と同じく、両子音構造の逸脱である。

ПЛЕТ-Ж (1・単・現), **О-ПЛОТ-Ъ**「編垣」(単・主) のような単語にあっては、原語根は本来 *p-l-「曲げる、巻く、畳む」である — cf. ラ du-plus「二重の < 二つ折の」(語根母音はゼロ階梯)。したがって、青年文法学派によれば、**ПЛЕТ-** の **-ЕТ-** (更に古い -ek't- ないしは -ekt- から、cf. ラ 1・単・現 plectō「編む」) は、ゼロ階梯である語根 *p-l- の後ろに付け加えられた、かつての接尾辞 (語根拡張) である。通常、語根がゼロ階梯 (*pl-) の時には、接尾辞は正常階梯 (**ПЛ-ЕТ-**) であるか、対応階梯 (**ПЛ-ОТ-**) であり、また 逆に、語根が正常階梯か対応階梯にある時には、接尾辞はゼロ階梯である。例、語根 *gʷer-「重い」と古い接尾辞 -bh- より、
 *gʷer-bh- > **ЖРѢБА**「(新生)子馬」(語根の e 階梯と接尾辞のゼロ階梯) ; *gʷr-ebh- > ギ β ρ έ φ ο ς「胎児、新生児、赤ん坊」(ゼロ階梯の同一語根と e 階梯の同一接尾辞より ; *gʷer- 語根の低減階梯は ギ βα ρ -ύ ς「重い」< *gʷьr-u- に見られる ; 「重い (重み)」>「胎児」といった再解釈については、ブ民間方言, тежка жена товарна жена「身重の妻 (女)」、また、**БРѢМА**「重荷、重み」や、бременна「胎児を宿す女、妊婦」を参照)。また、古イ gārbaḥ < *gʷer-bh-「胎内、胎児」も参照。

青年文法学派の印欧語母音階梯のモデルは、*pet-: *pot-: *pēt-: *pōt-: *pt- 型の交替に加えて、同一の非拡張 (両子音) 語根あるいは同一の接尾辞における、i, u, r, l, m, n の、母音あるいは子音としての二重の現れ方についても明らかにするのである — 例、**МРѢТИ** (不) < *mēr-tēi, **ΟΥ-ΜΟΡ-ΗΤΗ** (使役、不、§. 6 参照), **СЪ-МРЬ-ТЬ** < *su-mr̥-ti-s ; **ПЕР-Ж**「叩く、打つ」(1・単・現), **СЪ-ПОР-Ъ**「闘い」, **ПЪР-АТИ** (不), リ pir-tis「風呂、人々が (蒸し風呂用) 枝掃をもって汗を流す場所」< *pr̥-tis ; リ 不 šveī-sti「光沢を出す、磨く」< *kʷei-, **СВѢТЪ**「光」< *kʷoi-,

СВЪТЪТН「輝く」(不) < *k'ui- ; **СЪН-Ъ-МЪ** (単・造) < *sūn-u-mi, **СЪН-ОВ-Е** (複・主) < *sūn-eu-es。i, u, ɾ, ɺ, m, n は母音 e がゼロ階梯の時に現れる子音 i (j), u (w), r, l, m, n の母音形であることが判明するのである。

青年文法学派のモデルによって、古代ブルガリア語の語根及び接尾辞の母音階梯の最も重要な特徴が説明されるのである。しかし、このモデルの主要な長所は、他の印欧語にも対応形を持つかなりの数の古代ブルガリア語の単語や語形が、ある少数の語根から、母音階梯やさまざまな語根拡張子（接尾辞）を経てどのように形成されるかを、このモデルの助けによって設定できることである。

青年文法学派にとって、語根は、必ずしも絶対不変の両子音構造として実現される、相互不可侵、相互独立のものではない。語根母音だけではなく、いくらかの語根子音もまた異形態を有しているのである。軟口蓋子音は三種 — 摩擦的 [спирантна] (k', g')、円唇的 [лабиална] (kʷ, gʷ) 及び純粹的 [чиста]、つまりそのどちらでもない中立的 [неутрална] (k, g) — 音として現れる。古代ブルガリア語では、摩擦型に対応するのは **с**, **з** であり、純粹（中立）型及び円唇型に対応するのが **к**, **г** である。有声音の g は帯気化 (gh) することがある — 摩擦型 (g'h) には **з** が、純粹型 (gh) 及び唇音型 (gʷh) には **г** が対応する。

後舌子音の円唇型及び純粹（中立）型は、スラヴ祖語（古代ブルガリア語）以外では、さらに、インド・イラン（古代インド、アヴェスタ）、バルト祖語（リトアニア、ラトヴィア、古プロシャ語）、アルメニア、アルバニア語において同じである。これらの諸語では、摩擦型からはスー音ないしはシュー音が派生するが、これはヒッタイト、ギリシャ、ケルト、イタリア祖語（ラテン、オスク、ウムブリア）、ゲルマン祖語（ゴート、古高地ドイツ語）では観察されない。そこでは、摩擦型は、軟口蓋子音純粹（中立）型と一致するが、軟口蓋子音円唇型はもっと独自の対応を示し、しばしば円唇音あるい

は、軟口蓋音+唇音 (v) の結合形を与えるのである²。

比較・歴史的対照を容易にするために次表を掲げる。

	原子音	古代ブルガリア	古代インド	ギリシャ	ラテン	リトアニア	ゴート
1	k'	ц	ś (=š)	κ	c	š	h
2	g'	з	j (=ž)	γ	g	ž	k
3	g'h	з	h	χ	g,h	ž	g

例：

1. **ОСМЪ**, 古イ aštāu, aštā, アヴェスタ ašta, ギ *ὀκτώ*, ラ oct ō, ゴ ahtau < *ok'tō (**ОСМЪ** の **М** は **СЕДМЪ** の影響)

ВЪСЪ 「村落」, 古イ vīs 「村落、入植地」 < *uik'- (ゼロ階梯), ギ *οἶκος* < *Foīkos 「家」, ラ vicus 「村、田莊」, 古プ 対 w aispattin 「所有者、主婦」, リ viēšpats 「君主、家長」 < *uoik'- (o 階梯); リ viēšpats の第二要素は ラ potēns 「力強き、支配せる」 や 古イ pātiḥ 「君主」と同一語根), ゴ weihs 「村落」 < *ueik'- (e 階梯)

2. **ЗЖБЪ**, 古イ jāmbhaḥ 「齒」, ギ *γόμφος* 「釘」, 古高ド kamb 「櫛」 < ギザギザ (齒形) を付けたもの, リ žaṁbas 「鋭利な角、角張った先」 < *g'ombh-

БРЪЗА, リ béržas, 古プ berse, 古高ド birihha, 古イ bhūrjaḥ 「白樺」 < *bherg'-, bhṛg'- (§.4 参照)

3. **ЖЗЪКЪ**, 古イ aṁhūḥ, ラ angustus, リ aṅkštas, ゴ aggwus (=a ngwus) 「狭い」, ギ 1・単・現 *ἄρχω* 「狭める、締め付ける」 < *ang'h-

ЛНЖЖ, 不 **ЛНЗАТИ**, ギ *λείχω*, リ 1・単・現 liežiù 「なめる」 < *leig'h- (e 階梯), 古イ 3・単・現 lihati 「なめる」 < *lig'h- (ゼロ階梯), ラ lingō 「なめつくす」 (接中辞 -n- を有する、§.12, §.17 第2項 参照), ゴ bi-laigon 「舌なめずりをする」 < *loig'h- (o 階梯)

語根によっては、軟口蓋子音が純粹のものと摩擦的なものとの両方に現れ

る場合がある。例：

ГРДАТ, リ gařdas「囲んだ場所」, **Г** gards「家」 < *ghordhos, 古イ grhāḥ「家」(dhの前のghのgへの異化を伴う)、一方、ロ方言 **з о р ђ д**「干草の山」, リ žārdas「亜麻乾燥室」, ラト zārds「えんどう豆と亜麻種の乾燥室」, 古プ sardis「囲んだ場所」 < *g'hord-

КАРВА, リ kárvé < *kor-u- (o 階梯、-u- 接尾辞)、一方、**СРЬНА**, 古プ sirwis「鹿」, ラト sirna「シャモア」 < *k'ь r-n- (低減階梯、接尾辞 -n- を伴う); cf. 語根 *ker- : *k'er-「つの」及びその以下の交替、ギリ **κεραός** < *κεραφός「有角の」, ラ cornū「つの」, cervus「鹿」。また、以下のものも参照、**СРЬШЕНЬ**「もん雀蜂」 < *k'ь r-s- すなわち「角状のもので突き刺す昆虫」 - **СРЬШЕНЬ**は、リ širšuō, 古プ sirsilis, ラ crābrō「雀蜂」 < *k'ṛ-s-rō, ド Hornisse「雀蜂」 < Horn < *k'or-n-「つの」、と同類である。

ЧРТАА「大有角家畜の群れ > 列」, リ keřdžius「牧夫」, 古プ 対 kērdan「時間、一続き」 < *ker-dh-, 一方、古イ sárdhaḥ「群れ」 < *k'er-dh-, cf. **Г** haırda「畜群」 < *ker-dh- : k'er-dh-, キンブリー³ cordd「群れ」 < *kor-dh- : k'or-dh-, すなわち、語根 *ker- : k'er-「つの」と接尾辞 -dh- より。

ЦЕТТ (スラ祖 *kʷoit-, o 階梯、cf. チ květ-, ポ kwiat, ポラーブ kjot「花」), ラト 1・単・現 kvitu「明滅する、閃く」(ゼロ階梯)、一方、**СВТТ**「光」 < *k'ʷoit- (o 階梯), **СВЬНЖТИ**「明るくなる」 < *k'uit-n- (ゼロ階梯), リ šviēsti「輝く」, švytėti「輝く」, 古イ svitraḥ「白い、輝かしい」

СВТЗАА (スラ祖 *gʷoizd-, o 階梯、cf. チ hvězda, ポ gwiazda, 上ソルブ hwězda「星」)、一方、リ žvaigždė, žvaizdė, 古プ 対 swāigstan「光輝」 < *g'ʷoizd-

ГЖС < *ghan-s-, 一方、リ žąsis, 古プ sansy, 古イ haṁsāḥ「がちょう」 < *g'han-s-. cf. ギ **χάλυ**, 古高ド gans「がちょう」

СВЕКРЪ < *suekr-, 一方、古イ *śváśuraḥ*, リ *šēśuras* 「舅、夫の父」
 < *suek'ur-. cf. ラ *socer* 「舅、妻の父」, ギ *ἐκυρός* < *σφεκ
υρός 古高ド *swēhur* 「舅、夫の父」

ЖАЛЪТЪ < *gh_hl-t- (ゼロ階梯), リ *geļtas* 「黄色い」 < *gh-el-t- (e
 階梯). cf. ギ *χολή* 「胆汁、胆嚢」 < *ghol-, ラ *fel*, 属 *fellis* 「胆
 汁」 < *hel- < *ghel-, 一方 **ЗАЛЪЧЪ** < *g'h_hl-k-, しかし中世ブ **ЖАЛЪ**
ЧЪ < *gh_hl-k-. *g'hel- 型は更に次のものにも認められる、**ЗЕЛЪЕ**,
 リ *žolē* 「草」 < *g'hōl-, *žālias* 「緑の」 < *g'hol-, また、**ЗАЛТО** < *g'
hol-t-, リ *žeļtas* 「黄金の」, 古イ *hāriḥ* 「金色の」 < *g'hol- (古代インド
 語では、r と l は通常 r に、希に l に統合される). cf. 古ラ *helus* >
holus 「野菜」 < *ghel- : g'hel-, ゴ *gulth* 「(黄) 金」 < *gh_hl-t-

青年文法学派によれば、r と l が語根末子音である時には、両者間の交
 替もあり得るのである。例、1・単・現 **ГРЕБЖ**, 2・単・現 **ГРЕБЕШ**
И < *ghr-ebh-, **ГРОБЪ** < *ghr-obh-, ギ *γράφω* 「書く、窄つ、彫る」
 < *gr-bh- (帯気音の付いた g に替わって、純粹の g が付いている), cf.
ЖРЪБЪИ 「くじ < 印を刻んだ木板、金属板」 < *ger-bh-, 古ブ 対 *gīrb-*
in 「数」 < *gr-bh-, 古高ド *kerfan* 「切り抜く、切りとる」 < *ger-p- で
 あるが、一方 次の例、ギ *γλάφω* 「掘る、窄つ」 < *gl-bh-, ブ方言
глобам, ス *globīti* 「深くする」, *глоб* 「眼窩」 < *gl-obh- (原
 語根は「そこに何か別のものを入れるために、何かをくりぬく」の意、cf.
с-глоб-явам 「組み立てる、一緒に集める」, 西部ブ *глобим*
 「葱、ピーマンを植える」, チ *hlobiti* 「杭を打ち込む」, ポ *głobić* 「固定す
 る」。拡張語根 *g^wer-bh- 「胎児」と並んで (cf. **ЖРЪБА** 「子馬」, ギ
βρέφος 「胎児、新生児、幼獣」)、*g^wel-bh-, *gel-bh- の別形も存
 在している、例、ギ *δελφός* 「子宮、胎児」 < *g^wel-bh-, *ἄδελφός*
 「同じ胎からの > 兄弟」, ラ *vulva* < *volva* < *volba* 「子宮」 <
 *g^wol-bh-, ゴ *kalbo* 「子牛」 < *gol-bh- ; 古イ *gārbhaḥ* 「子宮、胎児」
 は *gher-bh- (bh の前での gh の g への異化を伴う) と *g^wel-bh- の

どちらからも派生した可能性あり。

cf. *nōmina agentis* (行為主名詞) 及び *nōmina instrūmentī* (道具名詞) を作る接尾辞 -ter-(-tor-, -tr-), -tel-(-tl-), -dhl- における r と l および t と dh の交替。例、ギリ $\delta\omega\tau\omega\rho$, $\delta\omega\tau\acute{\eta}\rho$, 古イ *dātār-*, ラ *dator* 「与える人」 < **dō-tor-s*, **dō-ter-s*, **də-ter-s*, (§.37 参照)。一方、**ПОДАТЕЛЬ** < **dō-tel-*; 古イ *hantār-*, アヴェスタ *ǰantar-* 「打つ人、殺す人」 < **g^when-tor-*, また、一方、**ЖАТЕЛЬ** 「穀物刈取人 < 切る人」 < **g^when-tel-*; 古イ *dhātār-* 「創造者」, ラ *con-ditor* < **condator* 「創始者」 < **dhē-tor-*, **dhə-tor-*, また、一方、**БЛАГО-ДѢТЕЛЬ** < **dhē-tel-*; **РАДЛО** < **ar-dhlo* (cf. チ *rādlo*, ポ *radło*), リ *ārklas* 「鋤」 < **ar-tl-o*, また、一方、ギリ $\acute{\alpha}\rho\omicron-\tau\rho-\omicron\nu$, ラ *arā-tr-um* 「鋤」; cf. **ШИДЛО** (チ *šídlo*, ポ *szydło*) < **siū-dhl-o*, ラ *sūbula* < **sū-dhl-ā* < **siū-dhl-ā* (*iū* の *ū* への短縮を伴う), 古高ド *siula* 「錐」 < **siū-dhl-ā*

§. 2 古代ブルガリア語母音の起源

10個の印欧語の原母音 (a, o, e, u, i, ā, ō, ē, ū, ī) から10個の異なる古代ブルガリア語の母音が得られて然るべきであろうが、すでにスラヴ祖語の時代に、a と o、ā と ō は統合してしまっている。同様の統合は、他の古代印欧諸語にも存在している。古代インド語の a は、a と o と e の、また ā は、ā と ō と ē の継承であり、ゴート語及び古プロシャ語の a は、a と o の、また o は ā と ō の継承である。ところが、リトアニア語では、a と o は a に融合するが、古い ā と ō の差異はしばしば保存されている — 原母音 ā に対しては ō が対応するが、原母音 ō に対しては、ō 以外に uo が対応することもあり、それはまた語末では u に短縮する。

古代ブルガリア語においては、a, o — **o**、e — **e**、u — **u**、i — **i** のように、また、ā, ō — **a**、ē — **e**、ū — **u**、ī — **i** のように対応するのである。

以下に、古代インド、ギリシャ、ラテン、リトアニア及びゴート語（比較歴史的対照が最もしばしば行われる言語）の、古ブルガリア語母音との対照を表示する。

	原母音	古ブ	古イ	ギ	ラ	リ	ゴ
1	a	o	a	α	a	a	a
2	o	o	a	o	o	a	a
3	e	e	a	ε	e	e	i, ai(=e)
4	u	u	u	υ	u	u	u, au(=o)
5	i	i	i	ι	i	i	i
6	ā	a	ā	η, ド ā	ā	o	o(=ō)
7	ō	a	ā	ω	ō	o, uo, u	o(=ō)
8	ē	e, i⁽¹⁾	ā	η	ē	é ⁽²⁾	e(=ē)
9	ū	u	ū	υ	ū	ū	u(=ū)
10	ī	i	ī	ι	ī	y=(ī)	ei(=ī)

(ド=ドーリス)

例：

1. **осъ**, 古イ *ākṣaḥ*, ラ *axis*, ギ *ἄξων*, リ *ašis*, 古ブ *assis*, 古高ド *ahsa* 「軸」 < *ak'-s- < *ag'-s-

остръ, 古リ *aštras* 「尖った、鋭い」, 古イ *ásriḥ* 「端、切っ先」, ギ *ἄκρον* 「頂点、切っ先」 < *ak'-r- (挿入音 t を伴う)

орати, リ 1・単・現 *ariū*, ラ *arō*, ギ *ἀρόω*, ゴ *arjan* 「耕す」

солъ, ラ *sāl* < *sal-s, ギ *ἅλς*, ゴ *salt* < *sal-, *sal-d-

2. **домъ**, 古イ *dāmaḥ*, ギ *δομος*, ラ *domus* 「家」 < *dom-

овъца, 古イ *aviḥ*, ギ *ὄϊς*, ラ *ovis*, リ *avis* 「羊」, ゴ *awistr* 「羊小屋」 < *ou-i-

око, ギ 主・双 *ὄσσε* 「眼」 (< *ok*-i-, cf. 主・対・双 **очн** < *ok*-i- における i 語幹 → §.27 参照), 古イ 主・対・双 *akṣi* 「眼」 (cf. 生・単 **очеce** における es 語幹 → §.20 参照), リ *akīs*, ラ *oculus* 「眼」, ア *akn* 「眼、穴」 < *ok*-

原母音 o が e の対応階梯である時には、アルメニア語におけるその対応は o あるいは u である — ア *lusa-vor* (ラ *lūcifer* と同類) 「明るい、明るさをもたらす」 < *luk'ā-bhor- 参照。Cf. ギ *φορός* 「運んでくるところの」, **съ-боръ** < *bhor- における語根母音の o 階梯と 1・単・現 **беръ**, ラ *ferō*, ギ *φέρω*, ゴ *baíra* 「運ぶ」 < *bher- における語根母音の e 階梯。原母音 o が e の対応階梯でない時には (例えば、**око**, ラ *oculus*, ア *akn* におけるように、上を参照)、そのアルメニア語の対応は a である。したがって、青年文法学派のモデル (§.1 参照) によれば、少なくとも二種類の原母音 o が存在し、その一つは e の対応階梯であり、今一つは e の対応階梯でないものである。

3. **небо**, ギ *νέφος* 「雲」, ラ *nebula* 「霧、雲層」, 古高ド *nebul* 「雲」, 古イ *nābhaḥ* 「霧、空」 < *nebh-

БЕРѦ, ギ $\phi \acute{\epsilon} \rho \omega$, ラ ferō, 古イ bhārāmi, ゴ baíra, ア ber em 「運ぶ」 < *bher-

ДЕСАТЬ, ラ decem, 古イ dāsa, ギ $\delta \acute{\epsilon} \kappa \alpha$, ゴ taihun 「十」, 古プ dessempts, リ dešimtas 「第十の」 < *dek'm-, *dek'mt-

呼・単 **ВЛЪЧЕ**, ギ $\lambda \acute{o} \kappa \epsilon$, ラ lupe, リ vilkē, 古イ vřka < *uļkʷ-e

4. **ДЪШТИ**, 古イ duhitā, 古プ duckti, リ duktē, ア dustr, ギ $\theta \upsilon \gamma \acute{\alpha} \tau \eta \rho$, ゴ daúhtar 「娘」 < *dhughə-ter-

СНЪХА, 古イ snuṣā, ラ nurus, ギ $\nu \upsilon \acute{o} \varsigma$, ア nu, 古高ド snur < *snus-

РЪДЪТИ 「赤くなる」, 古イ rudhirāḥ, ラ ruber, ギ $\acute{\epsilon} \rho \upsilon \theta \rho \acute{o} \varsigma$, リ rūdas 「赤い」 < *rudh-

5. **ВЪДОВА**, 古プ widdewu, ラ vidua, ゴ widuwo, 古イ vid hāvā < *uidheuā

ЧЪТО, ラ quid, オスク⁴ pid, ギ $\tau \acute{\iota}$, アヴェスタ čit 「何」 < *kʷ-i-d

МЪГЛА, リ miglā, ギ $\acute{o} \mu \acute{\iota} \chi \lambda \eta$ 「霧」, 古イ mih- 「雲、雨」, 低・ド miggelen 「そば降る」 < *migh-

ДЪНЬ, 古イ dīnam, ラ diēs, リ dienā 「日」 < *di-

6. **МАТИ**, ラ māter, ギ $\mu \acute{\eta} \tau \eta \rho$, ドーリス $\mu \acute{\alpha} \tau \eta \rho$, 古イ mātā, ア mayr, トカラA mācar 「母」, リ môtē 「妻」 < *mā-ter-

БРАТРОЪ, ゴ brothar, ラ frāter, 古プ brāti, 古イ bhrātā, トカラ pracar 「兄弟」, ギ $\phi \rho \acute{\alpha} \tau \eta \rho$ 「胞族 (フラトリア) の成員」, リ 指小形 broterēlis < *bhrā-ter-

СТАТИ, リ stōti 「立つ、立ち止まる」, 古プ po-stāt, ラ stāre 「立つ、立ち止まる」, 古イ スピ sthātum 「立つこと」, ギ $\chi \sigma \tau \eta \mu \iota$, ドーリス $\chi \sigma \tau \alpha \mu \iota$ < *σῑ-στᾱ-μι 「立つ」 < *stā-

ΒΑΝΤΗ, ギ $\phi\eta\mu\acute{\iota}$, ドーリス $\phi\acute{\alpha}\mu\acute{\iota}$ 「話す」, ラ *fāma* 「噂」,
ア *ban* 「語、言葉」 < *bhā-

7. **ΔΑΤΗ**, ラ *dōnum* 「贈り物」, ギ $\delta\acute{\iota}-\delta\omega-\mu\acute{\iota}$, 古イ *da-dā-mi*,
リ *dāoti* 「与える」 < *do-

ΖΗΑΤΗ, リ *žinōti* 「知っている」, ギ $\gamma\iota-\gamma\nu\acute{\omega}-\sigma\kappa\omega$ 「知る」,
ラ *nō-scō* 「知る」, 古イ 3・単・現 *jānāti* 「知る」 < *g'nō- (重い
語基) (cf. 古高ド *knāen* 「知る」 < 重い語基 *g'nē- における ē 階
梯)。当初、「自分の氏族を知る、自分の一族に加える、血縁関係にある、
産む」を意味した、同語根 *g'nē- : *g'nō- : *g'nə- は (cf. *б не и
с кам да те зна я* 「お前を血縁者で見なさない、血縁関係を
破る」)、次の例にも認められる：古イ *jñātum* 「名門の生まれ」 <
*g'nō-, *g'nē-, ギ $\gamma\nu\acute{\eta}\sigma\iota\omicron\varsigma$ 「血縁の、名門の」 < *g'nē-, ラ *c
ō-gnā-tus* 「血縁の」 < *g'nē- < *g'nə-, ギ $\gamma\nu\omega\tau\acute{o}\varsigma$ 「知られた、
著名な」 ($\gamma\iota-\gamma\nu\acute{\omega}-\sigma\kappa\omega$ 「知る」の動詞派生形容詞として), 「友達、
同族の者」 ($\gamma\iota-\gamma\nu\omicron-\mu\alpha\iota$ 「生まれる」の動詞派生形容詞の名詞化),
ラ *cō-gnō-men* 「姓、家名」 < *g'nō-, ラ *genitor* 「生める人、父」 <
*generator < *g'enə- ; 次の軽い語基 *g'en- : *g'on- : *g'n- も参照
： ギ $\gamma\acute{\epsilon}\nu\omicron\varsigma$, ラ *genus* 「種属、出生、家門」, ラ *gī-gn-ō*
「産む、生ずる」, ギ $\gamma\iota-\gamma\nu\omicron-\mu\alpha\iota$ 「生まれる」、また、*g'en- に
替わる異形 *gen- の例：ラ *genū*, ギ $\gamma\acute{o}\nu\upsilon$, 古イ *jānu*, ゴ *k
niu* 「膝」、更にまた、*g'en- に替わる異形 *g*en- の例：**ЖЕНА** (当
初は「産む人 (女)」の意), 古イ *jāniḥ*, 古プ 呼 *genno*, ア *kin*,
ゴ *qino* 「女」 ; 「生む、(氏)族、血統、子孫 (б р а ж д а м,
р о д, к о л я н о)」の意味群の単語については、ブルガリア語 *к о
л я н о* (膝、曲がり、節、族、世、代、血統) と同語根の *п о к о л е
н и е* (代、世代、一族) を参照。

双・主・対 **ΒΛΥΚΑ**, 古イ *vŕka-u*, ギ $\lambda\acute{o}\kappa\omega$, リ *vilkū* <
ul̥k-ō (語幹母音 e の延長対応階梯を有する ; cf. 正常階梯の呼格 **В**

ԱԿԵ < *u|k*-e、上記第3項参照)。

上例から判るように、原母音 *ō* が *e* ないしは *ē* の対応階梯である時には、語中音節でのリトアニア語の対応形は *ō* であり (cf. **ՅՈՒՏԻ**, リ *ži nōti*, ラ *nōscō* 「知る、認識する」, ギ *γί-γινώ-σκει* 「知る、認める」)、原母音 *ō* が *e* (*ē*) の対応階梯でない時には、語中音節でのリトアニア語の対応形は *uo* である (cf. **ԴԱՏԻ**, リ *dūoti*, ギ *δί-δω-μι* 「与える」, ラ *dō-num* 「贈り物」)。したがって、青年文法学派のモデルにしたがえば (§.1 参照)、少なくとも二種類の異なる原母音 *ō* があり、その一つは *e* (*ē*) の対応階梯のものであり、今一つは *e* (*ē*) の対応階梯でないものである。

こうして、*e* の対応階梯でない原母音 *ō* にたいしてはアルメニア語では *a* が対応し (上記第2項参照)、リトアニア語の語中音節での、その延長階梯 *ō* の継承が *uo* である。一方、*e* (*ē*) の対応階梯である原母音 *ō* に対して、アルメニア語では *o* が対応し (上記第2項参照)、その延長階梯 *ō* の、リトアニア語語中音節での継承が *ō* である。次例参照: **ԻՏԵՆԻ** (語頭にヨットを伴う), リ *úosis* 「とねりこの木」 < *ōs-, ア *haçi* 「とねりこの木」 < *osk'-, ラ *ornus* 「とねりこの木、檜」 < *ose nos (cf. ブ方言 *осен* 「とねりこの木」), ギ *ὄξυς* 「ぶなの木、檜」, 古アイスランド語 *askr* 「とねりこの木」 < *os-。一方、次例: **ԳՈՎԱԾ**, ア *kov* 「雌牛」, ギ 属・単 *βοός* < *βoF óς < *g*ou- < *g*iou- (三重母音 *iou* の *ou* への短縮), ラ *gūovs* 「大形有角獣」, リ *góta, gótas* 「羊群、豚群」 (語中音節に *ō* を有する), *gúota, gúotas*, 古イ *gāūh*, ラ *bōs* (オスク語・ウムブリア語からの借用) 「牛」 < *g*ōu- < *g*īōu-。語根母音の古い *e* 階梯は次の諸例にみられる: 1・単・現 **ЖΟΥЖ**, 2・単・現 **ЖОҮШИ** < *g*īeu-, 不 **ЖԵՅԱՏԻ** < *g*īu- (ゼロ階梯) 「食べ物を咀嚼する」, ブ方言 *жвакам*, ロ *жевать* 「咀嚼する」, ブ *преживям* (咀嚼する); cf. リ 複 *žiaunos* 「顎」 < *g*īou-,

ア kiv 「樹脂(香)」(ロ живица [テルビン油、含油樹脂], チ živice [樹脂、タール], 上ソルブ živica 「白い松脂」も参照), 古高ド kiuwan 「咀嚼する」(異化による、ゲルマン祖語の ku < g^w から k への変化を伴う)。すなわち、ГОВАДО, ラ bōs, 古イ gāūh < *g^wōu- < *g^wiōu- は「反芻動物」を意味したのである。同一の語根 *g^wieu- : *g^wiou : *g^wiū から、ЖИВЖ, ЖИВЕШИ 「生きる、すなわち、食べる」(cf. ロ живот 「胃」), ГОЖ, ГОНШИ < *g^woi- 「(ある人を)食べさせる、養育する」 (§.6 参照), ЖИТО 「食物、糧」。ГОЖ, ГОНШИのような例は、本来の始原的な語根は *g^wi- であり、u は始原的な語根拡張子であることを示している、cf. 不 ЖИТИ < *g^wi- (§.13 参照)。

何故青年文法学派のモデルでは二つの異なる母音 o (ō) – o > ア a、そして ō > リ uo であるのに、一方では、o > ア o、そして ō > リ ō – があるかについては、§.3 で示すことにする。

8. СѦМА, ラ sēmen 「種子」, リ sémenys 「亜麻種」, Г mana-se ths 「人類、人間」(逐語的には、人間の種子) < *sē-

ѦМЬ, リ 古 émi, édu 「食べる」, Г 1・複・過 etum, ラ 1・単・完 ēdī 「食べた」, Г 完・分 éδ-ηδ-ós, 古イ ād-i-vān 「食べた人」 < *ēd- (§.12 参照)

ВѦРА, ラ vērus 「真の」, Г tuzwerjan 「疑う」 < *uēr-

9. МЪШЬ, 古イ mūš-, Г μ ū s, ラ mūs, 古高ド mūs 「ネズミ」 < *mūs-

ДЪМЪ, 古イ dhūmāh, リ 複 dūmai, ラ fūmus 「煙」, Г θ ū μ ó s 「魂、気、息」 < *dhū-

ВЪМА, (語頭添加音 prothesis В を伴う), 古イ ūdhar, ラ ū ber, 古高ド ūtar 「家畜の乳房」 < *ūdh-

БЪТИ, リ būti, 古イ bhūtiḥ 「存在」, Г 1・単・Ⅱアオ ē φ ū v 「生ずる、生まれである」, 古ラ 1・単・完 fuī 「あった」 <

*bhū-

10. ПИТИ, 古イ pītīh, ギ π τ ι ω 「飲む」 < *pī-

対・複 СВИНЬА, ゴ swain 「豚」, ラ suile 「豚舎」 < *sui-

対・複 ТРИ, 古イ trī, アヴェスタ θrī 「3」, 古高ド drī 「3」,
ラ tri-gintā 「30」 < *trī-

スラヴ祖語の極めて重要な変化過程として、下向き二重母音の単母音化がある。原二重母音の ei に対しては、子音前あるいは絶対的語末において **И** が、oi(ai) に対しては **Ѥ** ないしは **И** が、eu に対しては **Ю** が、ou (au) に対しては **ΟΥ** が対応する。原二重母音 em (en) に対しては **А** (グラゴール文字、**Ѧ**) が、om(on, am, an) に対しては **Ѧ** (**Ѧ**) が対応する。原初的な結合群 er, el, or(ar), ol(al) は、子音前では **РѤ**, **ЛѤ**, **РА**, **ЛА** を与えるが、絶対的語末では、鳴子音 r は消失した (**ВОДА** < *uo d-ōr, cf. ギ 中・単 ὕ δ ω ρ, ヒッタイト 主・対・中・複 widār (uidār) ; 主・単 МАТН < *mātēr, ギ μ ῆ τ η ρ, ラ māter 参照)。

以下には、原二重母音の、古代ブルガリア、古代インド、ギリシャ、ラテン、リトアニア及びゴート語における対応表を掲げる。

	原母音	古ブ	古イ	ギ	ラ	リ	ゴ
1	ai	Ѥ И	e	α ι	ae	ie, ai	ai
2	au	ΟΥ	o	α υ	au	au	au
3	am	Ѧ Г Ѧ Ѧ	am	α μ	am	am	am
4	an	Ѧ Г Ѧ Ѧ	an	α ν	an	an	an
5	ar	РА	ar	α ρ	ar	ar	ar
6	al	ЛА	ar	α λ	al	al	al
7	oi	Ѥ, И	e	ο ι	ū	ie, ai	ai
8	ou	ΟΥ	o	ο υ	ū	au	au
9	om	Ѧ Г Ѧ Ѧ	am	ο μ	um	am	am
10	on	Ѧ Г Ѧ Ѧ	an	ο ν	on	an	an
11	or	РА	ar	ο ρ	or	ar	ar
12	ol	ЛА	ar	ο λ	ul	al	al
13	ei	И	e	ε ι	ī	ie, ei	ei(=ī)
14	eu	Ю	o	ε υ	ū	jau	iu
15	em	А Г Ѧ Ѧ	am	ε μ	em	em	im
16	en	А Г Ѧ Ѧ	an	ε ν	en	en	in
17	er	РѤ	ar	ε ρ	er	er	aír(=er)
18	el	ЛѤ	ar	ε λ	ul	el	il

例 :

1. **ΔΙΕΥΕΡΨ**, リ dieveris, 古イ devár, ギ $\delta \tilde{a} \eta \rho < * \delta a F \eta \rho$,
ア taigr「夫の兄弟」 < *daiu -

ΛΕΥΨ, ラ laevus, ギ $\lambda a \iota \acute{o} \varsigma < * \lambda a \iota F \acute{o} \varsigma$ 「左の」 < *l
aiu-

2. **ΣΟΥΨ**, リ saũsas, 古プ sausai (古い所格派生の副詞) = **ΣΟΥΨ**,
ギ $a \tilde{o} o \varsigma < * \sigma a \tilde{o} \sigma o \varsigma$ 「乾いた」, 古イ sósah「乾燥」 < *saus-

ΤΟΥΡ, リ taũras「野牛」, 古プ tauris「野牛」, ラ taurus「雄牛」
< *taur-

ΟΥΨ, リ ausis, 古プ 対・複 ausins, ラ auris < *ausis (cf. aus-c
ultäre「傾聴する」), ゴ auso「耳」 < *aus-、ところが、ギ $o \tilde{o} \varsigma$,
属 $o \tilde{y} a \tau o \varsigma$ (ホメロスの言語) < *ous- η -t- においては、n は古い
属格語尾であり (§.36 参照)、t は不活格類名詞 (後、中性名詞 — §.3
9 参照) に属することの指標である。何故、ギリシャ語において、予期され
る $a \nu$ (cf. ラ auris〔耳〕) の替わりに $o \nu$ が来るかについては、
§.3 において説明する。

3. **ΚΑΜΠΙΝΑ**「いばらの茂み、黒いちごの茂み」(cf. チ kupina, ポ kep
ina「川中、湖上の樹木の茂った小島」), ラ campus「平地、広場」, リ
kaĩpas「角、片隅、一地区」, ギ $\kappa a \mu \pi \eta$ 「カーブする所」 < *kamp-o
「カーブ、屈曲」 > 「平地、平原」への変遷については、**ΛΑΚΚΑ** = リ lan
ka「雪解け水で冠水する牧草地」, leĩkti「曲げる」= **ΛΑΚΚ**, 不 **ΛΑΨΤΗ**
「曲げる、伸ばす、張る」, **ΛΑΚΚ**「曲がっているもの、ぴんと張ったもの」
を参照。

4. **ΑΓΓΥΣ**, 古イ amhúh, ラ angustus, ゴ aggwus, リ aĩkštas「狭
い」, ギ 1・単・現 $\acute{\alpha} \gamma \chi \omega$ 「締め付ける」 < *ang'h-

ΑΝΤΙΣ, 生 **ΑΝΤΙΣ**, リ antis, 古プ antis, ラ anas, 属 anatis
「鴨」 < *ant- (§.4 も参照)

5. **ΑΡΚΛΑΣ**, リ árklas, ギ $\acute{\alpha} \rho o \tau \rho o \nu$, ラ arātrum < *ar- (§.4

も参照)

РАМО, ア armukn 「肘」, ゴ arms 「手」, ラ armus 「上はく、肩部」
 < *arm- (§.4 も参照)

6. **САДАЪКЪ**, リ saldūs 「甘い」(**СОЛЬ**と同語根より、cf. ゴ salt, ラ sāl, 属 salis, ギ ἅλς 「塩」) < *sal-d-

САМА, ラト saīms 「藁」, 古プ salme 「藁」, ギ κάλαμος 「藁、葦の茎」, 古高ド halm 「草の茎」 < *k'olm- (§.4 も参照)

7. **ВѢДѢТИ**, ギ 1・単・完 *oīδα* < *Foīδα, 古イ veda, ゴ 1・単・現 wait, 古プ 1・複 waidimai 「私たちは知る」 < *uoid-

ЦѢНА, ギ *ποινή* 「支払、身代金」, リ kaina 「価格」, ラ pūn iō 「罰する、報復する」 < *k'oīn- (ラ poena 「罰、贖い」は ギ *ποινή* からの借用である、cf. ロ пеня 「罰、贖い」は、これまた ラテン語からの借用であるポーランド語 pena を経たもの)

ЕДИНЪ, ИНЪ (**ЕА-** は不定性を強めるための要素、cf. ブ еди-ко и си 「誰か、何か」), ラ ūnus < 古 oinos, ゴ ains 「一」 < *oīn-

2・単・命 **БЕРИ**, 古イ 2・単・希 bhāres, アヴェスタ barōiš, ギ *φέροις*, ゴ baīrais 「運びなさい」 < *bher-oi-s (§.17, 第 6 項参照)

8. **СТРОУИ** (epentheticum 挿入音 t を伴う), リ srauja 「流れ」, ギ *ῥόος* < *ῥόFoς 「流れ」 < *srou- (語根母音の o 階梯); c f. ギ *ῥεῦμα* 「流れ、川」 < *sreu- における e 階梯

БОУАНТИ, 古イ bodhāyati 「眼をさまさせる」 < *bhoudh- (語根母音 o 階梯を伴う使役動詞、§.6 参照)。cf. ギ *πεύθομαι* 「照会する、知る」, ゴ anabiudan 「指図する、指示する」, **БЛЮАЖ** 「見守る、注視する」 < *bheudh- における e 階梯; **БЪДРЪ** < *bhudh- における語根母音ゼロ階梯参照。

РОУДА, リ raūdas 「赤っぽい、赤黄色の」, 古イ rōhitah, ラ rūfus, ゴ rauths 「赤い」 < *roudh-

ΛΟΥΧΑ, 古イ rokáh, ラ lūx 「光、明かり」, リ laũkas 「額に白い斑点のある動物」 < *louk- ; cf. ギ λ ε υ κ ό ς 「明るい」, ゴ liuhath 「光、明かり」 < *leuk- における語根母音の e 階梯

ΟΥΣΤΑ, 古イ ôštaḥ 「唇」, 古プ 対 āustin 「口」, ラ 指小 ausculum 「小さな口」 < *aus- ; cf. リ uostā 「口」, úostas 「河口、港湾」, ラ ôs, 属 ôris < *ôsis 「口」, ôstium 「河口」, 古イ ās- 「口」 < *ôus- (e の階梯ではなく、二重母音 ou の ô への短縮)

9. **ΖΑΜΒΥ**, 古イ jámbhaḥ 「歯」, ギ γ ό μ φ ο ς 「歯、楔、木釘」, リ žaĩbas 「尖った角、端」, 古高ド kamb 「櫛、つまりギザギザのある」 < *g'hombh-

10. **ΠΑΝΤΗ**, 古イ pánthaḥ 「小道、細道」, ラ pōns, 属 pontis 「橋」, ギ π ό ν τ ο ς 「海、海路」, ア hun 「浅瀬、渡河(点)」 (n の前で、o が u に替わった), < *pont-

11. **ΠΑΙΣ**, リ paĩšas 「子豚」, ラ porcus 「豚」, 古高ド farah 「子豚」 < *pork'-

ΟΡΒΥ, ラ orbus, ア orb, ギ ό ρ φ α ν ό ς 「孤児」, 古イ árbaḥ 「男の子、少年」, ゴ arbi 「相続、遺産(逐語的には孤児の所有物)」 < *orbh-

ΓΑΡΔΥ, ゴ gards 「屋敷、家」, リ gaĩdas 「垣、囲い」 < *ghor-dh- ; cf. **ΖΥΡΔΥ** 「木、樹枝、棒」 < *gh ɤ r-dh- における低減階梯。ラ hortus 「庭」, ギ χ ό ρ τ ο ς 「囲んである場所、放牧地」 < *ghort- が示しているように、dh や t は古い語根拡張子である。

12. **ΛΑΚΥΤΗ**, リ alkúne, 古プ alkunis, ゴ aleina, ラ ulna, 古イ aratnīḥ 「肘、尺骨」 < *ol- 。 *ol- の変異形からは リ úolektis, 及び ギ ώ λ έ ν η 「肘」が派生している。

13. **ΖΗΜΑ**, リ žiema, ギ χ ε ί μ α 「冬」, 古イ hēman 「冬期に」 < *g'heim-

ΣΤΗΓΝΗΧΤΗ, ギ σ τ ε ί χ ω 「行く、近づいて行く」, ゴ steigan

「上がる、上る」< *steigh-

ВНАЪ, リ véidas 「顔」, ギ $\epsilon \dot{\iota} \delta o \varsigma$ < *F $\epsilon \dot{\iota} \delta o \varsigma$ 「姿、形、様子」< *ueid-

14. **ЛЮБИТИ**, ゴ liufs 「可愛い、愛すべき」, リ liaupsē 「讃美、賛歌」< *leubh-

БЛЮДЖ, **БЛЮДЕШИ** (epentheticum **Л** を伴う), ギ $\pi \epsilon \acute{\upsilon} \theta o \mu a$ ι 「知る、情報を得る」, ゴ ana-biudan 「指示、指令する」< *bheudh-

15. **ΤΡΑΣЖ**, **ΤΡΑΣΕШИ**, ギ $\tau \rho \acute{\epsilon} \mu \omega$, ラ tremō 「震える」< *trem-

16. **ПАТЬ**, ギ $\pi \acute{\epsilon} \nu \tau \epsilon$, ゴ fimf, 古イ pañca 「5」, リ penkī 「5」< *penkʷ-, penkʷt-

17. **БРЪЗА**, リ béržas, 古ブ berse 「白樺」, ゴ baírhts 「明るい、光輝く」< *bherg'- (§.4 も参照)

ЧРЪДА 「有角家畜群」, リ keřdžius 「牧夫」, ゴ haírda 「家畜の群れ」< *kerdh-, cf. 古イ sárdhaḥ 「家畜の群れ」< *k'erdh-

18. **ПѦВѦ**, 古ブ pelwo, リ 複 pēlūs 「殻、粉がら」< *pelu-

スラヴ祖語の二重母音は、母音前、すなわち別音節前では、単母音化していない。しかし、二重母音の ei は、 $i\dot{i} > \mathfrak{b}i$ へと変化した（次例参照、ラ 主・複 hostēs 「敵」, ゴ gasteis 「客」< *ghost-ei-es, ところが一方、**ГОСТЬЕ** < スラ祖 *gost-iṯ-es < *ghost-ei-es ; 古イ 主・男・複 tráyah, ギ $\tau \rho \epsilon \dot{\iota} \varsigma$, クレタ $\tau \rho \acute{\epsilon} \epsilon \varsigma$, ラ trēs 「3」< *trei-es, 一方、**ТРЕ** < スラ祖 *triṯes < *treies）。また、一方、二重母音の eu は、硬母音の前では ou に変わっている（次例参照、ギ $\nu \acute{\epsilon} o \varsigma$, ヒットイト newa-, ゴ niujis 「新しい」< *neu- であるのに **НОВЪ**; ギ $\kappa \lambda \acute{\epsilon} o \varsigma$ 「栄光、榮譽、名声」< *k'leu-os であるのに **СЛОВО**）。同様の $eu > ou$ 変化はイタリア諸語にも観察される — cf. novus 「新しい」< *neu-os。u 語幹名詞の曲用において、格形の中で **-ЕВ-** に替わる接尾辞 **-ОВ-** は類推（アナロジー）によって現れるものである — 例、主・複 **СЪНОВЕ** < *sūn-eu-es は、生・複 **СЪНОВЪ** < *sūn-eu-on

の影響によるものであり、この場合、eu > oB の交替は規則的である。

二重母音の er, el, em, en は、母音 e が 低減階梯の時、br, bl, bm, bn に替わるか、また別の記録では r, l, m, n に替わっている。前者の記録は、古ブルガリア語の書記法に近いが（語根母音の低減階梯を持つ **ВЛЪКЪ**, **ВЛАКЪ**⁽³⁾ < *u₁lk^w-, cf. 1・単・現 **ВЛѢКЪ** < *uelk^w- における e 階梯と **ОБЛАКЪ** < *obh-uolk^w- の o 階梯）、後者の記録は、学者達が古代インド文字（デーヴァナーガリー）を転写する方法に似ている（**ВЛЪКЪ**, **ВЛАКЪ** に対する 古イ vṛkaḥ 「狼」参照）。書法として、二方法とも（br も r も）使うが、長母音を示したい時には ṛ の表示のみを使用することにする。

子音前では、始原的結合 br, bl, bm, bn（すなわち、母音 r, l, m, n）は、古代ブルガリア、古代インド、ギリシャ、ラテン、リトアニア、ゴート語において、次のような対応を有する：

	始原的 結 合	古ブ	古イ	ギ	ラ	リ	ゴ
1	br(r)	рѣ, рѣ, ѣр, ѣр	ṛ	ρ α, α ρ	or	ir, ur	aúr(=or)
2	bl(l)	лѣ, лѣ, ѣл, ѣл	ṛ	λ α, α λ	ul	il, ul	ul
3	bm(m)	м, г эѣ	a	α	em	im	um
4	bn(n)	м, г эѣ	a	α	en	in	un

例：

1. **СРЪДЪЦЕ**, リ širdīs, ギ καρδία, καρδίη, ラ 属 cordis 「心臓、心」 < *k'rd- ; cf. **СРЪДА** < *k'erd- の語根母音の e 階梯、また ゴ hairto 「心臓、心」, リ šerdīs 「心（しん）、中心」も参照。

СЪ-МРЪТЪ, リ mirtīs, 古イ mṛtiḥ, ラ 属 mortis, ゴ maúrthr 「殺人」 < *mṛ-t-

2. **ВЛЪКЪ**, ゴ wulfs, 古イ vṛkaḥ, リ vilkas 「狼」 < *u₁lk^w-

3. **ДЕСАТЬ**, リ dešimtas 「第十の」, 古イ dāśa, ラ > decem, ギ δέκα, ゴ taihun 「十」 < *dek'm-, *dek'm-t-

4. **ПАМАТЬ**, 古リ *mintis* 「思考、思い」, 古イ *matih* 「思考、考え」,
ラ 属 *mentis* 「思考、知性」, ゴ *ga-munds* 「記憶、覚え」, ギ *αὐτ*
ό-ματος 「自動の、自発的」 < *mṇ-t-

子音前では、始原的な長母音 *ī*, *ī*, *ṁ*, *ṇ* は、古代ブルガリア、古代イ
ンド、ギリシャ、ラテン、リトアニア、ゴート語において、次のような対応
関係を有する：

	原母音	古ブ	古イ	ギ	ラ	リ	ゴ
1	<i>ī</i>	рѣ, рѣ, ѣр, ѣр	<i>īr, ūr</i>	<i>α ρ α, ρ ω, α ρ ο</i>	<i>rā</i>	<i>ir, ur</i>	<i>aīr (=or)</i>
2	<i>ī</i>	ѣѣ, ѣѣ, ѣѣ, ѣѣ	<i>ūr, īr</i>	<i>λ ā, ο λ</i>	<i>lā</i>	<i>il, ul</i>	<i>ul</i>
3	<i>ṁ</i>	ѣ, г ѣѣ	<i>ā</i>	<i>μ ā</i>	<i>mā</i>	<i>im</i>	<i>um</i>
4	<i>ṇ</i>	ѣ, г ѣѣ	<i>ā</i>	<i>ν ā</i>	<i>nā</i>	<i>in</i>	<i>un</i>

例 (§ 4 も参照)：

1. 受過分・主・男・単 **ПРОСТРѢТЬ**, 古イ *stīrṇāh* 「まき散らした」,
ギ *σ τ ρ ω τ ός*, ラ *strātus* 「敷かれた、広がった」 < *stīr-
2. **ПѢНѢ**, 古イ *pūrṇāh*, リ *pīlnas*, ゴ *fulls* < *pīn-

語末閉音節では、原母音はもっと別の方法で変化した。それらに対する古
代ブルガリア語の対応は次の通りである：

- | | |
|---|--|
| I. <i>os</i> > ѣ | <i>ios</i> > ѣ |
| II. <i>on</i> > ѣ | <i>ion</i> > ѣ |
| III. <i>us, un</i> > ѣ | <i>is, in</i> > ѣ |
| IV. <i>ōs</i> > ѣ | <i>iōs</i> > ѣ (IX も参照) |
| V. <i>ōn(ōm, ām, ān)</i> > ѣ | <i>iōn(iōm, iām, iān)</i> > ѣ |
| VI. <i>ons</i> > ѣ | <i>ions</i> > ѣ , 古口 ѣ |
| VII. <i>āns</i> > <i>ons</i> > ѣ | <i>iāns</i> > <i>ions</i> > ѣ , 古口 ѣ |
| VIII. <i>uns</i> > ѣ | <i>ins</i> > ѣ |
| IX. <i>ōis</i> > <i>ōs</i> > ѣ | <i>iōis</i> > <i>iōs</i> > ѣ |

語末の位置における $us > \text{ʌ}$ 及び $is > \text{ɫ}$ の変化 (Ⅲ) は、語末子音の消失 (いわゆる開音節法則) に続く $u > \text{ʌ}$ 及び $i > \text{ɫ}$ の規則的变化を表している。語末の位置での un, in (Ⅲ) は、初ず狭い鼻母音 $ɥ, i$ に変わったが、古代ブルガリア語の鼻母音にはならず、その随伴鼻音を失って、 ʌ 及び ɫ をもたらした。語末結合群 os, on (Ⅰ, Ⅱ) は、狭まって、 us, un に変わり、また同じく、 $ɥ, i$ を介して、 $\text{ʌ}, \text{ɫ}$ をもたらした。同様にして、 ios, ion (Ⅰ, Ⅱ) は ɫ をもたらした ($ios > \text{ɫ}$ 及び $ion > \text{ɫ}$ の変化は、 $os > us > \text{ʌ}$ 及び $on > un > \text{ʌ}$ の変化を基に変換することによって、 $ios > ius > i\text{ʌ} > i\text{ɫ} > \text{ɫ}$, $ion > iun > i\text{ʌ} > i\text{ɫ} > \text{ɫ}$ のような展開過程として示すことができる)。 $os > us > \text{ʌ}$ (Ⅰ, Ⅲ) の変化に合わせて、始原的な語末結合 $ōs$ は $ūs$ を経て、 ʌ となり、また始原的結合 $iōs$ は $iūs$ を経て、 ɫ となった (Ⅳ) ; cf. 本節冒頭の表に基づいて並べた $u > \text{ʌ} : ū > \text{ʌ} = i > \text{ɫ} : ī > \text{ɫ}$ 及び Ⅰ, Ⅲ, Ⅳに基づいて並べた $os > us > \text{ʌ} : ōs > ūs > \text{ʌ} = ios > ius > \text{ɫ} : iōs > iūs > \text{ɫ}$ の平衡関係。始原的な語末結合 uns, ins は長い狭い鼻母音 $ɥ, i$ を媒介として (古代ブルガリア語の鼻母音には発展しなかったが)、 ʌ 及び ɫ をもたらした (Ⅷ) 。 un, in は、むき出しの語末の位置 (絶対的語末) では $ɥ > \text{ʌ}$, $i > \text{ɫ}$ となったが (Ⅲ) 、閉じた語末の位置 (子音 s の前) では、鼻音化の際長母音化したのである。語末結合 ons は $uns > ū$ を介して ʌ となった (Ⅵ) ; cf. $un > ɥ > \text{ʌ} : uns > ū > \text{ʌ} = on > un > ɥ > \text{ʌ} : ons > uns > ū > \text{ʌ}$ の平衡関係。語末結合 $ions$ からは、 e の狭い長い鼻母音が得られた。古代ブルガリア語の基になった方言も含めて、スラヴ祖語方言の一部では、それは ʌ に変わったが、西スラヴや東スラヴ語の基になった別のスラヴ祖語方言では、鼻母音の早期消失によって、それは他のすべての長母音 e がそうであったのと同じように、すなわち ʌ に変わったのである。閉じた語末の位置 (子音 s の前) では、長い二重母音 $ān$ ($ām$) は an (am) に短縮し、その結果更に、 a と o のスラヴ祖語における同一化によって、 $āns$ 結

合は *ons* > **𐌿** に変わった。同様にして、*iāns* 結合は *ions* > 古代ブルガリア語 **𐌿**, 古代ロシア語 **ѣ** に変わっている (VII)⁵。

閉じた語末の位置 (子音 *s* の前) では、原二重母音 *ōi* は *ō* に短縮し、その結果、*ōis* 結合は *ōs* を介して **𐌿** に変わり、同様にして始原的結合 *iōis* > *iōs* は **𐌿** に変わったのである (IV, IX)。

例:

I. 主・単 **𐌵𐌿𐌽𐌿** < **ul̥kʷos*, cf. 古イ *vŕkaḥ*, ギ *λύκος*, ラ *lupus*, リ *vilka* 「狼」

1・複・現 **𐌵𐌿𐌽𐌿𐌵** < **bher-e-mos*, cf. ラ *ferimus* 「我々は運ぶ」
< **bher-e-mos*

与・複 **𐌸𐌿𐌽𐌿𐌵** < **sūn-u-mos*, cf. 古ラ 与・複 *quercubus* 「オークの木」 < **perkʷ-u-bhos* (§. 32 の第4項参照)

主・単 **𐌵𐌿𐌽𐌿** < **uodh-ios*, cf. ラ *alius*, ギ *ἄλλος*, ゴ *aljis* 「別の、他の」 < **aljos*, リ *elnias* 「鹿」 < **elnjos*

例えば、**𐌵𐌿𐌽𐌿** < **nebhos* のような *es* 語幹の主・対格形は (cf. ギ *νέφος* 「雲」, 古イ *nābhas-* 「霧、空」)、**𐌵𐌿𐌽𐌿** < **iug-o-* の例と同じく、*o* 語尾を有する。

II. 1・単・単純アオ **𐌵𐌿𐌽𐌿** < **pōd-om*, cf. 1. 未完 *ἐφερο*
ν = 古イ *ābharam* 「私は運んでいた」 < **e-bher-om*

対・単 **𐌵𐌿𐌽𐌿** < **ul̥kʷ-on*, cf. 古イ *vŕkam*, ギ *λύκον*, ラ *lupum*, リ *vilka*

対・単 **𐌵𐌿𐌽𐌿** < **uodh-ion*, cf. ラ *alium*, ギ *ἄλλον*, ゴ *aljan-a* 「別の」 < **al-ion*

III. 対・単 **𐌸𐌿𐌽𐌿** < **sūn-un*, cf. 古イ *sūnūm*, ギ *πῆχυν*
「肘、腕」, ラ *querc-um* 「オークの木」 < **perkʷ-un*, リ *sūnų* 「息子」

対・単 **𐌵𐌿𐌽𐌿** < **nokʷt-in*, cf. リ *nākti*, 古イ *matīm* < **m̥p̥t-in* 「思考、考え」, ギ *πόλις* 「町」, ラ *turrim* 「塔」

IV. 主・複 **МЫ** < *mōs, cf. リ mēs, 古プ mes, ラト mēs「我々」, o 階梯に替わって、e 階梯を伴う、また ラ 主・複 nōs「我々」 < *n- (代名詞語根、§. 35 参照)

主・複 **ВЫ** < *uōs (= ラ 主・複 vōs「あなた達」)

V. 対・単 **ЖЕНЪ**, Г **ЖЭРЭ** < *g^wen-ān, cf. 古イ āśvām = ラ equam「牝馬」 < *ek'u-ān, ギ **χωρᾱν**「国、地方」, リ rañk a = **РЖКЖ**

1・単 **БЕРЖ**, Г **БЭБЭ** < *bher-ō-m (§. 35参照)

造・女・単 **ТОЖ**, Г **ТЭЖ** < *toj-ām

VI. 複・対 **ВЛЪКЪ** < *u_lk^w-ons, cf. クレタ **λύκονς**, Г wulfans「狼(複)」, 古プ deiwans「神(複)」

現在能動分詞・主・男・単 **СЪ** < *sons < *sonts, cf. 古イ sán, ギ ὄν < *sonts (= being)。例えば、スラヴ祖語の *sū < *sons < *sonts に、前接語(enclitic)として主格男性単数の前方照応代名詞(承前代名詞、anaphora) *īь (=И)が後続するとき、古い鼻母音 ū < on s は語末位置に来ず、その鼻母音的調音を残している。Cf. 承前代名詞付加分詞形(長語尾形) **САИ** (グラゴール **ЯСЯ**), **СЖИ**、また、承前代名詞なしの分詞形(短語尾形) **ГРАДЪ**, **ЖИВЪ**, **ТДЪ** に対する承前代名詞付加分詞形(長語尾形) **ГРАДАИ**, **ЖИВАИ**, **ТДАИ**, **ГРАДЖИ**, **ЖИВЖИ**, **СТРѢГЖИ** も同様。おそらく、**Є** (上記のキリール文字の翻字では **А** を以て伝えられる) は、硬い閉じた鼻母音を表す記号である。

主・単 **КАМЪ** < *kāmons (§. 37 参照)

対・複 **ВОЖАА** < *uodh-ions, cf. Г aljans「別の(もの)」、ただし、古プ **КЛЮЧА**, **ВОА**, **ЦЕСАРА**, **КОНА** に対して、古ロ **КЛЮЧѢ**, **ВОѢ**, **ЦЕСАРѢ**, **КОНѢ** 参照。

能動現在分詞・主・男・単 **ПЛАЧА** < *plāk-ions < *plāk-ions
スラヴ祖語の現在語幹接尾辞 -i- を持つ動詞(例えば、1・単・現 **МОЛЖ**, 2 **МОЛИШИ**, 不 **МОЛИТИ**, 1・単・現 **МЪНЖ**, 2 **МЪНИШИ**, 不 **МЪН**

ТИ) は、能動現在分詞主格男性単数形を、現在語幹接尾辞 -io- (-ie-) を持つ動詞 (ПЛАЧЪ, ПЛАЧЕШИ, ПЛАКАТИ) をモデルにして、形成した -

例、МОЛА < *mol-īns < *mol-īnts . МЪНА < *mъn-īns < *mъn-īnts 。単純アオリスト (прост аорист) 3人称複数形を持つ動詞は、現在形をモデルにして、その形を形成した - 例、3・複・単純アオ ПАДЪ < *pōd-ont, 3・複・現 ПАДЖТЪ < *pōd-ont-i (§ .19 参照)。

VII. 主・対・複/生・単 ЖЕНЪ < *g'en-āns, cf. 古ブ 対・複 gennans 「女達」, クレタ 対・複 χωραυς 「国、地方」

主・対・複 . 生・単 БОУРА < *bhour-iāns, ただし、古ブ ЗЕМЛА, ВОНА, ПЪШЕНИЦА, ПЪТИЦА, ДОУША に対する 古ロ ЗЕМЛЪ, ВОНЪ, ПЪШЕНИЦЪ, ПЪТИЦЪ, ДОУШЪ 参照。

VIII. 対・複 СЪНЪ < *sūn-uns, cf. 古イ sūnūn, クレタ υἱοὶς 「息子達」 < *sū-i-uns (СЪНЪの Н は古い語根拡張子、語根 *su- の意味については、§ .33 参照), ゴ sununs

対・複 НОШТИ < *nokʷt-ins, ゴ 対・複 gastins = ГОСТИ < *ghost-ins

IX. 造・複 ВЛЪКЪ < *uļkʷ-ōs < *uļkʷ-ōis, cf. 古イ vřkaiḥ, アヴェスタ vahrkāis 「狼達と共に」, おそらく、リ 造・複 vilkaīs も *uļkʷ-ōis から、原初期の ōi > oi への短縮に次いで発生したものである ; ラテン語、奪・与 lupīs < *uļkʷ-ois < *uļkʷ-ōis も参照。

§. 3 ラリungal (喉音)・モデル

青年文法学派モデルの唯一の欠点は、二つの異なるタイプの語根（いわゆる、軽い語基と重い語基）と二つの独立母音 *a* と *e*（一方が他方の階梯ではなく、軽い語基に五つの階梯、重い語基に三つの階梯を有する）、そしてある語根では *e* の対応階梯、別の非常に少数の語根では *a* の対応階梯、これまたある少数の語根では独自の階梯（軽い語基に三つ、重い語基に二つ）を持つある第3の母音 *o*、を前提とする母音階梯の体系である。この煩雑な、またシムメトリーを欠く状態は、いわゆるラリungal (Laryngeal)・モデルの助けを借りることによって — それは、いくらかは抽象的な手法で設定され、またいくらかはヒットイト語の資料とも合致しているのであるが — 排除できる。ラリungal・モデルの基本構想は次の通りである：

1. 三つの音声学的要素 H_1, H_2, H_3 が存在した。
2. それらは、母音 *e* と隣接する時脱落し、母音 *e* とその対応階梯 *o* は、次のようなルールで変化を行った：

$H_1e > e$	$H_1o > o$	$eH_1 > \bar{e}$	$oH_1 > \bar{o}$
$H_2e > a$	$H_2o > o$	$eH_2 > \bar{a}$	$oH_2 > \bar{o}$
$H_3e > o$	$H_3o > o$	$eH_3 > \bar{o}$	$oH_3 > \bar{o}$

e と *o* の延長階梯は、非延長階梯と同じように変化を行った（ $H_1\bar{e} > \bar{e}$, $H_2\bar{e} > \bar{a}$ 等）。

3. 母音 *e* がゼロ階梯の時には、 H_1, H_2, H_3 は同一母音に変じた（古代インド語では *i*、ラテン語では *a*、古代ブルガリア語では *o*、ギリシャ語では *a*、ギリシャ語は時に $H_1 > \varepsilon$, $H_2 > \alpha$, $H_3 > o$ の結果を得る；これは、アナロジーによって、語根母音が *e* 階梯の場合に合わせたものである — 次例参照、1・単・未 $\theta \eta \sigma \omega$ 「置くだろう」

< *dheH₁-s-, 動詞派生形容詞 $\theta \varepsilon \tau \acute{o} \varsigma$ 「据えた、定まった」 < *dhH₁-t- ; ドーリス 1・単・未 $\sigma \tau \acute{\alpha} \sigma \omega$ 「置くだろう」 < *steH₂-s-, 動詞派生形容詞 $\sigma \tau \alpha \tau \acute{o} \varsigma$ 「据えた」 < *stH₂-t- ; 1・単・未 $\delta \acute{\omega} \sigma \omega$ 「与えるだろう」 < *deH₃-s-, 動詞派生形容詞 $\delta \omicron \tau \acute{o} \varsigma$ 「与えられた、所与の」 < *dH₃-t-)。

ラリungal・モデルは、青年文法学派のモデルに対して次のような長所をもつ：

1. 単子音語根と両子音語根の差異が解消する。不定詞 **ΑΓ-ΤΗ, ΣΤΑ-ΤΗ, ΑΔ-ΤΗ** (< *dheH₁-, *steH₂-, *deH₃-) の語根の祖語構造は、1人称単数現在の **ΒΕΡ-Χ, ΗΕC-Χ** の語根の両子音構造と何等異なる所がない。語頭母音を持つ語根は、語頭子音を持つ語根から引き出すことができる — 1・単・現 **ΕC-ΜΛ** ラ 1・単・現 ag-ō 「導く、駆る」, **ΟΚ-Ο** (*H₁es-, *H₂eg'-, *H₃ok'-) における語根の祖語構造もまた 1・単・現 **ΒΕΡ-Χ, ΗΕC-Χ** の語根の構造と異なるところはない。

2. 母音交替の体系において、母音 a は、母音 e に対する等価的な対応母音ではなくなり、そこから派生する母音 (e に隣接して、H₂ の音がある場合に) に還元する。こうすれば、e : o の交替が極めて多発的な現象であるのに対して、a : o の交替は相対的に極めて希な現象であるという事実も説明されることになる。何れの場合も、o 母音は e 母音の階梯である。a : o の母音交替は H₂ に続く e : o の交替に帰せられるのに対して、青年文法学派のモデルにおいて o が e の階梯でない場合とは H₃ に続く e : o 交替に帰せられることになる。

青年文法学派の階梯6系列は以下の通りである：

- I. e : o : ē : ō : ь (あるいはゼロ階梯)
- II. a : o : ā : ō : ь (あるいはゼロ階梯)
- III. o (第I系列の e、第II系列の a の階梯でない場合の) : ō : ь (あるいはゼロ階梯)
- IV. ē (第I系列の e の延長階梯でない場合の) : ō : ɐ (あるいはゼ

ロ階梯)

V. $\bar{a}$ (第II系列の a の延長階梯でない場合の) : $\bar{o}$: $\bar{e}$ (あるいはゼロ階梯)

VI. $\bar{o}$ (第I系列の e 、第II系列の a 、第III系列の o 、第IV系列の $\bar{e}$ 、第V系列の $\bar{a}$ の階梯でない場合の) : $\bar{e}$ (あるいはゼロ階梯)

ラリンガル・モデルは、これらの諸系列をただ一つの系列 (I) に還元してしまい、そこから (e ないしは o に先行あるいは後続して H_1, H_2, H_3 がある場合に) 他の諸系列 (II - VI) が作り出されたことになる。

ラリンガル・モデルは、例えば、次のような諸例から観察することができる：

ギ 1・単・現 $\alpha \gamma - \omega$ = ラ $ag - \bar{o}$ 「導く、駆る」, ギ $\bar{o} \gamma - \mu o \varsigma$ 「鋤いた路」, リ $amb - \bar{a}g - \bar{e}s$ 「回り道、迂回」, ギ $\alpha \gamma - \omega \gamma - \eta$ 「導くこと、(ある状態に) もってくること」(先頭に a の正常階梯、後続して a の延長対応階梯を持つ語根重複[疊音])。青年文法学派のモデルによれば、これは、 $*ag' - : *og' - : *\bar{a}g' - : *\bar{o}g' -$ (第II系列) の母音階梯であるが、ラリンガル・モデルでは、 $*H_2eg' - : *H_2og' - : *H_2\bar{e}g' - : *H_2\bar{o}g' -$

の母音交替ということになる (1・単・現 **ВЕД-Ж**, 反復相不定詞 **ВОД-ИТИ**, 1・単・アオ **ВѢСЪ** < $*\bar{u}edh - s -$, 不 **ПРИ-ВѢЖДАТИ** < $*\bar{u}odh -$ — 二次的不完了体 — の場合と同じ)。

ギ 1・単・現 $\bar{o} \zeta - \omega$ 「臭いを発する」 < $*odi -$, $\delta \upsilon \sigma - \omega \delta - \eta \varsigma$ 「臭い、臭気のある」。青年文法学派のモデルによれば、この母音交替は $o : \bar{o}$ (第III系列) であるが、ラリンガル・モデルでは、 $*H_3ed - : *H_3\bar{o}d -$ ($*H_3\bar{e}d -$) の交替である。ラリンガル・モデルによれば、 $\bar{o} \zeta - \omega$ 「臭いを発する」 < $*H_3ed -$ 対 ラ $odor$ 「臭い」 < $*od - os$ < $*H_3ed - os$ の相関関係は、ギ 1・単・現 $\kappa \lambda \acute{e} - \omega$ 「賞賛する」 < $*k'leu - \bar{o}$ (1・単・現 **СЛОВЖ**, 不 **СЛОУТИ** と同系) 対 $\kappa \lambda \acute{e} o \varsigma$ 「知らせ、消息、誉れ」 = **СЛОВО** < $*k'leu - os$ の相関関係、すなわち、 e 階梯 対 e 階梯の相関関係と同様の関係たり得るのである。青年文法学派のモデルでは、

そのような解釈は許容され得ない。ラリングル・モデルは、語形成タイプを均一化する、と思われる。

1・単・現 **AT-ik**, 不 **AT-th**, ラ 1・単・完 *fē-cī*「為した」 < **dhē-*, ギ 1・単・現 *τῖ-θη-μι*「置く」, ラ *sacer-dō-s*「司祭」 < **sacro-dhō-t-*, ギ *θω-μός*「堆積、山」, ラ *fa-ctus*, ギ *θε-τός*, 古イ *hi-táh* < **dhi-táh*「為された、据えられた、配置された」。青年文法学派のモデルでは、この交替は *ē : ō : ə* (第IV系列) であるが、ラリングル・モデルでは、**dheH₁-* : **dhoH₁-* : **dhH₁-* となる。

不 **CTA-th** ラ 不 *stā-re*, ドーリス 1・単・現 *ῖσταιμι* < **σῖ-σται-μι*「置く、据える、立てる」, ラ *sta-tus*, ギ *στα-τός*, 古イ *sthi-táh*「置かれた、据えた」。青年文法学派モデルでは、この交替は *ā : ə* (第V系列) であるが、ラリングル・モデルでは **steH₂-* : **stH₂-* である。

不 **AA-th**, ギ 1・単・現 *δί-δω-μι*, ラ 不 *da-re*, ギ *δο-τός*, ラ *da-tus*「与えられた」, 古イ 中動(反射態)アオ *a-di-t*。青年文法学派モデルでは、この交替は *ō : ə* (第VI系列) であるが、ラリングル・モデルでは、**deH₃-* : **dH₃-* である。

ラ *auris* < **ausis*, ギ *οὖς*, 属 *οὖρατος* (ホメロスの言語)「耳」, ドーリス 複 *ῶρατα*「耳」。青年文法学派モデルでは、この交替は **ōus-* : **əus-* (第VI系列) である。ラリングル・モデルでは、ラ *auris* < **ausis* は **H₂əus-* から引き出すべきであるが、ドーリス 複 *ῶρατα* は、長二重母音 *ōu* の *ō* への短縮と母音間の *s* の脱落を伴う **ōs-a-t-* < **H₂ōus-η-t-* から引き出すべきである(延長階梯を持つ語根の集合・多数性の意味については、§. 5 参照)。ギ 主・単 *οὖς* は **H₂ous-* から生じたものである。

ラリングル・モデルの助けを借りることによって、**pet-* : **ptō-* : **ptā-* (ギ 1・単・現 *πέτομαι*「飛ぶ」, 1・単・完 *πέπτωκα*「倒れた、落ちた」, ドーリス 1・単・アオ *έπταν*) タイプの

交替も、例えば、主・単 **КАМЪ** と ギ $\alpha\kappa-\mu\omega\nu$ 「金敷、砧骨」, リ $akmu\tilde{o}$, 古イ $\acute{a}\acute{s}man-$ 「石」のような場合の対応や ラ $avis$ 「鳥」に対する 中世ブ **AE** 「卵」のような場合の対応も説明されるのである。

ラリンガル・モデルによれば、上の一連の形において、語根 $*pet-$ は拡張子（接尾辞） $-H_2-$ を得たのであって、したがって、ドーリス 1・単・アオ $\epsilon-\pi\tau\tilde{\alpha}-\nu$ と 1・単・完 $\pi\epsilon-\pi\tau\omega-\kappa\alpha$ は、 $*pt-eH_2-$ 及び $*pt-oH_2-$ （語根のゼロ階梯とそれぞれ接尾辞の e 階梯、 o 階梯）から生じたものである。接尾辞 $-H_2-$ の存在については、古イ スピ $p\acute{a}t-i-tum < *pet-H_2-t-$ が証明している。一方、主・単 **КАМЪ**, 生 **КАМЕНЕ** は $*H_2k'-eH_2-men-$ （語根のゼロ階梯と接尾辞 $-H_2-$ の e 階梯）から生じたものであるのに対して、リ $ak-mu\tilde{o}$, ギ $\alpha\kappa-\mu\omega\nu$, 古イ $\acute{a}\acute{s}man-$ は $*H_2ek'-H_2-men-$ （語根の e 階梯と接尾辞 $-H_2-$ のゼロ階梯）から生じたものである。H (H_1, H_2, H_3) の、先行の後口蓋子音との融合については、以下を参照。

ラ $avis$ 「鳥」は、 $H_2e > a$ と $H_3 (=H^*, \text{以下参照}) > u$ の変化を伴う $*H_2eH_3-i-$ から引き出すべきである。Cf. ラ $\tilde{o}vum$ 「卵」 $< *H_2\tilde{o}H_3-o-$, ギ $\phi o\nu < *\acute{\omega}F\iota-o- < *H_2\tilde{o}H_3-i-$, 中世ブ **AE** $< *H_2H_3-\tilde{o}i-o-$ （語根母音のゼロ階梯と接尾辞 $-\tilde{o}i-$ の延長対応階梯 ; **АНЦЕ** $< *o\tilde{i}-k- < *H_2H_3-\tilde{o}i-k-$ は古い接尾辞 $-k-$ を含む, cf. オセツト⁶ aik 「卵」）。 H_2H_3 （ここでは $H_3 = H^*$ ） $> u$ への変化は、古チ $vajce$, スロ $vajce < *H_2H_3-\tilde{o}i-k-$ において証明される。 $*H_2\tilde{o}H_3-i-$, $*H_2H_3-\tilde{o}i-$ における延長階梯 $\tilde{o}$ については、§. 5 参照。

二つの異なる現母音 $o (\tilde{o})$ — すなわち、 $o_1 = \text{ア } o$ （あるいは u ）, $o_2 = \text{ア } a$ 、また、 $\tilde{o}_1 = \text{リ 語中音節 } \tilde{o}$, $\tilde{o}_2 = \text{リ 語中音節 } uo$ (§. 2 参照) — は、それぞれ $o > o_1$, $H_3o > o_2$ 、また $\tilde{o} > \tilde{o}_1$, $H_3\tilde{o} (oH_3) > \tilde{o}_2$ から引き出されるのである。次例参照、ア $lusa-vor < *luk'-\tilde{a}-bhor-$ 「明るさをもたらす」における $-vor$ (cf. **СЪ-БОРЪ**) に対して、ア akn 「穴、孔、眼」 $< *H_3ok^*-n-$ (cf. **ОКО**, ブ方言 o

к н о「小さな孔、穴、小窓」= ロ о к н о) ; リ iŝ-vora「スープ」= ブ извара「凝乳チーズ、コテージチーズ」(cf. ВАРЪ「炎熱、熱気」 < *uōr- [リ vérdu「支度する」 < *uer- における e 階梯と不定詞 ВЪРЪТИ における低減階梯参照])に対して、リ úosis「とねりこの木」 < *H₃ōs- (cf. ИСЕНЬ 語頭にヨット付き), А haçi「とりねこの木」 < *H₃osk'-, また ААТИ と同系の リ dúoti < *deH₃- も類例。

ラリンガル・モデルは次例のようなヒッタイト語資料にも合致している。ギ áντí「〔に〕(反) 対して」や ラ ante「前に、〔の〕前に」は原初形 *H₂ent- を推定させる。ヒッタイト語の対応形は ḫant「前方」であり、ここでの ḫ は恐らく後舌無声流出音である。同様にして、ギ áργός「白い、輝かしい、明るい」, ギ ἄργυρος, ラ argentum「輝く、光る金属 > 銀」 < *H₂er-g'- に対しては、ヒッタイト語 ḫar-ki-(=ḫargi-)⁽⁴⁾「白い」が対応し、また、1・単・現 ПАСЖ < *pe H₂-sk'- (cf. ラ 1・単・現 pā-scō「放牧する」— 現在時制の接尾辞 sk'- は、ラ 1・単・完 pā-vī では消失する) に対しては、ヒッタイト語 pa ḫ-š-「番をする、守る、保存する」(意味については、同一語根である ПАЗЯ「番をする、守る」と不定詞 СЪ-ПАС-ТИ「救う」を参照) が対応する。ラ plānus「平の、均しい」 < *pl-eH₂- (語根ゼロ階梯) に対しては、ヒッタイト語 palḫiš「広い」 < *pol-H₂- (接尾辞ゼロ階梯) が対応する。同一語根からのものとして、ПОЛЕ や ПЛАНИНА「高原」がある。

これらの際立った一致が見られることからして、ラリンガル・モデルはヒッタイト語資料に完全な裏づけをもったものだということにはならない。H₁, H₂, H₃ の推定音に対応するのは ḫ という一子音だけである。別の例において(ギ áπó, ラ ab = ヒッタイト appa)、ラリンガル・モデルは、ヒッタイト語の単語の語頭に ḫ が来ることを要求するが、そこには語頭子音は存在しないのである。

H₁, H₂, H₃ の音声学的性質については統一見解はない。現代のラリングル・モデルの創始者クリウォーヴィッチ (J. Kuryłowicz, 1927) やバンヴェニスト (E. Benveniste, 1935) は、H₁, H₂, H₃ を音声学的不定要素 (代数学における変数に似て) として扱っており、それは比較歴史対照の一層の透明性と体系化を必要としているのである。H₁, H₂, H₃ は、ヒッタイト語の *ḫ* の子音的性質から推して、現代のセム・ハム語に存在しているような、もっと古い喉音 (ларингарни [гърлени] звукове) から出た、後舌無声流出音 (задноезични беззвучни проходни съгласни) であったと考える研究者もいる。このモデルの名称もここから得られたものである。アンドレーエフ (Н. А. Андреев, 1959) によれば、H₁ は (硬) 口蓋化軟口蓋音 (палатализиран велар) [H']、H₃ は (円) 唇軟口蓋音 (лабиализиран велар) [H*]、H₂ はそのどちらでもない。この推定は、H₁e > e, eH₁ > ē; H₂e > a, eH₂ > ā; H₃e > o, eH₃ > ō の変化とも合致している。

ヒッタイト語の *ḫ* や推定音 H₁, H₂, H₃ の後舌音的な性質については、サピア (E. Sapir, 1939) やマルティネ (A. Martinet, 1955) がその一部を立証したいくつかの間接資料がある。ギ *óστέον*, 古イ *asthi* 及び ラ *os*, 属 *ossis* < **ostis* 「骨」は *H₃os- なる原語根を推定させるが、これはヒッタイト語 *ḫaštai* 「骨」によって確認される。他の印欧諸語では脱落してしまったヒッタイト語の *ḫ* (H₃) は、**кость** や ラ *costa* 「肋 (骨)」において、後舌無声子音として残っている。古イ *ajāḫ* 「雄山羊」, *ajā* 「(雌) 山羊」, リ *ožys* 「雄山羊」は原語根 *Heg'- とその階梯を予想させる。語頭の H (= H₁, H₂) は **а́зъно**, **і́зъно** 「皮 (膚)」 < *Hōg'- では落ちてしまっている。しかし、それは **ко́за**, **ко́зълъ**, **ко́жа** における後舌子音として保存されている。能動過去分詞 **шъа́лъ** < *H₁i-dh- の起源については、§ 13 参照。

古代ブルガリア語の二子音間の位置における H(H₁, H₂, H₃) には、母音

◇ が対応している。第Ⅱシグマ・アオリストの、例えば、1・単 **НЕС-О-ХЪ** < *nek'-H₂-s- の起源については、§. 12 参照。

先行母音がソナント (r, l, m, n, i, u) である時、H (H₁, H₂, H₃) の音は脱落して、それは延長した — 例、**ПЛЪНЪ** < スラ祖 *pl̥-n- < *pl̥-H₁-n- (cf. 古イ pūrṇāḥ, リ pīlnas 「いっぱい、満ちた」 < *pl̥-H₁-n-) である。一方、ラ plēnus 「いっぱい、満ちた」 < *pl̥-eH₁-n-, ギ 1・単・アオ **ἔ-π λ η-σ-α** 「満たす」 < *pl̥-eH₁-s- (§. 4 も参照)。主・女・単、たとえば、**СН** 「この」 < *k'-i-H₂ や **ЖРЪНЪ**, 生 **ЖРЪНЪВЕ** 「水車、挽臼」 < *gʷr̥H₂n-uH₂ の語尾における **Ъ, Н** < *uH₂, *iH₂ の起源については、§. 24 参照。r, l, m, n, i, u が下向き二重母音の第二要素である場合には、それらに後続する H 音は脱落し、二重母音の第一要素は延長した — 例、1・単・アオ **ПАСЪ** < *pēn-s- < *pen-H₂-s-, **МРЪХЪ** < *mēr-s- < *mer-H₂-s-, cf. §. 10。

H の音が後舌子音後にあるとき、一部の例では、それが軟口蓋化して先行子音と融合してしまう。**ДЪШТИ**, リ duktě, ゴ daūhtar < *dhug-H-ter 「娘」参照。H の存在については、gH > gh への変化を伴う

ギ **θυγάτηρ** や 古イ duhitā が証明している。**но-сохъ** 「先が二つに分かれる棒、熊手、(農業用) フォーク」 (cf. ロ **соха** 「ロシア犁」) における子音の **Х** は k-H 結合より派生したものである ; cf. 古イ **sākhā** 「枝」, ゴ **hoha** 「すき」, リ **šaka** 「枝」 < *k'ok-H- (cf. 古イ における帯気音化した k)。

H (H₁, H₂, H₃) に接続する s (母音前の) に対しては、後舌子音後や r, u, i 後 (cf. 1・単・アオ **РЪХЪ** < *rēk-s-om, **ВРЪХЪ** < *ur̥-s-u-, **СНЪХА** < *snu-s-ā, 所・複 **ВЛЪЦЪХЪ** < *ul̥k'-oi-s u) と同じように、古代ブルガリア語において **Х** が対応する **οϋ-σπѢХЪ** < *sp-eH₁-s- の例参照 ; **споръ** 「速さ、多量」 < *sp-H₁-r- も同一語根, cf. 古イ **sphirāḥ** 「沢山の、豊かな」 (H₁ > i と p の帯気

音化 $pH_1 > ph$ を伴う)。不定詞 $\text{πατατι} < *H_1i-eH_2s-$ (§. 13 参照) の X は H_2 に後続する s より出たものである。第 I、第 II シグマ・アオリストの一連の形における $s > X$ の変化 (例えば、1・単 $\text{βηραχτ} < *bh\beta r-e-H_2s-$ と $\text{νεσοχτ} < *nes-H_2s-$) は、先行の H_2 の存在によって説明し得るのである (§. 10 参照)。1・単 $\text{παστ} < *pēn-s- < *pen-H_2s-$ のような第 I シグマ・アオリストの形においては、 $s > X$ の変化は、 H_2 の早期脱落の故に発生せず、その脱落が先行母音の延長を惹起したのである。 $\text{ηκςτ} < *nēk'-s-$ や $\text{βτςτ} < *uēdh-s-$ のような 1・単・アオリストの形は、シグマを保存しているが、それはこれらの祖語形が H_2 を包含していないからである (§. 12 参照)。

ギリシャ語やラテン語の過去形においては、二連続音 H (H_1, H_2, H_3) から得られた後舌子音 k が立証される — 例、ギ 1・単・アオ ἐ-δωκα 「与えた」 $< *deH_3-H_2m$, ἐ-θηκα 「置いた」 $< *dheH_1-H_2m$ 。Cf. ラ 1・単・完 fecī 「為した、行った」 $< *dheH_1-H_2$, 受過分 factus 「為された」 $< *dhH_1-H_2t-$ 。母音で始まる語尾の前の H_2 から得られたギリシャ語完了指標 κ (例えば、1・単・現 λύω 「解放する」) に対する 1・単・完 λέλυκα 「解放した、解いた」) に対しては、古代インド語では、 $i < H_2$ が対応する — 例、2・単・完 bubódhitha 「君は起こした」 $< *bh_2u-bh_2oudh-H_2-$ 。

全ての印欧語の a が、ラリンガル・モデルが求めるような eH_2 から発生し得るとは限らない。クーン (H. Kuhn, 1954) は、ゲルマン、ケルト、イタリア、スラヴ、バルト語群、またギリシャ語に反映されるような、印欧語のヨーロッパ系語群におけるいわゆる a 調 (モード) に注意を向けさせたのである。年代的には、それ (a 調) は新石器時代後期及び青銅器時代初期を包括し、なかなづく農耕に関連する単語に広がり、かつ原則としてインド・イラン語では欠落している。次例参照、 ορατι (=ラ arāre , ギ ἀρόω , リ ārti , ゴ arjan 「耕す」)、同系語として、 ραλλο

< スラ祖 *ordlo, リ ārklas, ギ ἄροτρον, ラ arātrum,
 トカラ āre「鋤、プラウ」; БРАШНО < *bhars-、同系語として、
 ラ fār「穀粉、挽き割り小麦」, ゴ barizeins「大麦の」; БОБЪ <
 *bhab-、同系語として、古プ babo, ラ faba「豆」。こういった語根
 には母音交替が観察されない。このことは、この無交替の a を持つ単語
 は比較的遅い時期に発生したことを物語っている。恐らくは、これらの印欧
 語の単語は、発達した農耕技術をもった非印欧語族からの文化的借用たる単
 語の一部であろう。

§. 4 ラリンガル・モデルとスラヴ祖語アクセント問題

スラヴ祖語期には2種類のソナント - 短母音 (r , l , m , n) と長母音 ($\bar{\text{r}}$, $\bar{\text{l}}$, $\bar{\text{m}}$, $\bar{\text{n}}$) - が存在した (§. 2 参照)。上述のように (§. 3)、長いソナント $\bar{\text{r}}$, $\bar{\text{l}}$, $\bar{\text{m}}$, $\bar{\text{n}}$ は、 rH , lH , mH , nH ($\text{H} = \text{H}_1, \text{H}_2, \text{H}_3$) から得られたものである。アクセントのある始原始的な短母音 r , l , m , n に対しては、曲音調 (circumflex intonation)、すなわち、リトアニア語における曲アクセント [$\sim$] (circumflex)、ラトヴィア語の重アクセント [$\grave{\text{~}}$]、セルビア・クロアチア語の長下降アクセント [$\hat{\text{~}}$]、スロヴェニア語の長下降アクセント [$\hat{\text{~}}$] ないしは長上昇アクセント [$\acute{\text{~}}$] が対応する。

例 : **ВЛЪКЪ**, セ・ク $\text{v} \hat{\text{y}} \text{k}$, ス $\text{v} \hat{\text{o}} \text{k}$, リ $\text{v} \hat{\text{i}} \text{kas}$, ラト $\text{v} \hat{\text{i}} \text{ks}$
СКРЪБЪ, ス $\text{sk} \hat{\text{r}} \text{b}$, セ・ク $\text{c} \text{k} \hat{\text{p}} \text{b}$ 「心配ごと」, リ 不 $\text{sk} \hat{\text{u}} \text{r} \text{bti}$
 「悲しむ」, ラト $\text{sk} \hat{\text{u}} \text{r} \text{bt}$ 「目眩がする、酔う」

СТАЪПЪ, セ・ク $\text{c} \text{t} \hat{\text{y}} \text{p}$, ス $\text{st} \hat{\text{o}} \text{lp}$, リ $\text{st} \hat{\text{u}} \text{lpas}$, ラト $\text{st} \hat{\text{u}} \text{lps}$
 「杭」

ЧРЪВЪ, セ・ク $\text{c} \hat{\text{p}} \text{v}$, ス $\text{c} \hat{\text{r}} \text{v}$, リ 対・単 $\text{k} \hat{\text{i}} \text{r} \text{m} \hat{\text{i}}$ 「虫、うじ、幼虫」

アクセントのある始原始的な長母音 $\bar{\text{r}}$, $\bar{\text{l}}$, $\bar{\text{m}}$, $\bar{\text{n}}$ に対しては、鋭音調 (acute intonation)、すなわち、リトアニア語の重アクセント [$\grave{\text{~}}$] (grave)、ラトヴィア語の曲アクセント [$\sim$] 及び中性名詞にあっては二重アクセント [$\hat{\text{~}}$]、セルビア・クロアチア語の短下降アクセント [$\grave{\text{~}}$]、スロヴェニア語の閉音節における長下降アクセント [$\hat{\text{~}}$] 及び開音節における長上昇アクセント [$\acute{\text{~}}$] が対応する。

例 : **ГРЪЛО**, セ・ク $\text{g} \hat{\text{r}} \text{p} \text{lo}$, ス $\text{g} \hat{\text{r}} \text{lo}$, リ 対・単 $\text{g} \hat{\text{u}} \text{r} \text{kli}$
 「咽喉」, ギ $\beta \acute{\alpha} \rho \alpha \theta \rho \omicron \nu$ 「深淵、奈落」 < $*\text{g}^* \text{r} \text{H}$ -

ЗРЪНО, セ・ク $\text{z} \hat{\text{r}} \text{no}$, ス $\text{z} \hat{\text{r}} \text{no}$, リ $\text{z} \hat{\text{i}} \text{r} \text{nis}$ 「えんどう豆粒」, ラト $\text{z} \hat{\text{i}} \text{f} \text{ns}$, ラ $\text{gr} \hat{\text{a}} \text{num}$ < $*\text{g}^* \text{r} \text{H}_2 \text{n}$ - 「すりつぶして粉にしたもの」 > 穀

粒」, cf. 古イ *jīrṇaḥ* 「すりつぶした」 < *g'rH₂n-。異形 *g'rH₂n- については、**ЖРЪНЪ**「製粉所、石臼」, ラト *dziřnus* 「手びき石臼」, リ *gīrna* 「石臼」を参照。*g'reH₂-u- の語幹からは、古イ *grāvan-*「魔法の植物ソーマを砕く石」, cf. アイルランド *bró*「水車小屋」 < ケルト祖語 *brāvan < *g'reH₂-u-。*g'erH₂n- は ゴ *asiluqaīrnus* 「ロバが動かす製粉所」に立証される。

ВЛЪНА, セ・ク *v ŷ n a*, ス *vólna*, リ *vīlna* 「毛、ウール」, ラト *viľna* 「毛」, 古イ *ūrṇā*, ラ *lāna*, ドーリス *λ ᾱ ν ο ς* 「毛」 「長い」 < *uļHn-

ДЛЪГЪ, セ・ク *d ŷ g*, ス *dōlg* (閉音節), 女 *dōlga*, リ *ilgas*, ラト *iľgs* 「長い」, 古イ *dīrghāḥ* 「長い」 < *dļHgh-

1・単・現 **ЖРЪЖ**, 不 **ЖРЪТИ** 「生け贄を差し出す、犠牲を払う」, リ *gīrti* 「ほめる」, ラト *dziřt* 「賞賛する」, 古イ *gīr-* 「賞賛」, ラ主・複 *grātēs* 「感謝」 < *g'rH-。語幹 *g'rH- は、**ΓΡΥΛΟ** (上記参照) もそこから派生するのであるが、当初は、「生け贄の動物の肉(血)を少し味わう > 生け贄を差し出す > 誉め称える」を意味したのである。

Cf. **ΓΡΑΝΕΣΑ** 「賛辞」 < *g'reH-n-, *g'roH-n-, 次も参照 ギ β *ι-β ρ ὠ-σ κ ὠ* 「食べる、飲み込む」 < *g'rH-, 古イ *gīrṇā-* 「飲み込まれた」 < *g'rHn-

ПЛЪНЪ, セ・ク *p ŷ n*, ス *pōln* (閉音節), リ *pīlnas*, ラト *pīľns* 「いっぱい、満ちた」, 古イ *pūrṇāḥ* 「いっぱい」 < *pļH₁n-。

*pleH₁- から派生するものとして、ラ *plēnus* = 古イ *prāṇaḥ* 「いっぱい」, ギ *π λ ῆ ρ η ς* 「いっぱい」, *π ι μ-π λ η-μ ι* 「満たす」がある。

始原的なソナント性短母音 (*r*, *l*, *m*, *n*) と長母音 (*ṛ*, *ḷ*, *m̄*, *n̄*) の他に、ソナントを含む短二重母音 (*er*, *el*, *em*, *en*, *or*, *ol*, *om*, *on*) と長二重母音 (*ēr*, *ēl*, *ēm*, *ēn*, *ōr*, *ōl*, *ōm*, *ōn*) が存在した。ソナントを含む長二重母音は、H (H₁, H₂, H₃) が後続するときの、ソナントを含む短二重母音か

ら発生したものである（すなわち、 $\bar{e}r < erH$, $\bar{e}l < elH$ 等）。始原的なソナントを含む短二重母音に対しては、曲音調、すなわち、リトアニア語の曲アクセント〔 $\sim$ 〕、セルビア・クロアチア語の長下降アクセント〔 $\wedge$ 〕、スロヴェニア語における一音節語の長下降アクセント〔 $\wedge$ 〕と多音節語でのそのアクセント〔 $\wedge$ 〕の一音節後退、チェコ語とスロヴァキア語の短母音、東スラヴ語母音重挿形（*полюгласие*）*оро, оло* における語頭アクセントが対応する。

例：対・単 **БРАДЪ**, セ・ク *брâду*, ス *bradô*, チ、スロ *bradu*, ロ *бòроду*, リ *bařzda* < *bhórdhân

ВРАНЪ, セ・ク *врâн*, ス *vrân*, チ *vran*, ロ *вòрон*, リ *vařnas* 「わたりがらす」 < *uornós

ГРАДЪ, セ・ク *грâд*, ス *grâd*, ロ *гòрод*, チ、スロ *hrad* 「城、砦」、リ *gařdas* 「垣、柵、家畜追い込み酔うに仕切った場所」 < *ghórdhos

ГЛАСЪ, セ・ク *глâс*, ス *glâs*, チ *hlas*, ロ *гòлос* < *golsós, 類似のリトアニア語の単語 *gařsas* 「音」, *bařsas* 「声」

対・単 **ТАДЪ** 「親類、隣人の勤労援助」, ウクライナ *тòлоку* 「放牧地」, リ *tařka* 「援助」 < *tólkân (当初の意味は) 「人あるいは家畜の群れ」

ПЛЪНЪ, セ・ク *плêн*, ス *plên* 「獲得(物)、獲物」, チ *plen*, スロ *plen* 「収奪、暴利」, リ *peľnas* 「収入、報酬」 < *pelnós

対・単 **РЪКЪ**, セ・ク *рûкy*, ス *rokô*, チ *ruku*, ロ *рûкy*, リ *rařka* 「手」 < *rónkân, Cf. 古プ 対・単 *rānkan* (曲アクセントを伴う二重母音の第一要素に長音符号)

ЗЪБЪ, セ・ク *зûб*, ス *zôb*, チ、スロ *zub*, リ *žařbas* 「尖った先、角」 < *g'ómbhos

ЛЪКЪ, セ・ク *лûк*, ス *lôk* 「弓形、弧」, チ、スロ *luk*, リ *lařkas* 「桶などのたが」 < *lónkos

同様のアクセントの相関性は、単母音化した短い二重母音 *ei, oi, eu, o, u* から得られるスラヴ語母音にも観察される。

例 : 対・単 **ЗНМЖ**, セ・ク *zîmy*, ロ方言、ウクライナ *zîmy*, チ、スロ *zimu*, リ *žiema* < *g'hefman

МНГЪ, セ・ク *mîg*, ス *mîg*, チ、スロ *mih*, リ *miëgas* 「眠り、夢」 < *meighós

СНѢГЪ, セ・ク *snêg*, ス *snëg*, リ *sniëgas* 「雪」 < *snoig*^o_s

ДРОУГЪ, セ・ク *drûg*, ス *drûg*, チ、スロ *druh*, リ *draũgas* 「友達、道連れ」 < *dhroughós

ТОУРЪ, セ・ク *tûp*, ス *tûr*, チ、スロ *tur*, リ *taũras* < *taurós

アクセントのある、始原的なソナントを含む長二重母音に対しては、鋭音調、すなわち、リトアニア語の鋭アクセント [ˈ]、ラトヴィア語の曲アクセント [˘]、セルビア・クロアチア語の短下降アクセント [ˑ]、スロヴェニア語の長上昇アクセント [ˊ]、チェコ語の長母音、スロヴァキア語の短母音、ポーランド語における古い短母音の痕跡、すなわち *o* > *ó* 変化の不在、ロシア語の母音重挿形 *оро, оло, ере* における第2母音アクセント、西スラヴ諸語における語頭 *or* > *ra* への変化が対応している。

例 : **БРѢЗА**, セ・ク *brêza*, ス *bréza*, チ *bříza*, ロ *brêza*, リ *béržas*, ラト *bērzs* 「白樺」 < *bherH-, Cf. 古イ *bhūrjah* 「白樺」, リ *bīržis*, ラト *biřzs* 「白樺林」 < *bhṛH-g'-

КРАВА, セ・ク *kráva*, ス *kráva*, チ *kráva*, スロ *krava*, ポ *krowa*, ロ *корòва*, リ *kárvé* 「雌牛」 < *korH-u-, Cf. ギ *κεραός* < *κεραFός 「有角の」 < *ker-H-u-, ラ *c rābrō* < *crāsrō 「熊蜂、門雀蜂、すなわち角状のもので刺す動物」 < *kṛH-s-, *k'ṛH-s- (§. 1 参照)

БРѢМА, セ・ク б р ѣ м е, ス brême, チ břímě, ロ б е р ѣ м я < *bher-H-, Cf. 古イ bharītram 「手、すなわち運ぶもの」 < *bher-H-tr-

РАМА, セ・ク р а м е, ス rāme, チ rāmě, スロ rāmā, ポ ra mię, 上ソルブ ramjo < *arHm-, Cf. 古イ irmāḥ 「肩胛骨」, 古プ irmo 「手」 < *rHm-

РАЛО, セ・ク р а л о, ス rālo, チ rādlo, スロ radlo, ポ、上ソルブ radło, リ árklas 「犁」 < *arH-; Cf. ギ ἄ ρ ο τ ρ ο ν, クレタ ἄ ρ α τ ρ ο ν 「犁」 < *arH-

СЛАМА, セ・ク с л а м а, ス slāma, チ slāma, スロ slama, ポ słoma, ロ с о л ђ м а, ラト saľms 「藁」 < *k'olHm-, Cf. ギ κ á λ α μ ο ς 「藁、藁の茎」

АТРѢ, リ jěntě, ギ ἐ ν ἄ τ η ρ 「義理の姉妹」 < *ienH-ter-, Cf. 古イ yātā, ラ 複 ianitrīcēs < *ianatrīcēs 「義理の姉妹」 < *iṇH-tr-

АНТИ, リ āntis, ラ anas, 属 anatis 「かも」 < *H₂enH-t-, Cf. 語根母音のゼロ階梯の次例、古イ ātīḥ, ギ ν ῆ σ σ α, ボイオーティア? ν ᾱ σ σ α 「かも」 < *H₂ṇH-ti-

ЗАНТ, セ・ク з ѣ т, リ žentas 「むこ、娘の夫」 < *g'enH-t-, Cf. ギ γ ν ω τ ό ς, 古イ jñātīḥ 「親族」 < *g'noH-t-

従列オクシトーンの（すなわち、常に最終音節にアクセントを有する）古い曲用や活用において、先行母音が長母音であったりあるいは何らかの理由で長母音化したときに得られる新鋭音調（new acute, neo-acute intonation）の場合については、別に取り扱う必要があるだろう。この新鋭音調（нов о а к у т о в а и н т о н а ц и я）に対しては、リトアニア語の鋭アクセント [´]、ラトヴィア語の二重アクセント [ˆ]（語末音節から先行音節へのアクセントの移動を表示している）、セルビア・クロアチア語の短下降アクセント [˘] ないしは長下降アクセント [˘˘]、ボサヴィナ（По

савина)⁸ 方言の曲アクセント [˜]、スロヴェニア語の長上昇アクセント [ˊ] (アクセントのある e に閉鎖が伴って ɛ となる)、ロシア語母音重挿形 оро, оло, ере における第2母音アクセント、チェコ語、スロヴァキア語の長母音、ポーランド語における古い長母音の痕跡 (o > ó の変化) が対応している。

例 : **СТРАЖА**, セ・ク стража, ポサヴィナ стража, ロ сторѡжа, 古ロ стража (古代ブルガリア語に一致するアクセントを持つ), ポ stróža

БРѢСТЪ, セ・ク брѣст, ス bręst, ポ方言 brzóst, ロ берѣсто

ДРѢНЪ, セ・ク дрѣн, ポサヴィナ дрѣн, ス dręn, Ч dřín, ロ дерѣн

МРАЗЪ, セ・ク мраз, チ、スロ mráz, ポ mróz, ロ морѡз

青年文法学派モデルによる、古い長母音あるいは古い長二重母音に起源を有する語根母音の、古代ブルガリア語二音節不定詞 (例、**БЪТИ** < *bh ūtēi, **КЛАТИ** < *kōltēi) は特に興味深い。ここでは、語根母音に始原的アクセントを持つ acute 類と不定詞語尾 -tēi に始原的アクセントを持つ neo-acute 類の2種類に分けるべきである。

acute 類 (不定詞・アオリスト幹にアクセントを持つもの) :

БЪТИ, セ・ク бѣти, 3・単・アオ бѣ, 能過分・女・単 бѣла, ロ бѣла, ス bīti, スピ bīt

РЪТИ, セ・ク рѣти, 3・単・アオ рѣ, 能過分 рѣла, ロ рѣла

КЛАТИ, セ・ク клѣти, 3・単・アオ клѣ, 能過分 клѣла, ロ колѡла, ス klāti, スピ klat, リ 不 kalti 「鍛える、打つ」

ШТИ, セ・ク шѣти, 3・単・アオ шѣ, 能過分 шѣла, ロ

шйла, リ siŭti, スピ° siŭtŭ < *siutun, ラト 不 šŭt 「縫う」

МЫТИ, セ・ク мйти, 3・単・アオ мй, 能過分 мйла,

□ мйла

БРАТИ, □ 能過分 борòлась, リ bārti, ラト bařt

ТРЪТИ, **ТРЪТИ**, セ・ク тр̂ти, 能過分 тр̂ла, □ т̂ерл

а

ТЫТИ, セ・ク тйти, 能過分 тйла

КРЫТИ, セ・ク крйти, 能過分 крйла, □ кр̂ла

АЖТИ, セ・ク д̂ути, 能過分 д̂ула, □ д̂ула

ВЫТИ, セ・ク вйти, 能過分 вйла, □ в̂ла

ЖАТИ, セ・ク ж̂ети, 能過分 ж̂ела, □ ж̂ала, ス 不 žeti, スピ° žet

МЛЪТИ, セ・ク мл̂ети, □ 能過分 молòла, チャ方言⁹
мл̂ела, ス 不 ml̂eti, スピ° ml̂et

neo-acute 類 (不定詞・アオリスト幹後にアクセントを持つもの)

ПИТИ, セ・ク пйти, 3・単・アオ пй < **ПИТ̂**, チャ方言
能過分・女・単 пил̂а, □ пил̂а, ス 不 p̂iti, スピ° p̂it, ラ
ト p̂it

ЖИТИ, セ・ク жйти, 3・単・アオ жй < **ЖИТ̂**, □ 能過
分 жил̂а, リ gýti, ラト dẑit 「生き生きさせる、元気づける」

ВИТИ, セ・ク вйти, 能過分 в̂йла, □ вил̂а, リ 不 v̂
yti, スピ° vyt̂ŭ, ラト v̂it

АНТИ, セ・ク лйти, チ líti, スロ liat' (古い長音), □
能過分 лил̂а, リ 不 l̂yti 「雨が降る」, スピ° lyt̂ŭ, ラト l̂it
「流れる、降る」

ВЪЗ-АТИ, セ・ク уз̂ети, チ vẑiti, スロ vẑiat' (古い長音),
チャ方言 能過分 з̂ел̂а, □ вз̂ял̂а, ラト 不 îmt 「取る」

БЫТИ, セ・ク бйти, チャ方言 能過分 б̂ил̂а, □ был̂а,

リ būti, スピ būtŭ

acute 類と neo-acute 類の間には明確な境界があるわけではない。そのことは、バルト・スラヴ諸方言における個々の揺れに示されている（例、**КЛАТИ**, セ・ク 能過分 *кл̋а́ла*, ロ *колòла* — acute 類に対する、ポー 不 *klóć*, ラト *kaît* 「打つ、鍛える」 — neo-acute 類；**МРѢТИ**, ロ 能過分 *умерл̋а* — neo-acute 類に対して、ラト *miřt* — acute 類）。この揺れは、疑いもなく、アナロジーによる後世の均一化の結果である。

不 **КЛАТИ**, セ・ク *кл̋а́ти*, ス *klāti*, チ *klāti*, ロ *колòть*, リ *kālti* 「打つ、鍛える」間のアクセントの対応は、**СЛАМА**, セ・ク *сл̋а́ма*, ス *slāma*, チ *slāma*, ロ *солòма*, ラト *saĩms* 「穀草の茎、藁」 < *k'olHm- 間の対応と同じである（上記参照）。このことは、**КЛАТИ** < *koltēi が *kol-H-tēi から発生したものであり、ここでの H（本質的には H₂）は古い過去テンスの接尾辞であり（§. 10 参照）、それがスラヴの不定詞語幹の一部に痕跡を止めていることを、我々に確認させるのである。同様にして、**ВИТИ** < *uītēi は *ui-H₂-tēi から引き出されるべきである、cf. 1・単 **ВЬѦ**, 2・単 **ВЬЕШИ** における現在語幹 *uei-e-, (ei-e- > ѡi-e の変化を伴う、§. 2 参照）及び **ВѢНЬЦЬ** における名詞語幹 *uoi-n-。

§. 5 延長階梯 ē 及び ō の形態的意義

ラリungal・モデルとそれに関連する単一母音体系は、e : o : ē : ō : Ъ (あるいは低減階梯) の階梯一列だけを取り扱うのであって、青年文法学派モデルのように異なる階梯六系列を取り扱うのではない。それ故に、交替自体の説明ももっと簡単である。大多数の研究者は、ゼロ階梯 (ないしは低減階梯) が現れるのは、正常階梯の母音 e が無アクセントの位置にあるときに調音が弱化した結果だと推定している。

o 階梯の、低減階梯からの発生については、クリウオーヴィチの仮説を参照 (§. 6)。

今、e : o : ē : ō : Ъ の交替が発生してくる唯一の原母音を V でもって表すことにしよう。拡張語根 **uVl-k**- からは母音 V の付加によって、動詞・名詞語幹 **uVl-k*-V-* が形成された (語根母音も語幹母音も e 階梯の 3・単・現 **ВЛЧЕТЬ** < **uel-k*-e-* と語根母音低減階梯で語幹母音 o 階梯の主・単 **ВЛКЪ** 「引き運ぶ動物」 < **u ь l-k*-o-* を参照)。**uVl-k*-V-* **uVl-k*-V-* 「狼が引く」という始原始的な文において、述語が主体 (主語) と異なるのは、述語の上には句アクセントが落ちたという点だけである (ブルガリア語 **ВЪЛКЪТ ВЛЕЧЕ** 「狼が引く」の文の述語の上の句アクセント参照)。句アクセントの近くでは、母音の V は最高の階梯つまり e 階梯になった — e 階梯は、述語 (動詞) の形の特徴を表示し、原則としてその上に句アクセントが落ちた (**ВЛЧЕТЬ** の e 階梯参照)。句アクセントからより遠い所では、母音の V はより低い階梯 (o 階梯あるいはゼロ階梯) になった — この階梯は主語 (名詞) の形の特徴を表示し、句アクセントは原則としてその上には落ちなかった。このようにして、動詞・名詞語幹 **uVl-k*-V-* からは、一方では句アクセントを持った動詞語幹 **uel-k*-e-* > **ВЛЧЕТЬ** が発生し、また一方では句アクセントのない名詞語幹 **u ь l-k*-o-* > **ВЛКЪ** が起こっ

たのである。呼格形 $*uVl-k^w-V-$ においては、語幹母音 V は句アクセントに近いものであり（呼びかけ全体が句である）、したがって、呼格単数形 **ΒΑΛΥΕ** (= ギ $\lambda \acute{u} \kappa \epsilon$, ラ *lupe*) において語幹母音は e 階梯である。Cf. 指示代名詞（句アクセント付加）**CE** 対 承前代名詞（句アクセントなし）**TO**。

延長階梯 $\bar{e}$, $\bar{o}$ は本質的には正常階梯 e の重複 ($\bar{e} = e + e$) であるか、あるいはその対応階梯 o の重複 ($\bar{o} = o + o$) であって、その重複が音象徴的な意義を持つのである。

あらゆる重複 (reduplication) は多数 (複数) 性の特徴である。名詞の体系にあっては、語根 (語) の重複あるいは語根 (語) の重複の継承としての語幹母音の延長は複数 (双数) の形態的表現であり (§. 11 参照)、集合性ないしは共同性の形態的表現である (§. 32 参照; 共同・具格 [sociative-instrumental] としての双数形の用法についてさらに同所参照)。このような語幹母音の延長は、例えば、双・主・対 **ΒΑΛΥΚΑ** $< *u\lambda k^w-\bar{o} = *u\lambda k^w-o-o$, **ΣΥΝΗ** $< *s\bar{u}n\bar{u} = *s\bar{u}n-u-u$, **ΝΟΨΤΗ** $< *nok^wt\bar{i} = *nok^wt-i-i$ の形に立証される。Cf. ギ 双・主・対 $\lambda \acute{u} \kappa \omega$, 古イ *vřk ā*, リ *vilkū* 「2匹の狼」 $< *u\lambda k^w-\bar{o}$, 古イ *sūnū*, リ *sūnu* 「二人の息子」 $< *s\bar{u}n\bar{u}$, 古イ *matī* 「二つの考え、意見」 $< *m\bar{n}t\bar{i}$, リ *naktī* 「二夜」 $< *nok^wt\bar{i}$ 。これらの諸例は、必ずしも全ての $\bar{u}$, $\bar{i}$ を uH , iH から引き出す必要がある訳ではないことを示している。

動詞体系でも、語根重複、あるいは語根重複の継承としての語根母音延長 (§. 12 参照) は同じく多数性の特徴であるが、行為に参加する人物の多数性ではない。動詞の場合、多数性特徴は、1) 多回的、すなわち反復的 (iterative) あるいは持続的 (durative) であったり、また 2) 集合的 (一括、全一的)、すなわち一気実現的であったりする、行為自体の独自の推移を表すのである。後者の場合、それは完結的でもあるから、それに相当する語幹は過去 (preterit) の意義を持つ時制の形成に適している。語根の重複は、ギリシャ語、古代インド語や、また一部ラテン語動詞の完了形 (perfect)

tum) にも立証されるが、その重複の基本的意義は過去性 (praeteritum) である (完了形の活用の起源については、§. 15 参照) — 例、ギ 1・単・完 $\lambda \acute{\epsilon} \lambda \upsilon \kappa \alpha$ 「ほどいた、解放した」、古イ 1・単・完 $\pi \acute{\iota} \pi \acute{\epsilon} \varsigma \alpha$ 「打った」 < * $\pi i - \pi o i - s -$, これと同系の語として **ПЪХАТИ** 「均等に打つ、脱穀する」 (cf. **ПЪШЕНИЦА**) 及び $\rho \acute{\iota} \nu \sigma \omicron$ 「搗碎く、碾いて細かくする、粉にする」 (鼻音接中辞については、§. 12 参照)。

動詞過去語幹での古い重複の継承が、古代ブルガリア語アオリスト幹の一部に見られる語根母音の延長である (§. 12 参照) — 例、1・単・アオ **ВѢСѦ** < * $\upsilon \acute{e} g' h - s -$ と 1・単・現 **ВЕЗЖ**, 2・単 **ВЕЗЕШИ** < * $\upsilon \acute{e} g' h -$ (cf. $\rho \acute{\iota} \nu \sigma \omicron$ 1・単・現 $\upsilon \acute{e} h \omicron$ 「引っぱる、運ぶ」と 1・単・完 $\upsilon \acute{e} x \acute{\iota}$) の対照; 1・単・アオ **БАСѦ** < * $b h \acute{o} d h - s -$ と 1・単・現 **БОДЖ**, 2・単 **БОДЕШИ** < * $b h \acute{o} d h -$ (cf. $\rho \acute{\iota} \nu \sigma \omicron$ 1・単・現 $f \acute{o} d \acute{\iota} \omicron$ 「掘る、突き刺す」 < * $b h \acute{o} d h -$ と 1・単・完 $f \acute{o} d \acute{\iota}$ < * $b h \acute{o} d h -$)。語根母音の延長は二次的不完了体動詞にも観察される — 例、不 **ПО-ЛОЖИТИ** < * $l \acute{o} g h -$, **ПО-ЛАГ-АТИ** < * $l \acute{o} g h -$; **ПРИ-ТЕШ-ТИ** < * $t \acute{e} k -$, **ПРИ-ТѢК-АТИ** < * $t \acute{e} k -$; **ВЪЗ-ДЪХ-НЪТИ** < * $d h u - s -$, **ВЪЗ-ДЪХ-АТИ** < * $d h \acute{u} - s -$; **ПО-МЪН-ѢТИ** < * $m \acute{y} n -$ = スラ祖 * $m \acute{in} -$, **ПО-МИН-АТИ** < スラ祖 * $m \acute{in} -$; **СЪ-БЪР-АТИ** < * $b h \acute{y} r -$ = スラ祖 * $b \acute{ir} -$, **СЪ-БИР-АТИ** < スラ祖 * $b \acute{ir} -$ 。これらの場合のスラヴ祖語の語根母音の延長は、行為の反復性、多回性、あるいはまた持続性を象徴化したものである。後続子音の脱落による母音延長 — 例えば、 $\rho \acute{\epsilon} s$ 「足」 < * $p \acute{e} d - s$ に対する 属 $p \acute{e} d \acute{\iota} s$; スラ祖 $k \acute{a} m \acute{u}$ (**КАМЪ**) < * $k \acute{a} - m \acute{o} n - s$ に対する 生 * $k \acute{a} - m \acute{e} n - e s$ (**КАМЕНЕ**) — については、§. 37 参照。

§. 6 e : o 交替の形態的意義

クリウォーヴィチ (1956) によれば、対応階梯 *o* は、なかなずく鳴子音 *r*, *l*, *m*, *n* 前に現れたのであり、そこでは母音 *e* が低減階梯で *o* と発音されたのである。初め、この位置的な *o* は次第に一定の文法形や文法範疇の語根あるいは接尾辞の特徴を表示し始めた。先ず、第一には、接尾辞（語幹母音）の交替によって、同一語根から形成された名詞形と動詞形の差異が強調された — 接尾辞の *e* 階梯は、動詞現在形のより大きな部分を特徴づけ始めた — cf. 2・単 **ВЛѢЧЕШИ** < *uel-kʷ-e-, 3・単 **ВЛѢЧЕТЬ**, 1・複 **ВЛѢЧЕМЪ**, 2・複 **ВЛѢЧЕТЕ**; 2・単 **БЕРЕШИ**, 3・単 **БЕРЕТЬ**; 2・単 **РЕЧЕШИ**, 3・単 **РЕЧЕТЬ**。ところが一方、接尾辞の *o* 階梯は、対応同一語根から形成されるほとんど全ての名詞形を特徴づけ始めたのである — 例、主・単 **ВЛѢКЪ** < *ul kʷ-o-s, 造 **ВЛѢК-О-МЪ**; 主・単 **СѢБОРЪ** < *bhor-o-s, 造 **СѢБОР-О-МЪ**; 主・単 **ПРОРОКЪ** < *rok-o-s, 造 **ПРОРОК-О-МЪ**。Cf. ギ 2・複 $\phi \acute{\epsilon} \rho - \epsilon - \tau \epsilon$ 「運ぶ」 < *bher-e-te = **БЕРЕТЕ** に対して、 $\phi \acute{\epsilon} \rho \omicron \varsigma$ 「税」 < *bhor-o-s、これと **СѢБОРЪ** は同系（意味については、**ПОБОРЫ** 「重税」、**НЕДОБОР** 「滞納税」）; 2・複 $\lambda \acute{\epsilon} \gamma - \epsilon - \tau \epsilon$ 「話す」に対して $\lambda \acute{\epsilon} \gamma \omicron \varsigma$ 「言葉、語」; 2・複 $\delta \acute{\epsilon} \mu - \epsilon - \tau \epsilon$ 「建てる」に対して $\delta \acute{\epsilon} \mu - \omicron - \varsigma$ 「家、建物」、これと **ДОМЪ** は同系。

語幹母音の *e* 階梯は動詞を、*o* 階梯は名詞を特徴づけるという原則の、いくつかの例外と思しきものについては、歴史的な説明を与えることができる。例えば、3人称複数現在形、**БЕРУТЪ**, **Г** **БѢЮ-Ю-У** cf. ギ 3・複・現 $\phi \acute{\epsilon} \rho \omicron \upsilon \sigma \iota$, **ラ** *ferunt*, **ゴ** *baīrand*, 古イ *bharanti* < *bher-o-nti は、分詞に起源を持つ (§. 34 参照)。**БЕРУ**, **Г** **БѢЮ-Ю-У** 型の1人称単数現在形は *bher-ō-m < *bher-o-H₂ に起源を持つ

ものであって、ここでの、古い活格活用1人称単数語尾 *m* (§. 15 参照) はもっと後に付加されたものである — cf. ギ 1・単・現 $\phi \acute{\epsilon} \rho \omega$ = ラ *ferō*, ゴ *baíra* 「運ぶ」 < **bher-ō* < **bher-o-H₂* (1人称指標 *m* はない)。この語末の *H₂* は古い中動相的(自動詞的、完了相的)活用の1人称単数の語尾であって、それは名詞語幹に付加されたものである(cf. 例、ギ 1・単・完 $o \acute{\iota} \delta \alpha$ = 古イ *véda* 「私は知っている」 < **uoid-a* < **uoid-H₂e*、これは当初は「私の知ること」の意 — 下記の第3項参照)。また、*o* 語幹男性名詞の呼格形(例、**ΒΛΥΧΕ** = ギ $\acute{\upsilon} \kappa \epsilon$, ラ *lupe*, リ *vilke* < **u|k*-e*) は、始原的な絶対格(純粹語幹)(*а б с о л ю т е н п а д е ж [ч и с т а о с н о в а]*)の継承であって、それは後の名詞曲用には組み入れられることなく、早くから呼びかけ専用とされたものである (§. 28 参照)。

第二に、ある一つの初期の格形の接尾辞や語尾の交替を通じて、スラヴ祖語や印欧語の名詞曲用の形成に必要な多様な格形が作り出されたのである。例えば、単・主 **СΥΝΗ** (= 古イ *sūnūh*, リ *sūnūs* < **sūn-u-s*), 生 **СΥΝΟΥ** (= 古イ *sūnóh*, リ *sūnaūs* < **sūn-ou-s*)、そして主・複 **СΥΝΟΒΕ** (= 古イ *sūnāvaḥ* < **sūn-eu-es*) は、同一の始原的な活格(*а к т и в е н п а д е ж*)の継承であって (§. 36, 37参照)、そこから、後に、三つの異なる格 — 単数主格、単数生格、複数主格が発生したのである(cf. ギ 単・主 $\kappa \acute{o} \rho \alpha \xi$ 「わたりがらす」 < **κ \acute{o} \rho \alpha \kappa - \varsigma*, 生 $\kappa \acute{o} \rho \alpha \kappa \omicron - \varsigma$, 主・複 $\kappa \acute{o} \rho \alpha \kappa - \epsilon \varsigma$)。いずれかの時点で、接尾辞母音の交替によって、単数主格形は、そのほかの格形に対立するに至った — 次例参照、主・対・単 **ΝΕΒΟ** (= ギ $\nu \acute{\epsilon} \phi \omicron \varsigma$ 「雲」 < **nebh-os* に対して、生 **ΝΕΒ-ΕΣ-Ε** (ギ 生 $\nu \acute{\epsilon} \phi \epsilon \omicron \varsigma$ < **nebh-es-os* と同系) ; 主・単 **ΚΑΜΥ** < **kā-mon-s* < **H₂k'-eH₂-mon-s* (ギ $\acute{\alpha} \kappa \mu \omega \nu$ 「鉄敷」 < **H₂ek'-H₂-mon-s* と同系) に対して、生 **ΚΑΜ-ΕΝ-Ε**。

印欧語及びスラヴ祖語の時期、語根母音の *o* 階梯は次のようなさらに

重要な形態範疇の特徴を表示したのである：

1. 動詞にその対応形を有する相当数の *o* 語幹と *a* (*eH₂*) 語幹の名詞：
- 1・単・現 **рѣк-ж**, 2 **рѣч-ешн**, **про-рок-ъ** ; **грѣб-ж**, **грѣб-ъ** ; **вѣд-ж**, **вое-вод-а** ; **пѣн-ж**, **о-пон-а** 「幕、帳」 ; **плѣт-ж**, **о-плот-ъ** 「編み、垣、籬」 ; **мѣр-ж**, **мор-ъ** ; **тек-ж** 「走る、流れる」, **ток-ъ** 「流れ、奔流、家畜を、その足で打ち固めさせるべく走り回らせる場所 = 脱穀場」 ; **дѣр-ж**, **раз-дор-ъ** ; **бер-ж**, **съ-бор-ъ** ; **нес-ж**, **водо-нос-ъ** 「水運び人、水を運ぶ容器」 ; **чѣш-ж** < *kes-, **кос-а** ; **вез-ж**, **воз-ъ** 「荷馬車」 ; **лак-ж** **г** **аэсѣтѣ**, **лак-ъ** **г** **аэсѣтѣ** 「弓」 ; **блад-ж** **г** **ѣаэсѣтѣ** 「誤る、罪を犯す」, **блад-ъ** **г** **ѣаэсѣтѣ** 「放蕩、思い違い」 ; **завѣн-ж** **г** **аэсѣтѣ** 「発芽する、生える、刺のごとく芽を出す」, **завѣн-ъ** **г** **аэсѣтѣ** ; **трѣс-ж** **г** **ѣаэсѣтѣ**, **трѣс-ъ** **г** **ѣаэсѣтѣ** ; **г** 1・単・現 **δέμω** 「建てる」, **дом-ъ** ; **ラ** 1・単・現 **precor** 「頼む、尋ねる」 < *prek'-, **въ-прос-ъ** < *prok'- ; **г** 1・単・現 **πέλομαι** 「動く」 < *k^wel-, **кол-о** 「車輪」 < *k^wol- ; **リ** 1・単・現 **renkū** 「集める」, **ржк-а** **г** **ѣаэсѣтѣ** ; **вѣтк-ж** < *uelk^w-, **облак-ъ** < *obh-uolk^w- ; **бѣшт-ж** < *bhlig'-sk-, **вѣтск-ъ** < *bhloig'-sk- ; **вѣз-дѣх-нж** < *dhu-s-, **доуѣх-ъ** < *dhou-s- ; **цвѣтж** < *kui-t-, **цвѣт-ъ** < *kuoi-t- ; **г** **нѣ-ж** < *ghnei- (§. 2 参照), **г** **нон** < *ghnoi- ; **по-чѣ-ж** < *k^wei- (§. 2 参照), **по-кон** < *k^woi-

2. 語根母音が *e* 階梯かゼロ階梯である第一次動詞（非使役、非反復動詞）の形と対照的な使役（作為）及び反復（多回）動詞 (§. 17 参照) の形：

- a) 使役動詞（これらの動詞にあっては、行為者が、行為を行うのではなく、その行為実現の原因となる） — 例、1・単・現 **боуѣжж**, 2 **боуѣнши** 「目を覚まさせる、人を眠らさずにおく」 < *bhoudh- と 1・

単・現 **БЛЮДЖ**, 2 **БЛЮДЕШИ**「番をする、看視する、注意を集中する」
 (ギ $\pi \epsilon \acute{\upsilon} \theta \omicron \mu \alpha \iota$ 「知る、探り出す、照会する、情報を得る」 <
 *bheudh-) の対照; **ОБЪШЖ**, **ОБЪСИШИ**「懸ける、ぶら下げる、吊るす」
 < スラ祖 *ob-uojs- と **ВНШЖ**, **ВНСИШИ** (ぶら下がっている) <
 スラ祖 *uejs-; **ТОЧЖ**, **ТОЧИШИ**「流れさせる」と **ТЕКЖ**, **ТЕЧЕШИ**
И「流れる、走る」; **ОУМОРЖ**, **ОУМОРШИ**「死なせる、殺す」と **МЪ**
РЖ, **МЪРЕШИ** (死ぬ); **ПОЖ**, **ПОИШИ**「飲ませる」と、**ПЪЖ**, **ПЪЕШИ**
 (飲む) < *peie- (§. 2 参照); **СОЧЖ**, **СОЧИШИ**「人にある事を追跡
 させる」 < *sok*- と、リ 1・単・現 sekû, ラ sequor, ギ $\xi \pi$
 $\omicron \mu \alpha \iota$ 「跡をつける、従う、ついていく」ゴ saihvan「見る、目で追
 う」 < *sek*-. 使役動詞の一部は語根母音の延長階梯を有する (以下参
 照)。

b) 反復動詞 : 1・単・現 **ВОЖАЖ**, 2 **ВОДИШИ** と 1・単・
 現 **ВЕДЖ**, **ВЕДЕШИ**; **ВОЖЖ**, **ВОЗИШИ** と **ВЕЗЖ**, **ВЕЗЕШИ**; **Н**
ОШЖ, **НОСИШИ** と **НЕСЖ**, **НЕСЕШИ**; **ВЛАЧЖ**, **ВЛАЧЕШИ** < *uo
 lk*- と **ВЛѢЖЖ**, **ВЛѢЧЕШИ** < *uelk*- の対照。

語根母音の延長によって、語根の第一次的な意義に比べて集約的 (強調的)
 [intensive] な意義を持つ新しい語幹が作り出された。集合性及び集合・多
 数性の意義の一変種としての集約性については、§. 20, 27 参照。名詞の
 場合、この集約性は、語幹の増大的 (集合・増加的) (augmentative) な意
 義を表したのである。次例参照、古イ nâbhas- = **НЕБО**, ギ $\nu \acute{\epsilon} \phi$
 $\omicron \varsigma$ 「空、雲」 < *nebhos と 古イ nâbhas-「雲層、雲量」 < *nēb
 h-; 古イ vâcas- = ギ $\xi \pi \omicron \varsigma$ 「話、語」 < *uek*os と ラ vōx
 「声」、古イ vâc-「言葉、話し」 < *uōk*- (cf. **РѢЧЬ** < *rēk- と
 1・単・現 **РЕКЖ** < *rek-) の対照; **СЛОВО** = ギ $\kappa \lambda \acute{\epsilon} \omicron \varsigma$,
 古イ śrâvas-「語、噂、知らせ」 < *k'leu-os と **СЛАВА** = リ
 šlově「名声、誉れ」 < *k'lōu- (§. 2 参照); 中世ブ **ДЕ** < *
 H₂H₃-ōi-o, ラ ðvum「卵」 < *H₂ōH₃-o と ラ avis「鳥」 < *H₂e

Нз-і- (§. 3 参照) ; **ВРАНЪ** = リ *vařnas* 「わたりがらす」 < **uorn-os* と **ВРАНА** (セ・ク *vrāna*, ス *vrāna*, ロ *vorōna*, チ *vrāna*, スロ *vraana*) = リ *vārna* 「からす」 < **uōrnā* < **uor-H-n-*。女性範疇と集合多数性範疇との近似性については、§. 22 参照。

動詞の場合、この集約性は、当該語幹が使役的、反復的意義の動詞を形成し得る可能性を持つことに現れている(集約・使役動詞と集約・反復動詞間の近似性については、§. 17、第5項参照)。時として、語根延長母音を持つ集約性動詞が、根源動詞(非集約性動詞)と対照的な別の意味を持つのである — 例、1・単・現 **ПОЛЪ**, 2 **ПОЛИШИ** 「燃える」と 1・単・現 **ПАЛЪ**, 2 **ПАЛИШИ** 「燃やす」(使役) < **pōl-* ; **ВЪРЪ**, **ВЪРНИШИ** (煮え立つ、沸く) < **uъr-* (ゼロ階梯) と **ВАРЪ**, **ВАРИШИ** (煮る、沸かす)(使役) < **uōr-* ; ギ *σβέλλω* 「消す」 < **sg'es-* と **ГДЪ**, **ГДСИШИ** < **g'ōs-* (集約的) ; ギ 1・単・現 *κλέω* 「(について) 語る、讃える」 < **k'leu-* と **СЛАВЪ**, **СЛАВИШИ** (有名にする、誉め讃える) < **k'lōu-* (集約的) ; 不 **БЪТИ** < **bhū-* (§. 12 参照) と **БАВЪ**, **БАВИШИ** < **bhōu-* (使役 ; 当初、この動詞は「立たせる、生じさせる」の意) ; **ИСЧЕЗЪ**, **ИСЧЕЗНЕШИ** (消失する、なくなる) < **k'eg'-* と **ИСКАЗЪ**, **ИСКАЗИШИ** 「絶やす、駆使する、消す」(使役) < **k'ōg'-* ; **РЕКЪ**, **РЕЧЕШИ** (言う) < **rek-* と **РАЧЪ**, **РАЧИШИ** (同意を与える、気遣う、望む、愛する)(集約的) < **rōk-* ; **ЧЪТЪ**, **ЧЪТЕШИ** 「読む」 < **k'i-t-* と **КАЪ**, **КАЕШИ** (悔いる、告解する)(集約的) < **k'ōi-* ; 古イ 3・単・現 *vādati* 「話す、言う」 < **ued-*, **uod-* と **ВАЖЪ**, **ВАДИШИ** 「(に) 反対して言う、非難する、告発する」(集約的) < **uōd-* (cf. 古イ *vādaḥ* 「発言、意見、論争」 — 始原的な語根は **Həu-d-*、このことは、ギ *αὐδῆ* 「音、声」, *αὐδάω* 「話す、大声を上げる」からも判る)。

使役動詞と反復動詞における語根母音の対応 o 階梯は、使役動詞、反復

§. 15 参照)に関連する過去語幹の一部。例、ギ 1・単・現 $\delta \acute{\epsilon} \rho \kappa$
 $o \mu \alpha \iota$ 「見る」に対する 1・単・完 $\delta \acute{\epsilon} - \delta o \rho - \kappa \alpha$ 「見た」；1・
 単・現 $\pi \epsilon \acute{\iota} \theta o \mu \alpha \iota$ 「信じる、従う」に対する 1・単・完 $\pi \acute{\epsilon} -$
 $\pi o \iota \theta - \alpha$ 「従った」；1・単・現 $\tau \rho \acute{\epsilon} \phi \omega$ 「養う、飼育する」に対
 する 1・単・完 $\tau \acute{\epsilon} - \tau \rho o \phi - \alpha$ 「養った」；1・単・現 $\phi \theta \epsilon \acute{\iota} \rho$
 ω 「壊す、汚す、駄目にする」に対する 1・単・完 $\acute{\epsilon} - \phi \theta o \rho - \alpha$ 「壊
 してしまった」。Cf. 次例のようなゴート語強変化動詞過去 (= アオリスト)
 形、1・単・現 binda「結ぶ、結合する」 < *bhendh- に対する 1・
 単・過 band「結んだ」 < *bhondh-；1・単・現 qima < *g*em-
 に対する 1・単・過 qam「来た」 < *g*om- (古イ 1・単・完
 jagama「来た、来ている」 < *g*e-g*om- における語根母音の o
 階梯 参照)。

始原的完了活用動詞の大部分は名詞起源である。例えば、ギ 1・単・完
 $o \acute{\iota} \delta \alpha$ 「私は知っている」(= 古イ veda, ゴ wait < *uoid-H₂
 e、また、1・単・現 **ВѢМЪ**、古ブ プレスラフ文献 **ВѢАѢ** も同類)
 のような、語根母音 o 階梯を持つ完了活用動詞の原型は「我が知識、私の
 知ること」の意であった。Cf. チュルク諸語の過去形の名詞派生的な性質、
 例えば、ウズベク語の過去形活用、活用 1・単・アオ $\acute{\epsilon} \acute{\imath} d - \text{им}$ 「私
 は書いた (= 私の書きもの)」、2 $\acute{\epsilon} \acute{\imath} d - \text{инг}$ 「君は書いた (= 君の
 書きもの)」、3 $\acute{\epsilon} \acute{\imath} d - \text{и}$ 「彼は書いた (= 彼の書きもの、(逐語的には)
 書きもの」は、所有曲用に完全に一致する、例えば、1・単 $\kappa \iota \tau o \acute{b} -$
 им 「私の本」、2 $\kappa \iota \tau o \acute{b} - \text{инг}$ 「君の本」、3 $\kappa \iota \tau o \acute{b} - \text{и}$ 「彼
 の本」(始原的完了語尾の所有的性格については、§. 16 参照)。

語根母音 o 階梯の古代ブルガリア語動詞(語幹母音 **и** を持つ使役、
 反復、名詞派生動詞を除く → 第2項参照)は、その完了の屈折語尾を失っ
 た古い完了活用動詞の継承である。動詞 1・単・現 **могъ**, 2 **може**
шиは、過去現在動詞 (preterite-present verb、perfecto-present verb、
 現在の意義と完了語尾を持つ)¹⁰ であるゴート語動詞 1・単・現 mag

「できる、してもよい、かもしれない」, 2 magt, 3 mag と同系関係にある。この古代ブルガリア語動詞は特別なアクセント・パラダイムを持つが (1・単・現 **МОГЪ** = **о** **МОГЪ**, 2 **МОЖЕШИ** = **о** **МОЖЕШЬ**)、現在形に語幹母音 *e* を持つ古代ブルガリア語動詞のどれ一つとして、このようなアクセント・パラダイムは持たない。語根母音 *o* 階梯の動詞、例えば、次のような動詞、1・単・現 **БОЛЪ**, 2 **БОЛИШИ**, 不 **БОЛЪТИ**; **БОЖ СЪ**, **БОИШИ СЪ**, **БОИТИ СЪ**; **ПОЛЪ**「燃える」, **ПОЛИШИ**, **ПОЛЪТИ** (cf. 重複語根 **ПОПЕЛЪ**「灰、燃えかす」における語根母音の *e* 階梯); **ГОРЪ**, **ГОРИШИ**, **ГОРЪТИ** (cf. 集約性名詞 **ЖАРЪ** < *g^whēr- における語根母音の *ē* 階梯) は、始原的な完了活用動詞に代わるものとしての状態動詞の特徴を表示する不定詞接尾辞 **-Ъ** を持っている (§. 18 参照)。1・単・現 **ВЪМЪ** (**ВЪАЪ**) については、上記参照。

そのほか接尾辞 **-Ъ** を持つ状態動詞の中には、語根母音の延長階梯を有するものもある — 例、**СТЫЖАЪ СЪ**, **СТЫДИШИ СЪ**, **СТЫДЪТИ СЪ** < *stūd-; **БЪЖЪ**, **БЪЖИШИ**, **БЪЖАТИ** (= **ри** 1・単・現 **bégu**, 不 **bégti**「走る」 < *bhēg^w-, cf. **ꝥ** 1・単・現 **φ έ β ο μ α ι**「走る」 < *bheg^w- における語根母音の *e* 階梯); **СЪЖАЪ**, **СЪДИШИ**, **СЪДЪТИ** < *sēd-; **ВИЖАЪ**, **ВИДИШИ**, **ВИДЪТИ** < *uīd- (cf. **ри** 1単・現 **pa-výdžiu**, 不 **pa-vyděti**「羨む」); **КЪПАЪ**, **КЪПИШИ**, **КЪПЪТИ** < *kūp-。語根母音の延長階梯と古い完了活用の関連については、§. 12 参照。

語根母音の *o* 階梯、あるいはまた、延長階梯を持つ完了活用動詞の一定部分は、古代ブルガリア語に僅かの痕跡をとどめているスラヴ祖語の非テーマ動詞活用 (無幹母音動詞、athematic verb) の中に組み込まれている (§. 18 参照)。**ꝥ** 1・単・完 **ο ι δ α**「知っている」 (= 古イ 1・単・完 **veda**, **ꝥ** **wait**) と同系関係にある動詞 **ВЪМЪ** (**ВЪАЪ**) の非テーマ活用についても、同所参照。語根長母音を持つもう一つの非テーマ動

詞 1・単・現 **ѣмь** < *ēdmi < *e-ed- < 重複語根 *H₁e-H₁ed-
 の完了起源については、§. 12 参照。古い完了活用にとって代わった、不定詞接尾辞 **-ѣ** を持つ静態動詞（状態動詞）のいくつかも同じく、当初、
 テーマ（幹母音）を入れずにその現在形を形成している（cf. 非テーマ動
 詞 1・単・現 **вѣмь**, 2 **вѣси** の不定詞語幹 **вѣд-ѣ-ти** は **ѣ**
 指標を含んでいる）。このことは、1・単・現 **горѣ**, 2 **горѣши**,
 不 **горѣти** に対する、能動現在分詞語幹 **горѣшт-** が証明している。
 この語幹は、サヴァの本（Саввина книга）やスプラシル写本
 （Codex Suprasliensis）に文証されるより新しい分詞幹 **горѣшт-** と併用
 される；**горѣшт-** は非テーマ動詞の分詞幹である — cf. 1・単・現
вѣмь, 2 **вѣси** に対する分詞幹 **вѣдѣшт-**。1・単・現 **вижа**
ѣ, 2 **видаши**, 不 **видаѣти** に対する受動現在分詞 **видаомѣ** も
 参照。これは、より新しい形 **видаимѣ** と併用される。2・3人称単数
 命令形 **вижаѣ** も参照（この起源については、§. 17、第6項参照）。
видаомѣ 及び **вижаѣ** は非テーマ活用である — cf. 受動現在分詞
вѣдаомѣ と 2・3人称単数命令法 **по-вѣжаѣ** < **вѣдѣти**。

§. 7 スラヴ祖語の語幹構造の変化

スラヴ語族の古典語としての古代ブルガリア語は、文献的に立証される古代印欧諸語の最も重要な文法的特徴を継承している。概して、古代ブルガリア語の曲用及び活用変化語の語構造は、語根、接頭辞、接尾辞及び語尾から成るスラヴ祖語の曲用、活用語の構造と同じである。スラヴ祖語のほとんど全ての変化語の必須構成要素は、語根、接尾辞（一ないしは数個の）、語尾であった。スラヴ祖語の語根は、一接尾辞（あるいは数個の接尾辞）と共に語幹を構成した。スラヴ祖語の単語が、希に、例えば、男性単数呼格形において、いくつかの単数所格形において、また名詞、形容詞中性主・対格において（§. 39 参照）、純粹語幹だけで、すなわち語尾なしで、語根と接尾辞だけで構成されることもあった。例えば、単・呼 **rod-e* (**РОД-Е**)、単・所 **pont-ei* (**ПЪТН**)、単・主・対 **nebh-os* (**НЕБО**) における *e*, *ei*, *os* は語尾ではなくて、接尾辞である — **РОДЕ** の **Е** はスラヴ祖語の接尾辞 *-e* の正常階梯であって、その *o* 階梯は 単・造 **РОД-О-МЪ** < **rod-o-mi* に見ることができる； **ПЪТН** の **Н** は、接尾辞 *-ei* の延長正常階梯に発するものである（同接尾辞のゼロ階梯は、例えば、単・造 **ПЪТ-Ъ-МЪ** < **pont-i-mi* に見られる）； **НЕБО** < **nebh-os* の *o* (§. 2 参照) は、例えば、複・主・対 **НЕБ-ЕС-А** に現れる接尾辞 *-es-* の母音 *e* の対応階梯である。

スラヴ祖語の観点からすれば、単・主 **ЖЕН-А** の語末の **-А** は語尾ではなくて、語幹母音である (cf. 複・与 **ЖЕН-А-МЪ**, 複・造 **ЖЕН-А-МН**, 複・所 **ЖЕН-А-ХЪ**)。ラリングル・モデルの観点からすれば (§. 3 参照)、女・単・主 **ЖЕН-А** の語末 **-А** は、複・中・主・対 **СЕЛ-А** の語末の **-А** と同じく、非分割多数性（一括性）指標 H_2 と単・造 **РОД-О-МЪ** の接尾辞 *-o-* (対応階梯) や単・呼 **РОД-Е** の接尾辞 *-e-* (正常階梯) と同等の語幹母音 *e* の結合したものである、すなわち **ЖЕНА** や **СЕЛ**

Δ の Δ は eH₂ に起源を持つのである。

開音節法則の結果として、スラヴ祖語のあらゆる子音語尾及びソナント語尾は脱落するかあるいはまた先行接尾辞母音に融合してしまった。それ故に、古代ブルガリア語の動詞、名詞、代名詞の語末の大部分は、実質的には、古い接尾辞であったり、あるいはまた古い接尾辞と古い語尾の融合より出たものである。次例参照、3・単・アオ **БЕДЕ** < スラ祖 *ued-e-t, 単・男・主 **РОДЪ** < スラ祖 *rod-o-s, 単・所 **РОДЪ** < スラ祖 *rod-o-i, 複・女・対 **КОСТИ** < スラ祖 *kost-i-ns。二重母音の単母音化や語末の特別な音声学的変化過程 (§. 2 参照) の故に、接尾辞はその外見を変えてしまったのである。例えば、**ЖЕНА** の曲用には — 単・主 **ЖЕНА** < *gʷen-ā, 生 **ЖЕНЪ** < *gʷen-ā-ns (§. 36 参照), 与 **ЖЕНЪ** < *gʷen-āi — スラヴ祖語の ā 語幹曲用の形を統合していたかつての幹母音 ā は、もはや見えなくなっている。三階梯 (正常階梯 eu、対応階梯 ou、ゼロ階梯 u) における接尾辞 -u- の位置に、古代ブルガリア語では **ОВ** : **ΟΥ** : **Ъ** の交替が現れるのである。次例参照、単・主 **СЪНЪ** < *sūn-u-s, 生 **СЪНΟΥ** < *sūn-ou-s, 与 **СЪНОВИ** < *sūn-eu-ei (§. 2 参照)。それ故、スラヴ祖語の同接尾辞 -eu- (eu : ou : u) は、もはや古代ブルガリア語の曲用には現れていない。それは、ある形においては、語尾ないしは語尾の一部に変わってしまい (単・主 **СЪНЪ**, 生 **СЪН-ΟΥ**, 与 **СЪН-ОВИ**, 複・主 **СЪН-ОВЕ**, 生 **СЪН-ОВЪ**)、また別の形では、語根と語尾の間の繋ぎ母音になってしまっている (単・造 **СЪНЪ-МЪ**, 複・造 **СЪНЪ-МИ**, 複・与 **СЪНЪ-МЪ**, 複・所 **СЪНЪ-ХЪ**)。 Cf. 主 **РОДЪ** < *rod-o-s, 造 **РОД-О-МЪ** < *rod-o-mi, 所 **РОДЪ** < *rod-o-i, 複・所 **РОДЪ-ХЪ** < *rod-o-i-su ; 単純アオ 単・1 **СТАЪ** < *sēd-o-m (o 階梯), 2 **СТА-Е** < *sēd-e-s (e 階梯), 複・1 **СТА-О-МЪ** < *sēd-o-mos, 複・3 **СТА-Ж** < *sēd-o-nt。古い接尾辞と語尾の融合の結果として、古代ブルガリア語のあらゆる曲用と活用は、繋ぎ母音と語尾の独自の組み合わせ

特徴を持つに至るのである。

大鼻母音 (голяма носовка) ないしは小鼻母音 (малка носовка) で終わる古代ブルガリア語の文字の形は、我々がそれらをキリール文字で見るかグラゴール文字で見るかによって、二つの解釈が可能である。例えば、キリール文字 **ЖЕН-Ж** の **Ж** は語尾であるが、グラゴール文字 **ѠѢѠѢ** (シナイ詩編 Psalterium Sinaiticum の字体による) では、**ѠѢѠ-** を語根、**-Ѣ** を接尾辞ないしは繋ぎ母音、そして **-Ѣ** は単数対格鼻音語尾 (cf. ギ 単・対 $\chi\acute{o}\rho\text{-}\acute{\alpha}\text{-}\nu$ 「国、地方」: ラ 単・対 terr-a-m 「大地、国、地方」) だと見なすこともできる。同様にして、キリール文字の複数対格 **КОН-А** は、語根 **КОН-** と語尾 **-А** に分けることができるが、グラゴール文字の **ѠѢѠѢѢ** (シナイ詩編の字体による) は、語根 **ѠѢѠ-**、幹母音ないしは繋ぎ母音 **-Ѣ** 及び鼻音語尾 **-Ѣ** (cf. ギ 複・対 $\lambda\acute{o}\kappa\omicron\nu\varsigma < * \lambda\upsilon\kappa\text{-o-}\nu\varsigma$; ラ 複・対 $\text{lup}\acute{o}s < * \text{lup-o-ns}$) に分けることができる。同じことは、現在1人称単数 **БЕР-Ж**, グラゴールの **ѢѢѢѢѢ** $< * \text{bher-}\acute{o}\text{-m}$ (§. 35 参照) 及び単純オリスト複数3人称 **СТА-Ж**, グラゴール **ѢѢѢѢѢѢѢ** $< * \text{s}\acute{e}d\text{-o-nt}$ のような形についても当てはまるのである; cf. ギ 未完・複・3 $\acute{\epsilon}\text{-}\pi\alpha\acute{\iota}\delta\epsilon\nu\text{-o-}\nu < * \epsilon\text{-}\pi\alpha\acute{\iota}\delta\epsilon\nu\text{-o-}\nu\tau$ 。

こうして、スラヴ祖語の曲用及び活用変化形は、必ず語幹、すなわち語根及び接尾辞を備え (例えば、呼 $*\text{rod-e}$ [**ѠѠѢ-Ѣ**], 単・主 $*\text{žen-}\acute{a}$ [**ЖЕН-А**])、またほとんど必ず語尾を備えた (例えば、単・主 $*\text{rod-o-s}$ [**ѠѠѢ-Ѣ**], 現・3・単 $*\text{ued-e-ti}$ [**БЕѢ-Ѣ-ѢѢ**], アオ・3・単 $*\text{ued-e-t}$ [**БЕѢ-Ѣ**])。原則として、曲用及び活用変化を行う古代ブルガリア語の単語は、語根 (語根及び繋ぎ母音) と語尾から成っている — 例、現・1・単 **ХОЖА-Ж**, 2 **ХОѢ-Н-ШИ**, 3・複 **ХОѢ-Ѣ-ѢѢ**; 単純アオ・1・単 **НА-Ѣ**, 2 **НА-Ѣ**, 3・複 **НА-Ж**; 男・単・主 **ВѢШ-Ѣ**, 生 **ВѢШ-Ѣ-ГО**, 複・生 **ВѢШ-Н-ХѢ**; 単・主 **ѠѠѢ-Ѣ**, 生 **ѠѠѢ-Ѣ**, 与 **ѠѠѢ-ѠѢ**, 所 **ѠѠѢ-Ѣ**。しかし、すでにスラヴ祖語の時期に、連続的に付加し得る多数の派生力を持っ

た新接尾辞が登場して来るのである — 例、**стар-ъ**, **стар-ѣц-ъ**, 中世ブ **стар-ѣч-ѣск-ъ** ; **рад-ъ**, **рад-ост-ъ**, **рад-ост-ѣн-ъ** ; **вѣр-а**, **вѣр-ѣн-ъ**, **вѣр-ов-ѣн-ъ** ; **мил-ъ**, **мил-ост-ъ**, **мил-ост-ѣн-и** ; **про-рок-ъ**, **про-роч-ѣств-о**, **про-роч-ѣств-ов-а-ти** ; **оуч-ен-ъ**, **оуч-ен-ик-ъ**, 中世ブ **оуч-ен-ич-ѣск-ъ** 。

動詞、名詞、代名詞系列の中に、硬、軟二種類の繋ぎ母音と語尾のタイプが独立するのである。例、1・単 **бер-ѡ**, 3・複 **бер-ѡ-тъ** に対して、現・1・単 **глагол-ѡ**, 3・複 **глагол-ѡ-тъ** ; 単・主 **род-ъ**, 生 **род-а**, 与 **род-оу**, 造 **род-о-мь**, 複・対 **род-ѣ** に対して、単・主 **кон-ъ**, 生 **кон-ѣ**, 与 **кон-ю**, 造 **кон-е-мь**, 複・対 **кон-ѣ** ; 男・単・主 **т-ъ**, 生 **т-о-го** に対して、男・単・主 **ваш-ъ**, 生 **ваш-е-го** 。

古代ブルガリア語最終期には、語末のイェル(ъ)、イェリ(ь)の脱落に続いて、語根(接頭辞及び語根)だけから成る、あるいは語根及び接尾辞(接頭辞、語根及び接尾辞)だけから成る形が発生してくる — 例、単・主 **род(ъ)**, **кон(ъ)**, **зъл(ъ)**, **зол(ъ)**, 複・生 **ран(ъ)** < **рана**, **на-род(ъ)**, **по-вин-ѣн(ъ)**, **стар-ѣц(ъ)**, **стар-ец(ъ)**, 複・生 **пѣт-иц(ъ)** < **пѣтица**, 命・2・単 **вижда(ъ)**, **ѡжда(ъ)**, **сѣн-ѣжа(ъ)**, 能過分 **шѣд(ъ)**, **при-шѣд(ъ)** — すなわち語尾なしの形が現れてくるのである。弱い位置の(脱落して然るべき)イェル、イェリ母音(弱母音)に終わるいくつかの単音節代名詞形に対しては、すでに古代ブルガリア語の時期に新しい形態素(承前代名詞 anaphoric)が付け加えられている — 例、男・単・主 **сън**, **син** = **съ** + **н** (*iъ < *i-o-s), 中世ブ **тън** (現代ブ **той**) = **тъ** + **н**。こうして、指示代名詞体系の全面的再編成が始まり、それは中世ブルガリア語期を通じて続くのである。

§. 8 スラヴ祖語の語根構造の変化

古代ブルガリア語は、場合によっては、今なおはっきりと印欧語語根の二基本型の痕跡を顕している。第一型は、両子音型でかつ動詞・名詞産出型である。次例参照、現・単・1 **РЕК-Ж** と 単・主 **ОТ-РОК-Ъ**「発言しない者、子供、下僕」；**БЕР-Ж**, **БЪР-А-ТИ**, **СЪ-БОР-Ъ** と **БРЪ-МА** < *bher-men ; **ВЛЪК-Ж**「引っ張る、引き運ぶ」 < *uel-kʷ-, **ВЛЪКЪ**「引いていく、略奪していくもの」 < *ul-kʷ-, **ВЛАКНО** < *uol-kʷ-n-, **ВЛАСЪ** < *uol-s-, **ВЛЪНА** < *ul-n- < *ul-H-n-(§.4 参照)。上例後半の語群では、両子音構造が現出してくるのは、ようやく kʷ, n, s が浮彫りになって以後のことであり、これは、語根の一部ではなく始原的な語根拡張子ないしは接尾辞である。第二型の語根は単子音構造であり、代名詞産出型である：男・中・単・生 **Т-О-ГО** と **С-Е-ГО**, 与 **Т-О-МОУ** と **С-Е-МОУ**, 男・単・主 **К-Ъ-ТО**, 中 **Ч-Ъ-ТО**, 1・単・生 **М-Е-НЕ**, 2 **Т-Е-БЕ**。

祖語における H (H₁, H₂, H₃) 類の音声学的変化の結果、また時と共に本来の意味を失って行った様々な語根拡張子の付加によって、すでに早期スラヴ祖語期に、始原的な動詞・名詞語根の両子音構造が全体として損なわれてしまった。例えば、スラヴ祖語の語根 *ul- が今なお見えている **ВЛЪК-Ж**, **ВЛЪКЪ**, **ВЛАКНО**, **ВЛАСЪ**, **ВЛЪНА** (上例参照) の場合とは違って、現・単・1 **ПЛЕТ-Ж** < *pl-ek-t- や 不定詞 **АЪ-ТИ** < *dheH₁-

のような例においては、音や意味の近い古代ブルガリア語の単語の比較対照によっては、始原的な語根は再構し得ない。両子音モデルの観点からすれば、現・単・2 **БОУДИШИ** < *bhoy-dh- や **ГРЕБЕШИ** < *ghr-e bh- のような形における始原的な語根は、*bhoy-(o 階梯) や *ghr-(語根母音ゼロ階梯) であって、A (dh) や Б (bh) は拡張 (接尾辞) であり、前者はゼロ階梯、後者は e 階梯である；歴史的観点からすれば、**ГРО**

БЪ では、*o* 階梯にあるのは語根母音ではなく接尾辞母音である。同様の語根拡張子（接尾辞）は、現代スラヴ諸語にも見られる。例、語根

*der- : *dъr- (現・単・1 **ДЕР-Ж** 不 **ДЪР-АТИ** 参照) によって、現代ブルガリア語に立証されるものとして次のもの、**д е р а** (皮を剥ぐ), **д р ъ г н а** (強く梳く) < *dъr-g-, **д р а с к а м** (引っかく), **д ъ р п а м** (引きむしる) < *dъr-p-, **д р ъ н** (**ДРЪНЪ**) = **о д ё р н** 「(小)塊、裂き取ったもの」, **д р ъ н к а м** 「綿花を梳く、羊毛を梳く」、ここから転義して、独立動詞 **д р ъ н к а м** 「(羊毛を梳くような) 単調な音を発する」が現れている ; **д р ъ н**, **д р ъ н**, **я р и н а** 「無駄話、空談」も参照。Cf. ギ **δέρω** 「皮を剥ぐ、なめす」, **δρέπω** < *dr-ep- 「破り取る、裂き取る、切り取る」, **δρέπανον** 「鎌」。

ある場合には、古代ブルガリア語の語根は、一見したところ両子音構造であっても、歴史的観点からすれば、第二子音は語根拡張子（接尾辞）であることが判るのである。例えば、現・単・1 **п а с ж** < *peH₂-sk'- においては、語根は *peH₂- であり、**с** はかつて現在形の特徴を表示した接尾辞 -sk'- に発するものである (cf. ラ 現・単・1 **pāscō** 「放牧する」に対して、完・単・1 **pāvī** ; 現・単・1 (g)nōscō 「認識する、知る」に対して、完・単・1 (g)nōvī、これは、ギ **γί-γνώ-σκω** 「知る、気付く」に対する **Παο**・単・1 **ε-γνώ-ν** と同系関係にある)。 **рѣка** においては、本当の語根は **рѣ-** < *roj- (cf. **по-рой** 奔流、どしゃ降り) であり、語根の *e* 階梯は ラ **rī-v-us** 「川、河、流れ」 < *rej-u- に現れており、また、**к** は古い語根拡張子（接尾辞）である。

また、始原的な語根のうち一子音だけが残っている場合がある。次例参照、現・複・3 **с ж т ъ** (単・1 **есмъ**) < *H₁s-o-nt⁽⁵⁾ あるいは、ゼロ階梯の語根母音と *e* 階梯の接尾辞 -er を持つ **перо** = ギ **πτερόν** 「羽」 (cf. ギ 現・単・1 **πέτ-ο-μαί** 「飛ぶ」における *e*

階梯)。現・単・1 **пѣхъ**, 2 **пѣши** < スラ祖 *peī-e- (§. 2 参照) においては、始原的な語根部分は子音の **п** だけである — **пѣхъ** < *pH₃-ei- (語根ゼロ階梯と接尾辞 -ei- の e 階梯を持つ)。こうして、**пѣхъ** と ラ pōtus 「酔った、酒飲みの」 < *peH₃-t- やレスボス方言¹¹ 現・単・1 πώνω 「飲む」 < *peH₃-n- との同系関係が説明される；o 階梯 *poH₃- については、ギ 完・単・1 πέ-πω-κα 「飲んだ」 < *pe-poH₃- に立証される。

単子音語根（代名詞語根）では、時には、その一つの語根子音さえ失われていることがある。例えば、男・中・単・生 **его** < *i-o-go の形においては、先頭音 **е** は交替語幹母音 o (cf. **т-о-го**) からでたものである。一方、キリール書法の **юго** における **і** の記号は、歴史的観点からすれば、代名詞語根だと見なすことができる (cf. ギ 単・主 **ѡс** = 古イ jah < *i-o-s 「関係代名詞 [who, which, that]」)。しかし、このスラヴ祖語の代名詞語根 *i- は、例えば、複・与 **имъ** < *i-o-i-m- の形においては、語幹母音 o 及び複数指標 i (§. 27 参照) と融合してしまっていて、キリール書法でもグラゴル書法でもそれらを識別することはできない。承前・関係代名詞複数与格の代名詞語根 *i- の唯一の痕跡は、ゾグラフォス写本の書法 (**нѣмъ**) が証明している **нѣмъ** における語頭添加 (prothesis) の **н** の軟性である。

後期スラヴ祖語の時期には、口蓋化過程と開音節法則の結果、古い両子音語根（動詞・名詞語根）には更に大きな変化が発生した。同一語根内で口蓋子音と非口蓋子音の間の交替が現れるのである — 次例参照、**жити** < *g^wi- 「生きる、食べていく、咀嚼する」、使役・不 **гонти** 「(人を) 食べさせる、存在させる」 < *g^woi- (語根母音 o 階梯、§. 6, 第 2 項 a 参照)；現・単・1 **женхъ** 「追う」 < *g^wen-, 不 **гънати** < スラ祖 *gъn- < *g^whъn- (古い円唇軟口蓋音に後続する **ь** の **ъ** への変化を伴う)；**ис кони** 「始めから、始めは」、現・単・1 **н а-чън-хъ** < *kъn- 「始める」；現・単・1 **рекхъ** 2 **речеши**, 命・

単・2 **РЪЦИ** 不 **РЕШТИ** ; **ЧИСТЪ** < *keid-t- (第一次的語根は **ЦЪАНТИ** < *koid-「清める」), **ОЦЪСТИТИ** < *koid-t- ;
 現・単・1 **ЖЪРЖ**「飲み込む」 < *g^wьr-, **ГРЪЛО** < スラ祖 *g
 ьr- < *g^wьr- (古い円唇軟口蓋音に後続する **ь** の **ъ** の変化を伴う)
 ; 現・単・1 **МОГЖ**, 2 **МОЖЕШИ**, 命・単・2 **МОШ** 不 **МОШТИ**。

またところによっては、語根の第一子音あるいは第二子音が二子音結合群に変化した — 例、現・単・1 **БЛЮДЖ**「注意する、気遣う、守る」
 < *bheudh-, 使役・不 **БОУАНТИ** (覚醒させる) < *bhoudh- ; 現・
 単・1 **ЛОВЛЖ**, 2 **ЛОВИШИ** ; **ХОЖАЖ**, **ХОДИШИ** ; **ЛЕШТЖ**, **ЛЕТИШИ**。ある場合には、継ぎ目子音 **т**, **д** が **с** に変化したり、あるいは脱落した — 例、現・単・1 **ВЕДЖ**, 不 **ВЕСТИ** ; **БОДЖ**,
БОСТИ ; **ЧЪТЖ**, **ЧИСТИ** ; 現・複・3 **ИДААТЪ**, 単・1 **ИМЪ** <
 *ēd-mi, 不 **ИСТИ** < *ēd-tēi。時に (歯音の前で)、唇音 **п**, **б**
 も脱落した — 単・1 **ТЕПЖ**「打つ、叩く」 不 **ТЕТИ** ; **ГРЕБЖ**,
ГРЕТИ ; **СЪНЪ** < *sup-n- = ギ $\psi \pi \nu o \varsigma$ 「眠り」, **ОУ-СЪПАТИ**。
 語根の内の第一子音に対しては、接頭辞 (前置詞) も影響を与えた — 次
 例参照 **ЧАДО** に対して、**ИШТАДЪЕ** < **ИС-ЧАДЪЕ** ; **ЧРЪВО** に対
 して、**ИШТРЪВА** < **ИЗ ЧРЪВА** ; 現・単・1 **ЖЕНЖ**「追う」,
 2 **ЖЕНЕШИ** に対して、**ИЖАЕНЖ**, **ИЖАЕНЕШИ** < **ИЗ-ЖЕНЖ** ; 現・
 単・1 **ВЛЪКЖ**, 2 **ВЛЪЧЕШИ** に対して、**ОБЛЪКЖ**, **ОБЛЪЧЕШИ** <
 *obh-uelk^w-。音声学的変化の結果、始原的語根の子音不変の原理は崩れ
 たのである。早期スラヴ祖語の語根では、語根母音だけが変化していた (例、
 *rek- : *rēk- : *rok-) のに対して、古代ブルガリア語の語根では、この
 変化は母音にも子音にも及ぶに至るのである — 例、現・単・1 **РЕКЖ**,
 2 **РЕЧЕШИ**, 不 **РЕШТИ**, アオ・単・1 **РЪХЪ**, 命・単・2 **РЪЦ**
И, 反復・不 **НА-РИЦАТИ**; 男・単・主 **ОТ-РОКЪ**, 中 **ОТ-РОЧА**,
 男・複・主 **ОТ-РОЦИ**。

語根母音の階梯にも極めて大きな変化が発生した。正常階梯 *e* と対応階梯 *o* の始原的な差異は、一連の場合には残っている — 次例参照、現・単・1 **РЕКЪ** (言う、発言する), **ОТ-РОКЪ** (子供、未成年) ; **ТЕКЪ** (走る), **ТОКЪ** 「流れ、奔流」 ; **ВЕЗЪ, ВОЗЪ** 「馬車、(荷)車」 ; 現・単・1 **НЕСЪ**, 反復・現・単・1 **НОШЪ** ; 現・単・1 **ЛЕЖЪ**, 現・単・1 **ПО-ЛОЖЪ**。同様の差異は、グラゴール文献の次のような例にも見られる — 現・単・1 **ЕАЭЕАЭЕ (БЛАДЪ)** 「罪を犯す、誤る」 : **ЕАЭЕАЭ (БЛАДЪ)** 「放蕩、墮落、迷い」 ; **УБЭЕЭЭЕ (ТРАСЪ)** : **УБЭЕЭ (ТРЪСЪ)** ; **АЭЕЕ (ЛАКЪ)** 「曲げる、よる、折る」 : **АЭЕ (ЛЖКЪ)** (弓) 。しかし、スラヴ祖語後期には、ゼロ階梯(低減階梯)はもはや希に見られるにすぎない(*r, l, m, n, i, u* に終わる語根にのみみとめられるにすぎない)。非子音的な子音で終わる語根と同じ様な交替が、一貫して行われていたとすれば、それは極めて大きな音声学的变化をもたらしていたはずであり(例えば、語根 **nek'-* [**НЕ-С-Ж**] は、ゼロ階梯で **ns- > *qs-* となり、また一方、語根 **pekʷ-* [**ПЕК-Ж**] は、ゼロ階梯で **pk- > *k-* になっていたはずである)、そうならば一連の同系語間の音声学的近似性は消滅していたはずである。ゼロ階梯での両子音語根のあまりにも大きな単純化を避けるために、第二子音が *r, l, m, n, i, u* でない場合には、語根母音の正常階梯ないしはその対応階梯が一般化したのである。*er:or:ь r, el:ol:ь l, en:on:ь n, em:om:ь m* 結合群は、これに母音が後続するときには変化がなかったが(例、**БЕРЖ, СЪ-БОРЪ, БЪРАТИ** ; **НАЧЪНЖ, КОНЬЦЪ**)、子音が後続すると、それは **РѢ : РА : РЪ = ʀ** (例、**ВРѢМА** < **uert-men*, 使役・不**ОТ-ВРАТИТИ** < **uort-*, 不**ВРЪТѢТИ**) ; **ЛѢ : ЛА : ЛЪ = ʎ** (例、不**ОБЛѢШТИ** < **obh-uelkʷ-*, **ОБЛАКЪ** < **obh-uolkʷ-*, 受過分**ОБЛЪЧЕНЪ** < スラ祖 **ob-ʎč-en- < *obh-ʎlkʷ-en-*) ; **А : Ж** (例、受過分**РАС-ПАТЪ** (磔にされた) < **pъn-t-*, **ПЖТО** 「枷、馬の足を縛る紐」 < **pon-t-*) のように変わったのである。

語根母音の延長といったような位置的な差異は（不完了体の派生動詞に最も頻出）、次のような **рѣ : ор : др : ѡр : ир : рѣ** (r) あるいは **он : ѡ : ѡн : ин** 型の独特の交替の原因となった。例えば、不 **мрѣти** < *mēr-t- (§. 10 参照), **морѣ, оу-мариати** < *mōr-, 現・単・1 **мѣрѣ**, 現・単・1 **оу-мираѣ** < スラ祖 *mīr- = *m̄r-, **сѣ-мрѣтъ** < *m̄r-ti-; **ис кони**, 不 **на-чати** < *kēn-t-, 現・単・1 **на-чѣнѣ**, 現・単・1 **на-чинѣ** < スラ祖 *čīn- < *k̄n-。ei: oi: i, eu: ou: u の始原的な交替は、位置的な条件や母音延長に応じて (oi > ōi, ou > ōu, i > ī, u > ū)、**и : ѣ : ѡ : он : ин, ю : оу : ѣ : ѡ : ов : ѣв : дв** 型の交替に変じた。次例参照、現・単・1 **по-чѣѣ** < *k̄ei- (§. 2 参照), **по-кон** < *k̄oi-o-; 不 **свѣтѣтъ** < *k̄ui-t-, **свѣтъ** < *k̄uoi-t-, 不 **свѣтати** < *k̄uī-t-; 不 **кронти, краи** < *krōi-o-; 現・単・1 **блюѣ** < *bheudh-, 使役・不 **боудати** < *bhoudh-, 不 **бѣѣти** < *bhudh-; 現・単・1 **словѣ** < *k̄leu- (§. 2 参照), 不 **слоути, слава** < *k̄lōu-; 不 **крѣти** < *krū-, **кровѣ**「屋根、庇、幌」< *krou-; 不 **тѣти**「太くなる、肥える」< *tū-, **тоуѣ**「脂肪、膏」< *tou-k-; 不 **на-вѣкнѣти** < *ūk- (語頭添加音 prothesis **в** を伴う), 不 **оучити** < *ouk-。

§. 9 始原的な名詞接尾辞と動詞接尾辞の統一性

古代ブルガリア語には、他の古代印欧諸語におけると同じように、名詞、代名詞、動詞の三つの主要品詞が存在している。それらに対応してそれぞれ、名詞変化（曲用）、代名詞変化（曲用）、動詞変化（活用）の三つの基本的な語形変化（屈折）類があり、そのいずれもが一定タイプの語根、接尾辞、語尾と結合するという特徴を持っている。語根母音の交替も、スラヴ祖語的な状態の名残として、名詞と動詞に固有のものである。多くの場合、古代ブルガリア語の名詞、代名詞、動詞の接尾辞は、起源的には同じであるが、やがて時と共に外面上の音の性格が変わってしまうか、あるいはまた異なる語派生、語形変化環境に措かれることになった — 異なるタイプの語根、拡張語根ないしは語幹（語根 + 別の接尾辞）の後ろ、あるいは異なるタイプの語尾の前、のように — すなわち、非常に一般的な言い方をすれば、異なるパラダイム（曲用と活用）に変じたのである。更に、開音節法則の結果、スラヴ祖語の接尾辞の多くが、古代ブルガリア語では語尾に変わったのである（§.7 参照）。

古い接尾辞は、その音と位置の多様性の故に、全ての顕れにおいて同一形態素であることをやめてしまった。歴史的観点からすれば、男・中・単・生 **Т-О-ГО**, 単・呼 **ВЛЪЧЕ**, アオ・3・単 **НЕС-Е** < *nek'-e-t, 単・造 **ВЛЪК-О-МЪ** は、語根の後ろに同種の始原的なテーマ（幹）母音を持っており、**ВЛЪЧЕ** と **НЕС-Е** では、それが正常階梯すなわち *e* 階梯であり、一方、**Т-О-ГО** と **ВЛЪК-О-МЪ** では *o* 階梯なのである。古代ブルガリア語では、この古い統一性が崩れてしまっている。指示代名詞の曲用（例、男・中・生 **Т-О-ГО**, 与 **Т-О-МОУ**, 所 **Т-О-МЪ**, 女・単・生 **Т-О-Я**, 与・所 **Т-О-И**, 造 **Т-О-И**）においては、古い接尾辞 *-e*（対応階梯では *-o-*）は今なお語根と語尾間の結合母音の役割を果たしているが、男性名詞硬変化では、それは全15格形中三つの格形（単・造 **В**

ЛЪК-О-МЪ, 複・与 ВЛЪК-О-МЪ, 双・与・造 ВЛЪК-О-МА) に見られるにすぎず、したがって、それは歴史的観点からのみ接尾辞という区分ができるにすぎない。一方、承前代名詞の曲用において、例えば、男・中・生 Е-ГО < *i-o-go, 与 Е-МОУ, 所 Е-МЪ では、古い接尾辞 -e- (対応階梯では -o-) はもはや語根である。

始原的な動詞語幹と名詞語幹の間には原理的な差異は存在しない。同一の接尾辞 -e- (対応階梯では -o-) は、古代ブルガリア語の動詞の -e- 活用の現在形、例えば、単・1 ВЛЪК-Ж, 2 ВЛЪЧ-Е-ШИ < *uel kʷ-e- あるいは НЕС-Ж, НЕС-Е-ШИ にも、男性・中性名詞硬変化 (すなわちスラヴ祖語 o 語幹名詞曲用)、例えば、単・主 ВЛЪКЪ < *uļ kʷ-o- あるいは БОДОНОСЪ < *nok'-o- にも立証される。単・主 ВЛЪКЪ < *uļ kʷ-o-s には、語根母音のゼロ階梯と接尾辞の o 階梯が (接尾辞の e 階梯は 呼 ВЛЪЧ-Е < *uļ kʷ-e に見える)、また 現・単・3 ВЛЪЧ-Е-ТЬ < *uel kʷ-e-ti には、語根母音の e 階梯と接尾辞の e 階梯が立証される (接尾辞の o 階梯は、現・複・3 ВЛЪКЖТЬ, Г вѣдѣ-ѡ-ѡ-ѡ < *uel kʷ-o-nti に見られる)。現・単・3 НЕС-Е-ТЬ < *nek'-e-ti では、語根母音、接尾辞共に e 階梯が現れ、БОДО-НОСЪ < *nok'-o- では、語根母音、接尾辞共に o 階梯が現れている。換言すれば、*uel kʷ-e- 及び *nek'-e- の語幹から、語根母音と接尾辞の異なる階梯を用いて、一定の特性の担い手 (引いたり運んだりする特性を持つ生物) の名称も行為自体 (引いたり運んだりすること) の名称も形成されたのである。我々は、こうした同一の原接尾辞 (正常階梯で -e-、対応階梯で -o-) を、代名詞語幹にも見ることができる - 例、中・単・生 Ч-Е-СО < *kʷ-e-so, 男・中・生 С-Е-ГО < *k'-e-go, 2・単・生 Т-Е-БЕ, 男・中・生 Т-О-ГО, 2・単・造 Т-О-БОЖ。

§. 10 始原的な動詞、名詞語幹における一括多数性 (ТОТАЛНА МНОЖЕСТВЕННОСТ) 指標 H_2

始原的な名詞語幹と動詞語幹の統一性は、**-А** 語尾の中性複数主・対格形 (**СЕЛ-А**, **ЧРЪВ-А**) にも、現在語幹に接尾辞 **-e** (**-ie**)、過去語幹に語根母音ゼロ階梯 (低減階梯) を持つ、動詞の不定詞・アオリスト形にも観察することができる — 例、現・単・1 **БЕР-Ж**, 2 **БЕР-Е-ШИ**, 不 **БЪР-А-ТИ**; 現・単・1 **ПИШ-Ж**, 2 **ПИШ-Е-ШИ** < スラ祖 $*p\bar{i}s-ie-$ < $*pe\bar{i}-k'-ie-$, 不 **ПЪС-А-ТИ** < $*pik'-$ 。中性複数主・対格形語尾 **-А** と女性単数主格語尾 **-А**、例えば、**ЖЕНА**、また一般的に **-а** 語幹の接尾辞 **-ā-** (例、複・与 **ЖЕН-А-МЪ**, 造 **ЖЕН-А-МИ**, 所 **ЖЕН-А-ХЪ**) の同系関係については、§. 24 を参照。

中性複数主・対格形の語尾 **-А** は、始原的な動詞・名詞接尾辞 **-e-** と始原的な非分割 (一括) 多数性指標である H_2 ($eH_2 > \bar{a}$, §. 3 参照) から発生したものである。テーマ母音 $\bar{a}$ を持つスラヴ祖語のこの原動詞は、非分割的、一括的、瞬時經過的、一気実現、完遂、完成的行為を表したのである (それは、後にスラヴ祖語の過去語幹、すなわちアオリスト [ми на ли свършени форми] 幹に変わっている — アオ・単・1 **БЪР-А-ХЪ**, **ПЪС-А-ХЪ** 参照)。したがって、**БЪР-А-** < $*bh\bar{y}r-e-H_2$ 及び **ПЪС-А-** < $*pik'-e-H_2$ における接尾辞 **-А-** は、現・単・2 **БЕР-Е-ШИ** や 単・造 **СЪ-БОР-О-МЪ** に見られる原接尾辞 **-e-** (対応階梯では **-o-**) と行為や特性の全一性、非分割性指標である H_2 とに由来するものである (cf. ギ 現・単・3 $\phi \acute{e} p-\epsilon-i$ 「運ぶ」 < $*bher-e-$ と $\phi o p \acute{a}$ 「運ぶこと、携行、肥沃、(重) 荷」 < $*bhor-e-H_2$ 、集合的な意味を持つ古い名詞で、後に女性名詞に編入された)。二次的不完了体動詞の接尾辞 **-А-** については、§. 17 第3項参照。

その他の始原的な過去語幹の指標は次の通りである：

1. 語根重複 (疊語法 reduplication)。これは、ギリシャ語やラテン語の完了形 (perfectum) に見られる — 1・単 $\gamma\epsilon\text{-}\rho\alpha\phi\alpha$ 「書いた」、 $\pi\epsilon\text{-}\phi\rho\acute{o}\nu\text{-}\eta\kappa\alpha$ 「思った、考えた」、 $\lambda\epsilon\text{-}\lambda\upsilon\kappa\alpha$ 「ほどいた、解き放った」、ce-cid-i 「落ちた」、me-min-i 「覚えている」、te-tig-i 「触れた、達した」。これらの例における語根の重複は、例えばブルガリア語の $x\acute{o}\Pi\text{!...}x\acute{o}\Pi\text{!}$ 「一回更にまた一回跳ぶ」といったような行為の多回性 (反復性) を表すのではなく、例えばブルガリア語の $x\acute{o}\Pi\text{-}x\acute{o}\Pi\text{!}$ 「素早く一気に跳んだ」のような、全一的、一括的実現行為、一气完遂的行為を表す。

2. 古い語根重複の継承としての、語根母音の延長 (§. 12 参照)。こうした延長は、アオリスト形にみられる — 例、1・単 **Вѣсъ** 「導いた」
 $\leftarrow *u\acute{e}dh\text{-}s\text{-}$, **Басъ** 「刺した」 $\leftarrow *bh\acute{o}dh\text{-}s\text{-}$ 。

動詞の原接尾辞 $-ā\text{-}$ の形成に際して、 H_2 の指標が加わったという証明はヒットイト語にあり、そこでは、語幹 $neuah\dot{h}$ 「復活させる、新しくする」が文証され、またそれはラテン語 $nov\text{-}ā\text{-}re$ 「新しくする」 $\leftarrow *n\acute{e}u\text{-}e\text{-}H_2\text{-}$ の語幹と同じものである。

Вѣр-а-, **Пѣс-а-** $\leftarrow *bh\text{ } \acute{e}r\text{-}e\text{-}H_2\text{-}$, $*pik'\text{-}e\text{-}H_2\text{-}$ 型の過去語幹は、語根母音のゼロ階梯ないしは低減階梯と接尾辞 $-e\text{-}$ の正常階梯を内包している。現在語幹に $-e\text{-}$ を持つ別の動詞類、例えば、現・単・1 **Нес-ж**, 2 **Нес-е-ши**, 不 **Нес-ти**; **Вед-ж**, **Вед-е-ши**, **Вес-ти** にあっては、語根は非完了 (infectum) 幹⁽⁶⁾ も不定詞・アオリスト幹も共に e 階梯であるが、接尾辞は非完了 (infectum) 形においてのみ e 階梯であった。この過去語幹 (アオリスト幹 $\mu\acute{\iota}\nu\alpha\lambda\alpha$ $\sigma\upsilon\upsilon\rho\sigma\eta\eta\epsilon\lambda\alpha$ $\omicron\sigma\eta\omicron\nu\alpha$) では、接尾辞 $-e\text{-}$ はゼロ階梯であり、したがって、この語幹特徴を表示した、行為の全一性指標 H_2 は、語根の後ろに直接付加されたのである。この始原的な語幹 $*nek'\text{-}H_2\text{-}$ 及び $*u\acute{e}dh\text{-}H_2\text{-}$ から第IIシグマ・アオリストの形 **Нес-о-хъ** 及び **Вед-о-хъ** が発生するのであり (§. 13 参照)、それは恐らくは、 $\acute{a}\text{-}bodh\text{-}i\text{-}\acute{s}am$ 「私は目覚めた、気付いた」

< *e-bhou_{dh}-H₂-s- (e は加音 augmentum) 型の接尾辞 -i_ʃ- を持つ古代インド語のアオリスト形と同系関係にある。第Ⅰシグマ・アオリスト形を持たなかった動詞、現・単・1 **ПАД-Ж**, 2 **ПАД-Е-ШИ**, 不 **ПАС-ТИ**; **МОГ-Ж**, **МОЖ-Е-ШИ**, **МОШ-ТИ**; **САД-Ж**, **САД-Е-ШИ**, **СЪС-ТИ** 型の動詞にあっては、古代ブルガリア語前期には、恐らく、第Ⅱシグマ・アオリストの方がより特徴的であつたろう。

現在語幹に接尾辞 -e- を持つ動詞の過去語幹が H₂ を内包していることを間接的に示唆しているのが、見かけ上の非テーマ（無幹母音）不定詞

НЕСТИ (□ нести̇), **ВЕСТИ** (□ вести̇) 型と **ПАТИ** (□ распя̇ть, セ・ク пѣти), **МРѢТИ** (□ умерѣть) 型のアクセントの差異である。この差異の名残がロシア語の無力点不定詞語尾の -ти の -ть への短縮である（例外は、печь < **ПЕШТИ**

及び мочь < **МОШТИ** 型のロシア語不定詞である；ただし、次を参照、ウクライナ語 печі̇, мочі̇）。

不定詞は、接尾辞 -ti- を持つ古い名詞所格形、すなわち古い ti 語幹名詞に起源を持つ。この曲用の所格形としては純粹語幹そのものが使われたが、ただし、接尾辞の正常延長階梯 (tēi-) を伴う。Cf. 現・単・1 **ПАД-Ж**, 2 **ПАД-Е-ШИ**, 不 **ПАС-ТИ** (落ちる), 単・主 **ПАСТЬ** 「(底なしの) 深淵、断崖」 < *pōd-ti-s, 所 **ПАСТИ** < *pōd-tēi (語根母音の延長を伴う古い集約性語幹) (§. 5 参照)；非集約性語幹 *ped-:

*pod- は前置詞 **ПОД-Ъ** に立証されるし、また ギ 単・属 ποδός, ラ 単・属 pedis < *ped-es 「足の」 も同じである。単・所

ПАСТИ < **ПАСТЬ** 「深淵」 の原型とは対照的に、見かけ上の非テーマ（無幹母音）不定詞 **НЕСТИ**, **ВЕСТИ**, **ПАСТИ**, **ПАТИ**, **МРѢТИ** の原型は、祖語において行為の全一性指標 H₂ を包含した過去語幹に関連している。この古代ブルガリア語の不定詞形は、*nek'-H₂-, *uedh-H₂-, *pōd-H₂-, *pen-H₂-, *mer-H₂- の語幹の継承と見なすべきであって、これに対して、後に H₂ が脱落して以後、接尾辞 -ti- が付加されたの

である。H₂ の脱落后、二重母音 en 及び er は延長されて、上昇調 (acute) を得たのであり、そのため ПАТИ 及び МРЪТИ のアクセントは、語根上に残るか、あるいはまた不定詞語末 -tēi から語根上へ移動したのである。このような移動は、語根母音が短く、また不定詞語末 -tēi- が鋭音調 (acute) の長母音を持っていた НЕСТИ 及び ВЕСТИ 型では起こらなかった。

現・単・1 БЪЖ, 2 БЪЕШИ < *bhej-e (§. 2 参照), 不 БИТИ < *bhi-H₂, アオ・単・1 БИХЪ < *bhi-H₂-s; 現・単・1 МЪЖ, 2 МЪЕШИ < スラ祖 *mu-je- < *mu-e-, 不 МЪТИ < *mu-H₂, アオ・単・1 МЪХЪ < *mu-H₂-s- といったような動詞の現在幹と不定詞・アオリスト幹での語根母音の短と長の交替も、このような説明がなされるべきである。

r, n に終わる語根のリトアニア語不定詞も、かつての不定詞・アオリスト語幹における始原的な一括多数性指標である H₂ について、はっきりと証明している。語根母音が e 階梯であったスラヴ祖語の不定詞 (例えば、МРЪТИ < *mer-H₂-tēi, ПАТИ < *pen-H₂-tēi) とは異なり、リトアニア語不定詞では、語根母音は低減 (ゼロ) 階梯であった。次例参照、pīn ti < *pñ-ti < *pñ-H₂-ti は、ПАТИ と同系; リ gīrti, ラト dzi řt 「誉める、賞賛する」 < *gʷr̥-ti < *gʷr̥-H₂-ti は、ЖРЪТИ 「生け贄を捧げる、生け贄の動物の血肉を味わう、食べる」と同系 (ЖРЪТИ のゼロ階梯は、「味わう」の意も「生け贄を捧げる」の意も表したかつての語根 *gʷer- から次の二つの動詞が作られたということによって説明される

— 現・単・1 ЖЪРЖ, 2 ЖЪРЕШИ, 不 ЖРЪТИ 「飲み込む」 < *gʷer-H₂-tēi は、リ gērti (飲む), ラト dzeft (飲む) < *gʷer-H₂-ti と同系、また 現・単・1 ЖЪРЖ, 2 ЖЪРЕШИ, 不 ЖРЪТИ 「生け贄を捧げる」 < *gʷr̥-H₂-tēi は、リ gīrti (賞賛する), ラト dzi řt 「賞賛する」 < *gʷr̥-H₂-ti と同系) である。リトアニア語不定詞 m iřti 「死ぬ」 (語根の短音性については、§. 4 参照) は、疑いもなく、新

しい形である — 古い長音は、ラトヴィア語 *miřt*「死ぬ」 < *mř-H₂-ti に立証され、これはまた **МРЪТИ** < *mer-H₂-tēi と同系である。古代ブルガリア語の過去語幹においては、語根母音のゼロ（低減）階梯は、能動過去分詞第Ⅱ形及び受動過去分詞形の特徴を表示した。例えば、現・単・1 **ПРОСТЪРЖ**, 2 **ПРОСТЪРЕШИ**, 不 **ПРОСТРЪТИ**, **ПРОСТЪРЪТИ**（現在語幹の影響による形）に対して、**ПРОСТРЪТЪ** < *str-H₂-t-（cf. 古イ *stīrnāh*「まき散らされた」, ギ *στρωτός*, ラ *strātus*「広げられた、被物のある」、§. 2 参照）; **МЪРЖ**, **МЪРЕШИ**, **МРЪТИ** に対して、女・単・主 **ОУМРЪЛА**（口 = умерла; セ・ク *mřla*, §. 4 参照）; **ТЪРЖ**, **ТЪРЕШИ**, **ТРЪТИ** に対して、**ТРЪЛА**（cf. 口 *těrla*, セ・ク *třla*）。

第Ⅱシグマ・アオリスト（1人称単数で **ОХ** 指標を持つ — 例、**ПАД-ОХ-Ъ**, **НЕС-ОХ-Ъ**）と第Ⅰシグマ・アオリスト（1人称単数で **Х** あるいは **С** 指標を持つ — 例、**БЪР-А-Х-Ъ**, **НЪ-С-Ъ** < *nēk'-s-, **ВЪ-С-Ъ** < *uēdh-s-, **ПА-С-Ъ** < *pēn-s-, **МРЪ-Х-Ъ** < *mēr-s-）という伝統的な二分法は、古代ブルガリア語の過去形の記述的分類には大変有効であるが、歴史的な観点からすれば、根拠を持たない。本来の二分法は、1) 古い完了形（パーフェクト perfectum）の語根重複の継承である語根母音延長のある語幹から作る過去形、2) 一括性（集合・多数性）指標 H₂ を媒介にして作る過去形、であった。第1区分に属するのが、現・1・単

НЕСЖ, 2 **НЕСЕШИ**, アオ・1・単 **НЪСЪ** < *nēk'-s-; **ВЕДЖ**, **ВЕДЕШИ**, **ВЪСЪ** < *uēdh-s- 類の動詞のアオリスト形である。現・1・単 **ПЪНЖ**, 2 **ПЪНЕШИ**, アオ・1・単 **ПАСЪ** < スラ祖 *pēn-s- < *pen-H₂-s-; **МЪРЖ**, **МЪРЕШИ**, **МРЪХЪ** < スラ祖 *mēr-s- < *mer-H₂-s- 類の動詞のアオリスト形はこれに属さない。第2区分に属するのが、

現・1・単 **БЕРЖ**, 2 **БЕРЕШИ**, アオ・1・単 **БЪРАХЪ** < *bh ь r-e-H₂-s-; **ПЪНЖ**, **ПЪНЕШИ**, **ПАСЪ** < *pen-H₂-s-; **НЕСЖ**, **НЕСЕШИ**, **НЕСОХЪ** < *nek'-H₂-s- である。現・1・単 **ПЪНЖ**, 2 **ПЪНЕШИ**;

МЪРЖ, МЪРЕШИ 型の動詞にあっては、現・1・単 **НЕСЖ, НЕСЕШИ** ;

ВЕДЖ, ВЕДЕШИ 型の動詞とは違って、第IIシグマ・アオリスト形は、スラヴ祖語期にも古代ブルガリア語期にも、原理的に不可能であり、それは第Iシグマ・アオリスト **ПАСЪ** < *pen-H₂-s- や **МРЪХЪ** < *mer-H₂-s- は、**НЕСОХЪ** < *nek'-H₂-s- や **ВЕДОХЪ** < *vedh-H₂-s- とはもともと起源を同じくするものだからである。

§. 11 語幹母音の延長階梯の形態的意義

更に我々に動詞・名詞語幹の統一性の例を提供してくれるのが、一つは、(СТАРЪ, СЛАБЪ, ЮНЪ に対する) СТАРЪИ, СЛАБЪИ, ЮНЪИ 型の比較級であり、もう一つは 現・1・単 СТАРЪЖ, 2 СТАРЪЕШИ, 不 СТАРЪТИ ; ЦЪЛЪЖ, ЦЪЛЪЕШИ, ЦЪЛЪТИ 「平癒させる、治療する」 ; О-СЛАБЪЖ, О-СЛАБЪЕШИ, О-СЛАБЪТИ 型の動詞である。СТАРЪИ < *stār-ē- 型の形容詞比較級は、語根重複の継承である、語幹母音 e の正常延長階梯を持っている (対応階梯 o は *stār-o- > СТАРЪ に立証される)。意味的には、*stār-ē- (СТАР-Ъ-) は、ブルガリア語の стар-стар 「大変老齡の」(стар-старядо 大変歳をとったおじいさん) に近い。Cf. νεώτερος 「より新しい」 < *neu-ō- (cf. νέος = НОВЪ < *neu-o-) 型のギリシャ語形容詞比較級の幹母音 o の延長階梯 及び frodoza 「より賢い」 < *prot-ōs- 型のゴート語形容詞比較級。語幹の *stār-ē- は、iis による拡張を受けて以後、先ず СТАРЪ の揚意級 [ēlativus]¹² (上級) の形として、更に後に比較級としても使われるに至った (男・単・主 СТАР-Ъ-И < *stār-ē-iis-)。同語幹 *stār-ē- は、現・1・単 СТАР-Ъ-Ж, 2 СТАР-Ъ-ЕШИ, 不 СТАР-Ъ-ТИ 「次第に老いゆく」に立証される。Cf. ЦЪЛЪЖ, ЦЪЛЪЕШИ, ЦЪЛЪТИ 「平癒させる」と ЦЪЛЪИ 「より健康な」 ; О-СЛАБЪЖ, О-СЛАБЪЕШИ, О-СЛАБЪТИ と СЛАБЪИ。

語幹母音の延長 (古い語根重複の継承) によって、主・対 ВЪЛКА < *uļk*-ō- のような双数形 — 意味的には「狼—狼」に等しい、すなわち「2匹の狼」 (§. 5 参照) である —、また 古イ vřka, リ vilkū < *uļk*-ō- = 双・主・対 ВЪЛК-А (§. 32 参照) のような共同・具格形 (sociative-instrumental)、またこれらに関連する、ラ bene 「良

く」, male「悪く」, cito「速く」(短長格〔iambus〕的短縮を伴う benē , malē , citō), longē「長く」, falsō「虚偽に、間違って」, rārē, rārō「希に」型の副詞の形を得ることができるのであり、ここでの幹母音 ē (ō) は、 *stār-ē- > **СТАРЪТИ** の幹母音 ē と同系関係にある⁷⁾。

同様にして、例えば、1・単 **ВЕД-Ъ-АХЪ** < *vedh-ē- のような、古代ブルガリア語の未完了過去(インパーフェクト)語幹も、非現在の(終止した)行為を表すための特別派生語幹として作られたのであり、これは、現在の(終止していない)行為を表すための古い語幹(例、現・単・2 **ВЕД-Е-ШИ**, 3 **ВЕД-Е-ТЪ**, 単純アオ・3 **ВЕД-Е** に立証される語幹 *vedh-e-)と対照的である。古代ブルガリア語の未完了過去(минало несвършено време)形(1・単 **ВЕД-Ъ-АХЪ**, **НЕС-Ъ-АХЪ**, **СТА-Ъ-АХЪ**)を作る *vedh-ē- , *nek'-ē- , *sēd-ē- のような語幹は、一つは、発話時における、行為に対する主体の不活発な態度(недействено отношение)(すなわち、過去性〔претеритност〕 — носех, но сега не нося「私は(過去に)運んでいたが、今は運んでいない」)を表したものであり、もう一つは、行為自体の持続性(трайност)を表したものである。したがって、古代ブルガリア語では、原則として、不完了体動詞だけが未完了過去形を持っている。第一の特徴、すなわち、発話時における、行為に対する主体の不活発な態度という面では、スラヴ祖語の過去時制の(後に、インパーフェクトの) ē 語幹は、語根重複の名残である語幹母音延長階梯であって、意味的には始原的な畳音(reduplication)パーフェクトに近似している。

МЪН-Ъ-ТИ < *mъn-ē-, **ЛЕЖ-А-ТИ** < *leg-ē-, **БЪД-Ъ-ТИ**, **ВИД-Ъ-ТИ**, **ГОР-Ъ-ТИ** 型の、接尾辞 -Ъ- を持つ不定詞・アオリスト幹も同一起源である。接尾辞 -Ъ- を持つ古代ブルガリア語の不定詞・アオリスト幹と同系関係にあるギリシャ語の第Ⅱアオリスト受動形¹³⁾ が示しているように、延長幹母音 ē (ギ η) は、非完了(infectum)幹の e

指標から得られたものである — 次例参照、現・2・複 $\gamma\rho\acute{\alpha}\phi\epsilon\tau\epsilon$ 「書く」 に対して、アオ・1・単 $\acute{\epsilon}-\gamma\rho\acute{\alpha}\phi-\eta-\nu$ 「私は書かれた」；
 2・複 $\beta\lambda\acute{\epsilon}\pi\epsilon\tau\epsilon$ 「見る」 に対して、アオ・1・単 $\acute{\epsilon}-\beta\lambda\acute{\epsilon}\pi-\eta-\nu$ 「私は見られた」； 現・2・複 $\delta\acute{\epsilon}\rho-\epsilon-\tau\epsilon = \text{ДЕР-Е-ТЕ}$ に対して、アオ・1・単 $\acute{\epsilon}-\delta\acute{\alpha}\rho-\eta-\nu$ 「皮を剥がれた」 (ДЪР-А-ТИ のように、語根母音の低減階梯を含む)。スラヴ祖語のインパーフェクトが不活発な意味あいを持つのと同一意味において、ギリシャ語の第Ⅱアオリスト受動形 (aoristus secundus passivi) の意味は不活発性の表現であり、それは、発話時における、行為に対する主体の不活発な態度を表したのである。受動の意味を持つ形 (ギリシャ語) も、過去の意味を持つ形ないしは状態表現の語幹 (古代ブルガリア語) も、同様の語幹から発達してきた可能性を持つのである。

スラヴ祖語において、接尾辞 $-\bar{e}$ の不定詞・アオリスト幹は、何よりも先ず、状態の語幹である。これは、つまり、述語動詞の主体は、絶対的な行為、主体に発するものではない行為 ($\text{ЛЕЖАТИ, СТОЯТИ, БЪДЪТИ, ВИСЪТИ, ЛЕТЪТИ, МЛЪЧАТИ, ГОРЪТИ, СЪДЪТИ, БОЯТИ СЯ}$) に対して不活発な参与者であって、そうした場合には原則として動詞自体も自動詞であるか、あるいはまた、主体が自己の感覚と思考を通して物事を捉える ($\text{ВИДЪТИ, СЛЪШАТИ, СЛЪШАТИ, МЪНЪТИ, ВЪДЪТИ, ЗЪРЪТИ}$) 場合であり、そのような場合、早期スラヴ祖語では、行為が疑似客体 (псевдообъект 、生・奪格による知覚対象補語) を有したことを伝えるものであろう。スラヴ祖語の疑似客体については、次のような用例がそれを証明している：詩編 (Psalterium) XXXVI-37 ВИЖАЬ П РАБОТЫ (直きものを見よ)；スプラシル写本 (Codex Suprasliensis) 41₂₆ $\text{ПРОБНАТЬСЯ СТРАХА ТВОЕГО}$ (汝の恐れをものともせず)；同写本 457₂₆ $\text{СТЫНУХЪ СЛОВЕСЪ ДА СЛЪШИМЪ}$ (聖なる言葉を聞こう)；ルカ XXIII-49 ЗЪРАШТА СИХЪ ((女達も) これらのことを見て)。しかしながら、古代ブルガリア語では、我々は基本的には対格に

よる直接補語を見い出すのであり — ルカ IV-30 **СЛЪШАТЪ СЛОВ**
О (彼らは言葉を聞く) ; マタイ IX-7 **ВНАТЪВЪ НСЪ ВЪРЖ НХ**
Ъ (イエスは彼らの信仰を見てから) ; マタイ XXVI-71 **ОУЗЪРЪ Н**
(αὐτόν) ΑΡΟΥΓΑΤЪ (他の女が彼を見た) —、これは恐らくはよ
 り新しい現象であろう。動詞 **БОИТИ СЯ** は、常に生格と共に使われ
 ており — 詩編 LXXXV-11 **БОИТИ СЯ ИМЕНИ ТВОЕГО** (御名
 を恐れる) ; 詩編 LII-6 **БОИШЕ СЯ СТРАХА** ((そのものは) 恐れ
 を抱いた) —、これは、 *timē Danaōs* 「汝はダナオイ人達を恐れよ」
 (この *timē* は、幹母音の延長階梯 *ē* を持つ) におけるラテン語対格に
 比して更に古い用法であろう。

非完了 (*infectum*) 幹に接尾辞 *-ē-* を持つラテン語の第Ⅱ活用動詞¹⁴
 も、不活性 (状態) あるいは感覚器官を通しての知覚を表すものである —

例、現・1・単 *videō*、不 *vidēre* 「見る」(cf. **ВНАТЪТИ**) ; *ta*
ceō、*tacēre* 「黙っている」(cf. **МЛЪЧАТИ**) ; *teneō*、*tenēre* 「保つ、
 持っている」(cf. **ДРЪЖАТИ**)。接尾辞 *-ē-* を持つラテン語動詞の一部
 は、その非完了幹に接尾辞 *-e-* を持つ、第一次の行為動詞に起源を持
 つ — 例、現・1・単 *placō*、2 *plācis* (*i < e*) 「平にする、鎮める」
 と 現・1・単 *placeō*、不 *placēre* 「気に入っている (逐語的には、平
 静・安寧の内にある)」 ; *pendō*、*pendis* 「懸ける、吊る」 と *pendeō*、
 不 *pendēre* 「掛かっている」。古代ブルガリア語の、非完了幹に幹母音 *e*

の同様の延長によって作られるのである : 未完・1・単 **НЕС-Ъ-АХ**
Ъ < **nek'-ē-*, cf. 現・3・単 **НЕС-Е-ТЪ** < **nek'-e-ti* ; **ВЕА-Ъ-**
АХЪ < **uedh-ē-*, cf. 現・3・単 **ВЕА-Е-ТЪ** < **uedh-e-ti*。

Cf. ラテン語第Ⅲ活用動詞¹⁵ の未完了形の幹母音 *e* の延長 : 現・1・
 単 *tegō* 「覆う、被う」, 2 *tegis* < **teges*, 未完・1・単 *teg-ē-ba*
m。

Ъ (*ē*) 指標を持つ古代ブルガリア語の未完了幹は、古典ギリシャ語第Ⅱ

アオリスト受動形 (aoristus secundus passivi) の語幹と一致しており、発話時以前に終止した持続的行為を表す。不定詞・アオリスト幹に接尾辞 **-Ѣ-** (ē) を持つ古代ブルガリア語動詞にあつては、第一次動詞の **e** 語幹との関連は目立たないが、それは、不定詞語末に **-ѢТИ** を持つ動詞の現在形が、補足付加的な現在指標 **i** を伴う不定詞・アオリスト幹から作られるからである : 例、不 **МЪН-Ѣ-ТИ** < *mъn-ē-, 現・3・単 **МЪН-Н-Ѣ** < *mъn-ē-i- (§. 27 参照)。 現・1・単 **СТАР-Ѣ-Ю**, 2 **СТАР-Ѣ-ЕШИ**, 不 **СТАР-Ѣ-ТИ** (男・単・主 **СТАР-Ѣ-Н** 「より古い」の語幹 *stār-ē- より、cf. **СТАР-Ѣ** < *stār-o-) ; **ОУМѢ-Ю**, **ОУМѢ-ЕШИ**, **ОУМѢ-ТИ** (cf. **ОУМѢ**) ; **НѢМѢ-Ю**, **НѢМѢ-ЕШИ**, **НѢМѢ-ТИ** (cf. **НѢМѢ**) 型の、接尾辞 **-Ѣ-** (ē) の名詞派生動詞の場合は、接尾辞 **-ēi-** = ē+i の現在幹は、テーマ母音 **e** (対応階梯では **o**) を補って拡張されたものである — 例えば、現・3・単 **СТАР-Ѣ-Е-Ѣ** (**СТАР-Ѣ-Ю-Ѣ**) は、*stār-ē-i-e-ti から出ている。感覚器官ないしは思考過程を経て知覚することを表す **-Ѣ-Ю**, **-Ѣ-ТИ** 型の派生動詞も、スラヴ祖語において、生・奪格の疑似客体を持っていた。次例参照、マタイ XXII-18 アッセマーニ写本 (Codex Assemanianus) **РАЗОУМѢВЪ...** **ЛЖКАВЕСТВІѢ НХЪ** (マリア写本 Codex Marianus では、**ЛЖКАВѢСТВО**) (彼らの悪意を知って) ; ヨハネ XVIII-37 **ПОСЛОУШАЕѢ ГЛАСА МОЕГО** (私の声を聞く) ; ヨハネ V-24 **СЛОУШАА СЛОВЕСЕ МОЕГО** (私の言葉を聞いて)。

接尾辞 **-Ѣ-** の古代ブルガリア語動詞には、過去 (不定詞・アオリストないしは未完了) 語幹においてだけ未完了体からの派生であるもの (不 **МЪН-Ѣ-ТИ**, 未完・1・単 **МЪН-Ѣ-АХЪ**, **НЕС-Ѣ-АХЪ**) と、過去語幹も現在語幹もそうであるもの (現・1・単 **СТАР-Ѣ-Ю**, 不 **СТАР-Ѣ-ТИ**, 未完・1・単 **СТАР-Ѣ-АХЪ**) とがある。

§. 12 古代ブルガリア語過去語幹の起源

これまでの記述において、我々は、母音延長を伴う二種類の語幹に出くわしたことになる：

1. 延長語根母音を持つ過去語幹 — アオ・1・単 **HTCT** < *n ek'-s-, cf. 現・3・単 **HECET** < *nek'-e-ti ; アオ・1・単 **BTCT** < *uēdh-s-, cf. 現・3・単 **BEA-E-T** ; アオ・1・単 **BACT** < *bhōdh-s-, cf. 現・3・単 **BOA-E-T** ; ラ 完・1・単 **legō** 「集めた」, cf. 現・1・単 **legō** 「集める」 ; 完・1・単 **vēnī** 「来た」, cf. 現・1・単 **veniō** 「来る」。

2. 接尾辞の延長母音を持つ過去語幹 — 未完・1・単 **HEC-T-AX** < *nek'-ē-, cf. 現・3・単 **HEC-E-T** ; ギ II アオ・受動 **ἐ-γραφ-η-ν** 「書いた」, cf. 現・2・複 **γραφ-ε-τε** 「書く」。

ラリンガル・モデル (§. 3) は、古い語根重複 (疊音 reduplication) と始原的な一括多数性指標 (完遂、完成行為の指標) H_2 による過去語幹形成から、第一型の延長を引き出すのに有効であろう。

ラ 現・1・単 **edō** 「食べる」 < *Hied- と 完・1・単 **edī** 「食べた」 < *Hie-Hied- の相関関係を検討してみよう。歴史的観点からすれば、これは、ラ 現・1・単 **pen-d-ō** 「懸ける、吊る」 (語根については、語根母音の低減階梯を持つ 現・1・単 **пѣн-х** 参照) と 完・1・単 **p e-pen-dī** 「懸けた、吊った」 の相関関係と同じである。*e-ed- > *ēd- 語幹 (現・1・単 **ѣмѣ** < スラ祖 *iād-m b < *ēd- の語幹と同じ) は、*Hie-Hied- 語幹の $H(H_1, H_2, H_3)$ 脱落后に、得られたのである ; 非テーマ (無幹母音) 動詞 **ѣмѣ** < スラ祖 *iād-m b は、疊音 (重複) 完了幹からできたもので、**дѣмѣ** < スラ祖 *dō-d-m b が、もっと別型の始原的な疊音完了幹 *deH₃-dH₃- からできているのと同じである。同様に、現・1・単 **emō** 「買う」 と 完・1・単 **ēmī**

「買った」の相関関係は、非畳音の語幹 *H₁em- > *em-と 畳音の語幹 *H₁e-H₁em- > *e-em- > *ēm- の相関関係に還元できる。欠如動詞 (defective verb) 完・1・単 ōdī 「憎む、(が)嫌だ」 < *ōd- < *o-od- < *H₃e-H₃ed- は、短母音を持つ非実現の現在を表す別形 (古い非畳音の語幹 *od- < *H₃ed-; cf. odium 「憎しみ」) を前提としたものである。この例においても、過去 (完了) 語幹の表徴としての、語根母音の延長は、過去 (完了 perfectum) の古い畳音 (重複) 構造に起源を持つのである。

〔語根短母音－非過去語幹〕: 〔語根長母音－過去語幹〕のように生成された対立は、現在語幹と見かけ上の非テーマ (無幹母音) アオリスト語幹との同じような対立 (現・1・単 φ ῥ ω 「生み出す、作り出す」 < *bh u-e- と 非テーマ・アオ・1・単 ε-φ ῥ-ν < *bhū- < *bhu-H₂-; cf. 不定詞 ΕΥΤΗ における不定詞・アオリスト幹 ΕΥ- < スラ祖 *bū- < *bhu-H₂-) による補強を受けた。現在幹 *ed- < *H₁ed-: 過去幹 *ēd- < *H₁e-H₁ed- 及び 現在幹 *mu- (現・1・単 ΜΥ-Η, ρ μ ο υ): 過去幹 *mū- < *mu-H₂- (cf. 不 ΜΥ-ΤΗ) 型の交替モデルにしたがって、ラ 現・1・単 scabō 「掻く、こする」, 完・1・単 scābī 「掻いた」; 現・1・単 veniō 「来る」, 完・1・単 vēnī 「来た」; 現・3・単 ΗΕC-E-ΤΥ, アオ・1・単 ΗΥCΥ < *nēk'-s-; 現・3・単 ΕΟΑ-E-ΤΥ, アオ・1・単 ΕΑCΥ < *bhōdh-s- 型の交替が生成されたのである。

ラテン語の、予期される交替 現・1・単 agō < *H₂eg'- と *āgī < *āg- < *a-ag- < *H₂e-H₂eg'- に代わる 現・1・単 agō と 完・1・単 ēgī 「駆った、導いた、動かした」の交替は、現・1・単 faciō 「為す、作る」 < *dhH₁-k- (§.13 参照), 完・1・単 fēcī 「為した」 < *dheH₁-k- (cf. ΑΥ-ΤΗ の不定詞幹); 現・1・単 iaciō 「投げる」 < *iH₁-k-, 完・1・単 iēcī 「投げた」 < *ieH₁-k- の交替モデルに従って発生したものである。現・1・単 linguō 「残す、去る」,

完・1・単 *liquī* 「残した、去った」； 現・1・単 *rumpō* 「破る、引き裂く」, 完・1・単 *rūpī* 「破った、引き裂いた」 型の交替は、 $*li-n-k^w - : *li-H_2-k^w - > *lik^w -$ 及び $*ru-m-p- : *ru-H_2-p- > *rūp-$ の交替から引き出されるべきであろう。この場合の *n* (*m*) は現在幹の指標 (c f. 現・1・単 **СТА-Н-Ж**, 2 **СТА-Н-Е-ШИ**, 不 **СТА-ТН**)、*H₂* は過去幹の指標 (行為と性質の一括性の指標)、*k^w* 及び *p* は現在幹の後ろにも過去幹の後ろにも付加された古い接尾辞 (語根拡張子) である。

ラテン語の、現・1・単 *rumpō* 「破る」, 完・1・単 *rūpī* 「破った」； 現・1・単 *fundō* 「注ぐ」, 完・1・単 *fūdī* 「注いだ」 の交替と古代ブルガリア語の交替、現・1・単 **БЖАЖ** < $*bhu-n-dh-$, アオ・3・単 **БЖСТЪ** < $*bhu-H_2-dh-t-$ ($dt > ct$ の変化を伴う) は、完全に一致しており、またこの場合の *dh* は、達成された状態を表す古い接尾辞であって (ギリシャ語の $\epsilon-\pi\alpha\iota\delta\epsilon\upsilon-\theta-\eta-\nu$ 「私は教育された」 型の受動アオリストの接尾辞 $-\theta-$ と同じ)、スラヴ祖語の動詞活用形に (不定形ではなく) 特有の接尾辞である (§.13 参照)。アオ・3・単 **БЖСТЪ** を アオ・1・単 **БЖХЪ** < $*bhu-H_2-s-$ と同じシグマ・アオリスト $*bhū-s-t-$ と見るのは誤りである。何故ならば、スラヴ祖語及び古代ブルガリア語アオリストの2・3人称単数は、原則として、シグマを取らないからである — cf. アオ・1・単 **ПАСЪ** に対して、2・3 **ПАТЪ** ； アオ・1・単 **РѢХЪ**, **РЕКОХЪ** < $*rēk-s-$, $*rek-H_2-s-$ に対して、2・3 **РЕЧЕ** < $*rek-e-$ ； アオ・2・3・単 **ДАСТЪ**, **ИСТЪ** は、シグマ付加形である 単・1 **ДАХЪ**, **ИХЪ** (**ИСТЪ**) とは違って、シグマを取らないスラヴ祖語形 $*dōd-tъ$, $*ēd-tъ$ から作られたものである。

いわゆる加音 (augmentum) も、頭音 *H* (*H₁*, *H₂*, *H₃*) を持つ古い過去語幹における畳音に由来するものであり、印欧諸語の一部 (古典ギリシャ語、古代インド語、アルメニア語、プリュギア語⁽¹⁶⁾) では、この加音の助けによって、過去時制 (未完了過去 *imperfectum*、アオリスト *aoristu*

s、過去完了 plusquamperfectum、また動詞によっては完了 perfectum も) が形成された。加音はスラヴ祖語においても存在し、少なくとも、推定される、助動詞 *es- (ЕС-МЪ) の非補充法 (suppletion) 的過去活用に存在したと考えられ、この活用の助けによって、古代ブルガリア語の未完了過去時制 (インパーフェクト минало несвършено време) 形が作られたのである。古スラヴ学者達は、通常、古代ブルガリア語動詞の未完了過去語尾、例えば、1・単 **НЕС-Ъ-АХЪ**, **БЪР-А-АХЪ**, **ПЪС-А-АХЪ**, **ХОЖА-А-АХЪ** に、助動詞の古い加音過去形があると見ている — 未完・1・単 *e-es- > *ēs-o-m (cf. 古イ 未完・1・単 āsam < *ēsom) から、過去指標 h の一般化と *ēh > *iāh- の変化を介して (§. 2 参照)、母音間のヨット (j) の消失以後に **-АХЪ** が得られたというのである。尤も、スラヴ祖語に加音が存在したという推定が絶対不可欠のものだというわけではない。何故ならば、過去語幹 *e-es- > *ēs- は、畳音過去語幹 *Hie-Hies- > *e-es- > *ēs- から直接得られるからである。ギリシャ語の加音未完了過去 *ēs- が畳音完了幹の継承であることは、例えば、2・単 $\eta\sigma\theta\alpha$ < *Hie-Hies-tha の形が証明しており、また、この $-\theta\alpha$ は古い完了語尾であり、古代インド語 2 人称単数完了 *vēt-tha* (=ギ $o\tilde{i}\sigma\theta\alpha$, ゴ *waist* < *uoid-th-) 「知った」及び *da-dātha* < *de-deH₃-tha の語尾と同じものである。

古代ブルガリア語の未完了過去 (インパーフェクト) 語尾 — 1・単 **-АХЪ** < *ēs-om, 2 **-АШЕ** < *ēs-es, 3 **-АШЕ** < *ēs-et, 1・複 **-АХОМЪ** < *ēs-omos, 2 **-АСТЕ** < *ēs-te, 3 **-АХЖ** < *ēs-ont — は、助動詞の過去語幹 *Hie-Hies- > *e-es- > *ēs- から引き出された可能性があり、またそこから非完了 (infectum) の e 活用の形が形成されたのである。Cf. 単純アオ・1・単 (起源的には、古い未完了過去) **ПАДЪ** < *pōd-o-m, 2 **ПАДЕ** < *pōd-e-s, 3 **ПАДЕ** < *pōd-e-t, 1・複 **ПАДОМЪ** < *pōd-o-mos, 2 **ПАДЕТЕ** < *pōd-e-te, 3 **ПАДЖ** < *pōd-o-nt。スラヴ祖語のイン

パーフェクトは、元来、回説合成的なものであって、 $*nek'-\bar{e}-$ ($\text{HEC-T-A X}^{\text{b}}$ 参照) あるいは $*bh\bar{e}r-e-H_2-$ ($\text{BEP-A-AX}^{\text{b}}$ 参照) 型の過去不定形 (純粹過去語幹) から構成され、これに非完了活用助動詞過去形が合成されたものである。ラテン語の、 $leg-\bar{e}-ba-m$ 「私は集めた」 型のインパーフェクトの形成については、§. 13 参照。

青年文法学派のモデルによれば、完・1・単 $\eta\chi\alpha$ (ドーリス $\acute{\alpha}\chi\alpha$) 「導いた」 (cf. 現・1・単 $\acute{\alpha}\gamma\omega$ 「導く」) の形は、語頭母音の延長、すなわち時量的加音 (augmentum temporale) によって形成されている。ラリングル・モデルの観点からすれば、 $\eta\chi\alpha$ は起源的には疊音形である ($*H_2e-H_2eg'- > *a-ag'- > *\bar{a}g'-$; g の帯気音化については、§. 13 参照)。同様にして、アオ・1・単 $\acute{\omega}\phi\theta\eta\nu$ 「見た」は、疊音過去語幹 $*H_3e-H_3ek^w- > *o-ok^w- > *\bar{o}k^w-$ から引き出すべきである。過去語幹におけるいわゆる時量的加音 (augmentum temporale) が音節的加音 (augmentum syllabicum) から得られた、すなわち「かつてある時」の意味を持つ副詞的前置小詞の e から得られたものだという定説は、非常に大きな矛盾にぶつかることになる。一面では、ヴェーダの (古代インドの) 頌歌やホメロスの言語において、音節的加音 (augmentum syllabicum) は義務的な現象ではなく、未完・3・単 $\acute{a}-bhar-a-t = \acute{\epsilon}-\phi\epsilon\rho-\epsilon <$ 語根 $*bher-$ 「運ぶ」 の加音形と並行して、 $bh\acute{a}rat$, $\phi\acute{\epsilon}\rho\epsilon$ の非加音形が見られるのであり、このことからすれば、音節的加音は比較的新しい特徴だという結論が為されるべきである。しかし、そうだとすれば、ギリシャ語の $\epsilon + \epsilon$ 及び $\epsilon + o$ の縮合 (contraction) に際しては、 η , ω ではなく、 $\epsilon\iota$, $o\upsilon$ となって然るべきであろう — アオ・1・単 $*\acute{\epsilon}-o\phi-\theta\eta-\nu$, 未完・3・復 $*\acute{\epsilon}-\epsilon\sigma-\alpha\nu$ は、 $\acute{\omega}\phi\theta\eta\nu$ 「私は見た」 や $\eta\sigma\alpha\nu$ 「彼らはあった、いた」ではなく、 $*o\bar{o}\phi\theta\eta\nu$ や $*\epsilon\bar{\iota}\sigma\alpha\nu$ の形を与えたはずである。推定される $\epsilon + \epsilon > \eta$ や $\epsilon + o > \omega$ の縮合は、ある非常に古い古代ギリシャ語前の時期にだけ発生し得たものであろう。しかし、このことは、時量的加音が

音節的加音よりも古い現象であることを表している。ただし、過去語幹における本来の縮合は、 $e + a > \bar{a}$ (アッティカ η), $e + e > \bar{e}$ (η), $e + o > \bar{o}$ (ω) ではなく、 $e + e > \bar{e}$, $a + a > \bar{a}$, $o + o > \bar{o}$ だったのである。時量的加音は音節的加音から出たものではなく、その逆に、音節的加音が時量的加音から出たのである。

ラテン語文法では、現・1・単 *edō*「食べる」と 完・1・単 *edī*「食べた」の相関関係、*odium*「憎しみ」と 完・1・単 *odī*の相関関係は、母音の量的交替として記述されるのに対して、ギリシャ語文法では、現・3・単 $\acute{\epsilon}\sigma\gamma\acute{\iota}\nu$ 「それ(彼)がある、いる」と 未完・2・単 $\hat{\eta}\sigma\theta\alpha$ 「君があった、いた」の相関関係、未・1・単 $\acute{o}\phi\theta\acute{\eta}\sigma\omicron\mu\alpha\iota$ 「見るだろう」と アオ・1・単 $\acute{\omega}\phi\theta\eta\nu$ 「見た」の相関関係は、非加音動詞語幹と加音動詞語幹(時量的加音を持つ)の差異として記述される。しかし、何れの場合も、古い非疊音(非過去)動詞幹と古い疊音(過去)動詞幹の相関関係である — 現・1・単 *edō*「食べた」 $< *H_1ed-$, 完・1・単 *edī*「食べた」 $< *H_1e-H_1ed-$; *odium*「憎しみ」 $< *H_3ed-$, 完・1・単 *odī*「憎んでいる」 $< *H_3e-H_3ed-$; 現・3・単 $\acute{\epsilon}\sigma\gamma\acute{\iota}\nu$ 「ある、いる」 $< *H_1es-$, 未完・2・単 $\hat{\eta}\sigma\theta\alpha$ 「あった、いた」 $< *H_1e-H_1es-$; 未・1・単 $\acute{o}\phi-\theta\acute{\eta}-\sigma\omicron\mu\alpha\iota$ 「見るだろう」 $< *H_3ek^-$ (cf. $\text{OKO} < *H_3ok^-$), アオ・1・単 $\acute{\omega}\phi-\theta\eta\nu$ 「見られた」 $< *H_3e-H_3ek^-$ 。現・1・単 $\text{edmi} < *e\text{-ed-mi} < *e\text{-ed-mi} < *H_1e-H_1ed-$ の原型は、ギ 未完・2・単 $\hat{\eta}\sigma\theta\alpha$ 「あった、いた」 $< *e\text{-s-tha} < *e\text{-es-tha} < *H_1e-H_1es-tha$ の原型も加音的であるのと同じ意味で、加音的なのである。

$H(H_1, H_2, H_3)$ の脱落后、 $*e\text{-ed-} > *e\bar{d}-$; $*e\text{-es-} > *e\bar{s}-$ 型の過去形は、印欧諸語の一部ではもはや疊音とは感じられなくなってしまったが、その特徴を表示する加音 e は古い非疊音過去形にも引き移されるに至った。加音は常に接頭辞と語根の間に措かれるという状況が、古い疊音動詞幹から加音が作り出されたということを間接的に示唆している — 現・

1・単 $\varepsilon \lambda \sigma - \phi \acute{\epsilon} \rho \omega$ 「運び込む」, 未完・1・単 $\varepsilon \lambda \sigma - \acute{\epsilon} - \phi \varepsilon \rho \omicron$
 ヲ 「運び込んでいた」。初め疊音語幹中の語頭音節、つまりそこから作られ
 る加音は、独自のアクセントを持った個別の語として発音されたのである。
 このことについては、語境界を示す符号 (:) が証明している、*faciō* 「為
 す、作る」 の疊音形 $*dhe-dhH_1-$ $>$ *fe-fa-k-ed* = FHE : FHA-KE
 D¹⁷ のような古いラテン語の書き方。このようにして、古代インド語や古代
 ギリシャ語の加音上のアクセントも説明がつく — cf. 未完・3・単 *a-*
bharat , これと同系の $\acute{\epsilon} - \phi \varepsilon \rho \varepsilon$ 「(そのものは) 運んでいた」。

§.13 古代ブルガリア語における過去語幹間の相関関係

古代ブルガリア語には、始原的な過去語幹4型の痕跡が残っている：

1. 畳音を含む過去語幹（不 **ѣСТИ** < *ēd-tēi < *e-ed- < *H₁e-H₁ed-； 畳音語幹は現在形にも一般化している — ラ 現・1・単 **edō**「食べる」 に対して、 1・単 **ѣмь** < スラ祖 *ēd-mi)。
2. 全一的実現、完遂、完成、停止終結行為の指標として再解釈を受けた一括多数性指標 H₂ を含む過去語幹 (cf. 不 **БЪРАТИ**, アオ・1・単 **БЪРАХЪ** < *bh₁r-e-H₂； アオ・1・単 **НЕС-О-ХЪ** < *nek'-H₂-s- [H₂ > **o** への変化を伴う]； アオ・1・単 **ПАСЪ** < *pen-H₂-s-, 不 **ПАТИ** < *pēn-tēi < *pen-H₂- [鋭音調 acute と H₂ 脱落以後の二重母音の延長を伴う])。
3. 語幹母音 e の延長を介して作られる過去語幹（不 **МЪН-Ѣ-ТИ** < *m₁n-ē-； 未完・1・単 **НЕС-Ѣ-АХЪ** < *nek'-ē-）
4. 語根母音の延長を持つ過去語幹（現・1・単 **НЕСЪ**, 2 **НЕСЕШИ** < *nek'- に対して、 アオ・1・単 **НѢСЪ** < *nēk'- ）。この型も、非常に古いものであるが、第一次的なものではなく、H(H₁, H₂, H₃) の消失後、第1型、第2型の過去語幹に生じた、現在語幹 — 短母音：過去語幹 — 長母音、という交替の類推（アナロジー）によって現れたのである。

同一語根から二方法、また時には、三方法による過去語幹形成が可能である。たとえば、*bhu- 語根から、現在語幹の e 母音の延長によって形成される過去語幹 *bhu-ē- > スラ祖 *bū-ē-s- > *bē-h- (未完・1・単 **БѢХЪ**)、また、一括多数性指標 H₂ を補って形成される過去語幹 *bhu-H₂- > スラ祖 *bū- (不 **БЪТИ**, アオ・3・単 **БЪСТЬ**, ギ 非テーマ・アオ・1・単 **ѣ-φ ū-ν**「生じた、起こった」) が立証される； cf. イタリア祖語のインパーフェクト活用に関与している *b

hu-e-H₂- > イタリア祖語 *bu-ā- > *bā- の語幹も（次例参照、ラ
 現・1・単 negō, 不 negāre に対して、未完・1・単 negā-ba-m
 「拒否した」, 2 negā-bā-s ; 現・1・単 tegō, 2 tegis < *teg-e-
 s, 不 teg-e-re に対して、未完・1・単 teg-ē-bam 「被った」, 2 teg-
 ē-bās - e の延長幹母音をもつ純粹語幹 teg-ē- は、イタリア祖語のイン
 パーフェクト形成に際して、不定形の役割を演じた）。

助動詞の語根 *es- < *H₁es-からの疊音過去語幹 *H₁e-H₁es-> *e-e
 s- > *ēs- を形成できる、cf. 純粹過去語幹 *nek'-ē- と助動詞 *H₁e
 s-の疊音過去語幹 *H₁e-H₁es-> *ēs- から得られる 未完・1・単 **HEC-
 T-AX-Ъ** の -AX- 接尾辞 (s > h の規則的变化を行なうシグマ・ア
 オリスト形の類推から s と h の交替を伴う) ; cf. 更に、ギ 未完・2・
 単 **ησθα** < *H₁e-H₁es-tha 。助動詞の現在幹 *H₁es-e- > *es-e-
 から、一括多数性指標 H₂ を補って、過去語幹 *H₁es-e-H₂- > *es-
 ā- も作ることができる (cf. ラ 未完・1・単 eram, 2 erās- これは
 母音間の s を r に変えてしまう r 音化現象 rhotacism を伴う)。

語根 *nek'- からは、一括多数性指標 H₂ を補った過去語幹 (アオ・
 1・単 **HEC-O-XЪ** < *nek'-H₂-s 参照) 及び語根母音 e の延長によ
 る過去語幹 (アオ・1・単 **HTCЪ** < *nēk'-s- 参照) を形成できる。
 一方、未完・1・単 **HEC-T-AXЪ** における過去語幹 **HEC-T-** は、語幹
 母音 e の延長によって、非完了 (infectum) 幹 *nek'-e- より出ている
 (現・1・単 **HEC-Ж**, 2 **HEC-E-ШH**, アオ・3・単 **HEC-E** <
 *nek'-e-t 参照) ; cf. ラ 未完・1・単 teg-ē-bam 「覆った」の過去
 語幹は、現・2・単 tegis < *teg-e-s に立証される非完了幹 *teg-e-
 より作ったものである。

語根 *H₁em-「取る」からは、一括多数性指標 H₂ を補った過去語
 幹が形成される - アオ・1・単 **ACTЪ** < *ēm-s- < *H₁em-H₂-s-
 (H₂の脱落后、二重母音 em の延長) ; 一括多数性指標 H₂ が非完
 了幹 *H₁b m-e- (語根母音の低減階梯を伴う) に付加されると、別の過去

語幹が形成される — 不 **ИМ-А-ТИ**, **ВЪЗ-ЬМ-А-ТИ** の過去語幹 **ИМ-А-** は、 $*H_1 \text{ь m-e-H}_2 >$ スラ祖 $*\text{ь m-ā-}$ の継承である。非完了幹 $*H_1 \text{ь m-e-}$ からは、語幹母音 *e* の延長によって過去語幹 $*H_1 \text{ь m-ē-}$ $>$ スラ祖 $*\text{ь m-ē-}$ が作られるが、これは **ИМ-Ѣ-ТИ** に立証される；ラ 完・1・単 *ēmi* 「買った、獲得した」は、畳音過去語幹 $*H_1 \text{e-H}_1 \text{em-}$ $>$ $*\text{e-em-}$ $>$ $*\text{ēm-}$ から出たものである。スラヴ祖語においては、過去語幹 $*H_1 \text{ь m-e-H}_2 >$ $*\text{ь m-ā-}$ 「取った」が、「持つ」の意の現在形として再解釈を受けたのである — 現・1・単 **ИМАМЪ**, 2 **ИМАШ** **И** 参照。この動詞の過去形は、補充法 (suppletion) 語幹 $*\text{ь m-ē-}$ (不 **ИМ-Ѣ-ТИ** 参照) より作ったものである。始原的な過去語幹 **ИМ-А-** は、同時に、派生動詞 現・1・単 **ЕМАЖ**, 2 **ЕМАЕШИ** の不定詞・アオリスト幹でもある。

語根 $*H_1 \text{i-}$ 「行く」からは、一括多数性指標 H_2 を補って、過去語幹 $*H_1 \text{i-H}_2 >$ $*\text{i-}$ (不 **И-ТИ** 参照) が形成される。この語根 $*H_1 \text{i-}$ は、すでに印欧祖語において *dh* による拡張を受けている (§. 14 参照)。この派性語幹 $*H_1 \text{i-dh-}$ から、一つは、能動過去分詞 **ШЬДЪ** が作られたが、この **Ш** は頭音 H_1 の継承である。**ИТИ** の能動過去分詞 **ШЬДЪ** を動詞 **ХОДИТИ** の語根 $*\text{hod-}$ から作った補充 (suppletion) 形であるとする定説は正しくない — スラヴ祖語の語根 $*\text{hod-}$ は、語根母音の低減階梯による $*\text{hьd-} >$ **ШЬДЪ** の様な変種は持ち得ない；語根母音 *e* 及び *o* の低減階梯は、鳴子音の前以外では現れ得ないのである — 例、現・1・単 **БЕР-Ж**, 単・主 **СЪ-БОР-Ъ**, 不 **БЪР-АТИ**；**О-ПОН-А** 「幕、帳」, 現・1・単 **ПЪН-Ж**。現・1・単 **ВЕД-Ж**, 2 **ВЕД-Е-ШИ**；**ВОЖА-Ж**, **ВОД-И-ШИ**；**МОГЖ**, **МОЖЕШИ**；**КОСНЖ**, **КОСНЕШИ** のような動詞の能動過去分詞においては、 $*\text{ВЪД-}$, $*\text{МЪГ-}$, $*\text{ЧЪС-}$ 型の語根は、絶対に許容され得ない。更に、**ХОЖАЖ**, **ХОДИШИ**, **ХОДИТИ** の能動過去分詞は **ХОЖДЪ** である。拡張語根 $*H_1 \text{i-dh-}$ からは、更にもう一つ、一括多数性指標 H_2

を補って過去語幹、アオ・1・単 **HA-O-Xʔ** < スラ祖 **bdohʔ* < **H₁i-dh-H₂s-* が作られた。古代ブルガリア語では、**H-TH** の不定詞語幹の母音 **H** (スラ祖 **i* < **H₁i-H₂*) は、動詞の全活用に一般化している

— チ 不 *jīti* (上ソルブ *hić*) < スラ祖 **i-tēi* < **H₁i-H₂* に対する チ 現・1・単 *jdu* = 上ソルブ *du* < スラ祖 **bd-* < **H₁i-dh-* の形は、現・1・単 **HA-ʔ**, **BʔH-HA-ʔ**, アオ・1・単 **HA-O-Xʔ**, **BʔH-HA-O-Xʔ** の形よりも古い。非完了語幹 **H₁i-e-* を、先ず *H₂* で拡張し、その後 *dh* あるいは *s* で以て拡張すると、**H₁i-eH₂-dh-* > スラ祖 **iād-* (cf. 現・1・単 **HA-ʔ**, 2 **HA-E-ʔH**「(乗って)行く」) あるいは **H₁i-eH₂s-* > スラ祖 **iāh-* (cf. 不 **HA-TH**) なる語幹が得られることになるが、これらは補充法活用を構成するに至っている。豊音過去語幹 **H₁e-H₁e_i-* は、ギ 未完・1・単 *ʔa*「行った」(**H₁e-H₁e_i-* > **e-e_i-* > *ʔ*) に立証されるが、これは、一人称単数語尾 *-a* が示すように、古い完了形(パーフェクト)に由来するものである([完了語尾を持つ] 未完・2・単 *ʔε ι σ θ α* も参照)。

豊語法(豊音、語根重複)は、過去語幹の形成手段としては、すでにスラヴ祖語期が始まる以前に使われなくなった。例えば、**ēd-* (cf. **HA-Mʔ** < **ēd-mi* < **H₁e-H₁ed-*) のような、起源的には豊語法であるいくつかの始原的な語幹が残っているが、それは、これらの語幹における *H* (*H₁*, *H₂*, *H₃*) の脱落后は、もはや本来の語根重複は存在しなかったからにすぎない。スラヴ祖語においては、加音も発達していない。豊音過去語幹の消滅の故に、例えば、ギ 完・1・単 *λ ε λ υ κ α*「解いた、解き放った」あるいは 古ラ 完・3・単 **fe-fa-k-ed*「為した、作った」(§. 12 参照)

のような、豊音語幹と *H₂* 指標を結合したような、複合派生的な過去形の痕跡も残っていない — ラ 完・1・単 *fēcī*「私は為した、作った」

や *iēcī*「私は投げた」(現在語幹、例えば、現・1・単 *faciō*, *iaciō* の接尾辞 *-k-* は完了形のアナロジー) や ギ 完・1・単 *λ ε λ υ κ α*「解いた、解き放った」に見られる接尾辞 *-k-* は、アオ・1・

単 **NEC-O-XЪ** < *nek'-H₂-s- や 古イ アオ・1・単 a-bodh-i-ṣam 「目覚めた、気付いた」 < *bhoudh-H₂-s- に見られる、始原的な一括多数性指標 H₂ に由来するものである。ラ 完・1・単 fēcī 「為した、作った」(同語幹 *dheH₁-H₂- は、ギ アオ・1・単 ε-θ η-κ-α 「置いた、据えた」にも見える) や iēcī 「投げた」(同語幹 *ieH₁-H₂- は、ギ アオ・1・単 η-κ-α 「送った、投げた」にも見える) は、ギ アオ・1・単 ε δ ω κ α 「与えた」と共に、それぞれ *dheH₁-H₂-, *ieH₁-H₂- 及び *deH₃-H₂- より得られたもので、この H₂ が H(H₁, H₂, H₃) の先行を受けて、後舌子音に変じたのである。完・1・単 λ é λ υ κ α の κ は、H(H₁, H₂, H₃) が H₂ の後続を受けて発生したことを間接的に示しているのが、完・1・単 η χ α (ドーリス ᾱ χ α) 「導いた」 < *H₂e-H₂eg'-H₂- (現・1・単 ᾱ γ ω < *H₂eg'-) や τ é-τ ρ ο φ-α 「向きを変えた」 < *te-trop-H₂- (現・1・単 τ ρ é π ω 「向きを変える」 < *trep-) のような形にみられる π, β > φ 及び κ, γ > χ の変化である。

かつて同一類であった、接尾辞 H₂ のある過去語幹(アオ・1・単 **БѸХЪ** < *bhu-H₂-s-, **ПАСЪ** < *pen-H₂-s-, **БЪРАХЪ** < *bh₂r-e-H₂-s-, **НЕСОХЪ** < *nek'-H₂-s-) は、語幹が母音または子音で終わる語根(非テーマ)過去形と接尾辞 -ā- を持つテーマ(幹母音)過去形に分解したのである。子音で終わる非テーマ(無幹母音)過去語幹には、二種類ものが現れている：

I. アオリスト形に繋ぎ母音 Ѧ を欠き、過去語幹が鳴子音 (ρ, λ, μ, η) で終わり、かつ鋭音調 (acute) の種類 — cf. アオ・1・単 **ПАСЪ** < *pēn-s- < *pen-H₂-s- (不 **ПАТИ** の語根母音上にアクセントを持つ)。これらの動詞のあるものは、その現在語幹に接尾辞 -e- を持つ — 例、現・1・単 **ПЪНЖ**, 2 **ПЪН-Е-ШИ**, 不 **ПАТИ**, アオ・1・単 **ПАСЪ** (cf. ρ ρ а с π я т ь) ; **МЪРЖ**, **МЪР-Е-ШИ**, **МРЪТИ** (cf. ρ у м е ρ ё т ь), **МРЪХЪ** ; **ЖЪНЖ**, **ЖЪН-Е-ШИ**,

ЖАТИ (cf. 口 ж а т ь), **ЖАСЪ**、また、あるものは、現在語幹に接尾辞 **-ie-** を持つ — 例、現・1・単 **МЕЛЖ**, 2 **МЕЛ-Е-ШИ**, 不 **МЛѢТИ** (cf. セ・ク м л ё т и), アオ・1・単 **МЛѢХЪ** ; **БОРЖ**, **БОР-Е-ШИ**, **БРАТИ** (cf. 口 б о р ѳ т ь с я), **БРАХЪ** 。

これらの動詞類は単純アオリスト (пр о с т а о р и с т) (古いインパーフェクト過去) を持たない。

II. 過去語幹が鳴子音でない子音で終わり、そのアオリスト幹に繋ぎ母音 **o** (起源的には、古い一括多数性指標 H_2) を持ち、不定詞語尾 **-tēi** にアクセントを持つ種類。例、現・1・単 **НЕСЖ**, 2 **НЕС-Е-ШИ**, 不 **НЕСТИ** (cf. 口 н е с т ѝ), アオ・1・単 **НЕСОХЪ**; **МОГЖ**, **МОЖЕШИ**, **МОШТИ** (cf. 口 п о - м ѳ ч ь), **МОГОХЪ**; **ВЪЛѢЗЖ**, **ВЪЛѢЗЕШИ**, **ВЪЛѢСТИ** (cf. 口 л ё з т ь), **ВЪЛѢЗОХЪ**; **ЧЪТЖ**, **ЧЪТЕШИ**, **ЧИСТИ** (cf. 口 п р о ч ё с т ь), **ЧЪТОХЪ**; **ПАДЖ**, **ПАДЕШИ**, **ПАСТИ** (cf. 口 у - п а с т ь), **ПАДОХЪ** ⁽⁸⁾。これらの動詞類は、単純アオリスト (古いインパーフェクト過去) 形も持っている — 2・3・単 **НЕС-Е** < *nek'-e-s, *nek'-e-t, **МОЖЕ**, **ВЪЛѢЗЕ**, **ЧЪТЕ**, **ПАДЕ**, 3・複 **НЕСЖ** < *nek'-o-nt, **МОГЖ**, **ВЪЛѢЗЖ**, **ЧЪТЖ**, **ПАДЖ**。これらの動詞の一部は、語根母音の延長を伴う第Iシグマ・アオリスト形も持っている: 現・1・単 **НЕСЖ**, 2 **НЕС-Е-ШИ**, アオ・1・単 **НѢСЪ** < *nēk'-s-; **ОТВРѢЗЖ**, **ОТВРѢЗЕШИ**, **ОТВРѢСЪ** < *uērg'h-s-; **ВЕДЖ**, **ВЕДЕШИ**, **ВѢСЪ** < *uēdh-s-; **БОДЖ**, **БОДЕШИ**, **БАСЪ** < *bhōdh-s-; **РЕКЖ**, **РЕЧЕШИ**, **РѢХЪ** < *rēk-s-; **ГРЕБЖ**, **ГРЕБЕШИ**, **ГРѢСЪ** < *ghrēbh-s-。次のような動詞は、第IIアオリスト形以外のシグマ・アオリスト形を作ることはできない: 現・1・単 **ВЪЛѢЗЖ**, 2 **ВЪЛѢЗЕШИ**, 不 **ВЪЛѢСТИ**, アオ・1・単 **ВЪЛѢЗОХЪ**; (сѣ) **ПАСЖ**, (сѣ) **ПАСЕШИ**, (сѣ) **ПАСТИ**, (сѣ) **ПАСОХЪ**; **КРАДЖ**, **КРАДЕШИ**, **КРАСТИ**, **КРАДОХЪ**; **ПАДЖ**, **ПАДЕШИ**, **ПАСТИ**, **ПАДОХЪ**; **МОГЖ**, **МОЖЕШИ**, **МОШТИ**, **МОГОХЪ**; **ВРѢГЖ**,

ВРЪЖЕШИ, ВРЪШТИ, ВРЪГОХЪ; ЛАГЖ, ЛАЖЕШИ, ЛЕШТИ, ЛЕГ
ОХЪ; СААЖ, САДЕШИ, СЪСТИ, СЪДОХЪ; ОБРАШТЖ, ОБРАШТЕШ
И, ОБРЪСТИ, ОБРЪТОХЪ; ИАЖ, ИАЕШИ, ИТИ, ИДОХЪ; ИАЖ,
ИАЕШИ, ИХАТИ, ИДОХЪ。

接尾辞 -e- の現在幹を持ち、鳴子音でない子音で終わる非テーマ（無幹
母音）不定形を持つ動詞については、第Ⅱシグマ・アオリストが一般的であ
り、したがって、これらの動詞の一部にのみ固有の、語根母音延長を伴う第
Ⅰシグマ・アオリストと比べれば、より基本的な部類である。第Ⅱシグマ・
アオリストの語幹の方が起源的にもより古いものであり、 $*nek'-H_2-s-$ >

НЕС-О-ХЪ 型の、一括多数性指標 H_2 を伴う過去語幹は、より後に
類推（アナロジー）によって発生してくる $*nek'-s-$ > НТСЪ 型の、
語根母音延長を伴う過去語幹に先行するものである。この類推の出発点の一
つは、i, u に終わる、語根母音ゼロ階梯の両子音語根から作る過去形で
ある — 次例参照、ラ 現・1・単 ru-m-pō「破る、引き裂く」、
完・1・単 rūpī「破った」 < $*ru-H_2-p-$; スラ祖 現・1・単

$*bu-n-d-ō-m$ (БЖАЖ) < $*bhu-n-dh-$, アオ・1・単 $*bū-d-h-$ (БЪ
ХЪ) < $*bhu-H_2-dh-s-$; ラ 現・1・単 linguō「残す、去る」<

$*li-n-kʷ-$ (cf. ギ 現・1・単 $λείπω$ 「残す」< $*lei-kʷ-$), 完・
1・単 liquī「残した」< $*li-H_2-kʷ-$; スラ祖 現・1・単 $*či-t-ō-m$
(ЧЪТЖ) < $*kʷi-t-$ 「読む、数える、敬う」(cf. 同語根であるが、-t-
による拡張のない次の語根 ЦТНА < $*kʷoi-n-$ 「価格、敬意」、また、
不定詞語幹 $*kʷoi-$ > КАЖ СА, КАЕШИ СА), アオ・1・単 $*čits-$
om (ЧНСЪ) < $*kʷi-H_2-t-s-$ 。

現・1・単 ЖИВЖ, 2 ЖИВЕШИ < $*gʷei-u-$ (§. 2, 第7項参
照) に対する 不 ЖИТИ は、 $*gʷi-$ < $*gʷi-H_2-$ に由来する。

H_2 音の痕跡は、ラ 完・1・単 vīxī「生きた」 < $*gʷi-H_2-s-$ (i-
 H_2-s > iks への変化を伴う) に見られる（これに対して、ЖИВЖ
< $*gʷei-u-$ と同系の 現・1・単 vīvō)。 Cf. ラ 現・1・単

struō に対して、完・1・単 strūxī「積み重ねた、建てた」< *stru-H₂-s-。青年文法学派のモデルでは、完・1・単 vīxī, strūxī は、古 fluvo > fluō, flūxī「流れる」、古 fivo > figō, fixī「穿つ、刺し通す」といった、その原語根 *bhleugʷ-, *dheigʷ- に後舌子音を含む動詞の類推によって説明されている。ラテン語における -iH₂s > -iks の変化については、次例参照、古イ dātrī「女贈与者」< *doH₃-tr-i-H₂（女性の接尾辞としての -i- については、§. 27 参照）、ギリ δότεια < *δοτεια < *dH₃-ter-i-H₂ に対して、単数主格用の語尾 s を補足的に付加した形、ラ dātrix < *doH₃-tr-i-H₂-s。

第Ⅱシグマ・アオリストは、全く新しい過去形で、恐らくは9世紀に現れて、次第に非シグマ・アオリスト（単純アオリスト）形や語根母音延長を伴う第Ⅰシグマ・アオリスト形に取って代わった、とする説が一般的である。しかし、もしそうならば、現在形に幹母音 e を持つ動詞で、第Ⅰシグマ・アオリスト形を持たず、この説からして、元々第Ⅱシグマ・アオリストのない動詞類、例えば、現・1・単 **ПАДЖ**, 2 **ПАДЕШИ**; **МОГЖ**, **МОЖЕШИ**; **ЛАГЖ**, **ЛАЖЕШИ** のような動詞は、スラヴ祖語の時代には一般にシグマ・アオリスト形を持たなかったということになるが、それは不自然である。スラヴ祖語文法の観点からすれば、アオリスト1人称単数形である **НЕСОХЪ** < *nek'-H₂-s- と **НѢСЪ** < *nĕk'-s- の相関関係は年代順的であり、前者のタイプは後者のタイプより古く、後者はいくつかの動詞にだけ後で広がったものである。古代ブルガリア語文法の観点からいえば、**НЕСОХЪ** と **НѢСЪ** の相関関係は年代的なもの（伝統的分類では、**НѢСЪ** の方が古く、**НЕСОХЪ** の方が新しいタイプ）ではなく、古代ブルガリア文章語に対する異なる方言的影響によるものである。**НѢСЪ** 型は、ブルガリア西部地方で書かれたグラゴール文献に特徴的であり（この点で最も首尾一貫しているのが、マリア写本 Codex Marianus とシナイ詩編 Psarterium Sinaiticum）、一方、**НЕСОХЪ** 型は古代ブルガリア語の東部の特徴を反映したキリール文献（スプラシル写本 Codex Suprasliensis と

サヴァの本 *Саввина книга*) に特徴的なのである¹⁸。

語根母音延長を伴う過去語幹 (1・単 *nēk'-s- > **НѢСѢ**, 3・複 *nēk'-s-nt > **НѢСА**) の出現以後、かつまた非完了活用 (2・単 *nek'-e-s > **НЕСЕ**, 3・単 *nek'-e-t > **НЕСЕ**) が意味的にアオリストに等しい過去形へと再解釈を受けて以後 (すなわち、いわゆる単純アオリスト、換言すれば非シグマ・アオリストの出現以後 — §.19 参照)、現在語幹に接尾辞 -e- を持つスラヴ祖語の全ての動詞において、また現在語幹に接尾辞 -ne- を持つ動詞 (例えば、現・1・単 **ДВИГНѢ**, 2 **ДВИГНЕШИ**) の一部においてアオリスト形が二つずつできあがり、また非完了語幹の語根母音に正常階梯すなわち e 階梯を持つ動詞においては (例えば、現・1・単 **НЕСѢ**, 2 **НЕСЕШИ**; **ВЕДѢ**, **ВЕДЕШИ**; **ЖЕГѢ**, **ЖЕЖЕШИ**; **РЕКѢ**, **РЕЧЕШИ**; **ТЕКѢ**, **ТЕЧЕШИ**)、三つずつのアオリスト形が成立することになった — 1・単 *mogh-o-m > **МОГѢ**, 2 *mogh-e-s > **МОЖЕ**, 3 *mogh-e-t > **МОЖЕ**, 3・複 *mogh-o-nt > **МОГѢ**; 1・単 *mogh-H₂-s- > スラヴ祖 *mog-o-h-om (単純アオリストから借用した語尾 om を持つ) > **МОГОХѢ**, 2 *mogh-H₂-s-s, 3 *mogh-H₂-s-t, 3・複 *mogh-H₂-s-nt > **МОГОША**; 1・単 *nēk'-s-om (単純アオリストから借用した語尾 om を持つ) > **НѢСѢ**, 2 *nēk'-s-s, 3 *nēk'-s-t, 3・複 *nēk'-s-nt > **НѢСА**; 1・単 *nek'-o-m, 2 *nek'-e-s > **НЕСЕ**, 3 *nek'-e-t > **НЕСЕ**, 3・複 *nek'-o-nt; 1・単 *nek'-H₂-s-om > **НЕСОХѢ**, 2 *nek'-H₂-s-s, 3 *nek'-H₂-s-t, 3・複 *nek'-H₂-s-nt > **НЕСОША**。

スラヴ祖語方言において、この不必要な多様性は次のようにして次第に統一的な過去パラダイムへ変わっていった。単数2・3人称においては単純アオリスト形が定着した: *mogh-e-s > **МОЖЕ**, *mogh-e-t > **МОЖЕ**; *nek'-e-s > **НЕСЕ**, *nek'-e-t > **НЕСЕ**。開音節法則に従えば、2・単 *nēk'-s-s 及び 3・単 *nēk'-s-t, 2・単 *uēdh-s-s 及び 3・単 *uēdh-s-t からは、*nē 及び *uē のような実際には表面化しな

かった形が得られたかも知れない。また、第Ⅱシグマ・アオリストは、2人称単数形に $*nek'-H_2s-s > *neso$, $*uedh-H_2s-s > *uedo$ を、3人称単数形に $*nek'-H_2s-t > *neso$, $*uedh-H_2s-t > *uedo$ をもたらしたはずであるが、これらの形は単純アオリスト形の $*nek'-e-s$, $*nek'-e-t > \text{HECE}$ 及び $*uedh-e-s$, $*uedh-e-t > \text{BEAE}$ の形によって簡単に置き換え得るものであった。こうして、アオ・1・単 $\text{HTC}\text{Ъ}$, 2・3 HECE ; 1・単 $\text{MOГO}\text{X}\text{Ъ}$, 2・3 MOЖE ; 1・単 $\text{ПAДO}\text{X}\text{Ъ}$, 2・3 ПAДE 型の補充法 (suppletion) 的パラダイムが現れたのである。

1人称単数及び双数、複数においては、語根母音の延長階梯を持つ形が、可能な限り定着した — 1・単 $\text{HTC}\text{Ъ} < *n\acute{e}k'-s-om$ 及び $\text{P}\text{E}\text{X}\text{Ъ} < *r\acute{e}k'-s-om$ が、1・単 $*nek'-o-m$ 及び $*rek'-o-m$ に取って代わり、3・複 $\text{HTCA} < *n\acute{e}k'-s-nt$ 及び $\text{P}\text{E}\text{WA} < *r\acute{e}k'-s-nt$ が、3・複 $*nek'-o-nt$ 及び $*rek'-o-nt$ を駆逐した。

上述の過程は、スラヴ祖語諸方言に均等に及んだものであり、古代ブルガリア西部方言も古代ブルガリア東部方言も、この祖語方言から発生してきたのである。根本的な違いは次の点にある。現・1・単 ПAДЖ , 2 ПAДEШИ ; MOГЖ , MOЖEШИ 型の動詞 (現・1・単 HECЖ , 2 HECEШИ ; BEAЖ , BEAEШИ 型の動詞とは違って、アオリスト形に語根母音の延長がない) の場合、古代ブルガリア西部方言の基になったスラヴ祖語では、単純アオリスト形が一般化したのであり (1・単 $\text{ПAД}\text{Ъ}$, 3・複 ПAДЖ ; 1・単 $\text{MOГ}\text{Ъ}$, 3・複 MOГЖ)、古代ブルガリア東部方言の基になったスラヴ祖語方言では、第Ⅱシグマ・アオリスト形が一般化したのである (1・単 $\text{ПAДO}\text{X}\text{Ъ}$, 3・複 $\text{ПAДO}\text{WA}$; 1・単 $\text{MOГO}\text{X}\text{Ъ}$, 3・複 $\text{MOГO}\text{WA}$)。しかし、古代ブルガリア東部方言では、すでに文献出現以前の時期に、第Ⅱシグマ・アオリスト形 (接尾辞 $-\text{OX}-$ の形) が、かなりの程度で語根母音延長を伴う第Ⅰシグマ・アオリスト形に取って代わったのである — スプラシル写本やサヴァの本では、1・単 $\text{HTC}\text{Ъ}$, 3・複 HTCA に対して、 $\text{HECO}\text{X}\text{Ъ}$, HECOWA による規則的な代替が見られる。現・1・単

РЕКЖ, 2 **РЕЧЕШН** の動詞の、語根母音延長を持った第Ⅰシグマ・アオリスト形 1・単 **РѢХЪ**, 3・複 **РѢША** は、スプラシル写本にもサヴァの本にも特徴的であるが、これは古代ブルガリア東部方言のアオリスト活用のもっと古い状態の痕跡である。

古代ブルガリア東部方言のアオリスト活用が古代ブルガリア西部方言のアオリスト活用に比して新しいというのは、第Ⅱシグマ・アオリスト形を含んでいるからではなくて、より統一性が取れているからである（マリア写本及びシナイ詩編での二種類の異なる過去形 — 単純アオ 1・単 **ПААЪ**, 3・複 **ПААЖ** と 第Ⅰシグマ・アオ 1・単 **НѢСЪ**, 3・複 **НѢСА** — に対して、スプラシル写本及びサヴァの本では、第Ⅱシグマ・アオリスト一種類の形 — 1・単 **ПААОХЪ**, 3・複 **ПААОША**; 1・単 **НЕСОХЪ**, 3・複 **НЕСОША** だけが対応している）。第Ⅱシグマ・アオリストは、10世紀の古代ブルガリア西部方言の特徴を最も完全に反映したマリア写本やシナイ詩編には見られないから、この方がより新しい言語現象だとする主張には根拠がない。古代ブルガリア語西部方言の原型においては、すでに文献出現前の段階で、第Ⅱシグマ・アオリストは限られたものであったかあるいは完全に排除されていたのである。その後、11世紀以後になってようやく、古代ブルガリア西部方言のアオリスト活用の完全統一の過程で、始原的に第Ⅱシグマ・アオリストを継承してきた古代ブルガリア東部方言の影響下に、あらためて第Ⅱシグマ・アオリストが再興復活したのである。

§.14 始原始的な動詞非完了 (Infectum) 幹 と完了 (Perfectum) 幹

古代ブルガリア語過去時制前史から明らかになることは、スラヴ祖語の多様な過去動詞幹及び非過去動詞幹も、ほとんど全て、二つの第一次動詞類から引き出せることである：

1. 動詞非完了幹でテーマ (幹) 母音 *e* を持つ、次のようなタイプのもの — 現・3・単 **НЕС-Е-ТЬ**, **БЕР-Е-ТЬ**, ラ 現・2・単 *legis* < **leg-e-s* 「集める」, ギ 現・2・複 *φέρε-τε* 「運ぶ」。

2. 動詞完了幹で、大多数の場合は畳音 (reduplication) を伴うもの (ギ 完・1・単 *γέγραφα* 「書いた」 タイプのもの)、あるいは非畳音タイプのもの (ギ 完・1・単 *οἶδα* 「知っている」 < **ued-Hæ*) で、これはすでにスラヴ祖語の時期に消失したが、古代ブルガリア語の動詞活用全体にしっかりと痕跡を止めている (始原始的な完了活用と非テーマ動詞間の関係については、§. 18 参照；また、現・3・複 **ДДААТЬ** < **dōd-nt* < **deH₃-dH₃-nt* の畳音も参照)。

可変性を持たない (複雑化しない) 非完了幹からは、現在時制や単純アオリストが発達した (cf. 現・3・単 **НЕС-Е-ТЬ** < **nek'-e-t-i*, 単純アオ 3・単 **НЕСЕ** < **nek'-e-t*)。第一次的な非完了幹 *e* 語幹は、能動的で持続的な、終止していない行為を表したのであり、それは原則的には他動詞、つまり主体以外に、行為の及ぶべき直接的客体も持つことを前提とするものであった。第一次的な非他動詞で、接尾辞 *-e-* を持つもの、例えば、単純アオ 2・3・単 **-ЛЕЖЕ** (現在幹については、以下を参照), 不 **ЛЕШТИ** ; 現・1・単 **ТЕКЖ** 2 **ТЕЧЕШИ**, 不 **ТЕШТИ** 「走る、流れる」 ; 現・1・単 **МЪРЖ** 2 **МЪРЕШИ** 不 **МРЪТИ** < **mē r-* < **mer-H₂* (§. 12 参照) のような動詞は比較的少数である。それらの大多数は、例えば、現・1・単 **ВЪ-ЛЪЗЖ**, 2 **ВЪ-ЛЪЗЕШИ** 不

ВЪ-ЛѢСТИ ; 1・単 **ПАДЖ** 2 **ПАДЕШИ** 不 **ПАСТИ** ; 単純アオ
 2・3・単 **СТАЕ**, 不 **СТѢСТИ** (現在幹については、以下を参照)
 のように、語根母音延長を含んでおり、これは完了幹の側からの影響を証するものである (§.18 参照)。現・1・単 **БОДЖ** 2 **БОДЕШИ**, 不 **БОСТИ** (刺す) < *bhodh- (ラ fodio 「掘る、刺す」 と同系) における語根母音の o 階梯については別の説明を行うべきである。そもそもこれの非完了幹動詞は、e 階梯の語根母音 (cf. リ bedû, bësti 「掘る」) を持っており、一方それに対応する反復相 (多回相 iterative) 動詞の表徴が o 階梯である (§.6 及び §.17 第 5 項 b 参照) — cf. リ b adaû, badýti 「刺す」 (リ bedû, bësti, と badaû, badýti 間の関係は、現・1・単 **НЕСЖ** と **НОШЖ** 間の関係と同様のもの)。スラヴ祖語においては、語根母音の o 階梯が非完了幹にも一般化するに及んで、第一次的な非完了幹動詞と反復相動詞間の違いが目立つようになったのである。

語根母音の e 階梯を持つ非完了幹 e 語幹は、語根母音に o 階梯を持つ名詞 o 語幹と極めて密接な関係を持っている (§.6 参照)。現・1・単 **НЕСЖ** 2 **НЕСЕШИ** に対して、**ВОДОНОСЪ** 「水運び人、水運び桶 (容器)」 < *nok'-o- が対応し、以下、**ВЕЗЖ**, **ВЕЗЕШИ** — **ВОЗЪ** 「(荷) 馬車、荷ぞり」 < *uog'h-o- ; **ТРАСЖ**, Г **ЎЪЭЄЖЭЄ**, **ТРАСЕШИ** — **ТРЖСЪ**, Г **ЎЪЭЄЖ·8** ; **ПЕРЖ**, **ПЕРЕШИ** — **СЪ-ПОРЪ** 「闘い」 ; **ЗАБЖ**, Г **ЎЪЭЄЖЭЄ**, **ЗАБЕШИ** 「櫛で、何か尖った歯形のもので梳く」, cf. 単純アオ 3・単 **ПРОЗАБЕ** 「突き刺した、(種子が) 発芽した」 — **ЗЖБЪ**, Г **ЎЪЭЄЖ·8** ; **БЪЖ**, **БЪЕШИ** < *bhej-e- (§.2 参照) — **РАЗБОИ** のような対応を示している。このことは、当初、行為の名称とその行為に関連する特質の名称の間には本質的な違いはなかったことを示唆している。

いくつかの古代ブルガリア語動詞、例えば、現・1・単 **БЖАЖ** 2 **БЖАДЕШИ** < *bhu-n-dh-e- ; **ГРАДЖ**, **ГРАДЕШИ** < *ghr-ŋ-dh-e- ; **И**

АЖ, НАЕШИ < *H_i-dh-e- (§.13 参照); **НАЖ, НАЕШИ** < *H_i-e H₂-dh-e- のような動詞は、古い接尾辞の -dh- を含んでいるのだから非他動詞(自動詞)である。これは、ギリシャ語の受動アオリスト形の接尾辞 -dh- と同系関係にある — 例、1・単 *ἐ-παίδεύ-θη* 「教育された」, cf. 未・1・単 *παίδευσ-θησομαι* 「教育されるだろう」。接尾辞の -dh- がいない場合には、その動詞は他動詞である — cf. ラ *eō Rōmam* 「ローマへ行く」 < *eō < *ei-ō < *Hei-ō, ギ *εἰμι ὁρθιον* 「険しい道に行く」。もう一つの古代ブルガリア語自動詞はその現在形に接中辞(infix) -n- を含み、これは起動相(inchoative)動詞の接尾辞 -n- と同系関係にある(例、現・1・単 **АВНГН Ж** 2 **АВНГНЕШИ**; **КОСНЖ, КОСНЕШИ**; §.17 第2項参照)。Cf. アオ・3・単 **ВЪЗЛЕЖЕ** に対して、現・1・単 **ЛАГЖ** 2 **ЛАЖЕШИ**, グ **ΛΕΓΕΣΘΩ**; アオ・3・単 **СЪДЕ** < *sēd-e-t (ラ 現・1・単 *sedeō* に対する 完・1・単 *sēdi* と同じく、過去語幹の語根母音延長を伴う) に対して、**САДЖ, САДЕШИ**。

接中辞 -n- を持つスラヴ祖語動詞は起動(始発)相的な意味を得て、他動詞には発展しなかったのである。鼻音接中辞は、次例のような、語根拡張子を持つ動詞に存在する古い起動相用接尾辞 -n- に起源を持つ — 例、*bhu-H₂-dh- > アオ・3・単 **БЫСТЬ** に対して *bhu-n-dh- > 現・1・単(単純未) **БЖАЖ**; *ru-H₂-p- > ラ 完・1・単 *r ūpī* 「破った、引き裂いた」 に対して、*ru-m-p- > ラ 現・1・単 *rumpō* 「破る、引き裂く」。語根拡張子(上例の dh や p)と起動相語幹や過去語幹との接合以後は、接尾辞要素 n は接中辞として再解釈を受けたのであり、例えば、**ЛАГ-** < *leg- あるいは **САД-** < *sed-, *sēd- のような他の動詞語根(この場合の gh や d は古い語根拡張子ではないが、鼻音要素は本来の接中辞である)に対しても、類推によって添加されることになったのである。

§.15 始原的な活格活用 (а к т и в н о с п р е ж е н и е) と 不活格活用 (и н е р т н о с п р е ж е н и е)

幹母音 *e* を持つ古代ブルガリア語の現在語幹及び単純アオリスト語幹に存在している第一次的な非完了活用は、現・1・単 **nek'-o-m* , 2 **nek'-e-s* , 3・複 **nek'-o-nt* 型のものである。この活用は、始原的な活格動詞活用に起源を持つものである。そして、活格動詞は基本的には主体と客体を具備する動詞に発達したが、極く希には非他動的な動詞にも発達している。不活格動詞は、活格動詞とは違って、原則として、主体・客体関係（他動性）を表す動詞には発達していない。この不活格動詞は、就中、生物及び無生物体のおかれている状態を表す動詞であり、精神状態や思考過程を表す動詞、また感覚器官を通しての知覚を表す動詞を含むものである。スラヴ祖語や古代ブルガリア語においては、このような動詞は概ね非他動詞（自動詞）である — §.11 参照。言語発達の更に古い段階では、動作（行為）主（agens, agent）によって為される行為を表す動詞は全て活格動詞であった。活格類には、「横たわっている（*б л е ж а*）」（cf. 単純アオ 3・単 *л е ж - е*）, 「座っている（*с е д я*）」（cf. 単純アオ 3・単 *с ѣ д - е*）, 「走る（*б я г а м*）」（cf. 現・2・単 *т е ч - е - ш и*）, 「死ぬ（*м р а*）」（cf. 現・2・単 *м ъ р - е - ш и*）のような動詞も入っていた。古い完了活用がすでにスラヴ祖語期に消失している以上、古代ブルガリア語の適当な例を示し得ないが、「赤い（*б ч е р в е н с ъ м*）」（逐語的には、私の赤いこと [*моята червенина*] 「病気だ（*б о л е н с ъ м*）」、「善良だ（*д о б ъ р с ъ м*）」、「死んでいる（*у м р я л с ъ м*）」といった意味の動詞は活格動詞ではない。ギ 完・1・単 *o ī ḍ a* (= 古イ *vēda* < **uoid-H₂e*) 「知っている」（逐語的には、「私の知（ってい）

ること」, §.6 第 3 項参照) という動詞も、不活格動詞の例となろう。もともと、この動詞は動作主の側からの働きかけを前提としたものではない。後 (§.18) に見るように、現・1・単 **БѢМѢ** < *uoid-mi、プレスラフ (Преслав) の古代ブルガリア語文献では **БѢАѢ** < *uoid-a-i < *uoid-Hæ-i (§.19 参照) となり、2 **БѢЧѢ** となる動詞は、不活格活用の継承たる古い完了活用の最も著しい痕跡を残す現在形を有しているのである (不定詞語幹 **БѢАѢ-ТИ** < *uoid-ē- については、§.17 第 4 項参照)。

非完了動詞幹 — 完了動詞幹という二分法に先んじて、活格動詞 — 不活格動詞という二分法があったのである。スラヴ祖語の動詞組織は、活格動詞幹 (原則として他動詞幹として、一部は自動詞幹として再解釈された) と不活格動詞幹 (原則として自動詞幹として、主として、人あるいは物がおかれている状態の語幹として再解釈を受けた) の対立は知っていたが、時制面の対立、すなわち非完了行為 (infectum) と完了行為 (perfectum) の対立は知らない始原的な動詞組織の継承なのである。原初の体系においては、活格動詞語幹は、不活格動詞語幹とは独立した存在であった。始原的な活格活用語尾 1・単 -m, 2・単 -s, 3・単 -t, 3・複 -nt を持つ第一次動詞は、1・単 -Hæ > -a, 2・単 -tHæ > -tha, 3・単 -e (すなわち、始原的な純粹名詞語幹 — §.34 参照), 3・複 -r となるような始原的な不活格活用語尾を持たなかったのである ; cf. キ^レ 完・1・単 *o l δ α* 「知っている」 < *uoid-Hæ, 2 *o l σ θ α* < *uoid-tHæ, 3 *o l δ ε* < *uoid-e ラ 完・3・複 *ēgēre* (*āgēre* 「導いた、駆った」に代えて) < *Hæ-Hæg'-ēr- (§.12 参照) (古代ブルガリア語の状態動詞[§.17 第 4 項参照]の場合と同じく、幹母音 e の延長を伴う), 古イ 完・3・複 *cakrūr* 「した、行なった」 < *k^we-k^wr-。また、逆に、不活格活用を持つ第一次動詞は活格活用を持たなかった (例えば、ギリシャ語完了 1 人称単数 *o l δ α* 「知っている」 は、いわゆる絶対完了類 [perfectiva tantum] である)。活格活用と不活格活用

は、同一動詞の二つの異なる形ではなく、二つの異なる動詞類であって、この内、形態面では、活格動詞の方がより発達しており（より多数の異なる形を持っており）、もう一方の不活格動詞は発達性のより劣るものであった。始原的な不活格活用の本来的な特徴は、疊音（語根重複）語幹ではなく（疊音法は、現・1・単 $*\text{uoid-H}_{2e} > \text{ギ } o\text{ } l\text{ } \delta\text{ } \alpha$, 古イ veda 「知っている」の動詞形を除くギリシャ語及び古代インド語の全完了形の表徴であったけれども）、その独自の語尾 — 現・1・単 $-\text{H}_{2e} > -a$, 2 $-\text{tH}_{2e} > -tha$ 等 — にあった。

§.16 古代ブルガリア語の -ER 語幹の起源

活格活用と不活格活用を持つ言語においては非分離的所有（属性）ないしは有機的所有（属性）（неотделима или органична принадлежност）のカテゴリーが強い発達を示している。このカテゴリーの形態指標は、特別な所有の接辞（affix）であって、それは、近親者、身体部分、必需品の名称を含む一定の名詞群に付加されるのである。空間的、時間的位置づけを示すいくらかの副詞もこのカテゴリーに属している（古代人は、自ら自身を宇宙の中心に据えて、その位置から世界の中での事物の位置を決定したのである；世界の中での位置判断は、世界に属する「私」の一部であり、したがって、この基本的な天地座標は、人たる個性の非分離的な所有（属性）であった）。

不活格活用の接辞機能を果たしたのは、この非分離（有機的）所有の指標である。例えば、完・1・単 * $\text{uoid-H}\epsilon$ 「知っている」（ギ $\text{o } \text{I } \delta \alpha$, 古イ veda , ゴ wait , ВТАТ [補足的な現在指標 i を伴う、§.19 参照]）のような不活格活用動詞は、本質的には「私の知（ってい）ること」の意であった（§.6 第3項参照）。恐らく、かつての不活格活用動詞の大部分は語根母音 o 階梯の始原的な名詞語幹から作られたものである（同じく、同所参照）。このことを証明しているのが、始原的な不活格活用の継承であるギリシャ語畳音完了活用における語根母音 o 階梯の例である。次例も参照、完・1・単 * $\text{uoid-H}\epsilon$ > 現・1・単 ВТАТ も参照, cf. НЕ-СЪ-ВТА-А 「極めて多数、無限数（逐語的には、知らないこと、分からないことの意）」 < * uoid-e-H_2 (§.10 参照)。ギ 完・3・単 $\text{o } \text{I } \delta \epsilon$ = 古イ veda < * uoid-e は、述語的用法の純粹名詞語幹（不定格 casus indefinitus ）だと思われる。3人称動詞形の名詞起源については、§.34 参照。

名詞付加接辞でもある、不活格活用動詞3人称複数語尾 r は、本来非

分離所有（属性）表現一般の指標たる *r* に由来するものであり、以下のような特徴を表示する：

1. 近親（血縁）者の名称。次例参照、古イ *pitár-*, ギ *πατήρ*, ラ *pater*, ゴ *fadar* 「父」；古イ *mātár-* 単・生 **ΜΑΤ-ΕΡ-Ε**, ギ *μήτηρ*, ラ *māter* 古高ド *muoter* 「母」；古イ *duhitár-*, 単・生 **ΔΥΗΤ-ΕΡ-Ε**, ギ *θυγάτηρ*, ゴ *daúhtar*, リ 単・生 *dukteĩs* 「娘」；古イ *bhrātar-*, **ΒΡΑΤΡΥ** ラ *frāter* 古高ド *bruder* 「兄弟」, ギ *φράτηρ* 「フラトリア（胞族）の成員」¹⁹；古イ *svāsar-*, **ΣΕΣΤΡΑ**, ラ *soror*, ゴ *swistar*, リ 単・生 *seseĩs* 「姉妹」。

2. 夫の死後も自分の氏族には戻らず、夫の父及び兄弟のところに残って生活する妻（cf. 古代の逆縁婚制 *levirate*²⁰）の側から見た、夫側氏族の成員の名称。次例参照、古イ *devār-*, **ΔΕΥΕΡΥ**, ギ *δᾶήρ*, ラ *le vir*, リ 単・生 *dieveĩs*, 古高ド *zeihhur* 「夫の兄弟」；古イ *svāsur a-*, **ΣΒΕΚΡΥ**, リ *šēšuras* ギ *ἐκυρός*, ラ *socer*, 古高ド *s wēhur* 「舅、夫の父」。

3. 複数 1・2 人称物主代名詞（ラ *noster*, *vester*, ギ *ἡμετέροϛ*, *ὁμετέροϛ*, ゴ *unzar*, *izwar* 参照）。これは、原始印欧語族社会における非分離所有のものとして、先ず第一に、共有財産があったことを示している。

4. 内臓の名称。次例参照、古イ *udāram*, ラ *uterus*, 古プ *weders*, リ *vēdaras* 「胃、腸詰め」；ギ *ἡτρόν* 「胃、腹」, *ἡτόρ* 「心臓」, 古高ド *ādara* 「血管」。

5. 空間と時間の副詞。次例参照、ギ *ὐπέρ*, ラ *super*, ゴ *uf ar*, 古イ *upāri* 「上から」, ゴ *undar* 「下から」, ラ *īnfernus* 「下方にある、地下の」, 古イ *ādhara-* 「下の」, 古イ *āpar-a-* 「遠方の、もっと後の（遅い）」。これらの諸例における指標 *r* は、次第に、対立を前提とした、対置あるいは対比の接尾辞に変わっている — cf. 古高

ド *fordro, fordaro* 「前へ、もっと早くに」、ゴ *aftaro* 「後ろから、後ろに」、ラ *dexter* 「右の」、*sinister* 「左の」。

接尾辞 *-r-* を伴う極めて多数の始原的な名詞の、古代ブルガリア語における継承として、次のような語がある：**МАТИ**, 生 **МАТЕРЕ**；**АЪШТИ**, 生 **АЪШТЕРЕ**；男・複・主 **ЧЕТЪРЕ**, 女・中・複・主 **ЧЕТЪРНИ** (cf. 古イ *catvārah*, ギ *τέσσαρες*, ラ *quattuor*, ゴ *fi dwor* 「四」) — この語は、空間的定位（東西南北の四基本方位）に関連する語であり、子音幹名詞曲用でもある；接尾辞 *-r-* の付いたいくつかの近親者名 — **БРАТЪРЪ**, **СЕСТРА**, **АЪВЕРЪ**, **СВЕКРЪ**, **СВЕКРЪ**, 生 **СВЕКРЪВЕ** (**СВЕКРЪ** からの派生語)；**АТРЪ**, 生 **АТРЪВЕ** 「夫の姉妹」(**СВЕКРЪ**, **СВЕКРЪВЕ** との類推による)；接尾辞 *-r-* の付いた身体部分や器官のいくつかの名称 — **АТРО** 「肝臓」(cf. ギ *ἐντερον* 「内臓、腸」), **ЖТРОБА**, **ВЪАРО** 「水運び容器、バケツ」 < 「皮囊」 < 「胃、腹」(cf. ラ *uterus* (子宮、腹), リ *vēdaras* 「腹」), **ИДРО** 「内臓」(ギ *ἡτορ* 「心臓」と同系), **БЕАРА**, **РЕБРО**, **НОЗАРИ**, **МАЗАРА** 「皮下膜」；方位の名称 **СЪВЕР**；古い対置接尾辞 *-ter-* (*-tor-*) を含む代名詞的形容詞 — **ВЪТОРЪ**, **ЕТЕРЪ**, **КОТЕРЪНИ** (cf. ラ *uter* 「二つの内何れかの」, 古イ *katarāh*, リ *katrās* 「二つの内の何れかの」)。

イタリアック語派・ケルト語派の中間受動 (*medio-passivum*) の語尾 *r* も、同一起源である (cf. ラ 現・3・単 *dicitur* 「と呼ばれている、という名である」, 複・1 *dicimur*, 複・3 *dicuntur*)。この *r* は、当初は不活格 (完了) 活用 of 3 人称複数形だけの表徴であったが、後に中間受動の意味を持つ他の全ての形に一般化したのである (完了活用動詞の一部にある中間受動の意味については、§.18 参照)。不活格活用動詞は自動詞であり、このことから、行為が他の対象に及ばないという意味で、非遠心的な動詞だと言えるであろう。中動相動詞も非遠心的な動詞である。そこでは、行為は、他の対象に及ぼされず、主体の不可分一体 (非分離) 的な領分にと

どまるからである。

§.17 始原的活格活用動詞における 動作態 (Aktionsart) カテゴリー

印欧祖語の活格活用にも不活格活用にも時制のカテゴリーは存在せず、これに代わって強い発達を示したのが動作態 (Aktionsart) 範疇である。かつての活格動詞類に存在していたのは、以下の指標である：

1. 全一的 (一括的) 実現行為の指標 H_2 。一連の原語根に立証されるもので、後に非過程的な過去として、すなわちアオリスト (минало свършено време) 幹として再解釈を受けている。次例参照、アオ・1・単 **НЕСОХЪ** < *nek'-H₂-s-, アオ・1・単 **БЪРАХЪ** < *bh₂r-e-H₂-s-, アオ・1・単 **ПАСЪ** < *pēn-s- < *pen-H₂-s-, 古イ アオ・1・単 **ā-bodhi-ṣam** 「目覚めた、気付いた」 < *bhoudh-H₂-s-, ギ アオ・1・単 **ἐ-δω-κ-α** 「与えた」 < *deH₃-H₂-m, アオ・1・単 **БУХЪ** < *bhu-H₂-s-, ギ アオ・1・単 **ἐ-φύυ** 「生じた」 < *bhu-H₂-m。

2. 起動性 [inchoative] (行為の開始) 指標 n 。次例参照、現・1・単 **СТАНЖ**, 2 **СТАНЕШИ** < *ste-H₂-n-e-; **ДВИГНЖ**, **ДВИГНЕШИ**; **КОСНЖ**, **КОСНЕШИ**, ギ 現・1・単 **πιτνω** 「飲む」, **δακνω** 「かむ」, ゴ 現・1・単 **fraihna** 「質問する」, **fullna** 「満たし始める」。

過程全体ではなく過程の開始を表した、接尾辞 **-n-** を持つ語幹は、スラヴ祖語のアスペクト体系が生成されるとき、基本的には完了体語幹に代わった。次例参照、現・1・単 **ДВИГНЖ**, 2 **ДВИГНЕШИ**; **КОСНЖ**, **КОСНЕШИ**; **ТЪКНЖ**, **ТЪКНЕШИ**; **ДРЪЗНЖ**, **ДРЪЗНЕШИ**; **КЛИКНЖ**, **КЛИКНЕШИ**。スラヴ祖語動詞の特徴は、同一語根から起動相語幹 (接尾辞 **-n-** を持つ語幹) も、第一次的接尾辞 **-e-** を持つ非起動相語幹も作ることができたという点である。スラヴ祖語の時制体系の構築に際しては、

ne 語幹からは現在（単純未来）時制の形が、一方 e 語幹からは単純アオリスト形が作られたのである。次例参照、 現・1・単 **АВИГНЖ**, 2 **АВИГНЕШИ**, アオ・3・単 **АВИЖЕ**; **НАВЪКНЖ**, **НАВЪКНЕШИ**, **НАВЪЧЕ**; **ИЗАЪХНЖ**, **ИЗАЪХНЕШИ**, **ИЗАЪШЕ**; **ПРОЗАБНЖ**, **ПРОЗАБНЕШИ**, **ПРОЗАБЕ**; **КОСНЖ**, **КОСНЕШИ**, **КОСЕ СА**（スプラシル写本 561₂₈）; **ОУМЛЪКНЖ**, **ОУМЛЪКНЕШИ**, **ОУМЛЪЧЕ**; **ПОСТИГНЖ**, **ПОСТИГНЕШИ**, **ПОСТИЖЕ**; **ИШТЕЗНЖ**, **ИШТЕЗНЕШИ**, **ИШТЕЗЕ**。起動相接尾辞 -n- へのアナロジーによって発生した鼻音接中辞を持つスラヴ祖語動詞にも、同様の相互関係ができあがっている（§.14 参照）— 現・1・単 **САДЖ**, 2 **САДЕШИ**, アオ・3・単 **СТАЕ**; **ЛАГЖ**, **ЛАЖЕШИ**, **ЛЕЖЕ**; **ОБРАШТЖ**, **ОБРАШТЕШИ**, **ОБРЪТЕ**（単純アオリスト形 1・単 **СТАЪ**, **ОБРЪТЪ**, 2・3・単 **СТАЕ**, **ОБРЪТЕ**, 3・複 **СТАЖ**, **ОБРЪТЖ** は、過去語幹の表徴である、語根母音 e の延長階梯である、§.11 参照）。

すでにスラヴ祖語期に、現在幹に n 指標を含んでいた動詞の不定形は、接尾辞 -neу-、対応階梯 -nou- を持ち、それが鼻音特徴面での同化を経て -non- > -нж- に変化した、補充法 (suppletion) 的語幹によって形成された。接尾辞 -нж- のより古い響きの痕跡が、**АРЪЗНОВЕНЪ** (cf. 現・1・単 **АРЪЗНЖ**, 2 **АРЪЗНЕШИ**, 不 **АРЪЗНЖТИ**) 型の受動過去分詞であり、またこれと同系の次のような動名詞である: **ДОУНОВЕНЬЕ** (cf. **ДОУНЖ**, **ДОУНЕШИ**, **ДОУНЖТИ**), **ПОКЪНОВЕНЬЕ** (cf. **КЪНЖ**, **КЪНЕШИ**, **КЪНЖТИ**), **ПЛИНОВЕНЬЕ** (cf. **ПЛИНЖ**, **ПЛИНЕШИ**, **ПЛИНЖТИ**), **КЛИКНОВЕНЬЕ** (cf. **КЛИКНЖ**, **КЛИКНЕШИ**, **КЛИКНЖТИ**)。この場合の接尾辞 -нов- は -neу- (§.2 参照) あるいは -nou- の継承である。-нов-, -нж- に再編された接尾辞 -neу- (-nou-) は、次のような現在幹の特徴を表示しているギリシャ語の接尾辞 -ν̄- と同系関係にある: アオ・1・単 $\xi - \delta \epsilon \iota \xi \alpha < *deik'-s-$ に対して、現・1・単 $\delta \epsilon \iota \kappa - \nu \bar{u} - \mu \iota$ 「示す、指摘する」; アオ・1・

単 $\xi\alpha\xi\alpha$ に対して、現・1・単 $\acute{\alpha}\gamma-\nu\bar{\nu}-\mu\iota$ 「砕く、こわす」；
 アオ・1・単 $\acute{\omega}\mu\omicron\sigma\alpha$ に対して、現・1・単 $\delta\mu-\nu\bar{\nu}-\mu\iota$ 「誓う、
 誓約する」。この接尾辞は、また古代インド語の接尾辞 $-no-$ (< $-ne\bar{u}-$ あ
 るいは $-nou-$) : $-nu-$ ($-nv-$) と同系関係にあり、次例のような動詞の現
 在幹の特徴を示している：現・3・単 $min\acute{o}ti$ (3・複 $minv\acute{a}nti$) 「損
 じる、害する、減じる」(cf. ラ 現・1・単 $mi-nu-\bar{o}$ 「砕く、減じる」)
 ； $ṛṇ\acute{o}ti$ 「起こる、生ずる」(ギ $\delta\rho-\nu\bar{\nu}-\mu\iota$ 「動かす、起こす」 と
 同系)； $dh\bar{u}noti$ 「震える」。1・単 **НАВѢКНѢХЪ**, 2・3 **НАВ**
ѢКНѢ；1・単 **ОУСѢХНѢХЪ**, 2・3 **ОУСѢХНѢ** 型のアオリスト
 形が、次第に単純アオリスト形(1・単 **НАВѢКЪ**, 2・3 **НАВѢЧЕ**；
 1・単 **ОУСѢХЪ**, 2・3 **ОУСѢШЕ**)に取って代わり始める。それ故に、
 現在語幹に $-ne-$ を持つ動詞にあっては、第IIシグマ・アオリストの痕跡
 は極僅かに見えるにすぎない(cf. スプラシル写本 391₂ の例、1・単
АРѢЗОХЪ)。

3. 動作(行為)の集約性(intensive)(頻発性[frequentative])指標
 H_2 。行為の一括性(全一性)を表す(第1項参照)集合・多数性の接尾
 辞 H_2 は、集約的(頻発的)行為の接尾辞として発達する可能性を得たの
 であり、この接尾辞の使用はしばしば動詞幹の意味の変化(強め)に連動し
 た。次例参照、ラ 現・1・単 $d\bar{u}c\bar{o}$ 2 $d\bar{u}cis$ 「引く、引き出す」<
 $*d\bar{u}c-es$ に対して、現・1・単 $\acute{e}d\bar{u}c\bar{o}$ 2 $\acute{e}d\bar{u}c\bar{a}s$ ($-\bar{a}s$ < $-eH_2s$)
 「育て上げる、教育する」； $fl\bar{i}g\bar{o}$, $fl\bar{i}gis$ 「打つ」に対して、 $pr\bar{o}-fl\bar{i}g\bar{o}$,
 $pr\bar{o}-fl\bar{i}g\bar{a}s$ 「打ち砕く、破壊する」； $d\bar{i}c\bar{o}$, $d\bar{i}cis$ 「話す、言う」に対し
 て、 $d\bar{i}c\bar{o}$, $d\bar{i}c\bar{a}s$ 「宣言する、布告する、知らせる」；**НАЖ**, **НАЕШИ**
 < $*H_{1i}-dhe-$ (§.13 参照) に対して、**ИДЖ**, **ИДЕШИ** 「旅する、(乗っ
 て)行く」< $*H_{1i}-eH_2dh-$, cf. 古イ 現・3・単 $\acute{e}ti$, リ 不 $\acute{e}iti$
 「行く」< $*H_{1ei}-t-$ に対して、古イ 現・3・単 $y\acute{a}ti$ 「遍歴する、旅
 する、(乗り物で)行く」, リ 現・1・単 $j\acute{o}ju$ 「(乗り物で)行く」<
 $*H_{1i}-eH_2-$ 。

動詞幹、名詞幹の集約性（強調性）特徴や意味的にこれに近い、動詞幹の頻発性（継続性 [durative]）特徴は、多数性の意義を持った形や語幹を形成するのと同じ形態手段によって表された。その形態手段は、以下の通りである：

a) 疊語法（語根重複）。次例参照、非重複語根 **ГЛАСЪ** < *gal-s- に対して、重複語根 **ГЛАГОЛЪ** < *gal-gal-o- に見られる語根 *gal- の重複例；同じく、ギリ **καλέω**, ラ **calō** 「呼び集める、召集する」 < *kl- に対して、**КЛАКОЛЪ**（鐘） < *kol-kol-o- ；**ТЖЧА**「雹雲、霰雲」 < *ton-k- に対して、**ТЖТЪНЪ**（轟音、雷鳴） < *ton-tъn-o- ；ギリ **φύρω** 「かき混ぜる、かき回す、混乱させる」 < *bhř- に対して、**πορφύρω** 「波立つ」 < *bhor-bhř- ；ギリ **φαίνω** 「現す、見える」 < *φaν-i- < *bhHn-i- に対して、**παμφαίνω** 「光る、輝く」 < *bhHn-bhHn- (bh > p の異化を伴う) 。

b) 語根重複の継承としての語根母音延長 (§.12 及び以下の c 項参照)。

c) 多数性指標 H₂ (§.10 参照) と i (第 5 項参照) の付加。

スラヴ祖語期に、接尾辞 -ā- < -eH₂- は、不完了体の二次的（派生）動詞の接尾辞として再解釈を受け、それは、語根母音の延長が可能である場合、その延長階梯を持つ語根の後ろに付加された — 次例参照 現・1・単 **мърж**, 2 **мърешн**（不完了体）： **оумърж**, **оумърешн**（完了体）： **оумираж**, **оумираешн**（二次的不完了体）； **кънж**, **кънешн**； **закънж**, **закънешн**； **заклинаж**, **заклинаешн**； **сълж**, **сълешн**； **посълж**, **посълешн**； **посылаж**, **посылаешн**； **гнетж**, **гнетешн**； **оугнетж**, **оугнетешн**； **оугнѣтаж**, **оугнѣтаешн**； **колаж**, **колешн**； **заколаж**, **заколешн**； **закалаж**, **закалаешн**； **гонж**, **гонишн**； **изгонж**, **изгонишн**； **изганѣж**, **изганѣешн**； **сѣкж**, **сѣчешн**； **посѣкж**, **посѣчешн**； **посѣкаж**, **посѣкаешн**； **падаж**, **падаешн**； **нападаж**, **нападаешн**；

НАПАДААЖ, НАПАДАЕШИ。

不完了体派生語幹は、現在幹に接尾辞 **-ne-** を持つ動詞からも、同じようにして作られる：現・1・単 **ВЪЗАЪХНЖ**, 2 **ВЪЗАЪХНЕШИ** (完了体)： **ВЪЗАЪХАЖ, ВЪЗАЪХАЕШИ** (不完了体)； **ПРИКОСНЖ, ПРИКОСНЕШИ**： **ПРИКАСАЖ, ПРИКАСАЕШИ**； **ВЪЗАВИГНЖ, ВЪЗАВИГНЕШИ**： **ВЪЗАВИСАЖ, ВЪЗАВИСАЕШИ**。現在幹に接尾辞 **-e-** を持つ動詞、例えば、現・1・単 **БЕРЖ**, 2 **БЕРЕШИ**, 不 **БЪРАТИ** のような動詞の場合は、語根母音を延長した形は不定詞・アオリスト幹に立証されるような語根の変種に変わったのである。例、**БЕРЖ, БЕРЕШИ, БЪРАТИ**： **СЪБЕРЖ, СЪБЕРЕШИ, СЪБЪРАТИ**： **СЪБИРАЖ, СЪБИРАЕШИ, СЪБИРАТИ**； **ПЕРЖ, ПЕРЕШИ, ПЪРАТИ**： **ПОПЕРЖ, ПОПЕРЕШИ, ПОПЪРАТИ**： **ПОПИРАЖ, ПОПИРАЕШИ, ПОПИРАТИ**； **ЗОВЖ, ЗОВЕШИ, ЗЪВАТИ**： **ПРИЗОВЖ, ПРИЗОВЕШИ, ПРИЗЪВАТИ**： **ПРИЗЫВАЖ, ПРИЗЫВАЕШИ, ПРИЗЫВАТИ**。恐らく、延長語根母音と接尾辞 **-a-** を備えた二次的不完了体動詞は、**БЪРАТИ**： **СЪБЪРАТИ**： **СЪБИРАТИ**； **ЗЪВАТИ**： **ПРИЗЪВАТИ**： **ПРИЗЫВАТИ** 類に真っ先に現れたのである。このような場合の、頻発性接尾辞 **-ā-** の起源は、スラヴ祖語動詞の過去語幹における接尾辞 **-ā-** の起源（第1項参照）と同じである。

4. 始原的活格動詞の幹母音 **e** を延長して得られる状態指標 **ē** (§. 11 参照)。このタイプの動詞幹は、古い完了活用（特別な語尾と語根重複を備える）が完全に消失した（スラヴ語群、バルト語群）か、副次的な役割を果たしている（イタリア語群、ゲルマン語群）印欧語群に見られる。古い完了活用が生き残ったギリシャ語では、**ē** 語幹は、行為に対する主体の不活発な態度を表す第Ⅱアオリスト受動形 (*aoristus secundus passivi*) にのみ特徴的である (§. 11 参照)：現・1・単 **κόπτω** 「切る」, アオ・1・単 **ἐκόπη** 「切っている、切断済である」。スラヴ祖語においては、接尾辞の **ē** は状態動詞の不定詞・アオリスト幹の特徴である —

例、**БЪДѢТИ**, **МЪНѢТИ**, **СКРЪБѢТИ**, **ТРЪПѢТИ**, **ВИДѢТИ**, **ЗЪРѢТИ**, **МРЪЗѢТИ**, **СМРЪДѢТИ**, **ЗВЪНѢТИ**, **СѢДѢТИ**, **БОЛѢТИ**, **ВНЕСѢТИ**, **ГОРѢТИ**, **ДРЪЖАТИ**, **ВРЪТѢТИ**, **МЛЪЧАТИ**。原則として、これらの動詞は自動詞である (§.11 参照)。

リトアニア語の過去 *ẽ* 語幹は、古代ブルガリア語の *e* 語幹と同様の意義を持ち、一連の場合それと完全一致を行う — 例、不 *pavydėti* 「羨む」 = **ВИДѢТИ**, *minėti* (回想する) = **МЪНѢТИ**, *smirdėti* (悪臭を放つ) = **СМРЪДѢТИ**, *budėti* (目を覚ましている) = **БЪДѢТИ**, *sėdėti* (座っている) = **СѢДѢТИ**, *garėti* (蒸発する、気が抜ける、しおれる) = **ГОРѢТИ**。ゴート語では、原接尾辞 *-ē-* は、次のような状態動詞に立証される — 不 *haban* 「持つ」(cf. **ИМѢТИ**), *thahan* 「黙っている」(cf. **МЛЪЧАТИ**), *hāhan* 「ぶら下がっている」(cf. **ВНЕСѢТИ**), *thulan* 「我慢する」(cf. **ТРЪПѢТИ**), *trauan* 「深く悲しむ」(cf. **СКРЪБѢТИ**)、これらの大部分は自動詞である。ラテン語では、接尾辞 *-ē-* は、次のような動詞の現在幹の特徴である — 例、*dolēre* 「苦痛を感じる」(cf. **БОЛѢТИ**), *tacēre* 「黙っている」(cf. **МЛЪЧАТИ**), *havēre* 「持っている」(cf. **ИМѢТИ**), *vidēre* 「見る、見える」(**ВИДѢТИ** と同系)。一連の場合には、接尾辞 *-ē-* を持つスラヴ祖語動詞は、古い完了形に取って代わったのである (§.18 参照)。

5. 行為の使役性 (causative) (作為性) ないしは反復性 (iterative) (多回性) 指標 *ei* (*i*)。語根母音 *o* 階梯の語根の後ろに付加した (§.6 参照) :

a) 使役動詞。次例参照、ラ 現・1・単 *moneō* 「思い出させる」, cf. 語根母音低減階梯 ラ *mēns*, 属 *mentis* 「知性、思考」 < **mьn-ti-* = **ПА-МЯТЬ** ; *torreō* 「乾かす」 < **tors-ei-ō*, cf. 語根母音 *e* 階梯 *terra* 「陸地、日照り」 ; *doceō* 「教え込む、習得させる、礼儀作法を教える」 < **dok'-ei-ō*, cf. 語根母音 *e* 階梯 *decet* 「穏当・妥当であ

る、適する、べきである」, decus 「気品、品格、榮譽、徳」 ; ギ 現・
1・単 $\phi o \beta \acute{\epsilon} \omega$ 「(恐怖のあまり) 逃げたくさせる、恐れさす」 <

bhog-ei-ō, cf. 語根母音 e 階梯 $\phi \acute{\epsilon} \beta o \mu a \iota$ 「(恐怖のあまり) 脱走する、恐れる」。スラヴ祖語においては、接尾辞 -ei- は、ギリシャ語、ラテン語、古代インド語の使役動詞に見られるような、幹母音 e (対応階梯では o) による拡張を受けていない。Cf. 古イ 現・3・単 bodhāyati 「呼び起こす、喚起する」 < *bhoudh-ei-e-ti に対して、**БОУАНТЪ** < *bhoudh-ei-ti 。

古代ブルガリア語の使役動詞には、以下のものが挙げられる : 現・1・単 **БОУЖАЖ**, 2 **БОУАНИШИ** < *bhoudh- (cf. 単・主 **БЪАРЪ**, 現・1・単 **БЪЖАЖ**, 2 **БЪАНИШИ**, 不 **БЪАТТИ** < *bhudh-) ; **ОУЧЖ**, **ОУЧИШИ** < *ouk- (cf. **НАВЪКНЖ**, **НАВЪКНЕШИ** < *ūk-ne-、これは添加音 prothesis の **В** を持つ、語根母音の延長については §. 18 参照) ; **ОБЪШЖ**, **ОБЪСИШИ** < スラ祖 *ob-uois- (cf. **ВИШЖ**, **ВИСИШИ** < スラ祖 *ueis-) ; **САЖАЖ**, **САДИШИ** < *sōd- (cf. 単純アオ 3・単 **СТДЕ** < *sēd-) ; **ГОУБАЖ**, **ГОУБИШИ** < *ghoub- (cf. **ГЪБНЖ**, **ГЪБНЕШИ**) ; **ТОЧЖ**, **ТОЧИШИ** 「濾す、注ぐ、流れさす」 (cf. **ТЕКЖ**, **ТЕЧЕШИ** 「流れる、走る」) ; **ОУМОРЖ**, **ОУМОРИШИ** (cf. **МЪРЖ**, **МЪРЕШИ**) ; **ПОЖ**, **ПОИШИ** < *poi-ei- (cf. **ПЪЖ**, **ПЪЕШИ** < *pei-e-、§. 2 参照) ; **ОМРАЧЖ**, **ОМРАЧИШИ** < *mor-k- (cf. **МРЪКНЖ**, **МРЪКНЕШИ** < *mъr-k-) ; **ПОЛОЖЖ**, **ПОЛОЖИШИ** (cf. **ЛЕЖЖ**, **ЛЕЖИШИ**) ; **ПРИЛЪПАЖ**, **ПРИЛЪПИШИ** < *loip- (cf. **ПРИЛЪПНЖ**, **ПРИЛЪПНЕШИ** < *lip-) ; **ПОГРЖЖЖ**, **Г РЭЪБЭЖЭЕ**, **ПОГРЖЗНИШИ** 「沈める、浸すだろう」 (cf. **ПОГРАЗНЖ**, **Г РЭЪБЭЖЭЕ-РЭЕ**, **ПОГРАЗНЕШИ** 「沈むだろう」) ; **ИСЖЧЖ**, **Г РЭЪБЭЖЭЕ**, **ИСЖЧИШИ** 「止めさせるだろう」 (cf. **ИСАКНЖ**, **Г РЭЪБЭЖЭЕ-РЭЕ**, **ИСАКНЕШИ** 「止むだろう」)。これらには、次のような動詞も挙げておくべきである : **ОУТЪШЖ**, **ОУТЪШИШИ** < スラ祖 *tois- (cf. **ТИХЪ** <

c) 不定詞・アオリスト幹に接尾辞 *-ē-* を持つ自動詞から。例、**БЛАЖИТИ** (**БЛАЖИТИ** に対する), **ВИСЖИТИ** (**ОБЖИТИ** に対する), **СТАЖИТИ** (**САЖИТИ** に対する)。

使役性を通じて、非他動的行為は他動的行為となり、そのことによって動詞語幹の意味も変化する。第一次動詞が遠心性動詞（すなわち、スラヴ祖語期における他動詞）であるときには、派生動詞は、他動性を残しつつ、反復動詞となる。例、現・3・単 **ВЕДЕТЬ** — **ВОДИТЬ**, **НЕСЕТЬ** — **НОСИТЬ**, **ЖЕНЕТЬ** — **ГОНИТЬ**, **ВЕЗЕТЬ** — **ВОЗИТЬ**。

反復動詞も使役動詞も起源的には古い集約性動詞であって、その接尾辞 *-ei-*（ゼロ階梯では *-i-*）は、多数性指標 *i* と同系関係にある（§. 27 参照）。集約性動詞の多数性の意義については、§. 5 参照。ゴート語やリトアニア語では、接尾辞 *-ei-* はゼロ階梯である。次例参照、ゴ 現・1・単 *liga* 「横たわっている」 < **legh-ō* に対して、現・1・単 *lagja* 「(横にして) 置く」 < **logh-i-ō* (cf. 接尾辞 *-ei-* の *e* 階梯、現・1・単 **ПОЛОЖЖ**, 2 **ПОЛОЖИШИ** < **logh-ei-*) ; リ 不 *vartýti* 「回転させる」 (cf. 接尾辞 *-ei-* の *e* 階梯、**ВРАШТЖ**, **ВРАТИШИ** < **uort-ei-*) 。

6. 意思の指標 *ieH₁*（ゼロ階梯では、*iH₁* > *i*）。希求法 (optative) 指標として、再解釈を受けた。次例参照、ギ 希・現・3・単 *φέροι* 「(彼が) 運ぶように」 < **bher-o-iH₁*, ゴ 希・現・3・単 *binda i* 「結び付けるように」 < **bhendh-o-iH₁*, 古ラ 接・現・2・単 *siēs* 「あるように」 < **H₁s-ieH₁-s*, 複・1 *sīmus* < **H₁s-iH₁-m-*, **ЮША** (スプラシル写本) 「願わくは・・・ならんことを、させたまえ」 < 希・3・単 **H₁es-ieH₁-t*、これと次は同系、ラ 希・3・単 *siet* = 古イ *syāt* 「あらんことを、あれかし」 < **siēt* < **H₁s-ieH₁-t*。スラヴ祖語では、希求法は、命令法として再解釈を受け、古代ブルガリア語文献では、これの単数、複数、双数のほとんど全人称の形が文証される：例、2・単 **МОШ** < **mog-o_i-s* < **mogh-o-iH₁-s*, 3・単 **МОШ** < **m*

ogh-o-iH₁-t, 1・複 **МОСТЪ** < *mogh-o-iH₁-m-os, 2 **МОСТЕ**
 < *mogh-o-iH₁-te, Cf. 2・複 **ВЪАНТЕ** < *uoid-iH₁-te, 2・単
ВЪЖАЪ < *uoid-i-o-s < *uoid-iH₁-s (語末閉音節での H₁ > o
 への変化を伴う)。

古代ブルガリア語の条件法分析型式を構成する動詞 1・単 **БНМЪ** <
 *bhu-iH₁-m, 2・3・単 **БН** の活用も、古い希求法語幹 *bhu-iH₁-
 > *bhū-i- > *bī- から出ている。動詞 1・単 **ХОШТЪ**, 2 **ХО**
ШТЕШН の現在形も、希求法語幹から作られたものである。不 **ХЪТЪТ**
Н (スプラシル写本 114₁), 現・1・単 **ХЪШТЪ** (169₃, 534₁₁), 3 **ХЪ**
ШТЕ (153₇) のような形における **ХЪТ-** という語根がもしも **ХОШТЪ**
 における **ХОШТ-** の形より古いとすれば、**ХЪШТЪ** の形は希求法の
 形 *hut-iH₁-ō > *hut-i-ō から引き出されようし、この場合の *h
 ut- は、不定詞 **ВЪС-ХЪТ-НТИ** ないしは **ХВАТ-Н-ТИ** の語根と同
 系関係にある、すなわち **ХОШТЪ** の本来の意味は「つかまえんとする」
 であったことになる。動詞 現・1・単 **ВЕЛЪ**, 2 **ВЕЛНШН** の現
 在形が、古い希求法語幹 *uel-iH₁- に由来するものであることも、極めて
 蓋然性が高い。Cf. 同じ動詞のゴート語希求法活用 — 現・1・単 *w*
iljau, 2 *wileis* < *uel-i-s < *uel-iH₁-s。

このようにして、同一のスラヴ祖語語根からは、活格活用における様々な
 動作態 (Aktionsart) 用原語幹の直接的ないしは間接的継承である、極めて
 多数の語幹を作ることができたのである。始原的不活格活用の場合には、活
 格活用とは違って、同一動詞用にそれほど多数の異なる動作態 (Aktionsar
 t) 指標があった訳ではない。不活格活用の枠内では、指標 *k* やギリシャ
 語完了形の一部に見られる語根末無気音の帯気音化から明らかなように、一
 括 (全一的) 行為指標である H₂ のみが使われたにすぎない (§. 13 参
 照)。この H₂ 指標は古代インド語の次のような完了形の *i* の背後にも
 隠れている — 2・単 *bubodhitha* 「君は目覚めている」 < *bhu-bho
udh-H₂-tH₂e, 1・双 *bubudhivā* 「私達二人は目覚めている」。

§. 18 古代ブルガリア語における始原的な 不活格活用の痕跡

活格活用動詞と不活格活用動詞間の原初的な相関関係を崩すような最初の重大変化は、活格動詞類が動作（行為）動詞と状態動詞という二群に分解したこと、さらにこの状態動詞群は意味的に不活格動詞と均等化したことである。同時に、活格動詞と不活格動詞の原初的な独立性 — 同一語根から作ることができたのは、同時に二つの活用（パラダイム）を持った動詞ではなくて、活格活用動詞か不活格活用動詞の何れかであること — も、損なわれることになった。一方では、新生の状態動詞群は、形態面で一様ではなく、接尾辞 *-ē* を持つ始原的な活格動詞（§. 17 第4項参照）も、始原的な不活格活用動詞も含むものであった。場合によっては、この形態的不均質性は、補充法的語幹形成を招いている — 例、現・1・単 **ВЪАТЪ** (**ВЪМЪ**)（始原的な不活格活用の名残り）に対して、不 **ВЪАТЪТИ**（古い *ē* 語幹）。また一方では、始原的な活格動詞は、次第に不活格活用を整理し、その不活格活用は過去として再解釈を受けることになった。

過去語幹は、通常、多数性（一括多数性）指標を含んでいる — cf. 古代ブルガリア語アオリスト幹における一括多数性指標 H_2 の痕跡例、アオ・単・1 **БЪРАХЪ, НЕСОХЪ, РАСПАСЪ**（§. 12 参照）。しかし、多数性は、語根重複によっても表すことができる — cf. 次の畳音例、ギ 完・1・単 **κ ἐ κ λ ο φ α**「盗んだ」、古イ **caġara**「した、遂行済だ」、ゴ **laġlot**「残した（てある）」、ラ **peperci**「節約した、大切にした」。活格動詞（動作動詞）と不活格動詞（性質動詞）という本源的対立は、非完了（*infectum*）と完了（*perfectum*）という対立として再解釈を受けたのである。

完了活用動詞が表すことができたのは、a) 精神状態、思考過程、感覚器官を通しての知覚をも含む、生物及び無生物が置かれている状態、b) 過去

性、であった。完了のこの二つの意義の間の共通性は、発話時における、行為に対する行為主の不活発な態度である — 前者においては、行為主は行為に参加しているが、それに対して働きかける訳ではない、したがって、この動詞は自動詞であり、また後者においては、行為主は過去には活動していたが、現在活動しているわけではない。このような意義について証明しているのが、ギリシャ語完了形である。その一部は、例えば、完・1・単 $\lambda \acute{\epsilon} \lambda \upsilon \kappa \alpha$ 「解いた、ほどいた」, $\pi \epsilon \phi \acute{\upsilon} \tau \epsilon \upsilon \kappa \alpha$ 「植えた」, $\gamma \acute{\epsilon} \gamma \rho \alpha \phi \alpha$ 「書いた」のように、過去を表しており、また一部は、次のように、非過去の意味を持った、性質ないしは状態を表す自動詞である： 例、完・1・単 $\pi \acute{\epsilon} \pi \eta \gamma \alpha$ 「突き出ている、突っ立っている」(現・1・単 $\pi \acute{\eta} \gamma \nu \upsilon \mu \iota$ 「突き刺す、打ち込む、固める」), $\delta \acute{\epsilon} \delta \eta \alpha$ 「燃えている」($\delta \alpha \acute{\iota} \omega$ 「燃やす、焼く」), $\pi \acute{\epsilon} \pi \omicron \iota \theta \alpha$ 「確信している」($\pi \epsilon \acute{\iota} \theta \omega$ 「確信させる、納得させる」), $\delta \lambda \omega \lambda \alpha$ 「駄目だ、死んでいる」($\delta \lambda \lambda \upsilon \mu \iota$ 「滅ぼす、駄目にする」), $\epsilon \phi \theta \omicron \rho \alpha$ 「壊滅状態だ、駄目だ」($\phi \theta \epsilon \acute{\iota} \rho \omega$ 「破壊する、壊滅させる」), $\acute{\epsilon} \gamma \rho \acute{\eta} \gamma \omicron \rho \alpha$ 「寝ずにいる、用心している」($\acute{\epsilon} \gamma \epsilon \acute{\iota} \rho \omega$ 「目覚めさせる、喚起する」), $\delta \rho \omega \rho \alpha$ 「動く、進む」($\delta \rho \nu \upsilon \mu \iota$ 「呼び起こす、動かす」)。

その語幹から現在形を作れない、現・1 $\mu \acute{\epsilon} \mu \omicron \nu \alpha$ 「望む、欲する」, $\tau \acute{\epsilon} \theta \eta \pi \alpha$ 「びっくりする」, $\omicron \acute{\iota} \delta \alpha$ 「知っている」, $\mu \acute{\epsilon} \mu \upsilon \kappa \alpha$ 「鳴く」のようないくつかの、現在の意を持ったギリシャ語完了活用動詞は、不活格活用が完全に活格活用から独立してあった、明らかにもっと古い状態の痕跡である。

もう一つの痕跡は、現在形と完了形が別々の語根から作られるギリシャ語第Ⅷ類動詞 (verba suppletiva)²¹ である — 例、現・1・単 $\acute{\epsilon} \sigma \theta \acute{\iota} \omega$ 「食べる」に対して、完・1・単 $\beta \acute{\epsilon} \beta \rho \omega \kappa \alpha$ 「食べてしまった」 ; $\tau \rho \acute{\epsilon} \chi \omega$ 「走る、急ぐ」に対して、 $\delta \epsilon \delta \rho \acute{\alpha} \mu \eta \kappa \alpha$ 「走った」 ; $\phi \acute{\epsilon} \rho \omega$ 「運ぶ」に対して、 $\acute{\epsilon} \nu \acute{\eta} \nu \omicron \chi \alpha$ 「運んだ」 ; cf. ラ *ferō* 「運ぶ」に対して、完・1・単 *tulī* < **te-tul-ī* 「運んだ」。

状態を表す、次のようなゴート語の過去現在動詞 (praeterito-praesentia) も、同様の痕跡を示したものである — 例、1・単 wait 「知っている」 (現・1・単 **ВТАТ** と同系、cf. 不定詞 **ē** 語幹の **ВТАТТИ**)、lais 「理解する、分かる」、kann 「知っている」、man 「考える、思う」 (**МЪН-Т-ТИ** と同系)、og 「恐れる」 (cf. 不定詞 **ē** 語幹の **БОЛТИ СА**)、これらは、現在の意味と完了の語尾を有するものである。ゴート語 1・単 aih 「持つ」も、ここに属する；これは、バンヴェニスト (E. Benveniste, 1960) によれば、二つの名詞 (一つは主格、もう一つは対格) を所有の関係に置く古い状態動詞 (cf. **ē** 語幹の不定詞 **ИМТТИ**) である。実際、動詞 **ИМТТИ** は、ゴート語動詞 aih と同じく、擬似他動詞であって、**ИМТТИ** からは、他の他動詞とは違って、受動構文において使用すべき受動過去分詞を作ることはいできない。

本来的な不活格活用は、完了活用としてだけでなく、中動相活用としても再編を受けた。最古の中動語尾 (1・単 $-a < -H_2e$, 2 $-tha < -tH_2e$, 3・複 $-r$) は、それぞれ始原的な完了語尾と完全に一致する。語尾 $-H_2e > -a$ は、例えば、ヒッタイト語中動相 現・1・単 *ēšahari* (*ēšḫaḫari*) 「座る」に立証される。この重複語尾 $-ha = -H_2e$ は、古い H_2 指標を含んだものである (r は補足された中動相指標である、この起源については、§.16 参照)。Cf. 語尾 **-Т** の 現・1・単 **ВТАТ** 「知っている」 = ラ 完・1・単 *vidi* 「見た」 $< *uoid-H_2e-i$ 、この i の要素は現在指標であって (§.19 参照)、ギ 完・1・単 $o l \delta a =$ 古イ *vēda* 「知っている」には欠けているが、古イ 中動 (middle voice = 反射態 *Atmanepadam*)・過去 (imperfect)・1・単 *bhāre < *bher-H_2e-i* に立証される。 $-tH_2e > -tha$ の語尾は、例えば、ヒッタイト語 現・2・単 *ar-ta-ti* 「立つ」に見られるが、この ti は補足付加指標である。また、古イ 過去 (impf)・2・単 *ābhara-thā-ḥ* 「運んでいた」も同様の例であるが、この場合の語尾 $-tha$ に対しては、2人称単数の始原的な活格指標 s が補足されている (§. 35 参照)。語尾の $-$

r. は、例えば、中動・古イ 現・3・複 sére 「横たわっている」に見られる。

始原的な中動相動詞も、その源である不活格活用動詞と全く同様に、概ね非遠心動詞（自動詞）であり、大部分自動詞である状態動詞として再解釈を受けたのである。次例参照、現・1・単 $\tau\rho\acute{\epsilon}\pi\omega$ 「回転させる」に対して、中動・現・1・単 $\tau\rho\acute{\epsilon}\pi\omicron\mu\alpha\iota$ 「自分の向きを変える、回る」； $\kappa\acute{\iota}\nu\acute{\epsilon}\omega$ 「動かす」に対して、 $\kappa\acute{\iota}\nu\acute{\epsilon}\omicron\mu\alpha\iota$ 「動く」； $\pi\acute{\iota}\mu\pi\lambda\eta\mu\iota$ 「満たす」に対して、 $\pi\acute{\iota}\mu\pi\lambda\eta\mu\alpha\iota$ 「一杯になる」； $\acute{\epsilon}\lambda\pi\omega$ 「期待させる」に対して、 $\acute{\epsilon}\lambda\pi\omicron\mu\alpha\iota$ 「期待する」、また次のような絶対中動相（media tantum）： $\kappa\epsilon\acute{\iota}\mu\alpha\iota$ 「横たわっている」； $\acute{\eta}\mu\alpha\iota$ 「座っている」。

早くもスラヴ祖語期には、古い完了形はすでに姿を消している。起源的に不活格活用の語尾を持ち、かつ過去の意味を持った古い形は、活格活用の語尾を起源とするアオリスト形によって — 例えば、1・単 **БѢРАХЪ** < *bh ь r-e-H₂s-om, 2 **БѢРА** < *bh ь r-e-H₂s-s, 3 **БѢРА** < *bh ь r-e-H₂s-t によって —、あるいはまた 完・1・単 **АДЛЪ Е СМЪ** 型の分析形式構文によって、置換されたのである — レスキーン (A. Leskien, 1884) によれば、これは、当初 dator sum （私は与える者である）の意であった。また一方、状態を表し概して自動詞である、起源的に不活格語尾を持つ形は、これまた状態を表し概して自動詞であるが、起源的に活格語尾を持つ $\acute{e}$ 語幹動詞の形 (§.11 参照) によって、置換されたのである。なお、スラヴ祖語期には、古い中動相も発達しないか、あるいは消失してしまったのである。

古代ブルガリア語における、古い完了（不活格）活用の痕跡が最も顕著に現れているのが、**ВѢМЪ** 動詞の形であり、これの不定詞・アオリスト幹 **ВѢАѢТИ** は、過去現在活用 *uoid-H $\acute{e}$ (= ギ 完・1・単 $\omicron\acute{\iota}\delta\alpha$, 古イ $v\acute{e}da$, ゴ wait 「知っている」) と $\acute{e}$ 指標を持つ状態語幹 (§.17 第4項参照) の間の、スラヴ祖語における補充法的パラダイム関係

について証明している。これらの痕跡が、現・1・単 **ВѢАѢ** < *uoid-H₂e-i (§.27 参照), 2・複 **ВѢСТЕ** (ギ 完・2・複 *ἴσ τε* < *uoid-te と同系), そして恐らくは、1・複 **ВѢМО** (古イ 完・1・複 *vidmā* と同系) である。現・1・複 **-МО** の語尾は、古代ブルガリア南西部の原典より書き写された中世ブルガリア語のテキスト (例えば、「オフリドの使徒」[Охридски апостол]、「セヴァスチャン選集」[Севастиановия сборник] 中のクリメントによる「キュリロス礼賛」[Похвално слово за Кирил]²²) の非テーマ動詞に極くまれに見られるものである — さらに、**ЕСМО**, **МАМО** < スラ祖 *iьmāmo, **АМО** 参照。これは、**ВѢАѢ** < *uoid-H₂e-i あるいは **ѢМЬ** (古い完了の畳音 *H₁e-H₁ed- > *e-ed- > *ed- を持つ、§.12 参照) のような動詞の始原的な完了活用の遺産であり、非テーマ動詞パラダイム全体に一般化したものである。

始原的な完了活用では、語根母音は単数では正常階梯ないしはその対応階梯、複数ではゼロ階梯の形であった。次例参照、古イ 完・1・単 *vēda*, ギ *οἶδα*, ゴ *wait* に対して、1・複 *vidmā*, *ἴσμεν*, *witum*。これは、活格構造言語の初期の状態の名残であり (§.28 参照)、この場合の動詞の単数形、複数形は補充法的に — 異なる語根から、後には異なる語幹から — 作られたのである、cf. ギ アオ・1・単 *ἔδωκα* 「与えた」 < *deH₃-H₂-m, 2 *ἔδωκας*, 3 *ἔδωκε* に対して、1・複 *ἔδομεν* < *dH₃-H₂-, 2 *ἔδοτε*, 3 *ἔδοσαν*。しかしながら、スラヴ祖語期には、古い不活格活用を持つ動詞にあっては、単数語幹が一般化したのである：現・1・単 **ВѢАѢ** — 1・複 **ВѢМЬ** 参照。現・1・単 **МОГЪ**, 2 **МОЖЕШИ** も古い不活格活用の動詞である。これは、ゲルマン諸語では、過去現在動詞 (完了語尾を持つ) である：ゴ 1・単 *mag* 「～できる、～してよい、～かもしれない」, 2 *magt* < *mogh-tH₂e 参照。スラヴ祖語では、この動詞は、特別のアクセント・パラダイムを持ち、それは、現在幹に接尾辞 **-e** を持つそ

の他の動詞とは違ったものである — cf. **о могу, можешь** に対して、**несу, несешь** ; **пекую, печешь** 等。

大部分の始原始的な完了形の特徴は、語根重複であるが、これは、語頭子音 **H** (**H₁, H₂, H₃**) を持つ語根にあっては、**H** (**H₁, H₂, H₃**) の脱落后、完了幹語根母音の延長を惹起した。次例参照、ラ 完・1・単 **edī** 「食べた」 < ***H₁e-H₁ed-H₂e-i** (cf. 古い完了幹と活格語尾を持つ 現・1・単 **iaml**) に対して、現・1・単 **edō** 「食べる」 < 非畳音語根 ***H₁ed-**。スラヴ祖語期には、完了活用はすでに消失していたが、完了幹の一部の最も重要な特徴の一つである語根母音の延長は、スラヴ祖語の語幹に広がり、それが始原始的な完了形に取って代わった。その一つが、語根母音延長の現れる過去 (アオリスト) 語幹であり (例、現・1・単 **рѣкъ**, 2 **рѣчешѣ** に対して、アオ・1・単 **рѣхъ**)、もう一つが、接尾辞 **-ě** を持ついくつかの状態動詞語幹である (例、不 **бѣжати, стѣати са, стѣати**)。また、延長にはなじまない語根母音ゼロ (低減) 階梯もこの状態語幹の特徴である (例、不 **мнѣти, зрѣти, смръѣти**)。

過去語幹における語根母音延長は、何と云っても、古い完了活用が完全あるいはほとんど完全に消失してしまった印欧語群に観察される。延長が重要な役割を演じているのは、スラヴ祖語 (古代ブルガリア語)、ラテン語 (cf. 現・1・単 **legō** 「集める」に対する 完・1・単 **lēgī** 「集めた」 ; 現・1・単 **vehō** 「運ぶ、引っ張る」に対する 完・1・単 **vēxī** 「運んだ、引っ張った」) 及びゲルマン祖語 (cf. 現・1・複 **niman** 「取る」 < ***nem-** に対する 完・1・複 **nemun** 「取った」 < ***nēm-**; 現・1・複 **qiman** 「行く、来る」 < ***g^wem-** に対する 完・1・複 **qemun** 「着いた」 < ***g^wēm-**; 現・1・複 **slahan** 「打つ」 < ***slak-** に対する 完・1・複 **slohun** 「打った」 < ***slāk-**) であって、完了活用が存在しているギリシャ語では特徴的でない。しかし、古代インド語のシグマ・アオリストには、古代ブルガリア語やラテン語のシグマ・アオリストと同じ語根母音延長が見られる — cf. 古イ アオ・1・単 **ā-vāṣam**, ラ

vēxi, **ВѢСѦ** < *uēg'h-s-「運んだ」であるが、現・3・単 vāhati, ラ
 vehit, **ВЕЗЕ** < *ueg'h-e-「運ぶ」では、非延長語根母音である。古
 代インド語のアオリスト形の延長は、明らかに、1・単 āda「食べた」
 < *H₁e-H₁ed- (cf. 現・1・単 **ѣмь**) や 1・単 āsa「あった」 <
 *H₁e-H₁es- 型の完了形 (古代ブルガリア語のインパーフェクト **мина
 ло не свършено време** 形の **АХ** 指標と同系である、
 これについては、§. 12 参照) における延長からのアナロジーである。始原
 的な過去形の母音延長のそもそもの原因となったのは、H (H₁, H₂, H₃) の
 音である。現・1・単 **БѢЖ**, **БѢШИ** < *bhej-e-: アオ・1・単 **Б
 НХѦ** < *bhi-H₂-s-; 現・1・単 **БЖАЖ** < *bhu-n-dh-: 不 **БѢТИ**
 < *bhu-H₂- 型の交替については、§. 12, 13 参照。Cf. ギ 現・
 1・単 **φύομαι**「育つ、生じる」 < *bhu- と II アオ・1・単
ἐφύν「成った、生じた」 < *bhu-H₂-。ラテン語の、現・1・単 **cap
 iō**「掴む、取る」 < *kH₁-p-: 完・1・単 **cēpī**「つかまえた」 < *ke
 H₁-p-; **frangō**「破碎する」 < *bhrH₁-n-g'-: **frēgī**「破碎した」 < *bh
 reH₁-g'-; **pangō**「打ち固める」 < *pH₂-n-g'-: **pēgī** (**pāgī**「打ち固めた」
 < *peH₂-g'- にかえて) 型の交替は、H (H₁, H₂, H₃) に終わり、現在
 幹がゼロ階梯、過去語幹が e 階梯である語根として独立したのである。
 ラテン語の、1・単 **ēdi**「食べた」(cf. 現・1・単 **ѣмь**) は、明ら
 かに、畳音語幹 *H₁e-H₁ed- に由来するものであり、それは、例えば、ドー
 リス 完・1・単 **πέπαγα**「固定させた」 < *pe-peH₂-g'- (ラ 現・
 1・単 **pangō**「打ち固める」 < *pH₂-n-g'- と同系) が証明しているの
 と同じものである。

現在語幹に接尾辞 -ne- を持ついくつかの自動詞、例えば、現・1・単
БѢГНѢ, 2 **БѢГНЕШИ**; **СТѢДНѢ**, **СТѢДНЕШИ**; **ГѢБНѢ**, **Г
 ѢБНЕШИ** のような動詞 (例えば、**БѢЖАТИ**, **СТѢДѢТИ** のような e
 語幹の状態動詞や **ГѢБѢЛЬ** のような名詞に対応する) の語根も、延
 長語根母音を含んでいる。名詞派生 (denominative) 語幹としての始原的

完了語幹の一部は、語根母音の *o* 階梯を持つ (§. 6 第 3 項参照)。不定詞・アオリスト接尾辞 *-ē-* を持ついくつかの古代ブルガリア語状態動詞 (cf. 不 **БОЯТИ СЯ, ГОРЕТИ, БОЛѢТИ**) も、消失した完了活用 of 側からの影響によって、語根母音の *o* 階梯を持っているが、その活用から、過去形あるいはまた状態動詞が作られたのである。スラヴ祖語の動詞形にあっては、語根母音の *o* 階梯は、ゴート語単数過去形に発生したようには — 例えば、現・1・単 *nima* 「取る」 < **nem-* に対して、1・単 *nam* 「取った」 < **nom-*; 現・1・単 *qima* 「来る、行く」 < **g^wem-* に対して、1・単 *qam* 「来た」 < **g^wom-* のようには、
— 、過去 (アオリスト) 幹に浸透しなかったのである。

§.19 古代ブルガリア語時制（テンス）の起源

スラヴ祖語のテンス・アスペクト体系は、全て始原的な活格活用の枠内で発達したものである。§.10 において指摘したように、集合多数性指標 H_2 の助けによって、一括（全一的）、完遂、完了的な行為を表す語幹が作られ、それがアオリスト幹に転じたのであった — 1・単 **БЪРАХЪ** < *bh₂r-e- H_2 -s-, **НЕСОХЪ** < *nek'- H_2 -s-, **ПАСЪ** < *pēn-s- < *pen- H_2 -s-, cf. §.12。語根母音延長を行うアオリスト幹は、例えば、現・3・単 **НЕСЕТЪ** < *nek'-e-, **ВЕДЕТЪ** < *vedh-e- に対する、1・単 **НѢСЪ** < *nēk'-s-, **ВѢСЪ** < *vedh-s- のような形は、完了活用と H (H_1 , H_2 , H_3) で始まる語根の完了用置語法（置音）を持つ、始原的な過去語幹の影響下に生じたものである — §.12 参照。*bher-e- (cf. 現・3・単 **БЕРЕТЪ**), *nek'-e- (cf. 現・3・単 **НЕСЕТЪ**, 単純アオ・3・単 **НЕСЕ**), *p₂n-e- (cf. 現・3・単 **ПЪНЕТЪ**) のように、もともと一括多数性指標 H_2 による拡張を受けない活格語幹は、持続行為を表したものである。ここからは、接尾辞 -e- を持つ動詞非完了 (infectum) 幹が作られたのである。それは、一つは、現在形であり、もう一つは、以前はインパーフェクト（発話時以前に終わった持続行為）形であった、単純アオリスト形である。

当初存在していたのは、唯一、幹母音 e（対応階梯では o）と 1・単 -m, 2 -s, 3 -t, 3・複 -nt の語尾 (*nek'-o-m, *nek'-e-s, *nek'-e-t, *nek'-o-nt) を持つ非完了活用のみであり、その直接的継承が単純アオリストである — 2・3・単 **НЕСЕ**, 1・単 **ПАДЪ**, 3・複 **ПАДЖ**。この形は、持続行為一般を表したのである。現在 — インパーフェクト (минало несвършено време) の対立は、非完了活用の範囲内に、もっと後に現れたものである。現在形 (例、3・単 **НЕСЕТЪ** < *nek'-e-t-i, 3・複 **НЕСЖТЪ** < *nek'-o-nt-i) は、

-m, -s, -t, -nt の語尾の後ろに、i 指標 (§.27 参照) を付加することによって得られたもので、その結果、第一次的な非完了形（語尾を拡張しなかった形）の方は、非現在（過去）の意義を獲得したのであり、それは古代ブルガリア語の単純アオリスト形が引き継いでいる。

幹母音 e を持つスラヴ祖語の動詞形の大部分は、その第一次的な非完了活用を失ってしまっている。古代ブルガリア語文献には、現・1・単 **БЕРЖ**, 2 **БЕРЕШИ**, 不 **БЪРАТИ**; **ПЪНЖ**, **ПЪНЕШИ**, **ПАТИ**; **МЪРЖ**, **МЪРЕШИ**, **МРЪТИ** 型の動詞の場合、単純アオリストの痕跡が文証されない。古代ブルガリア東部方言では、単純アオリストの中で残っているのは、第IIシグマ・アオリストを持つ動詞の補充法 (suppletion) 活用としての2・3人称の形だけである — 1・単 **ПАДОУХЪ**, 2・3 **ПАДЕ**; 1・単 **НЕСОУХЪ**, 2・3 **НЕСЕ**、また、動詞 **РЕКЖ**, **РЕЧЕШИ** のアオリストの活用における 1・単 **РЪХЪ**, 2・3 **РЕЧЕ** (§.13 参照) も。古代ブルガリア西部方言では、単純アオリストは、シグマ・アオリストを失った動詞の個別的なパラダイムとして生き残っている — 例、1・単 **НАЪ**, 2・3 **НАЕ**, 1・複 **НАОМЪ**, 2 **НАЕТЕ**, 3 **НАЖ**。つまり、ここでは、非シグマ・アオリスト（古いインパーフェクト）の方が、シグマ付加の過去形よりも好まれたのである (§.13 参照)。古代ブルガリア西部方言においては、語根母音延長によってシグマ・アオリストを形成する動詞は、2・3人称単数に単純アオリストを持っている — 例、1・単 **НЪСЪ** に対して、2・3 **НЕСЕ**; 1・単 **БАСЪ** に対して、2・3 **БОДЕ**。第一次的な非完了形 (infectum) は、現在形の発生以後インパーフェクトとして再解釈を受けたが、それは、スラヴ祖語の分析型のインパーフェクトに抑えられ、かつまたそれによって置換されてしまった。この分析型インパーフェクトは、活格活用型の助動詞の重複語根によって作られたもので、それを、始原的な不定形 — 一括多数性指標 H_2 の助けによって作られる、完遂行為用不変化動詞幹 — の後ろに付加するか、e の延長幹母音の助けによって作られる、状態用不変化動詞幹に付加したのである。

前者のタイプは、1・単 **Бѣр-а-а-хъ** < *bh₁r-e-H₂ に、後者のタイプは、**Нѣтъхъ** < *nek'-ē- に立証される。

完了形（パーフェクト）の消失を通じてその使用範囲を拡大して行った、スラヴ祖語動詞の ē 語幹 (§.18 参照) は、完了語幹と全く同じように、1) 状態、と 2) 過去性、すなわち発話時における、行為に対する行為主の不活発な態度を表したのである。接尾辞 ē を持つスラヴ祖語のインパーフェクト形は、ē 語幹のこの第二の意義を基に構築されたものである（ラテン語の 1・単 leg-ē-bam 「集めた」型のインパーフェクトの形成については、§.12 参照）。インパーフェクトの語尾自体（1・単 **-ахъ** < *H₁e-H₁es-o-m, 2 **-аше** < *H₁e-H₁es-e-s, 3 **-аше** < *H₁e-H₁es-e-t, 3・複 **-ахъ** < *H₁e-H₁es-o-nt）は、古い畳音語幹とそれに付加された非完了語尾である (§.12 参照)。

§. 20 スラヴ祖語の動詞・名詞接尾辞 -s-

スラヴ祖語のシグマ・アオリスト形を作った *s* 指標は、古い過去性指標ではない。過去性を表したのは、接尾辞 *-s-* が付加される語幹自体である。そうした語幹の一部は、例えば、アオ・1・単 **БЪР-А-ХЪ** < **b h b r-e-H₂*, **НЕС-О-ХЪ** < **nek'-H₂-s-*, **ПАСЪ** (**ПАХЪ**) < **pen-H₂-s-* のように、完遂、完了した行為の全一性を強調する、一括多数性指標 *H₂* を含むものであった。また、ある一部の過去語幹は、例えば、1・単 **НТ СЪ**, **ВТ СЪ** のように、いくつかの完了幹の類似の延長からのアナロジーによって、語根母音延長による形成を行った (§. 12 参照)。始原的な接尾辞 *-s-* は、古代ブルガリア語、ギリシャ語、古代インド語、また一部ラテン語動詞の過去語幹に見られる。しかし、この接尾辞それ自体が、行為の、対時間関係を表す訳ではない。ギリシャ語、古代インド語及びリトアニア語では、この接尾辞によって、未来形も作ることができる (cf. ギ 1・単 $\delta \acute{\omega} \sigma \omega$, 古イ *dāsyāmi*, リ *dūosiū* 「与えるだろう」)。スラヴ祖語においても、恐らく、プレスラフの古代ブルガリア語の原本から書き写された一連の古代ロシア語写本に見られる分詞 **БЫШАШТАИ** ($\tau \grave{\alpha} \acute{\epsilon} \sigma \acute{o} \mu \epsilon \nu \alpha$) から判断して、シグマ型の未来形も作られたのである。*s* 指標によって、いわゆるシグマ型現在 (*s-praesentia*) も作られたのであって、このことは、古代ブルガリア語の、現・1・単 **ТРА-С-Ж**, 2 **ТРА-С-Е ШИ** (cf. ラ 現・1・単 *tremō* 「振動する、震える」、この場合、接尾辞 *-s-* を欠いている)、不定詞幹 **И-Х-АТИ** 「(乗って) 行く、旅する」 < **Hi-e-H₂-s-*、また更に後の文献の、現・1・単 **МАХАМ**, 不 **МАХАТИ** (cf. リ *mosúoti* 「手を振る」) といった語に証明される。ブルークマン (K. Brugmann, 1906) によれば、現在、未来及びアオリストの接尾辞 *-s-* は、スラヴ祖語の *es* 語幹の接尾辞の *-es-* と同系関係にある

— 例、単・主 **НЕБО**, 生 **НЕБ-ЕС-Е** ; **СЛОВО**, **СЛОВ-ЕС-Е** ; **ЧОВ**

AO, ЧΟΥА-ЕС-Е。

動詞・名詞接尾辞 *-s-* の広範な使用が暗示しているのは、これが始原的な文法的表徴ではなく、むしろ語彙的な表徴だということである。それは、何らかの古い文体、人間の何らかの古代的な行動様式、何らかの原始世界観に関連しているはずであり、その世界観を表す、動詞・名詞の基本的な用語が、共通指標 *s* を含んでいるのである。動詞接尾辞 *-s-* と同じ接尾辞を持つ、スラヴ祖語の *es* 語幹名詞は、あるすぐれて古代的な世界観の中心概念を表しており、その世界観は、ヨーロッパの文明人には消えてしまっているが、18-19世紀の民族学上の記録によると、シベリア諸民族の世界観には類例がある。そうした世界観の最も重要な構成要素は、以下の通りである：

1. 地上の他に天空と地下の世界があるという考え。天 (НЕСО, 生 **HE BECE**, 古イ *nábhas*-「天、空」, ギ *νέφος* 「雲」における *es* 語幹参照) と地を結ぶものは、世界に広がる木 (АРТВО, 生 **АРТВЕСЕ** における *es* 語幹参照 ; cf. ラ *arbor*, 属 *arboris* < **arb-os-is* 「木」における *es* 語幹) であり、この木を伝って、人間は天空の中心に、また北極星に上りつめることができ、あるいはまた、地下の世界に降りて行くことができる。夜の星空は、車輪がその軸の回りを回転するが如く、北極星の回りを回転している (КОЛО, 生 **КОЛЕСЕ** = ギ *τέλος*, 属 *τέλεος* < **k^wel-es-* 「あるものがその回りを回転する先端」における *es* 語幹参照 ; 同一語根、ただし語根母音 *o* 階梯の語として、ギ 男 *πόλος* < **k^wol-o-* 「(車) 軸、蒼穹、天の北極」がある)。北極星と結びつくのが、星座の大熊座 (ブルガリア民間信仰では、“Колата” [荷車座]) と小熊座である。普通の荷 (馬) 車の一部分の名称が、夜の星空で天空の北端点 (北極星) の回りを回転する星座を「荷車」と見た古代人の表象を反映している。くびき (次の *es* 語幹参照、НГО, 生 **НЖЕСЕ**, ギ *ζεύγος*, ゴ *jukuzi* 「くびき」, ラ *iūgerum* 「くびきをはめられた連畜牛が一日の間に耕することができる地積単位」 < **ioug-es-*)

を、轅（次の es 語幹参照、スラ祖 *oi-es-, cf. ス ojê, 生 ojêsa 「轅」, 古イ i-ŝ-â 「轅」）に取り付けている位置は、原始スラヴの言い伝えでは、北極星に当たるところであった。-es- という接尾辞は、荷車の別の部分の名称にも広がっている — **ТАЖЕСА** 「家畜が荷車を引っ張る時の紐」, ポラープ 主・複 *zvenesa 「荷車の輪縁(リム)」参照。

2. この天空と地下世界に到達することができる者は、恍惚状態に没入して、狂ったような忘我の状態になる、あるいは熱病的な興奮状態に達する (**ЛЮТО**, 生 **ЛЮТЕСЕ** 「狂乱状態への精神的衝動」における es 語幹参照)、あるいはまた、自分自身の中に閉じ込めて自己の夢幻世界に浸ることができる者だけだという考え。恍惚状態の目的は、魂が彼岸世界を自由に遍歴することができるように、魂を肉体（次の es 語幹参照、**ТѢЛО**, 生 **ТѢЛЕСЕ** ; cf. ラ corpus, 属 corporis 「体、物体」 < *corp-os-es) から解放することにある。天との接触交流は驚きを通して得られる (**ДВО**, 生 **ДВЕСЕ** < 語根 *di-, *di-u-「天、神、天上の神」における es 語幹参照)。原始スラヴにおける驚嘆 (**чудене**) は、喫驚 (**дивене**) とは違って、恍惚として地下世界を巡歴することであった (次の es 語幹参照、ギリ **κεῖθος** 「地下深部、内奥」と同系である

ЧΟΥДО, 生 **ЧΟΥДЕСЕ** ; 同一 es 語幹、ただし語根母音 e 階梯に替わって、o 階梯の語として、**о кудѣсник** 「魔法使い」, 中・複 **кудеса** 「妖怪、悪霊による奇跡」)。恍惚陶醉の時、人は目と耳 (次の es 語幹参照、**ОКО**, 生 **ОЧЕСЕ** ; **ОУХО**, 生 **ОУШЕСЕ** ; **СЛОУХО**, 生 **СЛОУШЕСЕ**) に変じて、忘我驚嘆し、星空空間と地下世界への不可思議の旅の見聞に浸るのである。飛ぶことは、魂が肉体を離れて、宇宙を巡歴する能力を象徴化する。恍惚陶醉の時に、人は肩 (ポラープ語 複・主 *ramenesa 「肩」における es 語幹参照) から両手を翼のように動かす。そのことによって鳥の飛行を表すのである — 肩は、魂が乗って飛ぶ翼であった。より速く鳥に変身することができるように、恍惚陶醉状態に入った者は、羽 (ポラープ語 複・主 *peresa 「羽」における es 語

幹参照)でおおった特別の衣を纏う。接尾辞 **-s-** を付加する動詞 (1・単 **ТРАСЖ**, 2 **ТРАСЕШИ** [揺る、震える]、不 **МАХАТИ** [振る], **ИХАТИ** [乗り物で行く、旅する]) は、恍惚陶醉時の基本動作名 — 魂が飛行準備体勢に入った時の熱病的興奮状態、彼岸世界への驚嘆の旅を表す両手の揺さ振り — に関連がある。

3. 独特の転生を体験した者こそ、最も容易に天空と地下世界に到達できるという考え。この転生とは、目、耳、内臓 (次の **es** 語幹参照、**ОУДО**, 複・主 **ОУДЕСА** 「内臓」 ; **ИСТО**, 複・主 **ИСТЕСА** 「腎臓」 ; **ОКО**, 生 **ОЧЕСЕ** ; **ОУХО**, 生 **ОУШЕСЕ**) が入れ換えられるために、肉体が自己分離するか、あるいは分離される可能性を持つという考えである。転生の目的は、魔法の言葉と魔法の業の力 (**СЛОВО**, 生 **СЛОВЕСЕ** ; **ДѢЛО**, 生 **ДѢЛЕСЕ** における **es** 語幹参照) を習得することである。転生者、すなわち新しい内臓と新しい腎臓 (cf. 双・主 **ИСТЕСТЪ**) を受け供えた者こそ、**ИСТЪ**、すなわち真正の人となる (その者の肉体が自己分離を行っていても、未だ自己分離を完了していない時には、その者は、**НЕИСТОВЪ** である)。転生の後、その者は、予言者としての才能と、自分の臓腑 (**ЧРѢВО**, 生 **ЧРѢВЕСЕ** における **es** 語幹参照) の動きによって予言したり、魔法の呪文 (次の **es** 語幹参照、**ГРАНО**, 生 **ГРАНЕСЕ** 「詩句、祭司の極まり文句」 ; **ГРАНО** は、**ЖЬРЬЦЬ** [祭司] と同一語根) を唱える能力を得るのである。

名詞形以外にあった接尾辞 **-s-** は、一つは、祭司的予言の言葉の動詞形の表徴でもあった。その結果、最初は祭司的文体の範囲内に希求 (願望) (desiderative) の形が発達し、そこからシグマ型未来形が発生してくるのである。もう一つは、この接尾辞 **-s-** は、彼岸世界への驚嘆の旅についての話しの中の動詞形の特徴を表示するものでもあった。これらの話しは、筋立てがヨーロッパの古典的な魔法昔話に極めて近いものであり、通常1人称単数で行われた。話し中の基本的時間は、完了した行為の時間、すなわち当初はむしろ動作態 (Aktionsart) 的な文法範疇であった過去時制 (§. 17

参照)である。こうして、祭司的文体(3人称単数をその基本人称とする魔法昔話の語り部の文体と同じ文体)の枠内に、シグマ付き過去時制が現れる前提環境が整ったのである。このシグマ付き過去形は、後になって、スラヴ祖語を含む個々の印欧語群に時制体系が生成されて行く中で、過去時制全般の範疇(シグマ・アオリスト)に変じたのである。

始原始的な中性名詞は、形容詞機能も担うことがあった — 中性名詞の古い主格及び対格は、かつての絶対格(*casus indefinitus* 不定格)に由来するが、それは純粹語幹に相当するものであり、また形容詞的用法も有していた(§.28 参照)；最初は、性、数、格の一致は存在しなかった⁽⁹⁾。一連の古代インド語の *es* 語幹名詞は、アクセント記号を使って、形容詞に転用することができた — 次例参照、*tāras-*「力」に対して、*tarās-*「力のある、強い」；*māhas-*「偉大さ、雄大さ」に対して、*mahās-*「偉大な、大きな」；*dūvas-*「礼拝、崇拜」に対して、*duvās-*「崇めるところの」。しかし、もう少し古い時代には、形容詞形におけるこのようなアクセント移動は不必要であった。このことは、いくつかの古代インド語の例から明かであり、ここでは、接尾辞 *-es-* (ゼロ階梯では、*-s-*) が、古い *u* 語幹の後ろに付加されている — 例、*vāpuṣ-*「奇跡」と「奇跡的」；*tāpuṣ-*「熱気、暑熱」と「熱気を発散するところの、燃えているところの」；*cākṣus-*「目、眼」と「見えるところの」。接尾辞 *-u-* (ゼロ階梯) と *-es-* (正常階梯) の結合によって複合接尾辞 *-ues-* が得られ、これによって、古代インド語では、完了分詞として使われる動詞派生形容詞が作られたのである — 例、*babhūvas-*「あったところの、以前の」 < **bhe-bhu-H₂-u-es-*。同様の分詞は、スラヴ祖語にも立証されるが、ここでは、*ues* 指標の二要素ともゼロ階梯(*u + s*)である — cf. **ѡѡѡѡ**- (添加音 **ѡ** を伴う) < **bhu-H₂-us-i-*。

形容詞比較級も、同様にして作られている。古代インド語では、接尾辞 *-es-* (対応階梯では *-os-*) は、*i* 指標(§.27 参照)に付加された。この指標の助けをかりて、形容詞の *i* 語幹は、集約的な意義(§.5 参照)

を獲得したのであり、それが比較級 (*ēlativus* 揚意級²³ < ラ *ēlatiō* 「高めること、上昇」) の形成に適していたのである。次例参照、古イ *nāv* *ah* 「新しい」 < **neū-o-s* に対して、*nāvyas*= ラ *novius* 「より新しい (中性形)」 < **neū-i-os-* (この *-os-* は、接尾辞 *-es-* の対応階梯)。同じ複合接尾辞 *-i-es-* (*-i-os-*) は、スラヴ祖語の形容詞比較級中性単数主格形にも立証される — 次例参照、**ЛЮТЬ** に対して、**ЛЮШТЕ** < **lěut-i-es* ; **ЛНХЪ** に対して、**ЛНШЕ** < **leikʷs-i-es* 。二要素 *ei* と *es* のゼロ階梯から、形容詞斜格の指標 *is* > **Ш** が発生した ; 形容詞の比較級において — cf. **ЛЮШТЬШ-** < **lěut-iis-i-o-* 。能動過去分詞指標 *us* 及び形容詞比較級指標 *is* の後ろに付加する接尾辞 *-i-* の起源については、§.27 参照。なお、以下を参照、ラ 副詞 *magis* 「更に、より以上、より多く」 < イタリア祖語 中・単・主 **mag-i-s* (接尾辞 *-es-* のゼロ階梯) に対して、中・単・主 *māi-us* 「より大きい」 < イタリア祖 **mag-i-os* (接尾辞 *-es-* の *o* 階梯), *māiestās* 「有力、卓出」 < **mag-i-es-* (*e* 階梯), 男・複・主 *māiōrēs* 「長老達、先祖」 < **mag-i-ōs-es* (接尾辞 *-es-* の延長対応階梯 ; この延長は、比較級の接尾辞の古い集約的意義に相当する)。Cf. ゴート語比較級接尾辞 *-iz-* (< *-es-*) 及び *-oz-* (< *-ōs-*) の場合、*manags* 「大きい」(**МЪНОГЪ** と同系) に対して、*managiza* 「より大きい」 ; *hardus* 「堅い」に対して、*hardiza* 「より堅い」 ; *froths* 「賢い」に対して、*frodoza* 「より賢い」 ; *swinth* 「健康な」(**СВѦТЪ** と同系) に対して、*swinthoza* 「より健康な、より丈夫な」 ; いくつかのギリシャ語形容詞形における接尾辞 *-ios-* (*i + os*) の場合、男・複・主 *ἐλάσσονος* 「より小さい」 < **ἐλαχ-ι-ος-εος* ; 最上級形における接尾辞 *-is-* (*i + s*) の場合、*καλός* 「美しい」に対して、*καλλίστος* 「最も美しい」 ; *ἐχθρός* 「敵意のある」に対して、*ἐχθίστος* 「最も敵意のある」 ; *ταχύς* 「速い」に対して、*τάχιστος* 「最も速い」。

接尾辞 *-es-* による形容詞比較級の形成は、かなり新しい方法だと思われる。もっと古い時期には、性質の比較級の形成は補充法語幹を通して生成されたのであり、その痕跡が、ラテン語 *bonus* 「良い」に対する *melior* 「より良い」、*optimus* 「最も良い」；*malus* 「悪い」に対する *peior* 「より悪い」；*parvus* 「小さい」に対する *minor* 「より小さい」；*multus* 「大きい」に対する *plus* 「より大きい」；ギリシャ語 *ἀγαθός* 「良い」に対する *ἀμείνων* 「よい良い」、*ἄριστος* 「最も良い」；*μικρός* 「小さい」に対する *ἐλάττω* 「より小さい」である。古い補充法的比較級形成の名残は、古代ブルガリア語にも存在している — 例、**БЕЛЪН, БЕЛНЪ** (比較級 **БЕЛНЧАН**) に対する 男・単・主 **БОЛЪН**, 生 **БОЛЪША**；**МЪНОГЪ** (比較級 **МЪНОЖАН**) に対する **ВАШТЪН, ВАШТЪША**；**МАЛЪ** に対する **МЪНЪН, МЪНЪША**；**БЛАГЪ, ДОБРЪ** に対する **ЛОУЧЪН, ЛОУЧЪША, ОУНЪН, ОУНЪША, СОУЛЪН, СОУЛЪША**；**ЗЪЛЪ** に対する **ГОРЪН, ГОРЪША**。接尾辞 *-es-* は、比較級用の補充法語幹ないしは非補充法語幹に、後に付け加えられたものであることは確実である。次例参照、ギリ *καλός* 「美しい」に対する *καλλίω* 「より美しい」；*ἡδύς* 「楽しい、美味しい」に対する *ἡδίω* 「より楽しい」；*ἀγαθός* 「良い」に対する *βελέτιω* 「より良い」、これらの比較級では、接尾辞 *-es-* は欠けている。形容詞の比較級（起源的には、揚意的 *relative*, 集約的 *intensive*）語幹の第一次的な指標は、多数性指標 *i* であった。

§. 21 青年文法学派の形態モデル

古代ブルガリア語の形態前史の基本問題は、スラヴ祖語の名詞、代名詞及び動詞語尾の起源と意義についての問題である。名詞語幹と動詞語幹の始原的な共通性 (§.9 参照) ということから、古い両子音語根を含む二大主要产品詞である名詞と動詞は、名詞語尾、動詞語尾という二つのタイプの語尾の発生によって、次第に相互分裂した、という結論を下すことができる。動詞語尾は、誰が当該行為を行い、誰が当該の性質を持つのか、話し手か、その聞き手か、それとも当該時点における対話の直接的参加者ではないある第三者なのか、を表示した。また一方、名詞語尾は、一定の性質の担い手との関係を表示した — 生物や物が、行為に直接参加しているのか（働きかけを行う者としてなのか直接的働きかけを受ける者としてなのか）、それとも、行為には直接的参加を行うのではなくて、ただ行為がどのように推移して行くのか、例えば、行為の起点はどこか、その終着点はどこか、どのようにしてそれが行われたかを、説明したのである。

概して動詞・名詞語幹の第一次的な接尾辞を以て形成された、始原的な代名詞語幹もまた、名詞語尾を得たのである。代名詞が名詞と異なるのは、1) 単子音語根であること（このことから、代名詞語根においては、語根母音交替はあり得ないはずである）、2) 補充法、つまり相互補完的な語幹構成を行うこと、である — 次例参照、単・主 **АЗЪ** に対して、生 **МЕНЕ** ; 複・主 **МЫ** に対して、複・生 **НАСЪ** ; 男・単・主 **ОНЪ** に対して、生 **ЕГО** (**ІЕГО**) < *i-o-go ; ギ 男・単・主 **О** < *so に対して、対 **ТО** 。この現象の理由は、§. 33, 35 に示されている。いくつかの古代ブルガリア語の代名詞曲用においては、語根は同一であっても、第一次的接尾辞あるいは第二次的接尾辞が交替する — 例、男・単・主 **КЪ-ТО** < *k'-o-s に対して、中 **ЧЪ-ТО** < *k'-i- ; 女・単・主 **ТА** < *t-e-H₂ (§.10, 24 参照) に対して、生 **ТОМ, ТОА,**

グ **WƏ3C** < *t-o-i-ā-ns < *t-o-i-e-H₂-ns ; 生 **MEHE** < *m-e-n-es に対して、与 **MH** < *m-o-i ; 男・単・主 **CB** < *k'-i-s, cf. 女・単・主 **CH** < *k'-i-H₂ に対して、男・中・生 **CEΓO** < *k'-e-go 。

代名詞曲用のもう一つの特徴は、当該代名詞語幹に対して別の代名詞語幹、あるいはまたある種の指示小詞 (deictic particles) を結合し得ること、その結果、格語尾が単純語幹ではなく、拡張代名詞語幹に付加され始めることである。次例参照、*k'-o-s 及び *k'-i- に、指示代名詞語幹 *t-o- を付加して得られた、男・単・主 **KΛTO**, 中 **ЧΛTO** ; 古い生格形 **ЧЕCO** に、語尾 **-ΓO** 及び **-MOY** を付加して得られた、中・生 **ЧЕCO ΓO ЧЕСOMOY** (**ЧЕCO** の方は、代名詞語幹 *k'-e- と 代名詞語幹 *s-o- の結合である、§.33 参照) ; 主格形 **ЧΛTO** > **ЧTO** > **ШTO** と単数造格語尾 **-M** から得られた、中世ブ 中・単・造 **ШТОМЪ** (現代方言 **шoм**)。歴史的にみれば、代名詞 **ОНЪ** も **ОБЪ** も複合語幹を含んでおり、それは指示的語幹 *n-o- と *u-o- 及び前置的な指示的要素 e (対応階梯で o) によって得られたものである。この要素は、例えば、**E-CE** (スプラシル写本) (はるかに頻繁に用いられる **CE** と併用される)、現代ブルガリア語の **e-TO**、ロシア語の **(B)-O-T (= e-TO**、ただし、e の対応階梯と添加音 **B** を伴う) 及び **Э-ТОТ** に立証される。

スラヴ祖語 (古代ブルガリア語) も含む印欧諸語の名詞、代名詞、動詞の語尾の起源については、二つのモデル、ないしは二つの理論が存在している。一つは、青年文法学派モデルであり、もう一つは、活格モデルである。これは、印欧語及びスラヴ祖語の形態の説明にとって、類型論的に極めて重要な前提条件となる諸特徴を持っている活格文法構造という名称によって、このように呼ばれている。活格モデルについては、§.28 参照。

青年文法学派モデルによれば、文献以前の非常に古い印欧諸語の全てに、古代インド語及びギリシャ語の基本的な文法範疇とその形態指標が生きていたということであるから、青年文法学派モデルは、古代インド語・古代ギリ

シャ語モデルと言っても良い。このモデルは、文証される古代ブルガリア語の語形をそれに対応する古代インド、ギリシャ、リトアニア、ラテン、古代ゲルマン等の語形と比較しながら、スラヴ祖語の曲用と活用及びその語尾を再構する（文字の形にして提示する）のである。再構の目標は、一連の同系関係にある形（動詞の場合には、当該の人称、数、時制、相 [voice]、法及び活用形、名詞、代名詞にあつては、当該の性、数、格及び曲用形）と比較・歴史言語学の設定する転写法によって記述した単一の形の相互置換である。再構形は、そこから、青年文法学派が発見した規則の助けを借りて、それぞれの文法範疇の文証形のほとんど全てないしは全ての形を引き出すことができるため、原形と見なされている。例えば、青年文法学派モデルによれば、**uļkʷ-o-*「狼」の男性複数対格の原形は、**uļkʷ-o-ns* = 古イ
 複・対 *vřkān* , ギ *λύκονες* , ラ *lupōs*, ゴ *wulfans*, **ВЛ**
ЬКѢ リ *vilkūs* である。複数対格語尾 *-o-ns* は、ゴート語、古代ギリシャ・クレタ方言、例えば、*ἐ-λεύθε-ερ-ο-νες*「自由人出身の人々、両親が奴隷でない人々」、古プロシャ語、例えば、*deiw-a-ns*「神々」に立証されるが、これは明らかに本源的な形である。複数対格 **uļkʷ-o-ns* の、子音の *n* ないしは *s* が脱落して、先行母音 *o* がその後続子音の脱落が原因で延長したとするならば、そこから ラ 複・対 *lupōs* も古イ *vřkān* も引き出すことができるのである（複数対格 **ВЛЬКѢ** の語尾 **Ѣ** の起源については、§. 2 参照）。古代ブルガリア語には、始原的な複数対格語尾が鼻子音を含んでいたという間接証明がある — 複数対格 **ѠРРЗѠ**（キリール **КОРА**）では、鼻音要素 **Ѡ** はかつての語尾 *-ns* の *n* の継承である。男性複数対格の原形 **uļkʷ-o-ns* の再構、したがってその語尾 *-ns* の再構によって、男性複数対格語尾の起源の問題は、青年文法学派のモデルにおいては、解決されたものと見なされるのである。青年文法学派は、同様の手法で、ほとんど全ての名詞、代名詞、動詞の語尾の原形を設定したのである。

青年文法学派は、同一形に対して二つの異なる指標が存在する場合には、

古代インド語及びギリシャ語に一致するものを原形と見なし、また、古代インド語とギリシャ語の間に差異が現れる場合には、古代インド語に見られる方を原形と見なすのである。例えば、複数生格に対しては、二つの語尾が存在する：古イ 複・属 *vṛkān-ām* , リ *vilkū* , ギ $\lambda \acute{\upsilon} \kappa \omega \nu < *ul̥kʷ-ō-m$ に立証される *-ōm* と 複・生 **ΒΛΥΚΤ** $< *ul̥kʷ-o-m$ 、また同じく、ウムブリア方言 複・生 *frātrōm* $< *bhrātr-o-m^{(10)}$ に立証される *-om* である（スラヴ祖語の *-on, -om > -ъ* については、§. 2 参照；始原的な複数生格語尾は、本来 *-on* である、§. 36 参照）。青年文法学派モデルによれば、古代インド語もギリシャ語も長母音であり（リトアニア語も長母音を証明している）、一方、スラヴ祖語の語尾 *-om > -ъ* は、後に、*-ōm* 中の母音 *o* の短縮を経て得られたものであるから、複数生格の原語尾は *-ōm* であった。ドイツ人学者シュトライトベルク（W. Streitberg, 1892）は、この短縮を説明するために、曲音調（circum flex）の時スラヴ祖語の *-ōm* は *-om* に移行した、とする特別な法則を設定したのである。

o 語幹名詞曲用の男性複数主格の場合も、二つの語尾が存在する — 一つは、幹母音 *o* と語尾 *-es* から得られる語尾 *-ōs* であり（古イ 複・主 *vṛkāḥ* , ギ *wulfos* $< *ul̥kʷ-o-es$ を参照）、もう一つの語尾は、*-oi* である（複・主 **ΒΛΥΩΝ**, ギ $\lambda \acute{\upsilon} \kappa ο ι$, ラ *lupī* , リ *vilkai* $< *ul̥kʷ-o-i$ ）。青年文法学派モデルによれば、この原語尾は *-ōs < -o-es* である。古代インド語に見られるのはまさにこの語尾であり、語尾 *-oi* は、代名詞曲用から名詞曲用へ転用されたものだからである — 次例参照、複・主 **ΤΗ**, 古イ *te*, ギ *thai* $< *t-o-i$, ギ $ο ι < *s-o-i$ 「これらの」。青年文法学派によれば、語尾 *-es* が、子音幹曲用の全てに、また古い接尾辞 *-i-* 及び *-u-* を持つ名詞男性に特徴的であるという状況も、名詞男性複数主格形語尾 *-ōs* の始源性を証するのである — 次例参照、古イ 複・主 *mātārah* , ギ $\mu ε τ ε ρ ε ς$ 「母達」 $< *māt-er-es$; 古イ *āvayah* , ギ $ο ι ε ς$ 「羊」

< *ou-ei-es ; **КАМЕНЕ** < *kā-men-es < *H₂k'-eH₂-men-es ; **С**
УНОВЕ, 古イ sūnāvah < *sūn-eu-es ; **ГОСТЬЕ** < *ghost-ei-
 es 。

青年文法学派モデルにおいては、名詞の文法範疇も同じ様にして再構される。－ 名詞の始原的な基本的形態指標は、三つの性（男性、女性、中性）、三つの数（単数、複数、双数）、及び、o。語幹男性単数名詞曲用の古代インド語における様々な格形の数によって、八つの格（主格、属格、与格、対格、具格、処格、奪格、呼格）（古代インド語のその他の曲用では、格形の数はずっと少ない）である。青年文法学派モデルにおいては、古代インド・ギリシャ語的同系関係に基づいた主要な語形変化諸範疇は、もともと独立したものであり、形態的に不浸透性のものである。－ 数の形は、格の形と同一起源を持ち得ないし、性の形は、数の形と同一起源を持ち得ない、等。

§. 22 古代ブルガリア語の女性の起源

すでに19世紀最終四半世紀と20世紀初頭には、古代インド・ギリシャ語的照合から出てくる再構全部を、一般的な印欧語前史に当てはめることができる訳でないこと、またその全てがスラヴ祖語や古代ブルガリア語の形を引き出す基礎となり得る訳ではないことが、明らかになり始めた。中性複数の主語に対して、述語（名詞述語以外の）が単数におかれる（例、 $\pi\omicron\lambda\lambda\acute{\alpha}\tau\acute{\omega}\nu\ \acute{\upsilon}\pi\omicron\varsigma\upsilon\gamma\acute{\iota}\omega\nu\ \acute{\alpha}\pi\acute{\omega}\lambda\epsilon\tau\omicron\ \acute{\upsilon}\pi\acute{\omicron}\ \lambda\iota\mu\omicron\upsilon$ 「多数の労役用家畜が飢えのために死んだ」²⁴⁾）アッティカ方言の特殊な一致の仕方から出発して、ドイツの学者シュミット（J. Schmidt, 1889）は、中性複数の原形は本来単数の集合名詞であること、すなわちギリシャ語 $\tau\acute{\omicron}\ \delta\acute{\epsilon}\nu\delta\rho\omicron\nu$ 「樹（中・単・主）」と $\tau\acute{\alpha}\ \delta\acute{\epsilon}\nu\delta\rho\alpha$ 「樹（中・複・主）」の関係は、ブルガリア語の $\tau\rho\breve{\text{b}}\text{n}$ （リンボク、男・単）と $\tau\rho\breve{\text{b}}\text{n}\text{i}$ （複）との関係ではなくて、 $\tau\rho\breve{\text{b}}\text{n}$ と $\tau\rho\breve{\text{b}}\text{n}\text{a}\text{k}$ （リンボクの茂み、男性集合名詞）の関係に近いものであることを示した。

シュミットの発見から、二つのことが引き出される：1) スラヴ祖語の女性名詞の一部は、次のような集合的な意味を持つ抽象（派生）名詞であること — 例、**Господа**「男性仲間、集合」（サヴァの本では、**Господа**は、「食堂、旅籠屋、居酒屋」、すなわち男性の集まるところ、といった意味である。意味については、チェコ語 *hospoda*「旅籠屋、居酒屋」を参照）、**Юнота**「青春（時代）」（シナイ祈禱書 *Euchologium Sinaiticum* では、**Юнота**は、「若者、青年」の意）、**Слуга**「使用人、下僕」もっと前は、「奉仕、奉公」の意も）（cf. リ *slauga*「世話、看護」）、2) 女性範疇と集合多数性の間には、解明すべき何らかの始源的な関連性が存在すること。恐らくは、**Свинья**のような語（古文献には、例えば、複・造 **Свиньями**のような斜格形だけが文証されるが、これは 女・単・主 **Свинья**の形でもあり得る）は、**Жена** < *gen-, *g'en-「産

む」 (§.1 参照) が、もっと古い時期には、「家族、子供達を連れた母」(c f. ギ $\gamma \epsilon \nu \epsilon \acute{\alpha}$ 「氏族、種族、一族」) の意であった可能性があるのと同じように、豚の完全無事な(母子とも)出産を意味した可能性がある。

-ā 語尾の、ある種の中性集合名詞が単数女性名詞へ移行して行った過程は、ブルガリア語の歴史的諸文献中に追跡できる、長期にわたる過程である。今日の女性名詞単数形である уста (口), врата (戸、扉、門), кола (荷馬車) は、古い中性複数形であり、古代ブルガリア語テキストには、これを確証する資料がある — 例、複・与 БРАТ-О-МЪ, ОУС-Т-О-МЪ, 複・所 КОЛ-Ъ-ХЪ (СЕЛО の与、所格複数形 СЕЛ-О-МЪ, СЕЛ-Ъ-ХЪ と同じ変化であって、ЖЕНА の与、所格複数形 ЖЕН-А-МЪ, ЖЕН-А-ХЪ の変化ではない)。次のような一致も参照、Железни врата, големи уста, Сърдит Петко — празни му колата (鉄の扉に、大きな口、暴れ馬には、空荷の荷馬車) これは、врата, уста, кола が、古い複数形であることを示唆するものである。

シュミットの推論からして、本来、単数主格に -ā 語尾を持つ独立した女性範疇は存在しなかった、という結論を下すべきである。スラヴ祖語の

ā 曲用の原形は、単数名詞として使われる、同語尾の集合名詞形を包摂するものであった(アッティカ方言の一致を参照)。後に、この ā 形の中から、一つは、女性名詞が発生し(ЖЕНА ギ $\chi \acute{\omega} \rho \acute{\alpha}$ 「国、地方」, ラ terra 「土地、国、地方」)、もう一つは、中性複数主・対格形が分離したのである(СЕЛА ギ $\delta \acute{\epsilon} \nu \delta \rho \alpha$ 「木々」, ラ loca 「場所、地方」)。

印欧語の歴史における女性範疇の後進性については、次のような事実が証明している：

1. 単数主格に男性、女性、中性の三語尾を持つ、一般に見られる形容詞タイプ(例、ДОБРЪ, ДОБРА, ДОБРО ; ギ $\kappa \alpha \lambda \acute{o} \varsigma$, $\kappa \alpha \lambda \acute{\eta}$, $\kappa \alpha \lambda \acute{o} \nu$; ラ bonus, bona, bonum) と並んで、ギリシャ語、ラテン語には、単数および複数の、主格および対格に二語尾のものがある —

例、単・主 ギ $\sigma\acute{\omega}\phi\rho\omega\nu$ (男・女) と $\sigma\acute{\omega}\phi\rho\omicron\nu$ (中)「賢い」, $\epsilon\breve{\upsilon}\epsilon\lambda\pi\iota\varsigma$ (男・女) と $\epsilon\breve{\upsilon}\epsilon\lambda\pi\iota$ (中)「有望な、希望に燃える」, ラ brevis (男・女) と breve (中)「短い」; 単・対 $\sigma\acute{\omega}\phi\rho\omicron\nu\alpha$ (男・女) と $\sigma\acute{\omega}\phi\rho\omicron\nu$ (中), $\epsilon\breve{\upsilon}\epsilon\lambda\pi\iota\nu$ (男・女) と $\epsilon\breve{\upsilon}\epsilon\lambda\pi\iota$ (中), brevem (男・女) と breve (中); 複・主 $\sigma\acute{\omega}\phi\rho\omicron\nu\epsilon\varsigma$ (男・女) と $\sigma\acute{\omega}\phi\rho\omicron\nu\alpha$ (中), $\epsilon\breve{\upsilon}\acute{\epsilon}\lambda\pi\iota\delta\epsilon\varsigma$ (男・女) と $\epsilon\breve{\upsilon}\acute{\epsilon}\lambda\pi\iota\delta\alpha$ (中), brevēs (男・女) と brevia (中); 複・対 $\sigma\acute{\omega}\phi\rho\omicron\nu\alpha\varsigma$ (男・女) と $\sigma\acute{\omega}\phi\rho\omicron\nu\alpha$ (中), $\epsilon\breve{\upsilon}\acute{\epsilon}\lambda\pi\iota\delta\alpha\varsigma$ (男・女) と $\epsilon\breve{\upsilon}\acute{\epsilon}\lambda\pi\iota\delta\alpha$ (中), brevēs と brevia (中)。単数主格の $-s$ 語尾には存否があるが、複数主格に、語根母音延長と語尾 $-es$ を持つような形容詞形は、男性、女性名詞の両形に一致するのに対して、主格でそのような語尾を持たない形は、中性名詞の形に一致する。換言すれば、このようなタイプの形容詞にあっては、中性は、男性、女性に対して、個別に対立しているのではなく、男性、女性の共通特徴を含んでいるため、有生 (οδυσθεν , animate) と呼び得るような、同一共通性に対して対立しているのである。このような場合には、中性は、無生 (ηοδυσθεν , inanimate) と呼び得るのである⁽¹¹⁾。

2. 単数主格において、三語尾、すなわち $-ος$ (男性), $-α$ (η) (女性), $-ον$ (中性) を持つ、いくつかのギリシャ語形容詞にあって、男性形が女性形に代替する場合がある。例えば、 $\eta\epsilon\rho\eta\mu\eta\omicron\delta\acute{o}\varsigma$ 「人気のない、寂しい道」に代えて、 $\eta\epsilon\rho\eta\mu\omicron\varsigma\omicron\delta\acute{o}\varsigma$ を使うことができる。このことは、単数主格に二語尾、すなわち $-ος$ と $-ον$ を持つ形容詞体系は、三語尾形容詞体系よりも古いこと、また、形容詞曲用には、女性範疇は比較的遅く現れたものであることを示唆している。接尾辞 (幹母音) $-o-$ 及び $-ā-$ を持つ形容詞についてのこの結論は、単数主格に $-os$ 語尾を持つギリシャ語、ラテン語 o 語幹名詞が、男性名詞 (例、ギ $\omicron\lambda\acute{\upsilon}\kappa\omicron\varsigma$ = ラ lupus 「狼」) だけではなく、女性名詞

(*ἡ παρθένος* 「年頃の娘」、*ἡ ὁδός* 「道」、*ἡ νῆσος* 「島」、*ἡ ἀμπελος* 「葡萄の樹」、*populus* 「ポプラ」、*quercus* 「かし、オーク」、*laurus* 「月桂樹」) も含むものであることに着目するならば、名詞に対しても一般化することができるのである。単数に *-s* 語尾を持つ *o* 語幹名詞は、始原的な男性ではなく、もっと一般的な有生類に由来するものであり、それが後に男性と女性に分化したのである。さらに、始原的な有生類の範囲内に性の区別が欠けていることについては、ソナント接尾辞 (*-i-*, *-u-*, *-r-*, *-n-*) を持つギリシャ語、ラテン語の男性、女性名詞曲用が証明している — *ὁ στάχυς* 「穂」と *ἡ πίτυς* 「松」、*ὁ ὄφις* 「蛇」と *ἡ πόλις* 「都市、国家」、*ὁ πατήρ* 「父」と *ἡ μήτηρ* 「母」、*ὁ ἡγεμών* 「案内人、指導者」と *ἡ ἀηδών* 「鶯」、*fructus* 「果実」(男性 *u* 語幹) と *quercus* 「オークの木」(女性 *u* 語幹) のそれぞれのパラダイム間には、いかなる差異も存在しない。男・複・主 **КАМЕН-Е** と 女・複・主 **МАТЕРИ** ; 男・複・主 **ЛЮДЬЕ** と 女・複・主 **КОСТИ** の語尾の差異は、もっと後の推移の結果である。*ὁ λύκος* 「狼」と *ἡ παρθένος* 「若い娘」、*ὁ στάχυς* 「穂」と *ἡ πίτυς* 「松」、*ὁ πατήρ* 「父」と *ἡ μήτηρ* 「母」の原形間の真の性の区別が始まったのは、ようやく、これらの名詞の一部が *o* 語幹形容詞と一致し、また別の一部が *a* 語幹形容詞と一致し始めた時になってである (§. 20, 注 9 参照)。

3. ヒットライト語に、またルウィ語²⁸にも同じく、名詞の二分法(有生類ないしは活性類と無生類ないしは不活性類)が存在しているが、これは、明らかにその他の印欧諸語にみられる名詞の三分法(男性、女性、中性)よりは古いのである。

有生(活性)類が始原的に統一性を持っていることは、古代ブルガリア語の次のような形態特徴がこれを示している：

1. 疑問代名詞の曲用における、中性(すなわち無生)形(主・対 **Ч-Л-Т**

о, 生 **Ч-Е-СО**, 与 **Ч-Е-СО-МОУ**, 造 **Ч-И-МЬ**, 所 **Ч-Е-СО-МЬ**) に対立する男性、女性 (すなわち、有生) 共通形 (主 **КЪТО**, 生 **К-О-ГО**, 与 **К-О-МОУ**, 造 **ЦЪМЬ** < *kʷo-i-mi, 所 **К-О-МЬ**)。疑問代名詞 **КЪТО** は、男性、女性、単数、複数の人の名前の代わりに使用される — 例、ルカ VII-39 マリア写本 **ВѢДѢЛЪ БИ ОУБО КТО И КАКОВА ЖЕНА ПРИКАСАДѢ СѦ ЕМЬ** ((その人は) 自分にさわっている女が誰だか、どんな女か判るはずだ) ; ヨハネ VI-64 マリア写本 **КТО СЖТЪ НЕВѢРОУЮЩЕН** (誰が信じないものであるか) ; マタイ XII-48 **КЪТО ЕСТЬ МАТИ МОѢ И КТО СЖТЪ БРАТРИ ТЪ МОѢ** (私の母とは誰のことか、私の兄弟とは誰のことか)。事物や抽象的な名称の代わりには、**ЧЪТО** が使われる — 例、ルカ XXIV-17 マリア写本 **ЧТО СЖТЪ СЛОВЕСА СИ** (この話しは何のことか) ; マルコ VI-2 マリア写本 **ОТЪ КЖДОУ СЕ ЕСТЬ СЕМОУ. І ЧТО ПРѢЖДОСТЬ ДАНАТЪ ЕМОУ** (この人は、このことをどこから (得たの) か、この人の授かった知恵はどうだろう)

2. 古い о 語幹は、指示、承前、複合疑問代名詞の女性単数において、主格、対格以外の曲用では、男性形が作られている語幹に一致している。次例参照、男・単・主 **ТЪ** < *t-o-s, 生 **Т-О-ГО**, 与 **Т-О-МОУ**, 女・単・主 **ТА** < *t-eH₂, 生 **Т-О-Ѧ**, 与 **Т-О-И** ; 男・単・主 **ОНЪ**, 生 **Е-ГО**, (**ІЕГО**) < *i-o-go, 与 **Е-МОУ**, 女・単・主 **ОНА**, 生 **Е-Ѧ**, 与 **Е-И** ; 男・単・主 **КЪИ**, 生 **К-О-ЕГО**, 与 **К-О-ЕМОУ**, 女・単・主 **КАИ**, 生 **К-О-ЕѦ**, 与 **К-О-ЕИ**。対応階梯、すなわち о 階梯に代わって、正常階梯、すなわち е 階梯が現れる場合については、指示代名詞 **СЪ** を参照 : 男・単・主 **СЪ** < *kʷ-i-s, 生 **С-Е-ГО** < *kʷ-e-go, 与 **С-Е-МОУ**, 女・単・主 **СИ** < *kʷ-i-H₂, 生 **С-Е-Ѧ**, 与 **С-Е-И**。Cf. 以下の *t-o- (*t-e) 語幹 : 古イ 男・単・属 **t-á-sya** 「これの」, 与 **t-á-smai**, 女・単・属 **t-á-syāh**, 与 **t-á-syai** ; ゴ 男・単・属 **this** < *t-e-so, 与 **thamma** < *t-o-s-m-,

女・単・属 thizos, 与 thizai < *t-e-。古代インド語やゴート語の女性単数属格形が、それぞれの男性属格形から得られたものであることは極めて明瞭であり、このことは、かつての無生類中での男性 — 女性の対立は二次的なものであることを間接的に証明するのである。

ā 曲用の基になった -ā 語尾は(単・主 ЖЕН-А, 複・与 ЖЕН-А-МЪ, 造 ЖЕН-А-МИ, 所 ЖЕН-А-ХЪ; ギ 単・主 χ ὥ ρ -ā 「国、地方」, 属 χ ὥ ρ -ā -ς, 対 χ ὥ ρ -ā -ν; ラ terra 「土地、国、地方」, 古ラ terr-ā-s, 対 terr-a-m)、当初は女性範疇とは無関係であり、集合多数性というサブ・カテゴリーも含めたもっと一般的なカテゴリーに関連するものであった。双数形(例、主・単 БРАТРА)を持つが、本当の複数形を持たない 男・単・主 БРАТРЪ を参照。絶対単数(singulāria tantum)である補充法的集合名詞 БРАТРЪИ「兄弟仲間、集団」が、複数の意味で使われる。次例参照、マタイ XII-46 マリア写本 СЕ МАТИ И БРАТРЪЕ ЕГО СТОУХЪ ВЪНЪ(その母と兄弟達は、外に立っていた); マタイ XXII-25 マリア写本 БЪ ЖЕ ВЪ НАСЪ СЕДМЪ БРАТРИИ(さて、私たちのところには七人の兄弟があった); マタイ XXIII-8 マリア写本 ВЪСИ ЖЕ ВЪ БРАТРЪЕ ЕСТЕ(あなた達は皆兄弟である); マタイ XII-48 マリア写本 КТО СХТЪ БРАТРЪЕ МОЕ(私の兄弟とは誰のことか)。

集合多数性の語尾 -ā は、幹母音正常階梯 e と集合性(一括性)指標 H₂ から、すなわち eH₂ > ā (§. 3 参照)から発生したものである。-ā 語尾の集合名詞の一部は、中性の先行形である無生(不活性)類名詞の複数形として使われ始めた。ギ 中・単・主 τ ὀ δ έ ν δ ρ ο ν 「樹木」, 複 τ ᾶ δ έ ν δ ρ α; 中・単・主 СЕЛО, 複 СЕЛА; ラ 中・単・主 iugum 「(連畜の)くびき」, 複 iuga のようなペアの原形は、初めからパラダイムを構成していたのではなく、ブルガリア語の трън(リンボク)と трънак(リンボクの茂み)のように二つの独立した単語であった。原接尾辞 -e- (及びその階梯)を持つ有生(活

性)類の名詞のあるものは、その複数形(分割多数性の形)と並んで、集合形(非分割多数性の形)も持っていたのである。無生(不活性)類名詞も同じく、その集合形と並んで、分割多数性の形も持つことができた、すなわち現代語の *трън* (単数形), *трънак* (集合形), *тръни* (複数形) という三つ組の形が可能であった。*трънак* の接尾辞 *-k* が、中性複数語尾 *-ā < -e-H₂* を作っている *H₂* 指標と同じものである可能性については、マルティネ (A. Martinet, 1955) が書いている。彼によれば、*H₂* 音は、始原的な活性類名詞の表徴である単数主格語尾 *-s* の前で、後舌子音 *k* に変わったのである。

二種類の異なる複数形は、ギリシャ語及びラテン語に立証される。そこでは、男・単・主 *locus* 「場所、位置」, *acinus* 「果実の実」, *κέλευθος* 「道、細道」, *μηρός* 「股、股肉」に対して分割(可算)多数性の形 *- locī, acinī, κέλευθοι, μηροί* と非分割(一括、不可算)多数性の形 *- loca, acina* 「房、葡萄」, *κέλευθα, μῆρα* が対応している。古代ブルガリア語の、中・単・主・対 *нго*, 複 *нга*, 双 *нст* のタイプの三つ組には、古い集合形 *нга < *iug-e-H₂* と双数形として再解釈を受けた、可算多数形 *нст < *iug-o-i* を判別することができる。

性におけるいくつかの揺れも、一つは可算多数性の、もう一つは不可算多数性の形という二つの形の存在によって、説明すべきである。古代ブルガリア語においては、中・単・主・対 *езеро* の形と並んで、男・単・主 *езеръ* (cf. ス *jêzer*) の形も存在している。後者の単語は、リ 男・単 *ēžeras, āžeras* 「湖」から判るように、古い単語である。しかし、集合形 *ЕЗЕРА* (= 中・複・主・対) は、古い語尾 *-oi* を持つ複数形 (= 古ブ *-н*) を駆逐し、*ЕЗЕРА* を基にして、中・単・主・対 *ЕЗЕРО* の形を作りだしたのである。同様の過程は、中・単・主・対 *assaran* 「湖」の形から判るように、古プロシャ語にもある。いくつかのラテン語の、例えば、*rāster* (男) と *rāstrum* (中) 「鋏、鋤」の性の揺れも、複数形

rāstri と rāstra と併せて、同様の説明を行うべきである⁽¹²⁾。

一連の事物や現象は、古代人の意識の中で、ある時は有生、またある時は無生として存在した。ギリシャ人たちは、現れたり消えたり、また生き物のように夜の天空に自分の運行を続ける個々の天体を ἀστὴρ (男) (星) と呼んだ。ἀστρον (中) 「星座」という名詞は、その全体が非分割 (不可算) 多数の星 — ἀστροα — を構成する不動の天体によりふさわしいものであった。ラテン語 pira (女) 「梨」は、生き物のように果実を生み出す果樹の名称である ; 一方、pirum (中) は、個々の果実の名称であって、果実全ての総体が、樹に点々と散りばめられている、非分割多数である pira 「梨」を構成しているのである。

§. 23 古代ブルガリア語における男性カテゴリー

後期スラヴ祖語期には、新たに男性名詞（主として *o, io* 語幹）の再編が始まった。この曲用の範囲内に、*-ā (-ia)* 語尾を持つ単数生格形を単数対格の意味で使用することを基本特徴とする、いわゆる人間類（личен подрод）名詞が発生したのである。人間類名詞（その全てではないが）は、単数与格に常に *-oy (-yo)* を持つ非人間類と違って、時として、単数与格に *-ovi (-evi)* 語尾を持つことがある。

男性人間類には、人の名前、とりわけ社会的要職を占める人物の固有名詞が属している。次例参照、マタイ XIV-10 マリア写本 **І ПОСЪЛАВЪ ОУСТѢКНЪ ИОНА ВЪ ТЕМЪНИЦИ**（人を遣わして、獄中でヨハネの首を切り落とした）；マタイ I-2 サヴァの本 **АВРАМЪ РОДИ ИСАКА**（アブラハムはイサクをもうけた）；マタイ XVII-1 マリア写本 **ПОУТЪ ИС ПЕТРА И ИТКОВА И ИОНА БРАТРА ЕГО**（イエスは、ペテロ、ヤコヴと彼の兄弟ヨハネを連れていった）；マタイ I X-8 マリア写本 **ВИДѢВШЕ ЖЕ НАРОДИ ЧУДИША СЯ И ПРОСЛАВИША БА**（群衆は〔それを〕見て驚き、神を讃えた）；マタイ I X-9 マリア写本 **ВИДѢ ЧЛКА НА МЪТЪНИЦИ СѢДЯЩА ИМЕНЕМЪ МАТЕА**（マタイという人が収税所に座っているのを見た）；マルコ V-35 **ЧТО ДВИЖЕШИ ОУЧИТЕЛЪ**（どうしてあなたは先生を煩わすのですか）；スプラシル写本 23₂₄ **И ВСИ НАСЛАЖДАЮШТЕИ СЯ ЧОУДЕСЪ СЛАВА ТЪ ОТЦА И СНА И СТАДО АХА**（神の御業を味わう人たちは全て、父と子と精霊を讃えよう）。いくつかの例では、男性人間類の特徴としての、対格での単数生格の使用は、擬人法の義務となっている。次例参照、ヨハネ XVI-8 マリア写本 **ОБЛИЧИТЪ МИРА О ГРѢСѢ**（世〔の人々〕の罪について、明らかにするであろう）；スプラシル写本 338₄₀ **И АДА ВИДИШИ ГОСПОДЬСКОМЪ ПОВЕЛ**

ЪНИИМЪ (汝は、主の命によりて、黄泉の世界を見ることになる) ; ヨハネ XII-36 マリア写本 **ВЪРОУИТЕ ВЪ СВѢТА** (汝ら、光を信じなさい) ; スプラシル写本 24_з **И ПРОЗАБОСТА ПЛОДА БЛАГОВѢРЪНААГО. И НАРЕКОША ИМА ЮМОУ КОНОНЪ** (彼ら二人は敬虔なる実を育てたが、彼らはその名をカナンと名付けた) ; 同写本 396_з **СЕ ГО ХЛѢБА МАРИИ РОДИ** (マリアはこのパンを産み出した) ; 同写本 505_з **ТЫ ГРѢХА ВЪ ПЛѢТИ ОТЪСЖАИ** (汝は、肉体に存する罪を断罪した) ; 同写本 155₇ **РЪЦИ ОУБО НАМЪ КТО СЫ ТАКО ЛЪСТИШИ НАРОДА** (それでは、汝は一体誰であり、また民を誘惑するのか、述べてください)。中性名詞の場合も、単数生格が対格として使われる場合がある。次例参照、スプラシル写本 448_з **СЪВАЗАША ВЕЛИКААГО САФОНА СЛЪНЦА ХА** (彼らは偉大なるサブソン、太陽であるキリストを捉え縛った) ; シナイ詩編 CIII-2 **ПРОПИНАМИ НЕБА ЯКО И КОЖА** (天を皮の如く礫にする者は) ; スプラシル写本 154_з **ОБРАШТЕТЕ ТѢЛА МОЕГО** (汝らは我が肉体を得る)。

対格として使われる、**ОТЦА, ГОСПОДА (ГОСПОДЪ), СЫНА, МЖА, ЧКА, НАРОДА, ГРѢХА** 型の生格形に合わせて、単数女性生格形 **МАТЕРЕ, ДЪШТЕРЕ** (er 語幹), **ЦРЪКЪВЕ, НЕПЛОДЪВЕ, СВЕКРЪВЕ, ЛЮБЪВЕ** (ŭ 語幹) も、対格として使われた。次例参照、マタイ X-37 サヴァの本 **ЛЮБАИ ОЦА ЛИ МТРЕ** (父または母を愛する者は) ; スプラシル写本 35_з **СЪ ВЕЧЕРА ИДЖШТЕ ВЪ СЪБОРЪНЖЪ ЮМОУ ЦРЪКЪВЕ** ([彼らは] 夕方より大聖堂に来ると) ; 同写本 203_з **РАЗОУМѢВЪ ЖЕ БЛАЖЕННИ ДОУХОВЪНЖЪ ЮЮ ЛЮБЪВЕ** (至福なる者は彼ら二人の心の愛を悟りて)。

古文献には、男性の人の名称において、-Ъ 語尾の単数対格形が残っている場合もある。次例参照、スプラシル写本 292_{1в} **БОГЪ ЖЕ ИЖЕ ПРИСНО СВОИ ШТАДА РОБЪ АГГЕЛОМЪ СВОИМЪ ЗАПОВѢАА** (さて、自分が使っている者をいつも大切にしている神は、自分の天使

達に命じた) ; クローツ文書 660 **РАЗБОИНИКЪ СЪ ХМЪ РАСПН
АЖШТЕ** (彼らはキリストと共に強盗を磔にして) ; マタイ XI-10 マリ
ア写本 **СЕ АЗЪ ПОСЛАХ АНГЛА МОИ ПРѢДЪ ЛИЦЕМЪ Т
ВОИМЪ** (私は、汝の前に我が天使を遣わす)。男性単数の対格形に代えて
の生格の使用は、いくつかの場合、動物名にも見られる。次例参照、ヨハネ
X-12 マリア写本 **ВИДИТЪ ВЛЪКА ГРАДЖДА** ([その者は] 狼が
近づいてくるのを見る) ; スプラシル写本 192₇ **ИМЪ ЗА ОУЗАЖ
КОНЪ ЮГО** ([その者は]) 彼の馬の頭絡を取ってから) ; シナイ詩編 X
C-13 **ПОПЕРЕШИ ЛЪВА І ЗМЪТЪ** (汝は、ライオンと蛇を踏みつけ
る)。

単数与格語尾 **-ОВИ (-ЕВИ)** の使用は、男性有生類名詞にあって、はる
かにもっと一貫性に欠けている。次例参照、**БОГОВИ** (マリア写本に 4 回、
スプラシル写本では約 25 回) に対して **БОГОУ** (マリア写本に 12 回、ス
プラシル写本で約 150 回 ; 詩編では **БОГОУ** だけである), **ГОСПОДЕВ
И** (マリア写本に 8 回、スプラシル写本で 1 回) に対して、**ГОСПОДЮ** (マ
リア写本 4 回、スプラシル写本 36 回 ; シナイ詩編では **ГОСПОДЮ** だけ),
КЕСАРЕВИ (マリア写本 8 回、スプラシル写本 1 回) に対して、**КЕСАРЮ**
(スプラシル写本 1 回), **ИСОУСОВИ** (マリア写本 33 回) に対して、**ИСО
УСОУ** (マリア写本 8 回), **ИОАНОВИ** (マリア写本 6 回) に対して、**ИОАН
ОУ** (マリア写本 2 回), **ПЕТРОВИ** (マリア写本 13 回、スプラシル写本 2
回) に対して、**ПЕТРОУ** (マリア写本 4 回、スプラシル写本 2 回)。更に以
下を参照、**АДАМОВИ**, **БЛАГОДѢТЕЛЕВИ**, **ВРАЧЕВИ**, **ИУСИФОВИ**
(スプラシル写本), **АРХИСУНАГОГОВИ**, **АРХИТРИКЛИНОВИ**, **ВИНА
РЕВИ**, **ИЗДРАНИЛЕВИ**, **МЖЖЕВИ**, **ЦѢСАРЕВИ** (マリア写本)。人の名
前ではない男性名詞でも、中性名詞でも、どちらも擬人化される場合には、
単数与格語尾 **-ОВИ (-ЕВИ)** が見られる。次例参照、スプラシル写本 47
6₁₈ **ГЛАГОЛАШЕ АДОВИ** (地獄に向かって話した) ; 同 412₆ **МОРЕ
ВИ ЗАПРѢШТАЖШТАДГО** (禁じている者の海に対して)。

男性有生類名詞のこのような曲用（単数対格語尾 *-a* と 単数与格語尾 *-ovi*）は、チェコ語にも立証される。次例参照、単・主 *pán*「方、紳士」, 対 *pána*, 与 *pánovi*, *pánu* に対して、単・主 *hrad*「城」, 対 *hrad*, 与 *hradu*。チェコ語の有生男性類名詞曲用と無生男性類名詞曲用の間には、別の差異も存在している — 次例参照、単・生 *pána* と *hradu*（古い *u* 語幹語尾）, 前置格（古い所格） *pánu*, *pánovi*（=チ 与格）と *hradě*（= 単・所 **ГРАДЪ**）。ウクライナ語には、男性名詞の曲用に三種類のものがある：

1. 理性ある生物（人間） — 例、**бог**（神）, **ангел**（天使）, **син**（息子）, **чоловік**（人）, **наймит**「作男、使用人」, **вітер**「風（擬人法）」, **учитель**（先生）, **цесарь**「皇帝」, **швець**「仕立て屋、靴屋」, **Петро** のような固有名詞 — 単数対格（古い生格）語尾 *-a* と複数対格（古い生格）語尾 *-iv*（**-овъ** から）。例、単・主 **бог**, 生・対 **бога**, 複・主 **боги**, 生・対 **богів**。

2. 動物、植物、ゲーム、貨幣 — 例、**віл**「去勢した雄牛」, **голуб**（鳩）, **рак**（ザリガニ, エビカニ）, **червак**（虫）, **осел**（ろば）, **дуб**（樅）, **дурак**（トランプ遊びの一種）, **козак**（踊りの種類）, **рубель**（ルーブル [貨幣単位]）, **франк**（フラン [貨幣単位]） — 単数対格語尾 *-a* と複数主格に等しい複数対格形。例、単・主 **голуб**, 対 **голуба**, 複・主・対 **голуби**。

3. 無生類のもの — 例、**нарід**「国民、民（衆）」, **день**（日、昼間）, **стіл**（テーブル、机）, **вугол**「角」, **гриб**「墓」 — 単数、複数ともに、主・対格同形。例、単・主・対 **гриб**, 複・主・対 **гроби**。

§. 24 始原的名詞接尾辞 -H₂-

語尾 -ā を持つ女性名詞は、始原的には、集合名詞や集合的な意味を持つ抽象名詞と同系関係にあった。概して、女性範疇は、比較的新しいものであり、無生類（後の中性）と対立する始原的に単一の有生類が、男性、女性範疇に相当する二種類に分解した時点で始めて顕現してきたものである。印欧祖語の統語体系の根本的再編こそ、こうした分解の必要条件であったが、この再編については、§. 33 及び §. 38 において検討することになろう。中性範疇の複数の起源についてのシュミット説の観点（§. 22 参照）からすれば、女性指標 ā（単・主 ЖЕН-А, 複・与 ЖЕН-А-МН, 所 ЖЕН-А-ХЪ）は、複数中性指標 ā と同じものである（複・主・対 СЕЛА < СЕЛО）。ラリソナル・モデル（§. 3 参照）の観点からすれば、ā 表徴を持つ女性形と同語尾を持つ中性主・対格複数形の基になった始原的な共通範疇指標は、H₂ の要素であった。

語尾の -ā は、eH₂ に由来するもので、H₂ 指標を含む — 単・主・対 ИГО < *iug-o と 複・主・対 ИГА < *iug-e-H₂ の原形は、同一接尾辞を含んでいるが、ただし2つの異なる階梯である対応階梯と正常階梯としてである。ИГА の原形においては、正常階梯の接尾辞の後ろに、非分割（一括）多数性指標 H₂ があったのである。我々は、同指標を、中性複数主・対格形の指示代名詞 СН < *k'-i-H₂ にも見ておかななくてはならない — cf. 男・単・主 СЬ「これ」 < *k'-i-s ; СН < *k'-i-H₂ は、女性単数主格の形でもある。言い換えれば、女性単数主格と中性複数主・対格 СН < *k'-i-H₂ の、男性単数主格 СЬ < *k'-i-s に対する関係は、女性単数主格と中性複数主・対格 ТА < *t-e-H₂ の、男性単数主格 ТЬ < *t-o-s に対する関係と同じである。この同じ H₂ 指標は、古い ū 語幹の原形の特徴も表示している。次例参照、単・主 ЖРЬНЫ, 生 ЖРЬНЪВЕ「石臼、製粉所、水車」, ЖЕЛЫ, ЖЕЛЪ

ВЕ「亀」, **КРЪВЪ** (古い対格形 $< *krū$, cf. ス **krî**「血」), 生 **КРЪВЕ**。明らかに、***КРЪ** $< *krū < *kru-H_2$ は、u 語幹名詞の古い集合形であり、これは、中性複数主・対格形 **ИГА** $< *iug-e-H_2$ が、e 語幹名詞 (対応階梯では o) の古い集合形であるのと同じである。かつて ***КРЪ** $< *kru-H_2$ に、 H_2 指標が存在したことを間接的に証明しているのが、 H_2 が α に変わる (§. 3 参照)、ギリシャ語中性主・対格形 **κρῆας** $< *kr-eu-H_2-es$ である。

印欧祖語期には、二つの主要な名詞類が存在したが、一つは有生類ないしは活性類で、後にそこから男性範疇及び女性範疇が発生してくるのであり、もう一つは、無生類すなわち不活性類であり、そこから後の中性範疇が発生して来たのである。それ以外に、 H_2 指標による特徴表示を受けた派生名詞類である、第三グループの名詞も存在した。このグループの中から、 $\bar{a}$ 語幹名詞と中性名詞複数形が発生したのである。いくつかの印欧語 (例えば、古代ブルガリア語、ラテン語、ギリシャ語) には、 $\bar{a}$ 語幹男性名詞も存在している — 例、単・主 **СЛОУГА**, **ВОЕВОДА**, **СТАРѢШИНА**, ラ **scriba**「書記、書く人」, **homicida**「殺害者」, **agricola**「農夫」, $\nu \epsilon \bar{\alpha} \nu \bar{\iota} \bar{\alpha} \varsigma$ 「若者」, **στρατιώτης**「兵士」, **γεωμέτρης**「測量士、幾何学者」。

主格単数形が純粹語幹の形を成している、古代ブルガリア語やラテン語の形は、明らかにギリシャ語の形よりも古いものであって、ギリシャ語の語尾

s は、男性名詞の別の曲用からもらい受けたものである。極めて興味深い古代ブルガリア語の特徴として、**СТАРѢШИНА** や **СЛОУГА** のような名詞が、単数では、形容詞や分詞の男性形に一致するのに対して、複数では、原則として、形容詞女性形、また稀には同格的用法の分詞の女性形と一致するのである。次例参照、スプラシル写本 58_з **ШЕДЪ ЖЕ ЛЮТЫ**

СЛОУГА ТЪ (その悪しき僕がやってきて) ; 同写本 240_и **ВИДѢВЪ**

ЖЕ СТАРѢШИНА ЖЬРЬЧЬСКЪ (祭司長が見て) に対して、同写本 260_о **ТО СЛЪШАВЪША ОТЪ НЕЮ СТАРѢШИНЪ ВЛЪШЪС**

КЪА. РАЗГНѢВАВѢША СА ЗѢЛО. ПОВЕЛѢША СЪВАЗАТИ И
 (祭司長たちは、彼ら二人からそのことを聞いて、激怒し、その者を縛るよう命じた) ; 同写本 201. **ПОВЕЛѢ ЖЕ ЦѢСАРЬ ФЕВДОСИИ. ПР**
ИТИ НА СѢБОРѢ И СТАРѢШИНАМѢ ЕРЕТИЧѢСКАМѢ (テ
 オドシウス帝は、異教の族長達にも会議に来るよう命じた) ; 同写本 12₃₀
И ПРИСТѢПѢША СЛОУГѢ СЪВАЗАША ЮМОУ РЖЦѢ (使用人
 達は、近づいてくると、彼の両の手を縛った) ; 同写本 118₂ **СЛОУГАМ**
Ѣ ЖЕ ВЪЗГНЕТИВѢШАМѢ ОГНѢ (使用人達が火を焚くと)。ただし、
 次例も参照、ヨハネ II-9 マリア写本 **СЛОУГѢ ВѢДѢХѢ ПОЧРѢП**
ѢШЕИ ВОДѢ (水を汲んだ僕達は知っていた) ; スプラシル写本 116₂₇
ОТѢНЕМОГѢШЕМѢ ЖЕ СЛОУГАМѢ (絶対与格構文) (使用人達は疲
 れ果てて)。恐らくは、**СТАРѢШИНА**, **ВЛАДѢКА**, **СЛОУГА** のような
 語は、始原的な集合名詞、抽象名詞の意味あい何が残したのである
 — **СЛОУГА** は、むしろ、召使い (集合)、奉仕、奉公の意、 **СТАР**
ѢШИНА は、族長職、長老職の意、また、**ВЛАДѢКА** は、支配 (権)、
 覇権の意で用いられたのである。このことは、次のような例に良く現れてい
 る — **МАТАИ VIII-9** マリア写本 **АЗѢ ЧЛѢКѢ ЕСМѢ ПОДѢ В**
ЛАКОМѢ = $\acute{\epsilon} \gamma \omega \acute{\alpha} \nu \theta \rho \omega \pi \acute{o} \varsigma \epsilon \acute{\iota} \mu \iota \upsilon \rho \rho \acute{o} \nu \sigma \acute{\iota} \alpha$
 ν ($\tau \alpha \sigma \sigma \acute{o} \mu \epsilon \nu \omicron \varsigma$) 「私は権威の下にある者です (逐語的には、権
 力の下にある、権威の下にある)」 ; cf. ギリシャ語の同じテキストが、
 次のように翻訳されている、**ЛУКА VII-8** マリア写本を参照、**АЗѢ ЧЛѢК**
Ѣ ЕСМѢ ПОДѢ ВЛАСТЕЛѢ ОУЧИНЕНѢ (私は支配者の下に服して
 いる者です) (アッセマーニ写本 Codex Assemanianus では **ПОДѢ В**
ЛАСТЕЛѢ、サヴァの本では **ПОДѢ ВЛАДѢКАМИ**)。語尾 $-\bar{a} < e$
 H_2 を持つ集合名詞の原義は、語尾 $-\bar{a} < eH_2$ の女性名詞の原義と同
 じだったのである — 次例参照、ラ **pira** (女) 「梨を産出する木」, **pir**
a (中・複) 「梨の木の果実」。すなわち、印欧祖語においては、女性と集合
 多数性とは、同一のものであった。それ故に、**СЛОУГА** や **СТАРѢШИ**

HA のような名詞の複数形が、形容詞やまた稀に同格的用法の分詞 (*participia conjuncta*) の女性形に一致するのである。

§. 25 古代ブリガリア語の u 語幹の起源

名詞範疇内に見られる始原的末尾 H_2 は、増大、増殖、増加の観念（すなわち、生命の女性起源）、多数の肉体を孕むないしは含む一つの肉体の観念（すなわち、増大多数性）、生きとし生ける物すべての共通の始祖たる母なる大地の観念、そして滅びの観念、すなわち、産出をもたらす死（新しきものが来るべく、滅び行く古きもの）の観念に関連している。大地 —

これは、陸地であり、島であり、国であり、都市であり、大陸であるが、これらは、ギリシア語やラテン語では、女性起源の生物と全く同じように、常に女性起源である — 例、 $\eta \Lambda \acute{\epsilon} \sigma \beta \omicron \varsigma$ (島名), $\eta \text{Κολοφών}$ (都市名), $\eta \Theta \rho \acute{\alpha} \kappa \eta$ (国名、地名), $\eta \text{Εὐρώπη}$, $\eta \nu \eta \sigma \omicron \varsigma$ 「島」, $\eta \eta \pi \epsilon \iota \rho \omicron \varsigma$ 「陸地」, $\eta \pi \acute{o} \lambda \iota \varsigma$ 「都市」, Aegyptus, Rhodus (島名), Rōma, insula 「島」, urbs 「都市」。母が自分の子を産み出すと同じように、自分の果実を産み出す樹木の名称も女性起源である — 例、 $\eta \delta \rho \acute{\upsilon} \varsigma$ 「オークの木」, $\eta \acute{\alpha} \mu \pi \epsilon \lambda \omicron \varsigma$ 「葡萄の木」, $\eta \mu \eta \lambda \acute{\epsilon} \alpha$ 「林檎の木」, pira 「梨の木」, quercus 「オークの木」, pōmus 「林檎の木」, **СЛИБА** (プラムの木), **КРОУША** (梨の木)。産み出された生物の名称は、通常、中性起源である — **КОЗА** (小山羊), **ЖРТЕА** (小馬), **ЧАДО** (子供), $\tau \acute{o} \tau \acute{\epsilon} \kappa \nu \omicron \nu$ 「子供」, $\tau \acute{o} \pi \alpha \iota \delta \acute{\alpha} \rho \iota \omicron \nu$ 「小さな子供」, $\tau \acute{o} \mu \eta \lambda \omicron \nu$ 「林檎の実」, pirum 「梨の実」, pōmum 「林檎の実」。

女性起源であるべき樹木の名称の、例えば、**АЖБЪ** [オークの木] (男) のような、いくつかの、古代ブルガリア語の、原則からの逸脱については、神話的な解釈がなされるべきである — オークの木は、原始スラヴの雷神ペルーヌ (ン) **ПЕРОУНЪ** (バルト Perkūnas) に献上されたのであり、したがって、原始スラヴの、母なる大地の観念ではなく、天界の天地創造の、祭祀的なものについての観念に関係があり、その言語的表現がスラ

ヴ祖語の *u* 語幹名詞なのである。このことは、この単語の性にも曲用にも反映している — cf. **АЖЕЪ** の曲用における、スラヴ祖語 *u* 語幹の痕跡。宇宙論の次元では、天空は大地（女性的起源）に対置されるものである故、ここでは、予めスラヴ祖語の *u* 語幹の意味について幾分解説が必要であろう。

天と地は、宇宙の二つの半分である — cf. **ПОЛЪ** の曲用におけるスラヴ祖語の *u* 語幹。天なる父 (cf. **Р** **небо-батьшка**, **небо-отец**, ラト *Debess tēvs* 「(逐語的には) 天の父」, ギ呼 *Zēû πάτερ*, ラ *Iū piter*, ルウィ語 *tiųaz tatiš* 「(逐語的には) 天—父」; 最後の三つの形は、始源的な *u* 語幹 **di-u- : *di-eu-* 「天」を含んでいる) は、母なる大地 (cf. **Р** **мать-сыра земля**, アッティカ *Δημήτηρ*, ドーリス *Δᾱμᾱτήρ* < **g'h d̥m-māter-* 「母なる大地、(後に) 農耕と大地豊饒の女神」; 語根 **g' hdem-* とその階梯からは **ЗЕМЛѦ**, ギ *χθών* 「大地、土 (壤)」, ラ *humus* 「大地、土 (壤)」, ギ *χαμηλός* 「低い、小さい、取るに足らない」, ラ *humilis* 「低い、卑しい」が派生している) に対立している。天の雨は、母なる大地を肥沃にし、それに生命を与える (**ДЪЖАЪ** は、語根重複 **du-dju-* < **di-u-* 「天」を含んでいる ; 古い *u* 語幹については、形容詞 **ДОУЖА-ЕВ-ЪНЪ** < **dou-di-ou-* が証明している ; cf. リ *lietūs* 「雨」の *u* 語幹)。天の水 (分) の象徴が川であり、これは、ギリシア語、ラテン語では、常に男性である — 例、*ὁ Ἑβρὸς* 「マリーツァ川」, *Sēquana* 「セーヌ川」, *Tiberis* 「テベレ川」。古代インドの神話では、天の水 (分) は *dān-u-* (*u* 語幹) と呼ばれ、天界の植物ソーマから滴り落ちる樹液である ; 天の水 (分) からは、あらゆる川ができています — cf. 印欧の大河ドン川 (**Дон** < **dān-u-*)、ドネプル川 (**Днепър** < **dānu-apara* 「後方の川」)、ドナウ川 **ДОУНАВЪ** (ケルト・ラテン *Dānuvius*, ゴ **Donawi*, ヴィザンツ *Δοῦναβις*) の名称における語幹 **dān-u-*。

古代的な *u* 語幹は（接尾辞 *-u-* に転化した）、古代インド語の *g rāvan-*「ソーマを砕く石、天の水（分）を絞り出す石」にも立証される。その他の印欧諸語では、この名称は、「手びき石臼、挽き臼」として再解釈を受けている； cf. キンブリー²⁶ *breuan*「手びき石臼」、古代アイルランド *bráu*「挽き臼」（ケルト祖語の *g > b* への転化を伴う）。同じ

u 語幹は、ただし、接尾辞を挿入したものであるが、単・主 **ЖРЪНЪ**, 生 **ЖРЪНЪВЕ** < * *gʷr-H₂nū*「挽き臼、水車（小屋）」に立証され、また、ラト *dziřnus*「手びき石臼」、ゴ *asilu-qairnus*「ろばの動かす製粉機」も同じである。原始スラヴの神話的伝承においては、天の水（分）は、我が民謡にある蜜と油の川、豊饒の川にも似て、しばしば蜂蜜のイメージを持っていた。Cf. 古高ド *metu*「蜜酒、蜂蜜飲料」、リ *medūs*「蜂蜜」、古イ *mādhū*「蜂蜜（飲料）」、ギ *μέθυ*「ワイン、酒」。この水（分）は、天が地に送り出す果実であり、贈り物である — cf. **ПЛОДЪ** や **АДРЪ** の曲用における *u* 語幹の痕跡。

上述の宇宙観が古い起源を持つことは、「リグ・ヴェーダ」²⁷の一連の頌歌（例えば、V .53, 5 ; 58, 3 ; 59, 7）が立証している。特に、頌歌の VIII. 7, 16 は注目に値するもので、ここでは、雨の役割は、単に大地を肥沃にするだけではなく、天地創造的なものである — 雨は、世界の二つの半分、天と地を分け、配置せしめる、すなわち最初のカオス（混沌）、無定形の自然を秩序だった世界に、天球に、宇宙に変えるのである。頌歌 X. 121, 1

では、雨に代わって、地の実が現れ、それが空間を満たす、すなわち、古代インド的宇宙の状態（天と地の必要な距離）を支えるのである。頌歌 X. 82, 6 では、この実は、水（天の水 [分]）から産み出される。この実が、存在全体の象徴、生きとし生ける物全ての所有物の象徴として、宇宙の二つの半分 — 天と地 — を満たすのである（頌歌 X. 45, 6）。

原始印欧の神話的伝承においては、宇宙を支える支柱の役割を果たしたのが、オークの木であり、それが、大地からの然るべき距離で天を支えているのである — Cf. ラ *quercus*「オークの木」 < **perkʷ-u-s* と ゴ

faírhvūs「宇宙、天地」 < *perkʷ-u-s における語根と語幹の完全一致。オークの木は、古い他の u 語幹名詞と同じく、印欧及び原始スラヴの雷神神話に関連がある。ソヴィエトの学者イヴァノフ及びトポロフ (В. И. Иванов, В. Топоров, 1974) によれば、この極めて重要な神話は、次の筋立てを持つ：

1. 雷神は、高く、天空に、また枝を四方東西南北に広げる世界樹の頂に
いる。印欧語の語幹 *di-u-「天」については、上述参照。同一語幹から、
古イ devāh, リ diēvas, ラ deus, ギ Ζεύς, 属 Διός <
*di-u-os「神」 が形成される。当初は、神と天は同義の概念であった。
原始スラヴの雷神ペルーヌ **Перуны** の名称は、 リ Perk-ū-nas,
古プ Perc-u-nis (雷の化身), 古代アイスランド Fjörgyn (神トールの
母、これについては、以下を参照) とも、また同じく、宇宙樹たるオークの
木 *perkʷ-u-s = ラ quercus「オークの木」, ゴ faírhvūs「宇宙、世界」
と同系関係にある。宇宙樹の頂の名称における古い u 語幹については、
リ virš-ū-s, ラト vīrs-u-s「最上部、頂上、てっぺん」が証明しており、
また、**ВРЪХЪ** のいくつかの格形に見られる u 語幹の痕跡もまた同じ
である。大木は全て、世界樹の象徴だと考えられている。古高ド wit-u
「木 (木材としての)」, ギ δόρυ「木 (材)」, δρυς「木、オークの
木」, ゴ tri-u「木」, ヒットイト tar-u「木」 における u 語幹、ま
た同じく、triu, taru, δόρυ, δρυς と同系関係にある **ДРЪВО**
< *der-u-o の接尾辞 -u- も参照。四方位も宇宙樹と関連があり、その
ことを示しているのが、**ЧЕТЬРЕ** < *kʷet-ū- における接尾辞の -u-
(< 古い u 語幹) である ; cf. 同一語根派生の リ ket-u-rī, 古イ
対 cat-ū-ras, ラ quatt-u-or, ゴ fid-w-or「4」。

2. 雷神の敵対者が、下方、世界樹の根元に住まう世界蛇である。 **ЗМ
ЫН** の曲用には、古い u 語幹の痕跡が見られる。副詞の **ДОЛОУ, НИ
ЗΟΥ** の原形は宇宙世界の下方、世界蛇の住処に関連しており、これはス
ラヴ祖語の u 語幹曲用の所格に起源を持つ。

3. 世界蛇は、有角家畜を盗んで、それを世界の懸崖絶壁の背後（世界樹に等しい、世界の山の背後）に隠すのである。雷神は、その恐ろしい武器（大槌、刀剣、槍、鉞）を用いて、懸崖絶壁を打ち砕き（切り裂き）、家畜を解き放つ。神話の中には、雷神が、世界樹を打ち砕く異説もある。世界の懸崖絶壁の名称は、ヒッタイト語 *per-u-na* 「懸崖、絶壁」にも、また同じく、ゴ *faīrguni* 「山」 < **per-gh-u-n-* や **ПРЪГЪНИ** 「深い淵によって、切り裂かれた荒涼たる山地」 < **per-gh-ū-n-* や 古イ *pār-v-ata-* 「山」 < **per-u-* にも見られる。世界の懸崖絶壁（世界樹）の名称は、雷神の名称と同一語幹なのである。特に興味深いのは、「リグ・ヴェーダ」の頌歌 III. 35, 8 及び X. 94 であり、そこでは、*pārvata-* と呼ばれているのは、植物のソーマ（天の水 [分]）の樹液を絞り出す石のことである。古代インド語の *pārvata-* の古い *u* 語幹は、単・主 **जर्णन्**, 生 **जर्णन्वे**, ラト *dziṛnus* 「手挽き石臼」における古い *ū* 語幹を我々に想起させるが、これについては上を参照。印欧及び原始スラヴのどの武器も、雷神がそれを用いて世界の懸崖絶壁を打ち砕き（切り裂き）、その敵対者である世界蛇を打ち殺す恐ろしい武器を原形としている — 単・主 **БРАДЪ**, 生 **БРАДЪВЕ** における *ū* 語幹、ギリ *πέλεκυς* 「斧、鉞、大なた」における *u* 語幹参照、これは 古イ *parasūh* 「斧、鉞、大なた」, ゴ *haīrus* 「剣、刀」と同系。古い *u* 語幹は、雷神が懸崖絶壁を切り裂いた後に解放する家畜の名称にも立証される — cf. ラ *pecus* 「家畜」, 属 *pecudis* 「家禽獣、特に羊」、これは ゴ *faīhu* 「金銭、（当初は、家畜の意）」（この意味については、ラ *pecūnia* 「所有物、財産、金（額）」を参照）, ゴ *writhus* 「家畜群」, **ДОБЪТЪ-КЪ** （財産）²⁸ と同系； **ВОЛЪ** の曲用における古い *u* 語幹の痕跡も参照。世界蛇に対する勝利は、世界の秩序が到来したことを表す。その宇宙論的かつ倫理的な意味での、整った宇宙と世界秩序の同義語が、スラヴ祖語の名詞である **ređъ*, **čīnъ*, **mīrъ* である。**čīnъ* によって、原始スラヴ人たちは、はるか昔から秩序だった世界と人間関係にあまねく定められ、慣習的に保持

されなくてはならない全ゆるものを表している。一方、スラヴ祖語の *mīrъ は、蛇に対する勝利の後の、また二つの宇宙の半分である天と地が最初のカオス（混沌）から脱した後の世界の平静と宇宙の平穩を表したのである。**РААЪ, ЧИНЪ, МИРЪ** の曲用におけるスラヴ祖語の u 語幹の痕跡を参照、cf. 古高ド fridu 「平和、平穩」, situ 「慣習、習俗」。

4. 世界蛇に対する雷神の勝利に継いで、天の水〔分〕（雨）が現れる。その蛇は、大地の水の中に隠れている。**АЪЖАЪ** の古い u 語幹については、上述参照。世界蛇に対する勝利は、天地創造的な意味を持つのである。「リグ・ヴェーダ」の頌歌 III. 32, 8 によれば、インドラは、世界の懸崖絶壁を打ち碎き、世界蛇ヴリトラを打ち倒して、雌牛と天の水（分）を解き放つだけではなく、天地を創造して、太陽と月を産み出すのである。頌歌 VIII. 51, 8 によれば、世界蛇に対する勝利に次いで、大地の最初の住人も現れる。勝利の天地創造的な意味合いについては、古高地ドイツ語の sigu 「勝利」の u 語幹も、これを証明している。

古代ブルガリア語文献に残る多数の古い u 語幹の痕跡につながる、これら主要な印欧神話、原始スラヴ神話は、様々な異説中にも立証される。そのいくつかの異説の中では、敵対者が世界蛇ではなくて、宇宙樹の根元の水中に住まう世界魚であるものがある。ギリ $\iota\chi\theta\acute{\upsilon}\varsigma$ 「魚」における u 語幹、また同じく **РЪБИТЕЪ** 「漁師」における接尾辞 -tu- も参照。どの原始スラヴの漁師も、世界秩序と世界の平安が到来するように、世界魚に打ち勝ちあるいはそれを捕らえる神格化英雄を自己の庇護者として崇めていた。とりわけ、世界魚と戦ったのが古代ゲルマンの神トールである。その母フィヨルギュン Fjörgyn の名は、リトアニア語 Perkūnas や **ПЕРОУНЪ** と同系関係にある⁽¹³⁾。他の異説では、世界蛇に対する勝利は、勝利者を祝って、不思議な大釜を見つけて、酩酊させる飲料（ビール）を作ることが、それを象徴した（u 語幹の痕跡は、**ОАЪ** 「アルコール飲料」に見られる；この語は、リ alūs 「ビール」、古プ alu 「蜜酒、蜂蜜飲料」、アングロ・サクソン ealu 「大酒宴」 < *alu- と同系）。

その曲用中にスラヴ祖語 *u* 語幹の痕跡を残す古代ブルガリア語の名詞は、ある非常に古い祭祀的、天体論的、天地創造的な術語類の名残である。一つには、これらの術語類は、天の神（天そのものと同一であるが）の名称、また同じく、天の神に、神とその敵対者である世界蛇との闘いに、直接的な関係を持つ本質の名称を包摂するものであった。もう一つ、*u* 語幹に属する名詞は、世界秩序、つまり古代的な発想からして、整備整頓された世界の状態を反映したものであった — 整備整頓された秩序だった世界においては、天空たる、宇宙空間の天井たる、男性源たるものは、大地たる、宇宙空間の下層部たる、女性源たるものに対して、最高の衝の関係にあった。宇宙の二つの半分、すなわち天と地は、二つの人間の性、つまり男性と女性に相応している。印欧の主要な天地創造神話の一つによれば、世界は、ある第一次的な無定形の（両性的な）（創造）物（с ѣ щ е с т в о）から発生したのであり、その中から後に天と地（男性源と女性源）が分離したのである。

氷と世界蛇の毒素 — 太古から存在する死と沈滞とカオスの象徴 — が、始原的な物質である。次の *u* 語幹参照、リ *ledūs*, ラト *lēdus* 「氷」, cf. *лѣдъ, лѣтъ* の曲用におけるスラヴ祖語 *u* 語幹の痕跡。炎熱と発汗が最初の創造の力であった（*ЗНОН* は、古代ブルガリア語では、汗の意であり、またこの意味は、我が方言の一部にも残っている ; *ЗНОН*

の曲用における *u* 語幹の痕跡を参照）。最初の人間は、第一次的な両性物の息子である。古イ *sūnūh*, ゴ *sunus*, リ *sūnūs* の *u* 語幹、また同じく、*сѣнь* の曲用における古い *u* 語幹の痕跡も参照、cf. 古イ *manū-* 「人」, *pūrū-* 「男」の *u* 語幹。最初の人間は、第一次的な創造物が睡夢中に発汗して後に産み出される（睡夢は、大地が未だ創造されない、つまり天と地が未だ分離していない、無定型の混沌〔カオス〕状態の時期に相応する）。いくつかの天地創造伝説によれば、最初の人間が、第一次的な創造物の膝関節から産み出される — ギ *γόλυ*, 古イ *jānu*, ゴ *kniu*, ラ *genū* 「膝」における *u* 語幹参照。世界は、生け贄にされた第一次的な創造物の肉体の一部から創られるという、印欧及び原始スラヴ

の天地創造神話がある — **ΟΥΑΥ** (部分、肉体の部分、四肢) の曲用における *u* 語幹の痕跡を参照、cf. **ΓΟ** lithus 「肉体の部分」の *u* 語幹、また同じく、単・主 **ΚΡΥΒΕ**, 生 **ΚΡΥΒΕ** < *kru-H₂- における *ū* 語幹、これは、**ΚΡΕΑΣ** 「肉」 < *kru-H₂-es- と同系である (§. 24 参照)。

ある非常に古い天地創造神話によると、世界は、悠久の海の水の中を泳いでいたという亀の背甲の上で創られたり (**ΓΕΛΥ** 「亀」 と同系関係にある、単・主 **ΓΕΛΥ** [亀], 生 **ΓΕΛΥΒΕ** < *ghel-ū- における *ū* 語幹参照)、あるいはまた、悠久の海の水の上に芽生えたと言う一本の細枝の上で創られたのである ; その細枝が海水をかき混ぜると、その海水は油に変わったという (スラ祖 単・主 *mōty, 生 mōt₂ve 「かき混ぜるための細枝棒、油に変ずるべく、ミルクを泡立てる細枝棒」における *u* 語幹参照)。水鳥が世界の海の底から取り出す一塊の粘土から、大地が創り出されてくる話は、恐らく、印欧と原始スラヴの最古の天地創造神話である — スラ祖 主 *ōty, 生 *ōt₂ve 「カモ」, リ antuka 「沼地のシギ」における *ū* 語幹、**ΓΕΡΔΕ**, リ gérve, ラ 単・主 grūs, 属 gruis 「鶴」における古い接尾辞 -u- を参照 ; スラヴ祖語の *u* 語幹の痕跡をその曲用中に残す **ΗΛΥ** 「粘土」は、*u* 語幹のギリシャ語名詞 **ΙΛΥ** 「泥土、粘泥、泥 (寧)」と同系である。

小宇宙 (家族の秩序としきたり) は、大宇宙の形に合わせて構成された。宇宙の二つの半分である天と地に対応するのは、一族の半分である男性と女性、つまり息子達とその妻達である (娘達や孫娘達は、他の氏族に嫁するものであるが故に、家族の一時的な成員と見なされた)。地上の住まい (**ΔΟΜ** の曲用における *u* 語幹を参照、cf. ラ domus 及び 古イ vāst₂u 「家、住居」、またこれと同系の **ΓΕΩΤΥ** 「町、都市」の曲用における *u* 語幹) は、天上の館 (神のやかた) をモデルにして整えられた。原始スラヴ人達にとって、地上の町 (種族長の住処) は、神々が住み給う囲みを持った中央空間を象徴したもの (写し取ったもの) であった。それ故に、

ДОМЪ (ラ domus 女性 と対照的) や **ГРАДЪ** (ギリ πόλις, ラ urbs 女性 と対照的) は、男性起源である。主として男系 (すなわち天の系統) 親族は、何か小万神殿 (パンテオン) の如きものを成していた — **БЛИЖИКА, ЖЖИКА** 「親戚、親類」 (**И** は iū < iuH₂ の継承) における古い ū 語幹を参照 ; 古代ブルガリア語では、これらの語は、集合的な意味で使われており、恐らくは、現代語の **Ние сме роднини** (我々は親族だ) に似た、絶対単数 (singulāria tantum) 的なものであり、これは、**Ние сме роднини** (我々は親族達である) より古いのである。

男性 (天) の源の最高の代表は家長であり、半分である女性の観点からすれば、舅 (夫の父親) であった — 古イ svās-u-raḥ, 古高ド swēhur, リ šēšuras, ギリ ἐκὺρ ός 「舅」 < *sue-k'-u-r- における古い接尾辞 -u- を参照、この接尾辞は、もはや **СВЕКРЪ** には見られない ; **ВЛАДЪКА** は、接尾辞 -ū- < -uH₂- を持った古い集合名詞であり、pl ūrālis mājestātis (威厳の複数)、すなわち、敬重の複数の意味で使われたものである。**САНЪ** も、原始スラヴ人の、権力至高 (天上) 起源説の思想に関連している — スラヴ祖語の、この語の曲用における u 語幹の痕跡参照 ; **САНЪ** は、古代インド語の sānu 「頂上、上部、高さ」と同じ語根起源である。*sue-k'-u-r- のアナロジーによる、ただし接尾辞転位を行った、接尾辞の -u- は、姑 (夫の母親) を表す派生語にも一般化した — 単・主 **СВЕКРЪ**, 生 **СВЕКРЪВЕ**, 古イ svaśrū- < *sue-k'-r-u-H₂-, ラ socrus (単・主語尾 -s は新しいもの) を参照。単・主 **ЗЪЛЪ**, 生 **ЗЪЛЪВЕ** 及び **АТРЪ**, **АТРЪВЕ** は、**СВЕКРЪ**, **СВЕКРЪВЕ** からのアナロジーに従って形成されたものである。

古い接尾辞 -u- は、後に接尾辞の -k- を付加したいくつかの形容詞の語幹にも見られる : **САДАЪКЪ** < *sal-d-u-, **ГЛАДАЪКЪ**, **СТЫДАЪКЪ**, **БРИДАЪКЪ** 「差し込むように冷たい、寒い」, **ЛЫГЪКЪ**, **МАКЪКЪ**, **ТЫНЪКЪ**, **КРЪПЪКЪ**, **ЖЗЪКЪ**, **КРОТЪКЪ**, **ПЛЪЗЪКЪ**, **СЛЪЗЪКЪ**

Ъ, МРЪЗЪКЪ。古典ギリシャ語でこれらに対応するのは、純粹な（非拡張の）*u* 語幹の形容詞である — 例えば、*γλυκύς*「甘い」、*ταχύς*「速い」、*βραδύς*「ゆっくりした」、*θηλυς*「女性の」、*ἡμισυς*「半分の」、*πολύς*「多量の、豊富な」。これらの形容詞の一部は、明らかに、原始スラヴと印欧世界の秩序と第一次的な無秩序（世界のカオス） — 後に、主要な天地創造活動（世界蛇の抹殺、宇宙の二つの半分である天と地の分離、大地の固定強化、中間の宇宙空間である大気の創造；cf. *go* *luftus*「空気、大気」における *u* 語幹）以後、整備整頓された世界に対立する — の構成要素を表徴する形容語（枕詞 *epithet*）であった。例えば、こうした形容語が、**КРЪПЪКЪ** であり、これは、宇宙の二つの半分を分け、所定の状態と所定の距離と整備整頓された印欧と原始スラヴ世界の状態（*locus*「位置、状況、地勢」及び *status*「（所定の）状態、関係、地位、立っていること」）における *u* 語幹参照；cf. *go* *thaurus*「堅い、硬い」及び *tulus*「健康な、強い」における *u* 語幹形容詞）を支える、蜂蜜を塗った宇宙柱に関して、冠せられたものである。また、原始スラヴの天地創造説や原始スラヴのしきたり（祭式）において極めて重要な役割を演ずる蜂蜜（**МЕДЪ** の曲用にある *u* 語幹の痕跡を参照）に関して用いられた形容語 **СЛАДЪКЪ**（cf. *gi* *γλυκύς* における *u* 語幹） — 宇宙柱は、原始スラヴ的発想においては、蜜蜂の巣箱である宇宙樹の幹に相当する。形容語 *θηλυς*「女性の」は、形容語の *ἡμισυς*「半分の」と共に、宇宙論的発想における母なる大地に相当する、半分である女性に関係するものである。形容語 *βαρύς*「重い、つらい」 < **g^wb^r-u-* は、ラテン語の *gravis*「重い」と同系であるが、古代インド語の *grāvan-*「天の水（分）、ソーマを絞り出す石」 < **g^wr-eH₂-u-* や 単・主 **ЖРЪНЪ**, 生 **ЖРЪНЪВЕ**「挽き臼石、水車、水力製粉所」 < **g^wr-H₂-nu-*（上を参照）と同じ語根に由来するものである。宇宙論的発想においては、天の水（分）（その多量）を流出させることは、重く困難な仕事であった。**ТАЖЪКЪ** < **ten-g-i-u-k-* における

古い u 語幹参照、cf. **ОТАГЪЧИТИ** < *ten-g-u-k-、またゴート語形容詞 **aglus** 「難しい」の u 語幹も同じ。一方、**ЖЗЪКЪ**, **ТЬНЪКЪ**, **СЛЪЗЪКЪ**, **ПЛЪЗЪКЪ** は、当初は、世界蛇（蛇魚）の形容語である — cf. *an-g'-u- 「細い、狭い、密集した」(**ЖЗЪКЪ**, ラ **angustus**, ゴ **agwus**, 古イ **amhú-** 「細い、狭い」と *an-g-u- 「蛇、蛇魚」(古プ **angurġis**, リ **ungurȳs** < *angurȳs 「鰻」, ラ **anguis** 「蛇」, **anguilla** 「鰻」; 接尾辞 -u- のない語幹 *ang- は、**ЖЖЪ**, 古ロ **оужъ** [蛇の一種、紐], ス **vôž** (紐、ロープ), ポ **wąz** 「蛇、ホース」に立証される) には、共通の語根がある。**МРАЗЪ** 及び 現・1・単 **МРЪЗНЪ**, 2 **МРЪЗНЕШИ** と同系の形容語 **МРЪЗЪКЪ** 「厭うべき、忌まわしい、醜悪な」や **СТОУДАЪ** 「寒さ、恥」と同系の **СТЫДАЪКЪ** 「恥知らずの、厚顔な」は否定的な道徳的資質を表したのである。原始スラヴ的発想からすると、始原的なカオス、不安定な世界、未分化な物質、冷却物質、氷（上を参照）に特有なのは、無定型であることだった。氷と冷却性（冷寒）に関連するのが、形容語 **ГЛАДАЪКЪ** (なめらかな、滑る、平らな) と **БРНАЪКЪ** (苦々しい、苛烈な、つらい、鋭い、厳しい) である。Cf. **twalibwintrus** 「12の冬の」におけるゴート語形容詞 **wintrus** 「冬の」における u 語幹、**ГОРЬКЪ** (ь < iu) (苦い) は、蛇の毒素の形容語である。

u の要素は、接尾辞 **ОВ-** < **ou-** (接尾辞 -u- の古い対応階梯) を持つ一定数の形容詞の語幹にも現れている。接尾辞 **-ОВ-** (軟変化形 **-ЕВ-**) を持つ形容詞の一部、例えば、**СВАТ-ОВ-ИТЪ** (原始スラヴの光の神の名称であって、起源的には古い形容詞である), **ИД-ОВ-ИТЪ**, **ПЛОД-ОВ-ИТЪ**, **ВОЛ-ОВ-ЬНЪ**, **ДОМ-ОВ-ЬНЪ**, **ЗМЬ-ЕВ-Ъ**, **ДЪЖА-ЕВ-ЬНЪ**, **ДОУЖА-ЕВ-Ъ**, **ДЪЖА-ЕВ-Ъ** は、直接古い u 語幹から作ったものである。一方、他の一部の形容詞、例えば、**ДОУХ-ОВ-ЬНЪ**, **ВѢР-ОВ-ЬНЪ**, **СВѢТ-ОВ-ЬНЪ**, **СТОУДА-ОВ-ЬНЪ** 「恥ずべき」, **ГРѢХ-ОВ-ЬНЪ** (**ГРѢХЪ** の曲用の古い u 語幹の痕跡を参照) は、新旧を問わず宗教・祭祀的ないしは倫理道徳的な用語であって、原始スラヴ的宇宙信仰に関連する形容語

をモデルにして形成されたものである。こうしたものとして、例えば、**ГРОМ-ОВЪ** (雷神の基本的修飾語としては最古の形容語； **ГРЪМЪ**「灌木、低木、叢林(地)」の曲用には、**ГРОМЪ**「雷鳴、雷」との音の類似の故に、古い *u* 語幹の痕跡がある、ペルーンの声たる雷鳴の同様の連想が、**ГЛАСЪ** の曲用の古い *u* 語幹のいくつかの形の原因ともなっていよう)、**ЮГ-ОЪЪ**, **СЪВЕР-ОВЪ** (宇宙樹の四つの枝によって確定される方位に対する形容語であるが、この樹上には **Пероунъ** ペルーンの神が住んでいるのであり、これは、リ Perkūnas ペルクーナスと同系関係にある；バルト・スラヴの **Пероунъ** の神像は、四方位に向けた四つの顔を持ち、一週間の四番目の日であり、リトアニア語で ペルクーナスの日 Perkūno diena、ボラーブ語で Perăunedan と呼ばれる木曜日が **Пероунъ** に捧げられた)、大地の水(分)の形容語たる **СОУР-ОВЪ** (cf. *о матъ-сыра земля* 母なる大地)がある。

男性固有名詞及び男性活動体(有生)普通名詞から派生する一定数の物主形容詞も、接尾辞 **-ОВ-** (**-ЕВ-**) を以て形成される — 例、**ЖЕНИХОВЪ** < **ЖЕНИХЪ**, **ПАСТОУХОВЪ** < **ПАСТОУХЪ**, **СКЖДЕЛЬНИКОВЪ** < **СКЖДЕЛЬНИКЪ**「陶工」, **КИТОВЪ** < **КИТЪ**, **ЛЪВОВЪ** < **ЛЪВЪ**, **БЪСОВЪСКЪ** < **БЪСЪ**, **ВРАЧЕВЪ**, **ВРАЧЕВЪНЪ** < **ВРАЧЪ**, **ОУЧИТЕЛЕВЪ** < **ОУЧИТЕЛЬ**, **ЦЪСАРЕВЪ** < **ЦЪСАРЬ**, **АДОВЪ** < **АДЪ** (擬人法での), **АДАМОВЪ** < **АДАМЪ**, **НСОУСОВЪ** < **НСОУСЪ**, **АДВЪАДОВЪ** < **АДВЪАДЪ**。これらの語派生タイプのもものが広く普及するようになったのは、やっと古代ブルガリア語期に入ってからだと思われる。このタイプの派生力は、*u* 語幹単数与格の語尾 **-ОВИ** が、非常に広範囲に *o*, *io* 語幹の、人及び有生類名詞に置かれた (§.23 参照) ことに関連している — 例、単・主 **ЛЪВЪ**, 単・与 **ЛЪВОВИ**, 物主形容詞 **ЛЪВОВЪ**；**ВРАЧЪ**, **ВРАЧЕВИ**, **ВРАЧЕВЪ**；**ЦЪСАРЬ**, **ЦЪСАРЕВИ**, **ЦЪСАРЕВЪ**；**НСОУРЪ**, **НСОУСОВИ**, **НСОУСОВЪ**。

女性派生名詞の語尾 - **ЪНИ** (単・主 **БОГЪНИ**, **БЛАГЪНИ**, **ГРЪДЪНИ**, **ПОУСТЪНИ**, **ГОСПОДЪНИ** 参照) における接尾辞 -**Ъ**- は、恐らく、始原的な *u* 語幹形容詞に由来するものである。推定形 **bhag-u-* 「神の」の幹母音 *u* に女性名詞を作る H_2 指標が付加され、そこに得られた形 **bhag-u-H₂-* > **bogū-* に、さらに後に、接尾辞 -*nī* < -*n i-H₂-* が付加されて、**БОГЪНИ** の形に至るのである。-**ЪНИ** の語尾を持つ名詞の一定部分、例えば、**БЛАГОСТЪНИ**, **МИЛОСТЪНИ** のようなものは、二次的な接尾辞 -**ОСТ-** を含んでいるから、語派生タイプとしては、非常に新しいものであり、また一方、例えば、**ПОГАНЪНИ**, **КРЪСТЪНИ** のようなものは、借用語起源のものである。第三のグループの名詞、例えば、**БОГЪНИ**, **СВАТЪНИ** 「神聖なこと」, **ПОУСТЪНИ** (世界の荒蕪地、蛇国、混沌世界の名称) は、恐らく非常に古いもので、明らかにスラヴ祖語の祭祀的天地創造的意味の術語群に属したものである。第四のグループの名詞、例えば、**ГОСПОДЪНИ**, **РАБЪНИ**, **СЖЕСТЪНИ** のような名詞は、恐らく、**БОГЪ**, **БОГЪНИ** をモデルにして、**ГОСПОДЪ**, **РАБЪ**, **СЖЕСТЪ** から作られたのである。

本来、*u* の要素は、祭祀的、天体論的、天地創造的な用語類とは無関係であって、こうした用語類は、比較的新しいものであり、比較的發展した社会組織と發展した神話思想なり天地創造思想の形式を前提としたものである。*u* の要素は、先ず第一には、遠隔、到達不能、彼岸、不可視的で内部が遮蔽された事物、あるいはまた一瞥して即座に捉えきれないものを表す指示小辞であった。始原的な内在指標 (*инесивен показател* < ラ *in-esse* 「(～に) 存在する、内在する」) である *u* は、**КЪ-ДЕ** < **k*-u-* (cf. 古イ *kūha*, リ *kuř* 「どこで、どこへ」), **ТОУ** < **t-o-u*, **Ю-ЖЕ** = リ *jaū* 「すでに」, **НЕ Ю** 「未だ～ない」 < **i-o-u* のような代名詞的副詞に立証されるのであって、これが時を経るにしたがって、もっと一般的な、場所的 (時間的) 用法を獲得したのである。Cf. ラ *ubi* 「どこに、(～の) 所に、(～の) 時に」 < **u-bhei* 。内

在指標（ないしはこれと同系の双数・複数指標）の *u* は、強めの目的で複数所格に付加された — 例、**uḷkʷ-o-i-s-u* > **ВЛЫЦѢХЪ** (§. 31, 32 参照)、この場合の *s* は複数指標である (§. 37 参照)。単数与格 **ВЛЫКОУ** < **uḷkʷ-o-u* は、始原的な内在格（特殊な所格）であって、それが与格として使われるようになったのである (§. 32 参照)。

u の要素は、場所指標として以外に、過ぎ去った行為を表す際の時間指標としても使われた — これを用いて、能動過去分詞形（男・単・主 **НЕСЪ**, 女 **НЕСЪШИ** ; **СЪБЪРАВЪ**, **СЪБЪРАВЪШИ** < **nek'-u-s-*, *bh b r-ā-u-s-* を参照）が作られ、また恐らくは、ラテン語の、1・単 *doc-u-i* 「教えた」, *audī-v-i* 「聞いた、聴いた」型の完了形（perfectum）が作られたのである（-**ЪШ**- 指標を伴う能動過去分詞の起源については、§. 20 参照）。指示小辞 *u* からは、代名詞の **ОВЪ** も作られているが、これは主に相関的に、ペア **ОВЪ ... ОВЪ** で使われた — 例、マタイ XXII-5 マリア写本 **ОНИ ЖЕ НЕ РОЖАЪШЕ ОТИДЖ. ОВЪ НА СЕЛ О СВОЕ. ОВЪ НА КОУПАЖ СВОЖ.**（そこで、彼らはそ知らぬ顔をして、一人は自分の畑に、一人は自分の商売に出て行った）。*u* の要素は、遠くに離れてあるもの（同時一気には知覚できないもの）を表す指標から、二物（すなわち双数）を表す数詞ないしは形態指標に転化したか、それは一連の名詞、代名詞、動詞形に見られる。例えば、**ВЪТОРЪ** < **u-tor-*, ラ *u-ter-* 「二つの中の何れ（の）」, 古イ *u-bhaú* 「二つ」, 双・1・主 **ВЪ** 「私達二人」 < **u-ē*, 現・1・双 **ЕСВЪ** 「私達二人はいる」（この動詞語尾 **-ВЪ** は、人称代名詞形と一致する）, 古イ 双・主・対 *vřkā u-* 「二匹の狼」 < **uḷkʷ-ō-u-*, 双・生・所 **ВЛЫКОУ** < **uḷkʷ-o-u* を参照。

u の要素は、ある純粹に双数を表す接尾辞が、祭祀的な、天地創造神話に関連する指標に転化したのかもしれない — 最古の全人類的な天地創造神話伝承は、古代的な二元的（フラトリア的 = 胞族的²⁹）社会組織に相応しており、この組織に関連する双子神話に起源を持つ — より原始的な

タイプの伝承では、二兄弟、双子兄弟は、デミウルゴス³⁰（人類の庇護者）であり、より新しい伝承タイプでは、この双子兄弟は、大地を創造して、次第に天体論的な輪郭を帯び、鳥に変身したり、あるいは古代インドの *Asv inā*（＜語根 **ek'u-*「馬」）のような天馬（翼を持つ馬）に転身する、あるいはまたギリシャのディオスクーロイ（*Διόσκουροι*³¹）のような神の子になるという説話である。しかし、接尾辞 *-u-* の祭祀的な意味合いは、場所指示小詞 *u* の彼岸的（超越的 *transcendent*）意味からも、非常に容易に、発達してきた可能性がある。本来、接尾辞の *-u-*（*u* 語幹）は、天、すなわち、宇宙高所の要素の特徴も、世界の奈落深淵（太古からのカオス）の、地獄（蛇国）の、すなわち、天地創造上の下部、したがって肉体下部の、産み出しかつ吸い込む（くわえ込む）源 — 腸、母の腹部、墓 — の要素の特徴も表示したのである — ギ *δελφός*「母の胎内」、リ *vidūs*「中、内部、内臓」、ゴ *dauths*「死」における古い *u* 語幹、また同じく *ЧРЪВО*（腹、内部）、ラ *vul-v-a*「女性生殖器」、ゴ *hlaiw*「墓」、*МРЪТВЪ*＜**mr̥-tu-*＝ラ *mortuus*「死せる、死人」における接尾辞 *-u-* を参照。宇宙の下部は、産出する大地 — 種子が新しい生命のために死んで行く畑 — である。ゴ *fraiw*「種」、*ННВА*＜*НН-ЗЪ* の語根 **nei-*（ギ *νειός*「畑、耕地」＜**nei-u-* と同系）、古イ *nivāt*「低地」における接尾辞 *-u-* を参照。

§. 26 古代ブルガリア語の男性及び女性前史から

時を経ると共に、 $-ā < -eH_2$ 語尾、すなわち、多数の肉体を含み込む単一の肉体を表す接尾辞（集合多数性の接尾辞）であり、産出（女性）を表す接尾辞が、宇宙（そして肉体）下部の要素を表す基本指標となる。スラヴ祖語の名詞類の特徴は、天の水（分）の要素（宇宙上部に属する）が地（すなわち、宇宙下部）の水（分）の要素に変わり、いくつかの場合、印欧語の対応形とは違って、接尾辞 $-u-$ を取らずに、形態的に女性名詞となった。

リ *dangūs* (男性)「天、空」⁽¹⁴⁾ の u 語幹に対して、**АЖГА**「虹、弓」の $ā$ 語幹⁽¹⁴⁾、ラ *rīvus* (男性)「川、河、流れ、奔流」 $< *rej-u-$ の古い接尾辞 $-u-$ に対して、**РѢКА** $< *roj-k-$ における $ā$ 語幹 を参照、cf. **ТЖТЪНЪ**「天の雷（いかづち）」 $< *ton-tъn-$ （すなわち、語根 $*ten-$ 「轟く、爆ぜる」の豊音形）は男性であるが、**ТЖЧА** $< *ton-k-īā$ 「地の水（分）の源としての雲」は女性。同じ理由で、単・主 **ЖРЪНЪ**, 生 **ЖРЪНЪВЕ**「石臼、水車」 $< *gʷr-H_2n-u-H_2$, **МЛЪНЪН** $< *m_l-dh-ni-i-H_2$ 、また同じく、スラヴの新生河川名、例えば、Morava, Łaba, Волга $< *u_l-g-ā =$ チ Vlha (Łaba の支流), ポ Wilga (Wisła の支流)（同一語根であるが、対応階梯なのが、**ВЛАГА**「露、水分、湿気」）は、女性である。常に男性起源であるギリシャ、ラテンの河川名とは対照的に、**РОСА**（露、水滴）＝ リ *rasā*（露、水滴）は、古い $ā$ 語幹起源であり、古イ *rasā*「宇宙を回流する神話上の川、湿気、水分」と同系関係にある。

地中、水中動物は、当然、女性に属した — 例、**ВЪЛАРА**（川獺）（**В ОАА** 及び $\upsilon\delta\omega\rho$ 「水」と同一語根）、**ЖАБА**（ヒキガエル）、**РЪБА**, 単・主 **ПЪСТРЪ**, 生 **ПЪСТРЪВЕ**（ニジマス）、**ЗМЪЯ**（**ЗЕМЛЯ** $< *g'hdem-$, $*g'hem-$ と同一語根であり、ラ *humus*「大地、地面」及びプリュギア $\zeta\epsilon\mu\acute{\epsilon}\lambda\omega$ 「母なる大地」と同系；cf. **Р МАТЬ** -

сыра земля「母なる大地」); これは、世界樹の頂に住んでいた男性起源の、例えば、鷹(СОКОЛЪ)や鷲(ОРЪЛЪ)と比べて対照的である。ビーバー(海狸)(БОБРЪ)は、男性のスラヴ祖語 u 語幹起源である(cf. リ bebrūs, 古プ bebrus「ビーバー」)。原始スラヴ的発想からすると、宇宙の二つの半分である天と地を繋ぐ世界の木の根元に住んでいたからである。ЖАБАの祖形(cf. 古プ gabawo「ヒキガエル」)及び単・主 ПЬСТРЪ, 生 ПЬСТРЪВЕ < *pik'-r-u-H₂ も、古い接尾辞 -u- を含んでいた。ヒキガエルもニジマスも、天(宇宙の上部、男性である半分)に対立する世界の底(女性である半分、宇宙下部)の怪物・怪魚だったのである。

月(МѢСЯЦЬ)が男性なのは、天体が宇宙上部に属しているという理由だけによるものではない。ある始原的な発想からすると、月と太陽は夫婦であって、月は新郎、太陽は新婦である。この古い信仰の名残は、今なおポーランド語の月の名称 księżyc (月)(古ポ ksiądz「公」の指小形) — 新郎の意でもあった — に現れており、また、度々若い娘を太陽に喩える、ベロルシア(白ロシア)の婚礼歌や我が婚礼歌の場合も同様である(「静けき、ますらおの庭に、晴れやかに陽は昇りぬ」)。ブルガリアの婚礼歌では、ベロルシアのそれとは違って、若者を月ではなくて、濃霧 — 雨雲や雨、また種を蒔き、実りをもたらす男性の基(源)の隠喩(メタファー) — に喩えている(「静けき、乙女の庭に、深き霧の立ち込めぬ」)。月(男性の源)対太陽(女性の源)の対置の本来の意味は、原始スラヴのもう一つの月名で、女性である ЛУНА の存在のため、揺れが生じている。ある程度は、近東及び地中海文明の影響によって、またある程度は、月の周期と女性の二月经間の周期の一致のために、月が女性名詞類に算入されることにもなっている(cf. ラ lūna, ギ σελήνη「月」)。このことは、太陽と月の名称の文法性の上にも意味的特徴の上にも反映している。ラテン語 mēnsis とギリシャ語 μήν(男性)は、特に暦の概念(一か月の期間)として使う; ギリシャ語同語根の天体の名称は、女性である —

μήνη あるいは μηνάς, 属 μηνάδος 「月」。**МѢСЯЦЬ** 以外にも、古い男性は、ゴート語 *mena*, 古代インド語 *mās-*, リトアニア語 *mėnuo* 「月」にも残っている。ギリシャ語、ラテン語では、太陽の名称 (*sōl*, ἥλιος) は、男性名詞に転じており、また古代ブルガリア語では、**СЛЪНЦЕ** は中性であるが、原形 **suln-i-* は女性であったと考えられる。古い女性は、リトアニア語 *saulė* やゴート語 *sunno* 「太陽」に残っている。極めて明白な理由であるが、古い天の光の名称 **ДЬНЬ** (< **di-u-* 「神、天」の語根 **di-*; 古イ *deváh*, リ *diēvas* 「神」参照) は、男性である。それに対置される概念 **НОШТЬ** (= ラ 単・主 *nox*, 属 *noctis*, ゴ *nahts*, リ *naktis* 「夜」) は、女性である。

単数主格に語尾 **-А** を持つ古代ブルガリア語の一連の男性人間名詞も、宇宙下部、肉体下部に属していた。これは、なかんずく、下僕や奴隷の名称である。最下層で、虐げられた階層であった彼らは、自分の耕す土地や飼育している家畜の排泄物に関係していた。概して、社会的な最下層、ルンペン層、浮浪者層、貧困層、乞食が、土地に、宇宙下部に属するものとなった — cf. Ϟ чернь 「庶民、下層民」と古代インドで庶民層 *vaiśya* の表徴であった土の黒色、これは、専制・司祭者バラモン (*rāj-bhrahmán* = ラ *rēx flāmen*) のカーストの表徴であった、白色の輝ける天の色 (cf. Ϟ белый царь) と対照的である。次例 **-А** 語尾参照、**САΟΥГА**, 古Ϟ **ВОЗНИЦА** 「馬車大工、荷馬車の御者」, **СИРОТА** 「肉親のいない人、貧民」, 古Ϟ **МѢХОНОША** 「自分の主人の毛皮外套を支え運び従う下僕」, **ПРѢАЪТЕЧА** 「主人の到着を告げる下僕」(後に、**ПРѢАЪТЕЧА** は、'Ιωάννης ὁ Πρόδρομος [先だって走る人 ヨハネ] の古代ブルガリア語訳において、バプテスマ [洗礼者] のヨハネの名前の枕詞に変わっている), 古Ϟ **ВѢСТОНОША** 「下っ走りの使者」, 古ボ *smerda* 「下僕、召使い」 < 語根 **(s) mer-* 「泥、汚れ、不潔なもの」, また、乳児もよく *smerdy* と呼ばれることがあったという。 Cf.

ラ *auriga* 「御者」, *cacula* 「召使い兵士、伝令兵」, *lixa* 「輜重兵、酒保商人」, *advena* 「新来者、新参者」, *verna* 「持ち主の家で生まれた奴隷」, *perfuga* 「逃亡奴僕、逃走者」, *scriba* 「(奴僕) 書記」, *popa* 「(生け贄を捧げる儀式の時、生け贄を屠る) 祭司補」(*popellus* 「平民、細民」及び *popinō* 「放蕩者、飲み屋の常連」は同語根), *asseccla* 「従者、付き人奴隷」, *scurra* 「放浪者、旅芸人、ピエロ」, *nappa* 「怠け者」, *ri vālkata* 「放浪者」, *eīgeta* 「乞食」, *alata* 「貧乏人、浮浪人、ろくでなし」, ギ *ἵππότα* 「馬丁、馬の飼育者」, *σὺβώτης* 「豚飼い」。

-Δ 語尾は、自分の土地になれ親しんできた土着民の名称として、また田舎に暮らし、土地を耕してきた人々の名称として、全く自然なことであった — 次例参照、**ПОЛЬЩИНА** (農民、百姓、村人) (スヴァトスラフ文集 1073), ラ *incola* 「(地方都市) 居民」, *agricola* 「農夫」, *rūricola* 「農夫、百姓」, *indigena* 「その土地生まれの人、土着民」, ギ *γεωμέτρης* 「測量者」, *πολίτης* 「都市住民」(ギリシャ語都市名は、スラヴ語のそれと違って、女性である)。

バフチン (М. Бахтин, 1965) の見事な分析によれば、この辱みということは、生と下半身との関わり、生と胃袋及び生殖器官との関わり、したがって、性交、妊娠、出産、食、排泄のような行為との関わりをも表していた (**ПЬЯНИЦА** [大酒のみ] **ЛЮБОДѢЦА** [私通者], **ИДѢЦА** 「食い道楽」, **ПИВѢЦА** [大酒家], **ВИНОПИВѢЦА** [同], **ВИНОПЬИЦА** [同], ラ *gumia* 「大食家、美食家」, *galba* 「太っちょ」, *agaga* 「(情事の) 取り持ち、(売春) 仲介者、女衒」参照)。そして、結局、宇宙の下部及び下半身は、生の積極的な源 — 健康で強い力の漲る青春 (**ЮНОША** [若者], **ЮНОТА** [同], ギ *νεᾶνίς* 「若者」参照) — にも、否定的な源 — 横死、殺人、肉体切断、墓 — にも関係しているのである。次例参照、**СТѢЦА** 「刑吏」, **ОУБОИЦА** (殺害者), **ОУБѢИЦА** (同), **ЧѢЛОВѢКОУБѢИЦА** (同), **ЧѢЛОВѢКООУБОИЦА** (同), 古ロ **ГРОБОРЬЯ** (墓地盗掘者), **МЕЧЕНОША** (主人の武器を持つ従者、太刀持ち) (10世紀の

古代ブルガリアの宝石入り指輪の碑銘), 古ロ **ВРАЖИЦА** 「武装した敵」, ラ homicida 「殺害者」, ギ στρατιώτης 「(武装) 兵士」, τ ο ξ ό τ η ς 「弓兵」, ό π λ ή τ η ς 「重装備兵」, α ί χ μ η τ ά 「槍兵」。

-a 語尾を持つ、スラヴ語の、男性ないしは総性(男性、女性両用)名詞の卑語・罵言の類も、同じような意味分野の語と見なさなければならない — ポ ciapa (= ρ ρ α σ - τ ή π - α 「ぼんやり者、うすのろ」), ρ ο β ρ ύ ζ γ α 「不平家、やかましや」, н е ρ я х а 「だらしない人、ずぼら」, π λ ά κ σ α 「泣き虫」, ρ α з ъ н я 「間抜け、とんま」(これらは、俗語的文体に特有のものであり、したがって、古い文学作品にはみられない)。-ā < -eH₂ の語尾を持つ、スラヴ祖語の軽蔑語に対応するのが、古代インド語の罵語で、語尾 -ī < -iH₂ を持つ男性人間名詞である。これらの大部分は、男性に転用された女性名称である。バフチンの研究が示しているように、罵詈雑言の本来の目的は、破壊根絶して新しい産出を迎えるために、絶対的な下半身へ、産出、出産器官の領域へ、宇宙と肉体のどん底の淵へ追放することであった。例えば、ブルガリア語のバーバ б à б а (ばあさん、女々しい男、腰抜け)のような、男性に対する罵言の、根底には、多義的で両面価値的な性格があり、それは、一面では、破壊、すなわち老いと死と滅びの暗示であり、また一面では、完成改善と再生復活へ向けての独特の呼びかけなのである — 我が方言では、人間ないしは動物がこの世界に出てくる基になる囊(胎盤)のことも б à б а と呼んでいる。「老女」である б à б а も「胎盤」である б à б а も、元々二つの異なる単語ではなく、始原的には同一の本質の総称である — 孕める死滅(б е ρ е м е н н а т а с м ъ ρ т)、つまり春の来たらんがために去り行く冬(б а б а з и м а)を祭る奇祭である、ブルガリア民族の春のカーニバルの参加者のことを、バブーレツィ б а б ъ ρ е ц и (< б а б а)と呼んでいる。

СТАРТИШИНА (長老、族長), **ВЛАДЪКА** (主人、支配者), **ВОЕВОДА**

Δ (司令官), **ВЕЛМОЖА** (オプティマス、貴族) (**в е л м о ж а** なる民間語は、つい最近まで、キュディール地方³²で、家族共同体の長の意で残って来た), **БАЛЪИ** (医師), **ВЪТЪИ** (聖なるスラヴの民会 **ВЪШТЕ** < **uēt-i-o-* での演説者、発言者), **СЖДЪИ** (裁判官) (最後の三語は -ī < -iH₂ を含んでいる), *γ* **δέσποτα** 「主人、支配者、所有者」, *κ* **ριτής** 「裁判官」, *ε* **ὄροπα** 「先見の明のある (人)」, *μ* **ητ** *ί* **ετᾱ** 「賢明な (人)」のようなゼウスに対する形容詞、あるいは *ἀ* **κ** *α* **τητα** 「情け深い、有益な (人)」のようなヘルメスに対する形容語は、*plūrālis māiestātis* (威厳の複数)³³ の意味で使われている、集合的な意味を持つ抽象名詞であった。

§. 27 始原的な名詞接尾辞 -i-

古イ *āsvah* = ラ *equus* 「(雄)馬」 < **ek'u-o-s* (幹母音は対応階梯) に対して、古イ *āsvā* = ラ *equa* 「雌馬」 < **ek'u-e-H₂* (幹母音は正常階梯) となるタイプのように、男性名詞の語幹に古い語尾 *H₂* を付加して作られる女性派生名詞は、古代ブルガリア語には立証されない。この女性派生名詞形成法は、印欧語期に広がったものではない。このことを証明しているのが、*ὁ ἵππος* < **ek'u-o-s* は「雄馬」の意、*ἡ ἵππος* は「雌馬」の意となるギリシャ語である。しかし、形容詞の場合は、この上述の方法が、非常に広く行われている — 男・単・主 *новъ*, 女 *нова*, 中 *ново*, ギ *νέος*, *νέα*, *νέον* 「若い」, ラ *novus*, *nova*, *novum* < **neu-o-s*, *neu-e-H₂*, *neu-o-* を参照。女性派生名詞が最も頻繁に作られたのは、*i* の要素を含む語幹からである。この要素は、起源的には、近辺にあって、手が届く範囲内の、可視的なもの、また同じく、一瞥すると同時に捉えられる、したがって、一箇所に集中した小(規模複)数(ないしは二つ)のものとして再解釈されうる(二つの)物を表す場所指示小辞である。

この小辞からは、承前・関係代名詞が派生している — 男・単・主 *иже*, 女 *иже*, 中 *еже* (*иже*), ギ *ὅς*, *ἥ*, *ὅ*, 古イ *yāh*, *yā*, *yād* 「who, which」 < **i-o-s*, **i-ā* < **i-e-H₂*, **i-o-d* を参照。接尾辞 *-o-* (*-e-*) によって拡張しない語根 **i-* は、ラ 男・単・主 *is* 「それ」, 対 *im* (*eum* は、より新しい形), 中 *id*, ギ 中・単・主 *ita* < **i-d-*, 古イ 男・単・対 *im-ām*, 中 *id-ām* に立証される。男性単数対格の承前・代名詞形 *и*、また前置詞に後置されるとき *иъ* (ゾグラフォス写本) の形は、恐らく **i-m* あるいは **i-n* から派生したものであるまい (§. 38 参照) ; 曲用全体に特有である (単・生 *иго*, 与 *игоу*, 複・生 *иихъ*, 与 *иимъ*)、前置詞結合 *въ иъ*,

НА НѢ の **Н** の軟性は、むしろ *i-o-m ないしは *i-o-n といった原形を前提としたものである。

i の要素は、場所指標 (§.31 参照) として以外に、時間指標としても使われている — これは、古代ブルガリア語現在形語尾の一部に存在しており (1・単 **ЕСМЬ** < *es-m-i, 古ロ 3・単 **БЕРЕТЬ** < *bher-e-t-i, 古ロ 複・3 **БЕРЖТЬ** < *bher-o-nt-i 参照)、発話時に遂行された行為の印である — この要素の i が欠損すると、その動詞形は、未完了過去形 (インパーフェクト)、すなわち、持続的ではあるが、発話時以前に終了した行為を表す形 (古代ブルガリア語の単純アオリストは、これから作ったのであるが) に転じたのである。Cf. 現・3・単 **НЕСЕТЬ** < *nek'-e-t-i と単純アオ・3・単 **НЕСЕ** < *nek'-e-t, 現・3・複 **НЕСЖТЬ** < *nek'-o-nt-i と単純アオ・3・複 **НЕСЖ** < *nek'-o-nt。

古代ブルガリア語の物主形容詞の一部も、i の要素の助けを借りて作られている — 例、男・単・主 **ОВЪЧЬ** (*ou-i-k-i-o-) < **ОВЪЦА** (*ou-i-k-), **ГОВЪЖА** (*g*ou-nd-i-o-) < **ГОВЪДО**, **ОТЪЧЬ** (*at-i-k-i-o-) < **ОТЪЦЬ** (*at-i-k-o-)。本来、接尾辞の -i- は、所有を表すのではなく、基となる名詞との、非常に一般的な近接性とか共存性とかを表したのである — **ОВЪЧЬ** の原形は、羊自体を表すのではなく、羊に直接関係するもの、つまり、羊肉とか羊皮とか羊小屋とかを表したのである。

古い女性派生名詞も、この i 語幹に H₂ 指標を付加することによって作られている — 次例参照、古イ devāh 「神」 < *dei-u- に対して、dēvī 「女神」 (逐語的には、神の近くににいるもの、神に関するもの) < *dei-u-i-H₂; vřkah 「狼」 < *uřk*-o- に対して、vřkī 「雌狼」 < *uřk*-i-H₂。始原的な iH₂ > i のこの結合は、**ВЪЧНИЦА** < *uřk*-i-H₂-k-ā にも立証される。マルティネ (1955) が推定しているように、-ikā > **-ИЦА** 語尾の古来の子音 **К** (**Ц**) は、恐らく、H₂ 音

の継承であろう。 $-iH_2s$ の結合（この場合の s は、有生類名詞の古い主格語尾）は、 $-ik-s$ に変じ、一方、後に、女性名詞は補助指標 $\bar{a}$ を得て、 $\bar{a}$ 語幹に転ずる、すなわち、 $-ik-s$ は $-ik-\bar{a}$ に取って代えられたのである；同様に、 т р ѣ н а к （ブ 集合名詞 リンボクの茂み）の語尾 $-а к$ も、 $eH_2s > -\bar{a}k-$ から説明すべきである。

始原始的な $*u\lambda k^w-i-H_2$ の形は、逐語的には、「狼の近くにあり、狼に係する一括多数のものないしは女性のもの」を表したのであるが、これは他の名詞に対する不一致的な付語（同格語）としても使うことができた — 例えば、 $*u\lambda k^w-i-H_2$ pedes 「狼の足」。当初、組み合わせ全体に複数の意味を付与したのは、 $*pedes$ における語尾の $-es$ ではなくて、 $*u\lambda k^w-i-H_2$ における一括多数性指標 H_2 なのである。ここに示した $*u\lambda k^w-i-H_2$ pedes の組み合わせは、セム語の status cōnstructus（構成位相）（二つの名詞の組み合わせで、その内の一つは後に属格に転じた）、あるいは古代インド語文法で tatpuruṣa-（限定合成語、determinative compound）と呼ばれているシンタグマ（tatpuruṣa- という用語自体は、本来は「ある人の家来」の意味を持つ、文法上の使用例である）を想起させる³⁴。このシンタグマは、合成語であって、その第一要素は純粹語幹で所有者を表し、第二要素は屈折変化を行って、被所有物を表すのである — 例、古イ $rāja-putrā-$ 「王子」（逐語的には、王—息子）。 $lupī$ 「狼の」 $< *u\lambda k^w-i-H_2$ 型のラテン語男性単数属格形は、 $*u\lambda k^w-i-H_2$ pedes = ラ $lupī$ pedes 「狼の足」の組み合わせに現れている。すなわち、**ВЛЪЧНИЦА** における語幹 **ВЛЪЧН-** $< *u\lambda k^w-i-H_2$ (cf. 古イ $v\check{r}k\bar{i}$ 「雌狼」) は、ラテン語単数属格の $lupī$ 「狼の」に等しいのである。

語尾 $-īna$ （男 **ХРАМЪ**, 女 **ХРАМ-ИНА**）を持つ女性派生名詞の接尾辞 $-i-$ も、**-ИЦА** 語尾の派生名詞（男 **ВЛЪКЪ**, 女 **ВЛЪЧНИЦА**）の接尾辞 $-i-$ と同一起源（ $-i-H_2$ ）である。同様の語派生モデルは、ラテン語男性主格 $rēx$ 「王」 $< *rēg'-s$, 女性 $rēgīna$ 「女王」 $< *rēg'-i-H_2-nā$ にも立証される。通常 $\bar{a}$, $i\bar{a}$ 語幹名詞から物主形容詞を作る接尾

辞の **-ин-** < **-i-H₂-n-** (例、**ЗМѢИНЪ** < **ЗМѢЯ**, **БОГОРОДИЧЪНЪ** < **БОГОРОДИЦА**, **МАРИИНЪ** < **МАРИА**) は、**ГОСТИНЪ** < **ГОСТЬ** (i 語幹、男), **ТАТИНЪ** < **ТАТЬ** (i 語幹、男), **ЗВѢРИНЪ** < **ЗВѢРЬ** (i 語幹、男), **НЕПРИЯЗНИНЪ** < **НЕПРИЯЗНИЦА** (i 語幹、女) のような形が証明しているように、恐らく、i 曲用の枠内で発生したものであろう。**ВЛЪЧИЦА** < ***u_lk*-i-H₂-** や **ХРАМИНА** < ***skorm-i-H₂-n-**、また同じく、**БОГЪНИ** < ***bhag-u-H₂-n-** のタイプにおいて、女性語幹も作った一括多数性指標 H₂ は、第一次接尾辞と第二次接尾辞の原形に二回登場しているのである。

時が経つにしたがって、形容詞及び分詞の場合にも、i の要素の助けを借りて女性用派生語幹を作り始めるのである。次例参照、ギ 男・単・主 **μῑλᾱς** 「黒い、暗い」、中 **μῑλᾱν** に対して、女 **μῑλᾱινᾱ** < ***μῑλᾱν-ι-α** ; 男 **πᾱς** 「全ての、全き」、中 **πᾱν** に対して、女 **πᾱσα** < ***πᾱντ-ι-α** ; 男 **γλυκύς** 「甘い」、中 **γλυκύ** に対して、女 **γλυκεῖα** < ***γλυκύ-εF-ι-α** (接尾辞 u の e 階梯) ; 男・単・主 **φέρων** 「運んでいる (分詞)」, 中 **φέρον** に対して、女 **φεροῦσα** < ***φερ-ο-ντ-ι-α** 。本来女性用派生語幹の表徴であった i の要素は、スラヴ祖語においては、男性・中性単数主格形を除く、能動現在分詞、能動過去分詞の全ての形及び形容詞比較級の形に広がっている。次例参照、男・単・主 **БЕРУ** < ***bher-o-nt-s** (cf. ギ **φέρων**, ラ **ferens**) に対して、生 **БЕРЖШТА** < ***bher-o-nt-i-o-** (女性形の影響による i 挿入), 女・単・主 **БЕРЖШТИ** < ***bher-o-nt-i-H₂** (斜格の影響により、**t** > **шт**), 生 **БЕРЖШТА** < ***bher-o-nt-i-e-H₂-**, 男・複・主 **БЕРЖШТЕ** (女性形の影響による i 挿入 ; cf. ラ **ferentēs**, ギ **φέροντες**), 女・複・主 **БЕРЖШТА** (女性単数生格と同じ語幹から) ; 男・単・主 **ОУ-МЬРЪ** < ***mr̥-u-s-** (cf. 古イ 男・単・属 **ma-mr-ū-ſ-aḥ** — 畳音完了形), 生 **ОУМЬРЪША**, 女・単・主 **ОУМЬ**

РЪШН < *mr-u-s-i-H₂ (cf. 古イ ma-mr-ú-š-i), 生 ОУМЬРЪША
 < *mr-u-s-i-e-H₂ (cf. 古イ ma-mr-ú-s-y-ā-h), 男・複・主 ОУМЬР
 ЪШЕ, 女・複・主 ОУМЬРЪША (女・単・生と同じ語幹から) ; 男・単・
 主 МЬНЬН, 生 МЬНЬША < *min-iis-, 女・単・主 МЬНЬШН <
 *min-iis-i-H₂, 生 МЬНЬША < *min-iis-i-e-H₂-, 男・複・主 МЬ
 НЬШЕ, 女・複・主 МЬНЬША (女・単・生と同じ語幹から)。

i の要素を介して作られる、同タイプの女性用派生語幹は、指示代名詞
 ТЪ の曲用にも立証される — 例、女・単・主 ТА < *t-e-H₂, 対
 ТЖ < *t-ā-n < *t-e-H₂ に対して、単・生 ТОМ, 与 ТОН, 造
 ТОЖ < *t-o-i-ā- 。この場合の *t-o-i- の語幹は、代名詞語根 *t
 の o 語幹から取ったものである (cf. 男・単・生 Т-О-ГО, 与 Т-О-
 МОУ, 所 Т-О-МЬ)。

互いに近くに存在し、そのために集合多数性を構成するか、あるいは自然
 と対を成すようなものについての派生集合名詞も、i の要素の助けを借り
 て作られる。古代ブルガリア語期にも、それらの一部分は、singularia t
 antum (絶対単数) として用いられた — 例、ЧАДЬ「子供」, ИДЬ, С
 Ъ-НТАДЬ「食べ物、食料」, ВТАДЬ「知識」(見聞したもの、こと), СОЛЬ,
 ЗЛАДЬ「悪事、悪意」, ПАТЬ「五」(手を広げたときの五本指) (現・1・
 単 ПЬНЖ, 2 ПЬНЕШН [伸ばす、引っ張る] と同一語根から作る ;
 この同じ語根に、-t- に代えて古い接尾辞 -d- を付加すると、ПАДЬ
 「ぴんと張った親指と小指の間の距離」ができる)。当初、これらの集合名詞
 は、性の特徴においては中立的であって、その原形は恐らく無生類に属した
 のであるが、後になって、抽象(派生)集合名詞も含んだ (§. 10 参照)
 女性範疇に算入されたのである。語根 *ok*- (cf. 単・主 ОКО, 生 ОЧ-
 ЕС-Е) 及び *aus- (cf. 単・主 ОУХО, 生 ОУШ-ЕС-Е) に i 指標
 を付加すると、語幹 *ok*-i- 及び *aus-i- が得られたが、そこから古代
 ブルガリア語の双数形が作られるのである — 双・主 ОЧИ < *ok*-i-
 ; ОУШН < *aus-i- を参照。

すでにスラヴ祖語期には、接尾辞 *-i-* を持つ名詞の大部分は、複数形も形成し始め、その結果、当初集合的に使われていた **ЗВѢРЬ**, **МЫШЬ**, **КОСТЬ** のような単語（接尾辞 *-i-* のない語幹は、例えば、ギリ $\theta \eta \rho$ 「野獸」 < *g'hüēr-, 属 $\theta \eta \rho \acute{o} \varsigma$, ラ *mūs*, ギ $\mu \acute{\upsilon} \varsigma$, 古高ド *mūs* 「ネズミ」に立証されるが、これらは単数の意味を持っていた）は、単数、複数形を持つ完全曲用を発達させたのである。接尾辞 *-i-* を持つ形の最初の集合的な意味を基にして、スラヴ祖語集合名詞原形 ***ДЖБЬ**, ***ЗЕЛЬ**, ***ТРЬНЬ** を推定させる **БРЬБЬЕ** 「柳林」, **ДЖБЬЕ** 「広葉樹林、カシの森」, **ЗЕЛЬЕ** 「草木、緑葉」, **ТРЬНЬЕ** 「リンボク of 林」のような中性単数の派生集合名詞が作り出された — cf. **ЧАДЬ** と **ИШТАДЬЕ** < **ИС ЧАДЬЕ**; **ЖДОЛЬ** 「谷」と **ЖДОЛЬЕ** 。 **СОЛЬ**, **ДАЛЬ** (cf. **РО ДАЛЬ**) 「遠方、遠望」, **СЪН-ТДЬ**, **ВТДЬ**, **ЧАДЬ**, **БЛАДЬ** 「思い違い、失策」, **КОНЬ** 「初め、起点、終端、果て」, **ЛЪСТЬ**, **СРЬДЬ** 「中、内部」のような始原的な集合名詞からは、**СОЛЪНЪ**, **ДАЛЪНЪ**, **СЪНТДЪНЪ**, **БЕЗ-ВТДЪНЪ**, **БЕЗ-ЧАДЪНЪ**, **БЛАДЪНЪ**, **ЗА-КОНЪНЪ**, **ИСКОНЪНЪ**, **ПРЪ-ЛЪСТЬНЪ**, **МИЛО-СРЬДЪНЪ** のような派生形容詞、**ЧАДЬЦЕ**, **ТДЬЦА**, **СРЬДЬЦЕ**, **ЛЪСТЬЦЬ**, **СРЬДЬЦЕ-ВТДЬЦЬ** のような派生名詞が発生した。スラヴ祖語においては、接尾辞 **-ЪН-** や **-ЬЦ-** は、派生力が強くなり、他の名詞にも拡大していった — 例、**СЖЧЬЦЬ** < **СЖКЪ** 「木枝」, **ГРАДЬЦЬ** < **ГРАДЪ**, **ЮНЬЦЬ** < **ЮНЪ**, **ПОТЪНЪ** < **ПОТЪ**, **ВѢРЪНЪ** < **ВѢРА**, **БѢСЪНЪ** < **БѢСЪ**, **НЕБЕСЪНЪ** < 単・主 **НЕБО**, 生 **НЕБЕСЕ** 。変化 (declinable) 形容詞 **СВОБОДЪНЪ**, **РАЗЛИЧЪНЪ**, **СОУГОУБЪНЪ**, **ОУДОБЪНЪ** は、ゴート語 *i* 語幹変化形容詞 *hrains* 「清い、清潔な」, *anasians* 「見える、可視の」, *skeirs* 「光る、明るい」と同じ語派生タイプである、*i* 語幹の不変化形容詞 (indeclinable) **СВОБОДЬ**, **РАЗЛИЧЬ**, **СОУГОУБЬ**, **ОУДОБЬ** から発生したものである。形容詞比較級を作る集約性語幹の接尾辞 *-i-* については、§. 20 参照。

§.28 始原的な純粹語幹の文法的意義

始原的な有生類名詞と無生類名詞の本質的な違いは、前者は行為主（動作主）にも性質の担い手にもなり得るが、後者は性質の担い手にしかなり得ない、という点にある。古い有生類名詞は、活格動詞とも不活格動詞とも結合できたが、古い無生類名詞は、不活格動詞以外とは結びつき得なかった。始原的な二大活用である活格活用と不活格活用（§.15 参照）、及び二大名詞類である有生類と無生類（§.22 参照）、換言すれば、活性類と不活性類の存在は、スラヴ祖語の主格構文（他動詞の場合は主格主語と対格の直接補語、自動詞の場合は主格主語のみの構文）の基になった古い統語構造が、活格構造であったことを推定させる根拠になる。活格的統語構造にあっては、活格動詞の主語は、特別な語尾を持った活格に立ち、直接補語は、純粹語幹である絶対格に立つのである。直接補語を持たない不活格動詞の主語も、絶対格、すなわち純粹語幹になる。活格的統語構造の言語においては、数のカテゴリーの発達が弱く、単数形と複数形を区別する特別の名詞接辞（affix）を前提とすることはできない。数は、叙述的な方法、例えば、「多数」の意味の副詞を補って、あるいはまた、動詞の屈折によって、表されたのである。文法上の格は、活格と絶対格の二つであった。属格（生格）、対格及び与格に相当するような格は存在していない。しかし、所（処）格的、目的格的、奪格的、共同格的、具格的な意味を持つ様々な後置詞（要素）（задлог）は存在しており、それらが場所、目的地、分離、随伴（協力）、手段を指示したのである。活格構造の言語にあっては、受動構文や動詞の受動活用は無縁であった。

活性（有性）名詞類には、二つの文法格 — 活格動詞文の主語の機能を果たす活格（特別な語尾を持つ）、不活格動詞文の主語の機能及び活格動詞文の直接補語の機能を果たす絶対格（純粹語幹） — が存在した。この他、絶対格は、命名と呼びかけの機能も果たした — cf. **Вальке**, リ vilke,

古イ *vīka*, ギ *λύκε*, ラ *lupe* < **ul̥kʷ-e* は、純粹語幹。絶対格（純粹語幹）は、古代インド語文法がカルマダーラヤ（*karmadhāraya*, *appositionally defined compound* 同格限定合成語） — 不一致形容詞 + 名詞 — と呼んでいる構文での形容詞の役割も演じている³⁵。次例参照、スプラシル写本 434₅ **ДОБРОПОМОЩЬНИЦА** (= ギ *καλή βοηθός*) , 同写本 493₁₃ **БЛАГОДѢАННЕ**, (= ギ *κηδεμόνεια*) , 同写本 263₄ **БЛАГОИЗВОЛЕНИЕ** (= ギ *ἀρετή*) , 同写本 300₁₉ **БЛАГОДАТЬ** (= ギ *χάρις*) , ギ *ἀκρόπολις* 「城塞」 (逐語的には、上の町) , *μεσόγαια* 「内地、非沿海地」, 古イ *mahāvīra*-「偉大なる英雄」, *pūrṇāmāsa*-「満月」。これらの構文は、限定詞が性、数、格の変化をしない時代の名残である。次のような、i 語幹の不変化形容詞も、同様の古い統語特徴について証明している — **ИСПЛЪНЪ** (スプラシル写本 136₄ **РЖЦѢ КРЪВЕ ИСПЛЪНЪ** [両の手は血に染まっている]) , **СВОБОДЪ** (同写本 244₂₀ **ПОСЛАДНЪ БЫСТЪ СВОБОДЪ ГРѢХА** [罪を免れて遣わされた]) , **РАЗЛИЧЪ** (同写本 42₂₉ **СТАДА РАЗЛИЧЪ ВОЛОВЪ** [様々な牛の群れ]) , **СОУГОБЪ** (同写本 449₁ **СОУГОУБЪ ДЪНЕСЬ ПРИШЕСТВИЕ ГОСПОДЬНЕ** [今日は主の再来の日]) , **ОУДОБЪ** (シナイ祈禱書 24 a 8 **ВѢДЪ ОУДОБЪ ПОГЫБЕНИЕ** [軽い過ちを知って]) ; 副詞として使われているものもある、例、スプラシル写本 530₂₅ **ОБИЛО И ОУДОБЪ ПОДАМ** [大量にしかも簡単に落ちて] 。

純粹語幹は、極めて多様な状況語的意味も持っていた。この語幹のそのような意味については、例えば、**МЪНОГО**, **СКОРО**, **РАНО**, **ПРИЛЕЖЪНО**, **СВѢТЪЛО**, **ДОБЛЕ**, **ОУДОБЪ**, **ПРАВЪ** のような o 語幹、io 語幹、i 語幹の副詞が証明している — 例、詩編 CXIX 7 **МЪНОГО ПРИШЕЛСТВОВА ДША МОѢ**. (久しく、我が魂が住んでいた) ; 詩編 LXXVII 34 **РАНО ПРИХОЖДААХЪ КЪ БОУ**. (早朝から、彼らは神の助けを求めた) ; ルカ VII-43 ゾグラフォス写本 **ПРАВЪ**

СЖАНАЛЪ ЕСИ. (あなたの判断は正しい) ; スプラシル写本 367₁₅ **И**
И ГЛАДЪ ЗАМОРИ НИ РАНЫ ДАСТЪ. (飢え死にもさせず、傷
 も与えなかった)。形の上では、これらの副詞は、中性単数主・対格名詞と
 一致しており、純粹語幹から直接作るか、純粹語幹に取って代わった中性単
 数主・対格形から作ったのである (§.38 参照)。

活格動詞の主語となり得ない不活性(無生)類名詞にあっては、活格の範
 疇は欠如している。不活性類にとっての特徴は、絶対格としてあるいは様々
 の後置要素(за длог)と組み合わせて使われる純粹語幹だけである。
 ハーファース(W. Havers, 1924)の研究は、ギリシャ語やラテン語では、
 時に、不活性(無生)類名詞の絶対格の継承である単数中性名詞の対格が、
 それ以外の斜格に代わって使われたことを示している。これは、不活性類名
 詞が活性(有生)類名詞と比べて曲用が未発達である(後置要素によって作
 る形の少なさをも含めて)、より古い状態の痕跡なのである。古い無生類名
 詞は、とりわけ様々な意味を持つ純粹語幹として使われたのである。

§.29 始原的後置詞 [з а д л о г]

(前置詞 п р е д л о г) *od (ot)

未だ格体系が未構築であったスラヴ祖語に遥か先行する時期、文を構成する上で重要な役割を演じたのは種々の副詞 (adverbia) である。この副詞と動詞語幹の合成から動詞の接頭辞が作られ、またこの副詞とそれに前置する純粹語幹との合成からは、いくつかの格語尾が発生した。副詞のあるものは、移動語根 (лативен корен < лātus 「運ばれた」) *ad- : d- から形成された。古代ブルガリア語においては、これは前置詞ないしは接頭辞 (отъ, от-, о-, до) として立証される。この移動語根は、スラヴ祖語 o 語幹単数生格語尾 -ā の基になる要素の一つである — 例、単・生 ВЛЪКА < *uļkʷ-ōd , uļkʷ-ād < *uļkʷ-o-ad ; c f. л 単・奪 lupō < *lupōd = 古イ vřkāt (語末の d > t の無声化を伴う) に対して、リ viļko < *uļkʷ-ā-d < *uļkʷ-o-ad 。この移動語根 *ad- : d- は、ある起点から終点への運動を表したものである。この最も一般的な意味からは、二つの対立的な個別的意味の発達が可能であった — 一つは、離奪的な意味 (аблативно значение < лā ab-lātus 「(〜から) 運び去られた、遠ざけられた、奪い去られた、引き離された」) — 例、отъ, лā dē 「〜から」 (= ブ, л о т), 生 ВЛЪКА < *uļkʷ-o-ad = л 単・奪 lupō , 古 л lupōd , 古イ 単・奪 vřkāt , リ 奪・生 viļko — であり、もう一つは、接近の意味 (алативно значение < лā al-lātus < ad-lātus 「(〜へ) 運び込まれた、近づけられた」) — 例、до, лā ad 「〜へ (向かって)、まで」 (= ブ, л о д о) г o at < *ad 「〜へ、まで」 , ギ o i k ó λ - δ ε 「家へ」 , アヴェスタ vaē smən-da 「家へ」 — である。この移動語根 *d- は、指示代名詞や疑問代名詞の主格・対格形の形成にも与っている — 次例参照、主・対

TO < *t-o-d ; cf. 古イ t-ā-t , ギ τó < *t-o-d , ゴ th
ata < *t-o-d, ita < *i-d , ラ id「それ」, quid「何」。この移動
語根は、代名詞語幹（例、*t-o- *i-, *kʷ-i-）の表す不活性類の名詞が行
為に参与したのは行為の起点（発源点）としてであり、したがって、それは
疑似主体（псевдосубект）の機能を果たすこと、あるいはまた、
行為に参与したのは行為の終（着）点としてであり、その場合は疑似客体
（псевдообект）の機能を果たすこと、を明確化したのである
（§.39 参照）。

移動語根 *d- に由来する前置詞 **OTЪ** や **AO** は、生格とのみ使用
されるが、この生格はさらに古い移動格の継承である（起点の格としてだけ
ではなく、限界の格、到達の格としての、古代ブルガリア語における、生格
のさらに広い移動格的な用法については、スプラシル写本 31, **AOHAET**
Ъ МЪСТА ТОГО [その地に到る] のような例がこれを証明している）。

前置詞の **AO** は、他の古い印欧諸語に多数の類似対応例を持っていて —

例 ラト da「へ、まで（до）」, ゴ at「до」, ギ -δε (οἰ
κόλ-δε「家へ」における), ゲルマン祖語 *d- (ゴ at-augjan「目に
近づける、示す、見せる」 ; cf. ドイツ zeigen < *z-ougen), ゲル
マン祖語 *dō = 古高ド zuo (ド zu「へ」), ラ en-do —、「の中へ、
中で」の意を持つ古い移入前置詞 (имлативен предлог <

ラ il-lātus < in-lātus「中へ運び込まれた」) である。**AO** とは異
なり、前置詞 **OTЪ** は (*ad の継承である点については、以下を参照)、
古い奪格語尾 -ad とラテン語前置詞 ad (< 移動語根 *ad-: d-)
に対応するにすぎない。前置詞の **OTЪ** < *ad の対応例が極めて少な
い理由は、大多数の印欧語では、副詞の *apo : po (cf. 古イ apa「後
ろへ、脇へ、離れて」, ラ ab , ゴ af , ギ ἀπό「から [= ブ ,
ロ ot]」) が奪格的前置詞に転じたからであり、この副詞は、古代ブル
ガリア語では、上部存在的 (суперсивен < ラ super-esse
「上に在る」) かつ後部存在的 (постесивен < ラ post-esse

「後ろに在る」) な意味の前置詞及び接頭辞 **по** として使われている。

この前置詞(接頭辞) **отъ** は、古代ブルガリア語(現代ブルガリア語も)、ロシア語、白ロシア(ベロルシア)語、下ソルブ語、上ソルブ語においては、無声子音を持っている。ウクライナ語では、**від** あるいは **о** **д** であり、セルビア・クロアチア語、スロヴェニア語、チェコ語、スロヴァキア語、ポーランド語では、**od** である。古代ブルガリア語にも、**оа** のついたいくつかの形が見られるが — **оаънелиже** ([~の時以来] マルコ IX-21 マリア写本), **оаълъкъ** [残り] (=ギリ *τὰ κατὰ λοίπα*; 詩編 XVI. 14)、これは恐らくモラヴィア訛(**моравизм**)であろう。通説では、第一次形は ***ot** であり、最初是有声子音前にしか存在しなかった ***od** の形が、後になってスラヴ語の一部で一般化した、ということになっている。しかし、逆のようにも考えられるのであって、第一次形は ***od** であり、最初は無声子音前にしか存在しなかった ***ot** の形が、後になって一般化したのかもしれない。スラヴ祖語の前置詞 ***ot (od)** には、二つの異なる語幹 — その一つは、移動語根 ***ad-** : **d-** から作った語幹、もう一つは、指示小辞 **o** (正常階梯では **e**) とそれに指示代名詞語根 **t-** を加えたものから作った語幹 — が融合していると思われる、次例参照、**еще**, ギ *ἐτι* 「まだ、なお、さらに」、**лат** *at* 「~から、元の方へ、逆の方へ(接頭辞)」, **ла** *et*, **го** *ith* 「と、そして」、古イ *at-i* 「(の) 上に、上方へ、(の) 外に」、*at-as* 「そのあと、それから、これより」。 **o (e)** と周辺指標(**периферен показател**, §.34 参照) **t** の組み合わせは、指示(**б е то** [ここに、そこに : **о в о т**] 参照)、すなわち、より近い空間からより遠い空間への(中心から周辺への)目と手の動きを表したのである。この組み合わせが、「ここからそちらへ、~から、さらに(もっと)」の意味を持った副詞として再解釈を受けたのである。

§. 30 中間的代名詞語根 *m

スラヴ祖語、バルト祖語、ゲルマン祖語の与格形及び造格形の形成に極めて重要な役割を演じたもう一つの後置詞（後置素）が、中間指標（меди́йный показател）m である — cf. 単・造 **ВЛЪК-О-МЬ**, 複・与 **ВЛЪК-О-МЪ**, 複・造 **СЪН-Ъ-МИ**, 双・与・造 **ВЛЪК-О-МА**, リ 複・与 *vilkaṃs*, 双・与・造 *vilkaṃ*, ゴ 複・与 *wulfam*。m の要素は、中央、中間、中心を意味する、非常に古い代名詞語根である — **МЕЖДОУ** < *me-dhi-（「異なる二つのものの中央にあるもの」を表す、古い双数所格形）参照、cf. ラ *medius*「中間の」, *medium*「中央、中心」, ギ *μέσος*「中間の、中央にある」, 古イ *mādhyas*「中間の」, *mādhyam*「中心、中央」。前置詞 *me-t- も、この中間語根 *m- に由来する（cf. ギ *μετά*, ゴ *mith* = ド *mit*「（と）共に」）；本来、この前置詞は、それが関係するものが、手段、すなわち、行為者の行為遂行を助ける媒体、中心であることを表したのである — ギ *μετὰ βοιωτῶν μάχεσθαι*「ボイオチア人達と戦うこと」（逐語的には、ボイオチア人達の間で、中で）； *μεθ' ὀπλῶν*「武器を持って、武器の助けで、武器によって」； *μετὰ θεῶν*「神々の助けで、神々によって」。後置詞 m は、最初は、純粹に中間的な職能を持ち、造格・共同格的な形を構成したのである。

この中間素 m は、ある行為や特性の中心ないしは集中点を表すスラヴ祖語の *men* 語幹名詞、を作る接尾辞 -men- にも関与している — **КАМЪ**, 生 **КАМЕНЕ** < *H₂k'-eH₂-men- の原形は、自分自身の中に鋭度（острота — 形容詞 **ОСТРЪ** [鋭い] は、同語根 *H₂ek'-r- に挿入音 t を添加して作ったもの）を集中体現しているものを表し、**СЪМА** の原形は、播種作業の中心、焦点であるものを、**БРЪМА**, **ЧИСМА**, **ПИСМА**, **ЗНАМА** の原形は、それぞれ、運び、読み、書き、知るとい

行為の中心、焦点であるものを表すのである (**ЗНАМА** は、消すと忘れてしまうような覚え書き、目印を表す)。**ВРЪМА** < *uert-men- は、本来、天空の星座の回転を表している (cf. 古イ várman-「生け贄献祭に、したがって世界の事件の成りゆきに影響する天体の運行路」) — **ВРЪМА** の原形は、大空の天体と星座の相互配置に関わる天体の回転の中心たるものを表したのである。

行為の中心を表した古い名詞に起源を持つものとして、**МОЛИМЪ**, **ЗНАЕМЪ**, **НЕСОМЪ**, **ТАНИМЪ**, **ВИДИМЪ** のような、接尾辞 -m- の受動現在分詞がある。Cf. 古イ bhár-amāṇaḥ , ギ φερόμενος , リ nēśamas「運ばれる」。**НОСИМЪ** < 他動詞 **НОСИТИ**、あるいは、**ВИСИМЪ** < 自動詞 **ВИСѢТИ** のような受動現在分詞の原形は、運ぶ (運ばれる) 行為ないしは掛かっている (掛けてある) という行為に関わる性質あるいは能力を、自分自身の中に集中体现する人ないしは物を表したのである。次例参照、スプラシル写本 564₂₃ **ВЪ ПОНЪВНИЦИ НОСИМЪ** (亜麻布を纏っている) ; 同写本 483₁₂ **НА КРЪСТѢ ВИСИМЪ** (十字架に掛かっている)。通常、他動詞から作る受動現在分詞にあっては、しばしば名詞が造格に措かれるが、これは、その人あるいは物が、別の人あるいは物の関与を通して、当該の性質 (能力) を集中体现することを示したのである。次例参照、スプラシル写本 219₂₉ **ТѢХЪ РАДИ ИЗЛИХА ЛЮБИМЪ ЮСТЪ БОГОМЪ** (その者達の故に、なお一層のこと神の愛を一身に集めている) ; 同写本 **ТЕКЪШТЕ БѢГАДУЖ АКУ ОГНЕМЪ ПАКУ ГОНИМИ** (彼らは再び火に追われる如く一目散に逃走して行った)。

中間語根 *m- は、1人称単数の人称代名詞でもある — 次例参照、生 **МЕНЕ**, ギ 対 μέ, ゴ 対 mik < *me-g-, 古イ 属 m e, リ 対 manē, ヒットライト 対 a-muk (ammuk)。古代人は、自分自身を宇宙の中心と見なし、その自己の位置から世界のものの位置を決定したのである。1人称単数の人称代名詞指標 m は、**ЕСМЪ**, 古イ āsmi ,

ギ $\varepsilon \iota \mu \iota$, リ $esmi$, ラ sum , ゴ im 「私は、ある、いる (ブ $c\bar{y}m$)」における動詞1人称単数語尾 $-m$ と同系関係にある。中間素 m は、スラヴ、バルト、ゲルマン語の造格・与格語尾を作る後置詞(要素)である。

他の印欧諸語では、造格・与格の一部が、前置詞 $\text{об}(\phi) =$ ラ ob 「前に」や数詞 оба と同系の別の古い後置詞 bh に起源を持っている。後置詞(前置詞)の原形 $*obh$ は、当該の人物ないしは事物が、他の人物あるいは事物の近辺にあること、それと併せてペアを成し得ることを表したものである。後置詞 $bh-$ の極めて広い意味については、ホメロスの言語がこれを証明しており、そこでは、純粹語幹に $-\phi \iota < *-bhi$ の末尾を付加することによって、様々な状況語的な形、なかんずく単数・複数の造格・奪格の意味を持った形を表徴したのである — 例、 τ 480 (オデュッセイアー) $\phi \acute{\alpha} \rho \upsilon \gamma \omicron \varsigma \lambda \acute{\alpha} \beta \epsilon \delta \epsilon \xi \iota \tau \epsilon \rho \eta \phi \iota \nu$ 「(その人は) 右手で 喉を掴んだ」; ρ 696 (イーリアス) $\delta \sigma \sigma \epsilon \delta \alpha \kappa \rho \upsilon \acute{o} \phi \iota \nu \pi \lambda \eta \sigma \theta \epsilon \nu$ 「両眼は涙であふれた」(下線は訳者による)。後置詞 bh の具格的、奪格的、与格的意味は、この要素の対置的な用法 ($\text{обесивна употреба} < \text{ラ } obesse$ 「の前に、に対して、の為にある、対立する、妨げとなる」) から発達したのである; 後置的副詞 bh は、行為遂行時の、局外的な人物あるいは事物の介在を表したのであるが、それが、間接客体(目的語)、起点、状況促進を表す格語尾として再解釈を受けたのである — 例、ラ 複・与・奪 $pedibus$, 古イ 複・与・奪 $padbhyāḥ$, 複・具 $padbhīḥ < \text{ラ 単・主 } pēs$, 古イ $pāt$ 「足」。

単数では、 bh の要素は、若干の与格形にのみ認められる — 古イ $tūbhyam$, ラ $tibi$, 古プ $tebbei$ 「君に」を参照。単数与格形 ТБТ も、同一起源であり、これのスラヴ祖語の語幹 $*te-b- < *te-bh-$ は、他の斜格形にも一般化している — 生 ТЕБЕ , 造 ТОБОМ , 所 ТЕБѢ を参照。再帰代名詞も、2人称単数の人称代名詞をモデルと

した曲用を行う — 生 **СЕБЕ** 与 **СЕТЪ** 等。

あらゆる **ОБ** (о) の用法の中で、恐らく最も古いものは、所格を取って、「回りに、周囲に」の意味を持つ用法であろう — 例、マルコ V-21 ゾグラフォス写本 **СЪБЪРА СЯ НАРОДЪ МНОГЪ О НЕМЪ** (大勢の群衆が彼のみもとに集まった)。bh の要素は、「回りに、前に、そばに」の意味以外に、恐らく、同系の前置詞 *ambhi : mbhi — この継承が、ラ amb- (例、ambiō「巡回する、かこむ」), 古高ド um bi「回りに、周囲に」 — との混淆の故に、「両側、両面から」の意味も表すに至った。この bh「回りに、両側から」の要素は、数量代名詞双数男性主格の **ОБА**, 女性・中性 **ОБЪ** の語根であり、これと同系関係にあるものとして、リ abū, ラト abī, 古プ abbai, ラ ambō, ゴ bai, ギ $\alpha\mu\phi\omega$, 古イ ubhā「二つ、両方、双方」がある。古い前置詞 *obhi 及び *epi (対応階梯では *opi) は、前置詞 **ОБ** (о) と合一してしまっている — cf. ギ $\epsilon\pi\iota$ 「上に」。

幹母音の延長によって作った、始原的な非曲用双数形も、共同・具格的な職能で使われた (§.5 参照)。若干の印欧語では、双数主・対格形が、単数造(具)格形と一致している — 次例参照、古イ 単・具 vřkā「狼と(共に)」= 双・主・対 vřkā「二匹の狼」, リ 単・造 vilkū = 双・主・対 vilkū。レヴィ (E. Lewy, 1913) は、フィン・ウゴル系の言語でも、単数造格形と双数形の上に同一性が存在しており、あるフィン・ウゴル語では同一形が造格であり、また別のフィン・ウゴル語ではそれが逆に双数形であることに注目したのである。幹母音の延長を伴った、始原的な印欧語の双数形 (例、*uļkʷ-ō「二匹の狼、別の狼と一緒に」) は、随伴・共同格 *uļkʷ-ō「別の狼と一緒に」の意味でも使われたが、後に、共同・具格形に転じ得た。それ故、一方では、*uļkʷ-ō から、**ВЛЪКА** や ギ $\lambda\acute{\upsilon}\kappa\omega$ のような双数主・対格形が発生し、また一方では、ゴ wulfa (与格として使われた) のような単数造格が発生したのである⁽¹⁵⁾。幹母音の延長を伴う純粹語幹は、すでにスラヴ祖語期に、共同・具格的な意味を持つ

ことを止めてしまった。古代ブルガリア語のあらゆる単数造格形は、始原的な中間的後置詞 *m* によって形成されたのである。

§. 31 格語尾としての指示代名詞的小辞 i

所格形形成に重要な役割を演じたのが、純粹語幹の後ろに付加される指示代名詞的小辞 *i* である (§.27 参照) — 単・所 **ВЛЪЦѢ** = 古イ *v fke* 「狼のそばに」 < **uļkʷ-o-i* を参照、cf. ギ *o ŷ k o ι* 「家で (副)」。所格形以外では、複数形も、指示代名詞的小辞 *i* の助けを借りて作られている — 主 **ВЛЪЦИ**, ギ *λ ú k o ι*, ラ *lupī*, リ *vikai* 「狼達」 < **uļkʷ-o-i* 参照 (*i* の要素の集合・多数性の意味については、§. 27 参照)。純粹語幹 **uļkʷ-o-* と指示小辞 (deictic particle) *i* 「近くに」 との結合である **uļkʷ-o-i* のような始原的な形は、狼の相対的近接性も絶対的近接性も表した。狼の相対的近接性とは、狼の近くにあり、狼と同一場所にあることを、また狼の絶対的近接性とは、一箇所に蟠集する狼達のことである。単数所格 **uļkʷ-o-i* = **ВЛЪЦѢ** と 複数主格 **uļkʷ-o-i* = **ВЛЪЦИ** の同一性は、いくつかのツングース・満州語における、所格形と複数形の同一性を想起させるのであって、そこでは、「と同じ場所に、と一緒に」の意味の所格・共同格的な指標を持った表現が、複数形の意味でも使われているのである。Cf. 古代ブルガリア語の疑問、指示代名詞における、単数造格・共同格語幹 (**ТѢМЪ** < **t-o-i-mi*) と複数語幹 (主 **ТИ**, 生 **ТѢХЪ**, 与 **ТѢМЪ** < **t-o-i-*) の同一性も。

始原的な不活性類の継承である中性名詞は、代名詞的指示小辞 *i* の助けを借りて、双数形を作った — 双・主・対 **НСТ** = 古イ *yugé* 「二つのくびき」 < **iug-o-i* 参照。 **uļkʷ-o-i* (= **ВЛЪЦИ**) の複数使用と対照的に、 **iug-o-i* (= **НСТ**) が双数使用であるのは、不活性類名詞は、一括多数性指標 *H₂* の助けを借りて複数形を作ったからである (§.10 参照)。当初は集合的意味を伴う抽象 (派生) 名詞であった、一括多数 (非分割多数、不可算多数) 形 **iug-e-H₂* (= 複・主・対 **НГД**) とは対照的に、 **iug-o-i* の形 (= 単・所、双・対 **НСТ**) は、近在的、並存的な小

(規模複)数のもの、分割、可算多数のものを表したのであり、その結果、双数用法を獲得したのである。双数が、小(規模複)数を表す特別な形から発生したことは、ホメロスの言語が証明しており、そこでは、いわゆる双数形なるものが、二つ以上のものについて述べるときにも使われるのである。

Cf. I 182 - 198 (イーリアス) ; ここでは、アガ멤ノーンが遣わした三人の使者 — オデュッセウス、アイアース、ポイニクス — について、古典ギリシャ語文法の観点から見て双数である動詞、代名詞、分詞を以て語られている。アリストテレス(弁論術、Ρ η τ. Γ.5)によれば、優れたギリシャ語話術の特徴の一つは、多数、小数、また単一であるものの形を正確に使用することである — ἐν τῷ πο πολλὰ (多数のもの) καὶ ὀλίγα (小数のもの) καὶ ἐν (一つのもの) ὀρθῶς (正確に) ὀνομάζειν (名を挙げる)。このことは、アリストテレスにとっては、いわゆる双数形とは、本質的には小(規模複)数を表す形であったことを示している。

スラヴ祖語の子音幹曲用の名詞の場合、単数所格語尾は e であった — 単・所 **НЕБЕСЕ, БРѢМЕНЕ, МАТЕРЕ, ОТРОЧАТЕ** 参照。この e (対応階梯では o) は、近くに在るものを指示し、**Е-СЕ** (スプラシル写本) 現代ブ e-то, о (в)от に立証される、小辞の e と同系のものである。純粹 o 語幹(例、*uļk*-o-)が、指示小辞 i を付加することによって単数所格(例、**ВЛЪЦѢ**)、双数主・対格(例、**НСТѢ**)、あるいは、複数(例、**ВЛЪЦИ**)の原形を作ったのと同じように、純粹な子音語幹(例、*māt-er-)も、指示小辞 e を付加することによって、単数所格(例、**МАТЕР-Е**)及び双数(例、ギ主・対 **μητέρ-ε**「二人の母」, **γέροντε**「二人の老人」, **ποιμένε**「二人の牧人」)の原形を作ったのである。単数所格形と双数(複数)形の意味の近似性については、上を参照。ラテン語の単数奪格形 **homin-e**「人から、人と」, **māter-e**「母から、母と」, **lapid-e**「石から、石と」 は、恐らく、古い造格(ないしは共同格)の継承であり、また、単数所格 **СѢМЕН-Е, НЕБЕС-**

Ε, ΜΑΤΕΡ-Ε やギリシャ語双数主・対格 *ποιμέν-ε* 「二人の牧人」,
κύν-ε 「二匹の犬」 と同じ *e* 指標を含んだものであろう。

§. 32 状況格的（具格的、共同格的、所格的、奪格的） 意義を持つ古代ブルガリア語の格形の起源

スラヴ祖語の格体系は、次のような特徴を持つ活格構造言語の格体系から発達したものである：1）活性（有生）類名詞における二つの文法格（活格と絶対格）と不活性（無生）類名詞における活格の欠損；2）純粹語幹に後置詞（素）ないしは指示小辞を付加して作られ、むしろ副詞的に用いられる、状況格的（具格的、共同格的、所格的、奪格的）意味の格形；3）主格、対格、生格、及び与格範疇の欠損；4）複数専用形の欠損 — 複数範疇は、叙述的に（§.28 参照）、あるいは集合的意味を伴う抽象（派生）名詞によって（§.24 参照）、あるいはまた副詞的に用いられる共同格及び所格の形によって、表される。

単数、複数、双数に、主格、生格、与格、対格、造格、所格形を持つというスラヴ祖語の発達した曲用の代わりに、言語史のさらに古い遠い時期に存在したのは、二つの基本格形 — 活格と絶対格 — だけ、しかもそれは活性（有生）類名詞の場合だけであり、また同じく、ホメロスの言語で、奪格、所格、具格の指標として使われる、接尾辞 $-\theta\epsilon\nu$, $-\theta\iota$, $-\phi\iota$ に似た状況格的意味を持った若干の副詞接尾辞であった — 次例参照、 $\omicron\upsilon\rho\alpha\nu\acute{o}\theta\epsilon\nu$ 「空から」, $\omicron\iota\kappa\omicron\nu\delta\epsilon$ 「家に、家へ」, $\kappa\eta\rho\acute{o}\theta\iota$ 「心の中で」, $\kappa\epsilon\iota\theta\iota$ 「あそこで」, $\iota\lambda\iota\acute{o}\theta\iota$ $\pi\rho\acute{o}$ 「イリオンの前で」, $\beta\iota\eta\phi\iota$ 「力で、力によって」；例、 ζ 6（オデュッセイアー） $\beta\iota\eta\phi\iota$ $\delta\grave{\epsilon}$ $\phi\acute{\epsilon}\rho\tau\epsilon\rho\omicron\iota$ $\eta\sigma\alpha\nu$ 「彼らは、力において勝っていた」。

古い状況格的後置詞に起源を持つものとして、次の語尾がある：

1. $\omicron$ 語幹単数生格語尾 $-\mathbf{\bar{A}}$ ($\mathbf{\bar{B}\bar{A}\bar{L}\bar{Y}\bar{K}\bar{A}$ 参照) で、これは古い奪格指標 $-\acute{o}d < -o\text{-}ad$ の継承である（§.29 参照）。
2. 男性・中性・単数・造格語尾 $-\mathbf{\bar{M}\bar{B}}$ ($\mathbf{\bar{B}\bar{A}\bar{L}\bar{Y}\bar{K}\text{-}\bar{o}\text{-}\bar{M}\bar{B}}$, $\mathbf{\bar{C}\bar{Y}\bar{H}\text{-}\bar{Y}\text{-}\bar{M}\bar{B}}$,

ПХТ-Ь-МЬ 参照)。これは、中間指標 *m* を含み、それを、近接性も共存性も表した指示的要素 *i* によって補強したものである（この *i* の要素は、ギリシャ語の副詞的後置詞 $-\phi\iota < *bhi$ にも立証されるが、これによって、意味的には造格に近い状況格的な形を形成する）。拡張されない中間指標 *m* は、女性単数造格形に立証される — 例、**ЖЕНОМЪ, КОСТЬМЪ, ТОМЪ** $< *t-o-i-\bar{a}-m$ (§. 27 参照)。これは、人称、再帰代名詞の単数・造格形にも存在している — 次例参照 **ТОБОМЪ, СОБОМЪ, МЬНОМЪ** $< *m-b\ n-o-i-\bar{o}-m$ 、この場合の *o* は幹母音、*i* は共同性指標 (§. 31 参照)、 $\bar{o}$ は延長を伴って反復された幹母音で、これは古い共同格的な形 (§. 5, 31 参照) に特有のものである。

当初、語尾 $-mi$ は、行為実現のための状況（環境ないしは手段）である人物や事物の、単一性も多数性も表していない。Cf. ギ $\theta\epsilon\acute{o}\phi\iota\nu$ は、意味的には、単・与 $\theta\epsilon\phi$ 「神に」、複・与 $\theta\epsilon o\iota\varsigma$ 、単・属 $\theta\epsilon o\tilde{\upsilon}$ 、複・属 $\theta\epsilon\hat{\omega}\nu$ に等しい（ギリシャ語与格は、共同・具格的な用法を、またギリシャ語属格は、奪格的用法も持つ）。複数造格の語尾 $-m\bar{i} < -m\bar{i}$ (例、**ПХТ-Ь-МН, С҃НН-Ь-МН**) は、第一次的な語尾 $-mi$ の語末母音の延長によって、すなわち、古い共同・双数的な形の形成法に従って作ったものである — cf. 双・主・対 **ВЛ҃КА** $< *u\bar{l}k^w-\bar{o}$ 、**С҃НН҃** $< *s\bar{u}n-\bar{u}$ 、古イ 単・具 = 双・主・対 $v\bar{f}k\bar{a}$ 「二匹の狼、狼と（一緒に）」、ギ 双・主・対 $\lambda\acute{o}\kappa\omega$ 「二匹の狼」；小（規模複数形の意味を伴う、双数形のさらに古い用法については、上を参照。その他の印欧諸語では、複数具格形は、単数具格に複数指標 *s* を付加することによって得られる（この指標の起源については、§. 37 参照） — cf. リ 単・造 $m\acute{o}terimi$ 「女性と」、複・造 $m\acute{o}terimis$ 「女性達と」、古イ 複・具 $s\bar{u}n\acute{u}bhi\bar{h}$ 「息子達と」 $< *s\bar{u}n-u-bhi-s$ ；また、数の点で中立的な $\theta\epsilon\acute{o}\phi\iota$ 「神々と、神々に」 $< *dheus-o-bhi$ (**ΔΟΥΧΤ** $< *dhous-o-$ と同系)。

3. *o* 語幹単数・所格語尾 (**ВЛ҃ЦТ** $< *u\bar{l}k^w-o-i$ 参照)、同じ

く o 語幹中性・双数・主・対格語尾 (**ИСТ** < *iug-o-i 参照)、また同じく o 語幹男性・複数・主格語尾 (**ВЛЪЦИ** < *uļkʷ-o-i 参照)、§. 31 参照。

i 語幹、u 語幹名詞においては、スラヴ祖語の単数所格形は、接尾辞の母音 e の正常延長階梯を含んだ純粹語幹に起源を持っている — 単・所 **ПЖТИ** は、*pont-ēi の継承であり、単・所 **СЪНΟΥ** は、*sūn-ēu の継承である（他の格の語幹の影響による eu > ou の交替については、§. 2 参照）。幹母音の延長階梯は、かつて子音幹名詞の中性主・対格形の特徴も表示している。このことについては、ヒットイト語単数 watar- に対する複数 widār- のような例 — ギ ὕδωρ 「水」 や **ВОДА** と同系（起源的には、古い集合名詞、§. 2 参照） — 、またアヴェスタ語単数 nāman- に対する複数 nāmān- < *nāmān- のような例 — **ИМА** < *ṛmen < *H₁ṛ-H-men と同系 (cf. ギ ὄνομα 「名」 < *H₁on-H-mṛ, 古プ emmens 「名」 < *H₁en-H-men-) — が、証明している。古代インド語の主・対格形 nāmāni 「名（複）」のような形においては、複数語幹 *nāmān- は、一括多数性指標 H₂ > i (§. 3 参照) によって補強されたものである。こうした例は、所格形と複数形の始原的な関連性のもう一つの例証である。

子音幹曲用の名詞の場合、単数所格形は、指示小辞 e の助けを借りて作られた。古代インド語単数所格、例えば、āśman 「石のそばで」の場合とは違って、古代ブルガリア語では、単数所格の意味をもつ純粹子音語幹は文証されない。複数所格形は、さらに後に現れたものである。それは、純粹語幹あるいは単数所格形に、複数指標 s（この起源については、§. 37 参照）及び指示小詞 u を付加して作ったものである。純粹語幹からは、ā 語幹（例、**ЖЕН-А-ХЪ**）、u 語幹（例、**СЪН-Ъ-ХЪ** < *sūn-u-su）及び i 語幹（例、**ПЖТ-Ъ-ХЪ** < *pont-i-su）の複数所格形が作られている。当初、単数と複数という範疇に対しては中立的であった単数所格形からは、o 語幹複数所格形が作られ (cf. 単・所 **ВЛЪЦѢ**

＜ *u_lk^w-o-i と 複・所 ВЛЫЦѢХЪ ＜ *u_lk^w-o-i-su）、また同じく、子音幹曲用複数所格形が作られたのである（cf. 単・所 МАТЕР-Е, КАМЕН-Е, СЛОВЕС-Е と 複・所 МАТЕР-Е-ХЪ, КАМЕН-Е-ХЪ, СЛОВЕС-Е-ХЪ）。複数所格形の一部（o 語幹、u 語幹、i 語幹）では、複数指標の s > X の転化が音声学的な規則性を持つが（§. 3 参照）、その他の形での語尾 -ХЪ ＜ -su は、類推によって得られたものである。

複数所格形において、複数指標 s に対して補足された小辞の u は、指示代名詞的語根 *u- に起源を持つものであって、この場合の u は、内在的な意味（§. 38 参照）を持つか、あるいは話者から離れてあるもの、あるいはまた互いに離れていて一見しただけでは即座に捕捉できないようなもの（§. 25 参照）の表徴であった。この最後の用法の故に、u の要素は、双数（複数）指標の意味を獲得する可能性、したがって、複数所格形において複数指標 s を補強する可能性を得たものであろう。複数所格形に起源を持つ、ギリシャ語子音曲用複数与格形においては、補足的指示小辞が u でなく i になっている — cf. 複・与 μητρᾶσι < *māt r-s-i（古イ 複・処 mātṛṣu < *matṛ-s-u）。近くにあるものの表徴である指示小詞 i は、共存（同）性も表したが（§. 31 参照）、そのため、これもまた複数指標 s を補強することができたのである。所格（状況格）としても用いられた純粹 o 語幹（例、*u_lk^w-o-）からは（cf. 純粹語幹単数所格 ПЯТИ < *pont-ēi, С҃ННОУ < *sūn-ou < *sūn-ēu, 古イ 単・処 āsman「石のそばに」）、双数（複数）指標の付加によって、双数所格形 *u_lk^w-o-u（ВЛЫКОУ）が作られた。この形は、スラヴ祖語の曲用を構築するに際して、双数生格形としても用いられるようになった。双数（複数）の意味を伴うこの指示素 u は、古代インド語の双数主・対格形 vṛkau「二匹の狼」に立証されるが、これは古い共同格的な形 *u_lk^w-ō = 双・主・対 ВЛЫКА から作ったものである。

4. 複数与格語尾 -МЪ。語尾 -МЪ は、単数造格語尾 -МЪ 及び

複数造格語尾 **-MH** と同じく、中間素 *m* を包摂している。与格は、同様の状況格（所格、共同格、奪格、具格）と比べて、更に新しいものである。これは、活格統語構造が主格構造へ転じて行った後、すなわち活格の主格への転化と活格活用動詞に付いていた絶対格が対格に変わって後に、独立したものである（§.38 参照）。状況格的な意義をもつ極めて多様な形が、与格形の原形となった。例えば、人称代名詞の短語尾与格形 **MH** 及び **TH**

（< **m-o-i* , **t-o-i* , cf. ギ 単・与 *μ o í* , *τ o í* , 古イ *me* , *te* ）は、代名詞語幹 **mo-* 及び **to-* に、所格指標 *i* を補ったものに起源を持っている。この同じ所格指標 *i*（正常階梯では、*e i*）は、次のような形における単数与格語尾である — **СЪНОВИ** = 古イ *sūnāve* < **sūn-eu-ei* , **СЛОВЕСИ** < **k'leu-es-ei* , **МАТЕРИ** < **māter-ei* , ギ *κ λ έ ε ι* 「栄光のために」 < **k'leu-es-i* , ギ *μ η τ ρ ι* 「母に」 < **mātr-i*（ラ *mātrī* < **mātr-ei* と同系）, ギ *λ ό κ ω* = アヴェスタ *vəhrkāi* 「狼に」 < **uḷkʷ-o-ei* ; cf. *lupō* < *lupōi*（*-ōi* > *-ō* の変化を伴う）; 古い決まり文句 *populōi Rōmānōi* 「ローマの民に」 も参照。ギリシャ語複数与格 *λ ό κ ο ι σ ι* 「狼達に」 < **uḷkʷ-o-i-si* , *μ η τ ρ ά σ ι* 「母達に」 < **mātr-s-i* は、本質的には、古い所格形である。スラヴ祖語の古い *i* 曲用の単数与格形 **ГОСТИ** < **ghost-ei-ei* は、イタリック系言語の *-ei-ei* の組み合わせと同じように、*-ei* に短縮したものである — cf. ラ 単・与 *hostī* 「異邦人に、敵に」 < **ghost-ei-ei*。

ā 語幹名詞の場合、単数与格語尾 **Т (ЖЕНТ)** は、幹母音 *ā* < **eH₂* と *e* 階梯の語尾 *-ei* の融合（**gʷen-āi* < **gʷen-ā-ei*）から、また単数所格語尾 **Т (ЖЕНТ)** は、幹母音 *ā* < **eH₂* とゼロ階梯の語尾 *i* の結合（**gʷen-ā-i*）から、発生したものである。単・主 **ГЛАВА**（ロ *г о л о в ā* , cf. リ *galvā*） — 単・対 **ГЛАВЖ**（ロ *г ђ л о в у* , cf. リ *gálvā*） ; **РЖКА**（р *у к ā* , *rank ā*） — **РЖКЖ**（р *ѣ к у* , *rañkā*） ; **ЗИМА**（з *и м ā*） — **ЗИМЖ**

(зѣму) ; **СТРАНА** (сторона̀) — **СТРАНѦ** (стòрону) ; **ГОРА** (гора̀) — **ГОРѦ** (гòру) ; **СТѢНА** (стенà) — **СТѢНѦ** (стѣну) のタイプの、移動アクセントパラダイムを持つ *ā* 語幹名詞の単数与、所格間のアクセントの差異も、単数与格語尾 **Ѣ** と単数所格語尾 **Ѣ** の起源の違いによるものである — セルビア シトー (што) 方言 単・与 гла̀ви < スラ祖 *goľvē に対する、 単・所 гла̀ви < スラ祖 *golvē ; ロ方言 与 зѣме, к стòроне, к стѣне に対する、 所 сторонѣ, знемѣ стѣнѣ を参照 (§.38 も参照)。

本来、与格は、意味的には、造格にも近いものであった。古い後置的中間素 *m* は、与格的な意味も造格的な意味も持たず、行為の遂行者 (行為主 agent) と行為が直接向けられるものとの間に、第三者 (人、もの) があることを示したものである。この第三者は、仲介者ないしは道具手段としての意味付けを受ける可能性を得、そのことの結果、*m* 指標は、造格語尾に転じたのである (第 2 項参照)。直接客体を表す特別の格 (対格) の出現後 (§.38 参照)、付随状況を表す役割を演じた人や物は、間接客体として再解釈を受ける可能性を得た結果、*m* 指標は、与格語尾に転じたのである。

複数与格語尾 **-МЪ** は、後置的中間語幹 *mo- に複数指標 *s* (これの起源については、§.37 参照) を加えたものに起源を持っている。-mos > **-МЪ** の変化については、§.2 参照。古代ブルガリア語の複数与格形 (例、**ВЛЪКОМЪ**, **МАТЕРЕМЪ**, **СЫНЪМЪ**) に一番近いのは、リトアニア語の複数与格形 (例、vilka^s 「狼達に」, mōterims 「女達に」, sūnūms 「息子達に」) とゴート語複数与格形 (例、wulfam 「狼達に」, brothrum 「兄弟達に」, sunum 「息子達に」) である。スラヴ祖語の -mos 語尾の与格形 (例、*sūn-u-mos > **СЫНЪМЪ**) は、構造的には、ラテン語の -bus < *-bhos 語尾の与格、奪格形 (例、pedibus 「足(複) に対して、足(複)の所に」) に近似しているが、対置後置詞 (о б е с и в

ен задлог) -bh の代わりに、中間後置詞 (медіен задлог) m をもって形成されるのである。古代インド語の複数与格、奪格、例えば、vṛkebhyaḥ「狼達に対して、狼達から」 < *uḷkʷ-o-i-bh i-es , mātṛbhyaḥ「母達に対して、母達から」 < *mātṛ-bhi-es , pad bhyāḥ「足(複)に対して、足(複)から」 < *ped-bhi-es、また複数具格、例えば、mātṛbhiḥ「母達と」 < *mātṛ-bhi-s , padbhiḥ「足(複)で」 < *ped-bhi-s のような形は、この対置要素 bh を含み、それが、一つは、単数造格語尾 -म् < -mi の中の i の要素と同じ要素 i によって、もう一つは、複数指標 es (s) によって、補強されているのである。複数形において s 指標を加えずに、後置詞 -bhi から作ったものに、ギリシャ語の -φι 語尾の形があるが、これは、ホメロスの言語では、単数、複数の状況格的(奪格的、与格的、具格的)な格の意味で用いられている — 例、ἀπ' ἰκρὶόφι「甲板から」、κατ' ὄρεσφι「山々から」、βίηφι「力でもって」、παρὰ ναῦφι「船(複)から」。

古代ブルガリア語の双数曲用は、三形だけしかないものであって、与格、造格においては同一語尾 -ма を持っており、このことは、古くはこの二つの格の意味の間に近似性があつたことを証明している。この語尾は、中間語幹 *mo- の末尾母音を延長したものから得られたもので、この延長は、双数的な意味合いでも用いられる共同格 (§.31 参照) に特有のものである。代名詞の男性・中性・単数・与・所格形も、中間後置詞 -m をもって作られる — 例、**ТОМОУ** < *t-o-mo-u , 所 **ТОМЬ** < *t-o-m-i 。スラヴ祖語の単数与格 *t-o-mo-u は、語尾 u を含んでいるが、これは、
 ○ 語幹名詞単数与格形の表徴でもあつた — 例、**ВЪКОУ** < *uḷkʷ-o-u ; 与格語尾 -ΟΥ の起源については、以下を参照。近接性も共存(同)性も表した所格的指標 i は、代名詞男性・中性・所格形 **ТОМЬ** < *t-o-m-i に立証される。*uḷkʷ-o-ei > *uḷkʷ-ōi (= ギ 単・与 λύκφ, 古ラ lupōi, アヴェスタ vəhrkai) と複数指標 s から出

てくる、 $*u\lambda k^w-o-ei-s > *u\lambda k^w-\bar{o}i s > \text{ВЛЪКЪ}$ (§.2 参照) タイプの複数造格形も、与格と造格の意味の古い近似性について証明している。複数造格 $\text{ВЛЪКЪ} < *u\lambda k^w-o-ei-s$ に最も近い対応形は、複数具格形として用いられる、古イ $v\check{r}k\bar{a}ih$ 及び リ $vilkais$ である。

単数与格 $*u\lambda k^w-o-ei > *u\lambda k^w-\bar{o}i$ の語尾 $-\bar{o}i$ からは、 $-\text{Ъ}$ が得られてしかるべきであろう (§.2 参照)。ところが、古代ブルガリア語の男性、中性 o 語幹名詞にあって、与格語尾 $-\text{Ъ} < *-\bar{o}i < *-\bar{o}-ei$ は、文証されない。 ПОЗАЪ ЖЕ БЫВЪШОУ (後になってから) の構文 (Dativus absolutus 絶対与格構文) には、恐らくその痕跡があり、この場合、性、数、格ともに БЫВЪШОУ に一致した ПОЗАЪ は、古い格形 (o 語幹中性単数与格) だと解釈すべきであり、それが副詞に転化したものである。スラヴ祖語の o 語幹名詞にあって、与格の職能で使われたのが、かつての内在格 (инесивен падеж) (所格 locativus の一種) である。 $*u\lambda k^w-o-u >$ 単・与 ВЛЪКОУ における内在指標 u については、§.38 参照。遙か遠い時代に、古い内在格と所格は意味的に均等化したのであり、このことを示唆しているのが古代ブルガリア語の $-\text{Ъ} < -\bar{o}i < -\bar{o}-ei$ 語尾の副詞と $-\text{ОУ} < -\bar{o}-u$ 語尾の副詞の対応である — $\text{ЖТРЪЖАЪ, КЖАЪ, ИНЖАЪ, СЖАЪ, ВЪСЖАЪ, ОТЪВЪСЖАЪ, ОТЪСЖАЪ, ТЖАЪ, ОТЪТЖАЪ, ВЪНЪЖАЪ}$ に対する、 $\text{ЖТРЪЖАОУ, КЖАОУ, ОТЪКЖАОУ, ИНЖАОУ, ОНЖАОУ, ИЗВЪНЖАОУ, ОТЪНЪЖАОУ, СЖАОУ, ВЪСЖАОУ, ОТЪВЪСЖАОУ, ОТЪСЖАОУ, ТЖАОУ, ОТЪТЖАОУ, ОБЖАОУ, ВЪНЪЖАОУ, ЖТРЪЖАОУ, ВЪНЪЖТРЪЖАОУ, ИЗЖТРЪЖАОУ, ОБЖАОУ}$ を参照。

§. 33 始原的代名詞語根 *s-

文における活格統語構造が、主格構造へ再編されて以後、主格に転じた古い活格は、-s 語尾を持っていた。ギ 単・主 $\lambda \acute{\upsilon} \kappa \omicron \varsigma$, ラ lupus, 古イ $v\check{f}kah$, リ $vi\check{l}kas$ 「狼」 < * $ul\check{k}^w-o-s$ の s 語尾を参照。男性単数主格 ВЛКЪ も、この原形 * $ul\check{k}^w-o-s$ から、語末の s が脱落して以後 (§.2 参照)、発生して来るのである。この活格語尾 -s は、古い代名詞語根に起源を持つ。この語根は、純代名詞的な用法では、古イ 男・単・主 $s\acute{a}$, ギ $\acute{o}$, ゴ sa 「これ」 < * $s-o-$ 語幹 に立証されるもので、この語幹は、かつて指示代名詞 * $t-$ の活格として用いられ、したがって、活性類名詞だけの代替を務め得たにすぎない。指示代名詞の絶対格として用いられたのは、補充法的語幹 * $t-o-$ (男・中・単・生 T-O-ΓO , 与 T-O-MOY , 中・主・対 T-O) であり、この語幹から、後になって、指示代名詞斜格形が作られるのである — ギ 男・中・単・属 $\tau \acute{o} \upsilon$, 与 $\tau \phi$, 対 $\tau \acute{o} \nu$; 古イ 属 $t\acute{a}sy\acute{a}$, 与 $t\acute{a}sm\acute{a}i$, 対 $t\acute{a}m$; ゴ 属 $this$, 与 $thamma$, 対 $thana$ < * $t-o-$ を参照。スラヴ祖語では、この代名詞語幹 * $t-o-$ は、男性単数主格にも一般化したのである — ТЪ < * $t-o-s$, cf. リ 男・単・主 tas 。

指示代名詞の活格の古形 (* $s-o$) を作り、また活格 (後には主格) 語尾の機能も果たした代名詞語根 * $s-$ は、古代ブルガリア語において、再帰代名詞の語根としても立証される — 生 СЕБЕ , 与 СЕСТ , 造 СО БОМ ; cf. ラ 与 $sibi$, 対 $s\acute{e}$, 古ラ $s\acute{e}d$, ゴ 対 sik , 与 si s 。かつての活格構文 (活格動詞文) においては、代名詞主体は、代名詞語幹 * $s-o$ (= 古イ 男・単・主 $s\acute{a}$, ギ $\acute{o}$ 「これ」) によって表され、一方、名詞主体は活性 (有生) 類名詞の純粹語幹と、代名詞語根 * $s-$ を起源とする -s 語尾によって、表されたのである。客体は、もしそれが名詞類であれば、純粹名詞語幹によって、また、もしそれが代名詞類で、主体

と同一でないときには、補充法的代名詞語幹 *t-o によって表された。代名詞客体が、主体と一致する場合には、それは、活格動詞の代名詞主体と同じく、代名詞語幹 *s-e- (*s-o-) によって表され、それが再帰代名詞語幹としても機能し始めたのである。その再帰代名詞は、主格形なしのまま残ったのである。

始原的な語幹 *s-o は、絶対格として機能する指示代名詞語幹 *t-o に対する活格として使われたのである。その結果、*so は、指示代名詞 *t-o の補充法活用における男性単数主格形に変わったが、それは、古イ *sá*, ギ *ó*, ゴ *sa* に立証される。語幹 *s-e- (*s-o-) が、再帰代名詞としても使われ、その曲用を構築し始めると、この語幹は、「良き、自分の、血縁の(もの)」を意味する語根 *su- (cf. **свон**, ラ 属 *suī*, リ 対 *savē*, 生 *savēs*, 造 *savimī*) と混淆したのである。「良き(もの)」と「自分の(もの)」の意味の近似性については、ロシア語 *добро* 「財産、不動産、所有物」を参照。また、次例も参照、ギ *ē* *ō* 「良く、善、財」 < *seu, 古イ *su-* 「良く」, **съ-мрътъ** < *su-m̥r-ti- 「(逐語的には)良き、自然な死」(cf. *бумря от смъртта си*, *о умереть своей смертью* = リ *sāvo smerčiū miṛti* 「天寿を全うする」; 原形 *su-m̥r-ti 「(逐語的には)良き死」は、意味的には、ロシア語の *своя смерть* 「自然死」に近く、またこれに対立して、*несвоя смерть* 「不幸な、不自然な、非キリスト教徒的な死、例えば、自殺死」がある), **счастье** < スラ祖 *su-čestbje 「(逐語的には)良き分け前、自分の持ち分」(次も参照、スラ祖 *su-božbje = ポ *zbože* 「穀物、穀粒、自分の食べ物、豊かさ」, 上ソルブ *zbožo* 「幸せ、平安」, ウクライナ *збіжжя* 「穀物、財産」; cf. 古イ *su-bhāga-* 「自分の持ち分を有する、幸せな、富んだ」), **сынъ** (cf. リ *sūnūs*, 古イ *sūnūh*, ゴ *sunus* < *sū-n-us, *sun-u-s* 「息子、(逐語的には)血縁の、自分の(者)」; 家父長制時代からのロシアの概念範疇としての、不動

産、財産の意味での *добро* [財産、所有物] の語は、息子達も含んでいた), **СВЕРУ**, 生 **СВЕРУБЕ** < **sue-k'rū-*, **СВЕРУ** < **sue-k'r-* (この場合の **su-e-* の構成は、**СВОИ** における語幹 **su-o-* と同じ)。語幹 **su-e-* あるいは **s-e-* は、さらに、印欧語の姉妹の名称にも現れている – **СЕСТРА**, リ *sesuõ*, 生 *seseřs*, ラ *soror*, 古プ *swestro*, 古イ *svásar-*, ゴ *swistar* を参照。

語根 **su-* からは、先ず最初に、代名詞的形容詞語幹 **su-o-* が作られ (**СВОИ**, ラ *suus*, 古ラ *sovos* 「自分の」, 古イ *svás* 「自分自身の」, ゴ *swes* 「自分自身の」, ギ *éós* < **seu-os* 「自分の、自分自身の」を参照)、それに関連する生格 (属格) 形が作られたのである (cf. ラ 属 *suī*)。生格形 **СЕБЕ** は、恐らく、**seu-es* から、与格形中の **Б** の一般化と共に発生してくるのであり (cf. 与 **СЕБѢ**, これは、ラ 与 *sibi* < **se-bh-ei* 及び 古プ 与 *sebbei* と同系、§.30 参照)、この与格形をモデルにして、造格形 **СОВОМ** 及び 所格形 **СЕБѢ** が作られている。リトアニア語では、**sev-* < **seu-* 語幹が、再帰代名詞の曲用全体に一般化している。単数2人称の物主代名詞 (男・単・主 **ТВОН**) 及び単数2人称の人称代名詞 (生 **ТЕБЕ**, 与 **ТЕБѢ** 等) の曲用は、再帰物主代名詞 (単・主 **СВОИ**) 及び再帰人稱代名詞 (生 **СЕБЕ**, 与 **СЕБѢ** 等) の曲用をモデルにして構築されたものである。

§. 34 古代ブルガリア語の3人称動詞形の起源

始原的な活性類の名詞は全て、二つの文法格 — 活格（-s 語尾を持つ）と絶対格（純粹語幹） — を持ち、また加えて様々な後置詞を付けて作るいくつかの状況格を持っていた（§.32 参照）。数の範疇の発達は弱く、複数専用形がなくて、むしろ状況語的副詞である状況格のいくつかが、大ないしは小（規模）の多数を表す形としても使われたのである。したがって、例えば、*uļkʷ-ō (cf. 古イ 単・具 vřkā 型の共同格の形が、双数 (cf. 双・主・対 **ВЪКА**) の意味も持ち、*uļkʷ-o-i (cf. 単・所 **ВЪЦѢ**) 型の所格形が、複数 (cf. 複・主 **ВЪЦИ**) の意味を、また不活性類名詞（例、双・主・対 **НСТ** < *iug-o-i 参照）の場合には、それが双数の意味を兼ね備えたのである；-e 語尾を付けた子音幹曲用の所格形 (cf. 単・所 **КАМЕН-Е**) も、双数形として使われている — ギ 双・主・対 **ΠΟΙΜΕΝ-Ε** 「二人の牧人」 参照。

活性（有生）類名詞の状況語的な形が、絶対格の意味の複（双）数形として、すなわち、通常、遠心的動詞（他動詞）である活格動詞の非単一的な客体の表現として、あるいはまた、通常、非遠心的な動詞（自動詞）である不活格動詞の非単一的な主体の表現として、使われたのである。本来、活性（有生）類名詞だけが持っていた -s 語尾の活格は、数範疇に対しては中立的であった。活格構造文の行為主の数は、主体の格形から現れてきたのではなく、単一主体の時には、純粹語幹ないしは -t 語尾を持つが、非単一主体の時には -nt 語尾を持つ述語の形から顕現してくるのである。数範疇の発達に伴い、名詞接尾辞や語尾の母音の交替によって、次第に、活格構文の単一主体の形と非単一主体の形とが区分されるようになるのである。活格（後に、主格）には、二つの異なる形、すなわち、一つは単数形、もう一つは複数形が現れ、それはその末尾の階梯によって区別されるのである。次例参照、単・主 **СЪНЪ** = 古イ sūnūh < *sūn-u-s, 複・主 **СЪНОВ**

ε = 古イ *sūnāvah* < **sūn-eu-es* (cf. ギ 単・主 *πῆχυς* 「ひじ」, 複・主 *πῆχεις* < **πᾶχ-εF-ες*), 単・主 *гостъ*, ゴ *gasts* 「客」, ラ *hostis* 「敵」 < **ghost-i-s*, 複・主 *гостѣ*, ゴ *gasteis*, ラ *hostēs* < **ghost-ei-es* (cf. ギ 単・主 *πόλις* 「都市」, 複・主 *πολεῖς* < **πολ-ει-ες*), ギ 単・主 *πούς* < **ποδ-ς* 「足」, 複・主 *πόδες*。

語尾 -t の3人称単数及び語尾 -nt の複数3人称の活格形は、起源的には、不変化の動詞派生名詞であって、それが、次第に、動詞活用に吸収されて述語に変わるか、あるいはまた、曲用を発達させて分詞に転じたのである (ここで念頭においているのは、アオリスト3人称単数語尾 -τῶ - 例、*οὐμρῶτῶ*, *ρᾶσπατῶ*, *πῆτῶ* - のことだけであって、現在3人称単数語尾 -τῶ - 例、*βερετῶ* = 古イ *bhāratī* 「[彼は] 担う」 < **bher-e-t-i* - やインパーフェクト [未完了過去] 3人称単数語尾 -t - 例、古イ *ābharat* 「[彼は] 担っていた」 < **e-bher-e-t* - のことではない)。3人称複数の非完了動詞形、すなわち、古いインパーフェクト (単純アオリスト、§.12 参照) 形及び現在形と、非完了 (能動現在) 分詞形との関連性は、明らかである - 次例参照、単純アオ・3・複 *παῖς* < **pōd-o-nt*, 現・3・複 *παῖσιν* < **pōd-o-nt-i* (§.27 参照), 男・複・主 *παῖσιν* < **pōd-o-nt-i-es* (§.27 参照); 3・複 *νεκῶν*, 男・複・主 *νεκῶν*; 現・3・複 *βερεῖν* (= 古イ *bhāranti*, ギ *φέρουσι*, ドーリス *φέρουσι* < **bher-o-nt-i*), ギ 未完・3・複 *ἐ-φέρου* (= 古イ *ā-bharan* 「[彼らは] 担っていた」 < *augmentum syllabicum* を伴う **bher-o-nt* より、§.12 参照), 男・複・主 *βερεῖν* < **bher-o-nt-i-es* (ギ *φέρουσι*, ラ *ferentēs* と同系)。当初、接尾辞 -nt- の付いた述語と分詞は、能動性 - 受動性という特徴に関しては中立的であった。分詞接尾辞 -nt- と同系の接尾辞 -anza- を伴うヒタイト語分詞は、他動詞から作るときには、受動の意味を持ち (例、*adanza* 「食べ

られた」、しかし、男・複・主 **ИДЖШТЕ** 「食べるところの」、またその同系語、ラ **edentēs** 「食べるところの」 < *H₁ed-e-nt-, ラ **dentēs** 「歯、[逐語的には] 食べるところの」 < *H₁d-e-nt-; **kunanza-** 「殺された」; **appanza-** 「つかまえられた」、自動詞から作るときには、能動の意味を持つ (例、**akkanza-** 「死んだ」、**huyanza-** 「逃げた」、**panza-** 「動きだした」)。これは、それ以前の古い言語状況の痕跡であって、nt 付きの述語や分詞の原形は、主体ないしは被(限)定項としての活性類名詞が、相(voice)的な表徴抜きの動詞的特徴 (**глаголен признак**) を付与されたことを表したものである。

始原的な接尾辞 -nt- は、集約的な意味を持っていた。同接尾辞は、ギリシャ語では、形容詞最上級を作る接尾辞として立証される (スラヴ祖語の形容詞比較級の集約的な意味については、§.20 参照) — 例、**νεός** 「若い」 < *neū-o-s に対して、**νεώτατος** 「一番若い」 < *neū-ō-t-nt- (集約語幹幹母音における延長、§.5, 6 参照)。同様の、形容詞の集約語幹は、チ **drahý** 「大切な、愛する」 に対して、古チ **drahúci** 「大変大切な」 < スラ祖 *dorg-o-nt-i-o- ; **bílý** 「白い」 に対して、**bělúci** 「非常に白い」 < スラ祖 *běl-o-nt-i-o- のような例から結論できるように、スラヴ祖語にも存在したのである。さらに、チ **div divúci** 「非常に奇妙な」、**svět světúci** 「全世界、世界中」、**pravda pravdúci** 「まぎれもない真実」、**ро́тъма́ тму́шая** (無数、[逐語的には] 真っ暗闇) のような語源的な固定表現形も参照。

集約語幹からは、指小 (diminutive) 名詞も作ることができた。ガーターズ (A.Gaters, 1954) は、ウラル・アルタイ諸語において、形容詞比較級の接尾辞が、指小名詞の接尾辞と同一であることに注目し、同時に印欧語の類型的な対応例も示したのである。スラヴ祖語では、接尾辞 -nt- の助けを借りて、動物及び人間の子供の名称が表された — 次例参照、単・主 **ОТРОЧА**, 生 **ОТРОЧАТЕ**, **ПРАСА**, **ПРАСАТЕ**, **ЖРѢБА**, **ЖРѢБАТЕ**, **ОСЛА**, **ОСЛАТЕ**, **КОЗЛА**, **КОЗЛАТЕ**, **ОВЬЧА**, **ОВЬЧАТЕ**, **КЛЮСА**,

КЛЮСАТЕ「繋がれている家畜の子供、駄獣」。その他の印欧語にも、いくつかの、接尾辞 **-nt-** の指小的用法例がある。クレッチマー (P. Kretschmer, 1925) によれば、ラ **Pīcentēs**「中部イタリアのピーケーヌム **Pīcēnum** 地方の住民」は、**pīcus**「キツツキ」に由来するもので、「若いキツツキ、キツツキの子供」を表し(キツツキは、この地方の入植者を守護する、トーテム崇拝的な動物)、また、ローマ七丘の一つの名称である、ラ **Aventīnus** は、**avis**「鳥」の派生語 ***aventes**「若い鳥」に起源を持つという — cf. 古高ド **hrind** < ***kr-ent-o**「若い雄牛、若い雌牛、若い有角家畜、(逐語的には)小さな角、小牛」(**КРАВА** や ラ **cornū**「角」における語根 ***kr-**, **k'r-** から)。揚意 (**ēlātīvus**) 級 (最上級) 語幹が、特徴の増大を表す一方 (例、スラ祖 **běl-o-nt-i-o-** = 古チ **bělŭci**「大変白い、真っ白な」)、生物の名称を表す語幹は、生物自体の増大・増殖、すなわち、生物の生長と増殖の時期を表したのである。最初は、能動現在分詞は、増大的な動詞特徴を表す動詞派生形容詞である — 次例参照、古ロ **МОГЪТЪНЪ** < スラ祖 ***mog-o-nt-**「強力な、力のある」(cf. 現・単・1 **МОГЪ, МОЖЕШИ**), **СЛОВОУТЪНЪ** [< スラ祖 ***slo-u-o-nt-**「高名な、誉れ高い」(cf. **СЛОВЪ, СЛОВЕШИ**), チ **mrzutý** < スラ祖 ***mьrz-o-nt-**「厭うべき、忌々しい、むかつくような」(cf. **мръжъ, мръзиши**「うんざりさせる、嫌悪をもようさせる」)。スラヴ祖語の能動現在分詞の原形、例えば、***ber-o-nt-i-o-** > **БЕРЪШТ-** における **i** 指標の起源については、§.27 参照。

-t- 指標を付けた受動過去分詞 (例、男・単・主 **ПИТЪ, ПѢТЪ, РАСПАТЪ, ПОЖРЪТЪ**「飲み込まれた」) と **-тъ** 語尾のアオリスト 3 人称単数の動詞 (例、**ПИТЪ**「飲んだ」、**ПѢТЪ**「歌った」、**РАСПАТЪ**「磔にした」、**ПОЖРЪТЪ**「飲み込んだ」) の発生源である、接尾辞 **-t-** を持つ名詞も、相的特徴付けを持たない動詞的特徴の指示を含んでいた。一方で、接尾辞 **-t-** のある受動過去分詞を作り、もう一方で、語尾 **-тъ** の 2・3 人称単数アオリスト形を作る古代ブルガリア語の動詞類の間には、ほぼ完

全な一致がある。時に、受動過去分詞形が2・3人称アオリストと語根母音階梯に差異を持つことはある — 例、単・3 **ПРОСТРЕТЬ** に対して、受過分 男・単・主 **ПРОСТРЪТЪ**。

接尾辞 **-t-** のある動詞派生名詞は、人が動詞的特徴を付与されていることを表した。動詞的特徴の付与は、通常、行為がすでに遂行済の場合である。それ故、接尾辞 **-t-** の付いた古い名詞は、**-ТЬЕ** 語尾の動（詞派生）名詞を作る一方で（例、アオ・3・単 **ОУМРЪТЪ** に対して、**ОУМРЪТЬЕ**；アオ・3・単 **ПИТЬ**， 受過分・男・単・主 **ПИТЬ** に対して、**ПИТЬЕ**；アオ・3・単 **ЖИТЬ** に対して、**ЖИТЬЕ**；アオ・3・単 **АТЬ**， 受過分・男・単・主 **АТЬ** に対して、**АТЬЕ**；アオ・3・単 **ПѢТЬ**， 受過分・男・単・主 **ПѢТЬ** に対して、**ПѢТЬЕ**）、3人称単数アオリスト形か受動過去分詞形に変わったのである。もしも他動詞的な特徴を受け取るのが主体であれば、活格構文では文法的客体の役割を果たす絶対格はなくなる、すなわち、接尾辞 **-t-** の付いた名詞は自動詞に転じ、そこから受動過去分詞が発生することになる。もしも他動詞的な特徴を受け取るのが行為の客体であれば、すなわち、活格構文に絶対格である行為の受け手も存在するのであれば、接尾辞 **-t-** の付いた名詞は、他動詞述語として、すなわち、動詞3人称アオリストとして、使われることになる。主体が自動詞的特徴を付与された場合にも、3人称アオリストの動詞が得られよう。

t 指標の受動分詞がある印欧諸語（古代インド語、スラヴ祖語、ギリシャ語、バルト語、ゲルマン語） — ギ **κλυτός** 「知られた」=古イ **srutāḥ** 「聞知された」, **λεκτός** =ラ **lectus** 「選ばれた、優れた」, **wasiths** 「を着た」, リ **siūtas** 「縫われた、刺繍のある」=ブ **шит**, ただし 古ブ **шъвєнъ** — では、これら受動分詞は、基本的には、通常始原的な活格活用の継承である、他動詞（遠心的動詞）から作られている。通常古い不活格活用の継承である自動詞（非遠心的動詞）は、基本的には、接尾辞 **-t-** を持つ受動過去分詞を形成しない。本来、接尾辞 **-t-**

の付いた分詞は、相的表徴は持っていない。ラテン語のいくつかの過去分詞、例えば、*praeteritus* 「過ぎ去った、過去の」、*occāsus* 「沈んだ」(*sōl occāsus* 「沈んだ太陽」) は、受動的な意味は持たない。自動詞から作る、古代インド語の、例えば、*gatā-* < **gʷm-to-* 「去ってしまった、過ぎ去った」のような接尾辞 *-t-* 付きの分詞も、受動の意味は持たない — cf. 語根については、ラ 現・1・単 *veniō*, ゴ *qima* 「来る」 < **gʷem-* を参照。時が経つに連れて、**БОГАТЪ, КРИЛАТЪ, БРАДАТЪ, РОГАТЪ** (cf. ラ *barbātus* 「ひげのある」、*cornūtus* 「角のある」、*aurītus* 「耳のある、耳の長い」) のような、名詞派生形容詞も、接尾辞 *-t-* を以て作られた。これらは、人物(事物)が基の名詞によって決定された特徴をもつことを表したのである。

最初は、3人称単数動詞の意味を持った、接尾辞 *-t-* (*-to-*) 付きの述語的動詞派生名詞は、純粹語幹、すなわち絶対格として使われた。無客体活格構文においては、この述語的名詞は、自動詞述語の意義を獲得し、そこから、受動過去分詞(動詞派生形容詞)(**ΟΥΒΗΤЪ**, 古イ *hata* = ギ *φ α τ ό ς* 「殺された」 < **gʷh₁p-t-o-*、すなわち、ギ *φ ο ν ε ύ ω* 「殺す」と同語根; ギ *κ λ υ τ ό ς* = 古イ *śrutā-*, ラ *in-clutus* 「知られた」 < **kʷlu-t-o-* のタイプの分詞)と中動的自動相の3人称単数過去形(ギ 中動・未完・3・単 *ἐ φ έ ρ ε τ ο* = 古イ *ā-bharata* 「(自分のために)運んだ」 < **bher-e-to-* に、後に *augmentum syllabicum* を付加したもの[§. 12 参照] — のタイプの過去形)が作られたのである。活格の主体(語尾 *-s* を伴う)と絶対格(純粹語幹)の客体を持つ活格構文においては、接尾辞 *-to-* を持つ述語的動詞派生名詞は、他動詞的な意義を持つ3人称単数過去形に発展した。次例参照、アオ・3・単 **АТЪ, ОҮМ РѢТЪ, ПИТЪ, ПѢТЪ, ЗАЧАТЪ, ПРОКЛАТЪ, ПРОСТРѢТЪ, ПОЖ РѢТЪ, ПОВИТЪ**、これらの大部分は、他動詞派生である。

スラヴ祖語の3人称単数アオリスト語尾 *-tъ* は、恐らく、*-tos* 語尾に起源を持ち(§. 2 参照)、それは、述語的名詞の純粹語幹に付加された

有生類名詞の始原的な活格指標 *s* (すなわち、後の単数主格語尾 *-s*) を含んだものである。恐らく、活格構文における述語的動詞派生名詞は、格の上では構文の主語と一致していたのである。実在しているのが、印欧語の絶対(独立)分詞構文(古代ブルガリア語の絶対与格 *dativus absolutus*、ギリシャ語の絶対属格 *genitivus absolutus*、古代インド語の絶対処格 *locativus absolutus*、ラテン語の絶対奪格 *ablativus absolutus*) 型のシンタグマであり、文証される諸言語では、これは状況語的な従属文の意義で使われている。かつての語尾 *-s* の痕跡は、古プロシャ語の過去形に残っている — アオ・3・単 *billats*「言った」, *immats*「取った」を参照。アオリスト3人称単数語尾 *-tъ* と不活格活用の2人称単数語尾 *-th* (cf. 古イ 完・2・単 *vēttha*, ゴ 現・2・単 *waist*, ギ 完・2・単 *οἶσθα* < **uoid-th*「君は知っている」) は、混淆してしまっている。そのため、3人称単数アオリストで *-tъ* 語尾を持つ動詞にあって、*-tъ* は、2人称単数アオリスト語尾としても使われだしたのである。 — cf. アオ・2・単 **АТЪ, ПРОКЛАТЪ, ОΥΜΡΕΤЪ**。この混淆は、スラヴ祖語の、その他の活用の2・3人称形が、語末子音の脱落后、一致してしまったという状況によっても助けられたのである。

§. 35 古代ブルガリア語の1・2人称人称 代名詞と動詞語尾の起源

始原的な人称代名詞と動詞活用における始原的な人称語尾の使用は、1つは、話者（1人称）と非話者（2・3人称）の対立、もう1つは、対話者（1・2人称）と非対話者（3人称）の対立を前提としたものである。先ず最初に現れたのは、1・2人称範疇の場合の、人称代名詞と、起源的に代名詞的な動詞語尾である。当初、3人称形は、特別な代名詞語尾を持たず、動詞の純粹語幹か、あるいはまた、動詞派生名詞（分詞）の純粹語幹であった。3人称の人称代名詞も、さらに後の発生である。古代ブルガリア語においても、真の3人称代名詞は未だ現れていない。3人称代名詞として使われているのは、指示代名詞である（男・単・主 **съ**, 生 **се҃го**, 複・主 **си**, 男・単・主 **тъ**, 生 **то҃го**, 男・単・主 **онѣ**, 生 **оно҃го**, 複・主 **они**）。代名詞の **онѣ** が、人称代名詞として使われるとき、その斜格の機能を務めるのは、承前代名詞の形である（男・単・生 **е҃го**, 与 **емоу**, 複・生 **ихѣ**, 与 **имѣ**）。

活格活用動詞の1人称単数指標は、中間的代名詞語根 *m- であったが（§. 30 参照）、この語根から、1人称単数の人称代名詞斜格（生 **мене**, 与 **мѣнѣ**, 対 **ма**, cf. 古イ 属 *māma*, *mē*, 与 *māhyam*, *mē*, 対 *mām*, *mā* ; ギ 属 *ἐμοῦ*, *μοῦ*, 与 *ἐμοί*, *μοί*, 対 *ἐμέ*, *μέ* ; ゴ 対 *mik*, 与 *mis* ; ラ 属 *meī*, 与 *mihi*, 対 *mē*）と1人称複数の動詞形（**есмѣ** < *es-m-i, 1・複 **есмѣ** < *es-m-os 参照 ; cf. 古イ 現・1・単 *āsmi*, ギ *ἐσμί*, リ *esmi*, ラ *sum*, ゴ *im* 「**бъм**」 ; 古イ 現・1・複 *smāh*, ギ *ἐσμε*, *ἐν*, ラ *sumus*, リ *esmē*, *ēsme*, ゴ *sijum* 「**бъме**」）が作られたのである。1人称単数人称代名詞は、補充法 (suppletion) 的な曲用を行った — 絶対格は、後の斜格の基になった語根 *m- から作られたのに対

して、後に主格に変わった活格は、語幹 *eg'- から作られたのであり、この場合の e は、恐らく、**E-CE** や ブ e-TO (=POBOT) と同系の指示的小辞 (deictic particle) であり (ギリシャ語 1 人称単数人称代名詞斜格の トーン・アクセント 強意形である 属 $\acute{\epsilon}\mu o\hat{\upsilon}$, 与 $\acute{\epsilon}\mu o\acute{\iota}$, 対 $\acute{\epsilon}\mu\acute{\epsilon}$ は、これと同一の小辞を伴う)、また、g (摩擦音ヴァリアント g' あり) は、単・生 **ТОГО** の Г と同系の指示的小辞であり (cf. ゴ 対 mik < *me-g-), 先行語の強調を行う後置要素であった — **ΟΝΛ ΖΕ** (ギ $\acute{o}\delta\acute{\epsilon}$), **ΤΚΟΖΕ** (=ギ $\acute{\omega}\zeta, \acute{\omega}\zeta\delta\acute{\epsilon}$), 男・単・主 **ΗΖΕ** (=ギ $\acute{\omicron}\zeta$) における **ΖΕ** を参照, cf. $\tau o\hat{\upsilon}\tau o\gamma\epsilon$ 「それ (こそ)」, $\delta\rho a\gamma\epsilon$ 「(ともかく) 見よ」, $\epsilon\hat{\upsilon}\gamma\epsilon$ 「大変見事に」 における $\gamma\epsilon$ 。

1 人称単数主格 **431** に最も近い対応形は、古イ $ah\acute{a}m$ < *e-g'-H₂om (g'H₂ > g'h > h の変化を持つ)、また同じく、ギ $\acute{\epsilon}\gamma\acute{\omega}$ (cf. ホメロスの言語における $\acute{\epsilon}\gamma\acute{\omega}\nu$ < *e-g'-o-H₂m), ラ ego < *e-g'-H₂ であり、これらの m や H₂ は、強調のための 1 人称指標である。前者の指標は、人称代名詞の斜格語根 *m- (例、生 **ΜΕΝΕ** 参照) と同系であり、一方、H₂ の要素は、不活格 (完了) 活用の 1 人称単数語尾と同一の要素である — ギ 完・1・単 $o\acute{\iota}\delta\alpha$ 「知っている」 = 古イ $v\acute{e}da$ < *uoid-H₂e を参照 ; cf. 現・1・単 **ΒΤΑΤ**, スラ祖 *uoid-a-i (現在指標 i を付加して、*uoid-H₂e > *uoid-a から作ったもの)。完了活用の 1 人称単数形に H (H₂) の語尾があることは、ヒッタイト語 $sakhi$ (šakḫi) 「知っている」が証明しており、この場合の i は、現在指標であって (§. 27 参照)、現・1・単 **ΕCΜΛ** = ギ $\epsilon\acute{\iota}\mu\acute{\iota}$, 古イ $asmi$, リ $esm\acute{i}$ < *es-m-i 「私はある」の i 語尾と同系のものである。また、この H₂ 指標を似て作られたのが、ギ $\phi\acute{\epsilon}\rho\omega$, ラ $fer\acute{o}$, ゴ $ba\acute{f}ra$ 「運ぶ」 < *bher-o-H₂ タイプの 1 人称単数現在形であり、この形は、恐らく、最初は中動相的な意味 (нося си [自分 (のため) に運ぶ]) を持っていた可能性がある。1 人称単数現在 **ΒΕΡΩ** のような形

は、*bher-o-H₂-m に起源を持ち、これは、1人称指標 m が、1人称単数

*bher-o-H₂ > *bher-ō の形に付加されたものである。Cf. *bher-o-H₂-m に補足的現在指標 i を付加した、古イ 現・1・単 bhārāmi

「担う」。古代インド語の1人称複数現在形 bhārāmaḥ 「私たちは担う」

は、1人称単数現在形の語幹 *bher-o-H₂-m > *bhārām に、複数指標 es (os) を補って作ったものである。431 の語尾 -1 は、恐らく

は、-om に起源を持つものであるが (cf. 古イ ahām < *eg'-H₂-om)、語頭母音 A は、ギ ἐγω, ラ ego, リ aš, ゴ ik 「私」

< *e-g'- における古い e に対応しない。主格 (古い活格) の語幹 *e-g'- は、恐らく今一度指示的要素 e による補強を受け (cf. ギ ἐ-μο

ὺ < *e-mo-s-)、その後 *ēg'- < *e-eg'- が、スラ祖 *iāzъ を与えた可能性がある — cf. ブ方言 ѡ аз, ѡ а, ѣ з, ロ я, セ・ク jā, ス jaz, jā, 古チ jáz, ポラーブ joz, jo。

活格構造の言語の特徴は、複数専用語尾の欠損である。それに代わって、動詞活用で支配的なのは、語幹の補充法 (suppletion) — 単数形と複数形が別々の語幹から形成される — である。印欧語 (古代ブルガリア語も) は、始原的な活格構造言語の継承であるが、ここでは、単数と複数の動詞語幹の間の補充法構成は、消失してしまっている。しかし、いわゆる不規則動詞における、単数語幹と複数語幹の語根母音の階梯の違いは、始原的な状態の痕跡であり、これらの動詞は、過去の言語史の段階の特徴を包含している点で格別な動詞である。Cf. 古イ 現・1・単 as-mi 「私はある」 < *H₁e-s-m-i, 2 asi, 3 āsti に対して、1・複 smāḥ < *H₁s-m-es, 2 sthā, 3 sānti; ゴ 1・単 im [be 動詞], 2 is, 3 ist に対して、1・複 sijum, 2 sijuth, 3 sind; ギ アオ・1・単 ἐδωκα 「与えた」 < *deH₃-H₂-m (これに、augmentum sillabicum を伴う), 2 ἐδωκας, 3 ἐδωκε に対して、1・複 ἐδομεν < *dH₃-H₂-m-, 2 ἐδοτε, 3 ἐδοσαν; アオ・1・単 ἐθηκα 「置いた」 < *dheH₁-H₂-m, 2 ἐθηκα

ς, 3 $\xi\theta\eta\kappa\epsilon$ に対して、1・複 $\xi\theta\epsilon\mu\epsilon\nu$ < *dhH₁-H₂-m-,
 2 $\xi\theta\epsilon\tau\epsilon$, 3 $\xi\theta\epsilon\sigma\alpha\nu$; ギ 現・1・単 $\epsilon\lambda\mu\iota$ 「行
 く、来よう」 < *H₁ei-m-i, 2 $\epsilon\lambda$, 3 $\epsilon\lambda\sigma\iota$ に対して、1・
 複 $\lambda\mu\epsilon\nu$ < *H₁i-m-, 2 $\lambda\tau\epsilon$, 3 $\lambda\bar{\alpha}\sigma\iota$; 古イ
 完・1・単 $v\acute{e}da$ 「知っている」 < *uoid-H₂e. 2 $v\acute{e}ttha$, 3 $v\acute{e}d$
 a に対して、1・複 $vidm\acute{a}$ < *uid-mo, uid-me, 2 $vid\acute{a}$, 3 vi
 $d\acute{u}r$ (cf. 完・1・単 $o\lambda\delta\alpha$, 2 $o\lambda\sigma\theta\alpha$, 3 $o\lambda\delta\epsilon$ に
 対して、1・複 $\lambda\sigma\mu\epsilon\nu$, 2 $\lambda\sigma\tau\epsilon$, 3 $\lambda\sigma\bar{\alpha}\sigma\iota$) ;
 ゴ 現・1・単 $wait$ 「知っている」, 2 $waist$, 3 $wait$ に対して、
 1・複 $witum$, 2 $wituth$, 3 $witun$; 過・1・単 nam
 「取った」 < *nom-, 2 $namt$, 3 nam に対して、1・複 $nemu$
 m < *nēm-, 2 $nemuth$, 3 $nemun$; ヒットタイト 完・1・
 単 $sakhi$ ($\acute{s}ak\check{h}i$) ($a < o$ を伴う) 「知っている」, 2 $sakti$ ($\acute{s}akti$),
 3 $saki$ ($\acute{s}akki$) に対して、1・複 $sekweni$ ($\acute{s}ekueni$), 2 $sekteni$
 ($\acute{s}ekteni$), 3 $sekanzi$ ($\acute{s}ekkanzi$) (語根母音の正常階梯、すなわち e
 階梯)。動詞の単数語幹と複数語幹の古い差異の古代ブルガリア語におけ
 る唯一の残滓は、3人称複数形 **ѡТѢ** とそれに連繋する能動現在分詞
 形 (男・単・主 **ѡѢ**, 生 **ѡѢТѢ** ; §. 34 参照) が、語根母音の階梯に
 おいて、残りの全現在形 (例、現・1単 **ѡѢѢ**, 2 **ѡѢѢ** 等) に対立す
 る非テーマ (無幹母音) 助動詞の現在活用である。

当初、活格活用の単数1人称と複数1人称の形の間に存在した差異は、語
 根母音階梯にだけあった。どちらの形も、語尾 $-m$ を持ち、それに対し
 て後に複数 (多数性) 指標 s (これに起源については、§. 37 参照) が
 付加され、その結果、より新しい複数形が得られたのである。Cf. 現・1・
 単 **ѡѢѢ** < *H₁es-m-i, 1・複 **ѡѢѢ** < *H₁es-mo-s ; 現・1・
 複 $ferimus$ < *bher-e-mos = 現・1・複 **ѢѢѢѢѢ** における、ラ
 テン語語尾 $-mos > -mus$ も参照。1人称複数語尾 $-mo-s > -ѢѢ$
 と並んで、 $-mo$ (**ѢѢ**) の語尾も存在したが、これは、一部の古代ブル

ガリア語文献にだけ文証されるもので、非テーマ動詞の場合である（例、現・1・複 **ААМО**）；セルビア・クロアチア語、スロヴェニア語、ウクライナ語、スロヴァキア語、そしてブルガリア語西部ウ方言（**ѡ** > **y** の変化を持つ）では、また、中世の西部ロシアのテキストでも同じく、**-mo** は、1人称複数一般の語尾に変わっている。恐らく、**-mo** は、例えば、古イ完・1・複 **vidmā** が ***uid-mo** の継承である場合、古い不活格活用の複数1人称語尾の継承であろう。複数1人称のもう一つの語尾は、**-me** ないしは **-mes**（複数指標 **s** を補っている）である。中世ブルガリア語の非テーマ動詞複数1人称形 **ВѢМЕ, ААМЕ, ЕСМЕ, ННМЕ** を参照、この複数1人称語尾 **-МЕ** は、ここからさらに後に過去語尾 **-ХОМЪ** > **-ХМЕ** に転移し、また同じく、1人称単数現在で語尾 **-м** を取るテーマ（幹母音）動詞の現在形にも転移したのである、cf. ブ 現・1・単 **давам**, 1・複 **даваме**。中世ブルガリア語の **-МЕ** 語尾は、**-me, -mes** のどちらからも出た可能性がある — ドーリス 現・1・複 **φέρουμες** 「運ぶ」、リ 現・1・複 **věžame** 「(乗せて) 運ぶ」参照。

活格構造言語の特徴は、1人称複数に対して二種類の異なる形が存在することである。一つは、内包形（inclusive form 2人称を包摂する形）であり、「君と私（君達と私）」を表すのに対して、もう一つは、外包形（exclusive form 2人称を除外する形）であって、「彼と私（彼らと私）」を表す。1人称代名詞の内包形と外包形は、スラヴ祖語（古代ブルガリア語）や他の印欧諸語が継承した、活格構造の形態・統語組織の原形にも存在した。1人称複数代名詞の内包形と外包形の違いは、文証される印欧語に（古代ブルガリア語にも）現れている。代名詞のかつての活格と絶対格が、異なる語根から作られたことを示唆する唯一の補充法曲用が立証されている。

内包形は、代名詞語根 ***u-** から作られ、これは、本来、一見して即座に捕捉不能なものに関係する語根である（§. 25 参照）。双数的な意味も持っていたこの語根からは（§. 32 第3項参照）、1人称複数の、補充法的内包

形代名詞曲用の活格だけが作られ、それは後に主格に転じた。古イ 1・複・主 *vayām*「私達」を参照 — これは、**u-e-*, *u-o-* 語幹に、古い所格的後置詞 *i* (§. 31 参照) に起源を持つ多数性指標 *i* と古い中間語根 **m-* に起源を持つ 1 人称指標 *m* (§. 30 参照) をもって補強したもの。Cf. ヒットイト 1・複・主 *wes* (*uēš*)「私達」は、**u-e-* の語幹に、多数性指標 *s* (これに起源については、§. 37 参照) を付加したものであり、また同じく、ゴ *weis*「私達」も、語幹 **u-e-* と二つの多数性 (複数) 指標 *i* と *s* から作ったもの。双数 1 人称形も、1 人称内包形語幹 **u-* *e-*「君と私 (君達と私)」から作っている。 — 次例参照、双・主 **БТ** < **u-ē* (幹母音の延長を伴う、§. 5 参照) ; リ 双・主・対 *vē-du* = ゴ *wit*「私達二人」(語幹 **u-e-* を語根 **du-*「二つ」をもって補強したもの — cf. **АБД**, ラ *duo*, ギ *δύω* < **du-ō*「二つ」)。 *u* の要素は、双数及び複数 1 人称の動詞語尾でもあった — 次例参照、現・1・双 **ЕСБТ** (この語尾の **БТ** は、双数主格 **БТ** と同じもの), リ *ěsva*, *esvā*「私達二人はある」(複数指標 *s* を補った 古イ *svāh* < **H_{is}-ue-s* と同系), ヒットイト 現・1・複 *ep-wen-i* (*ēp-uen-i*)「掴む、取る」(-*ue-n*〔以下を参照〕を現在指標 *i*〔§. 27 参照〕によって補強した 1 人称複数語尾)。

1 人称複数代名詞の同じパラダイムの斜格は、語根 **n-* から作られたが、これは、本来、外包的な意味 (彼と私、彼らと私) を持っていた。同語根は、「彼 (彼ら)」だけでも表していた ; これに指示的要素 *e* (*o*) を補強して、指示代名詞 **ОНЪ** < **o-no-* が作られ、それが、古代ブルガリア語で 3 人称代名詞としても用いられるのである — cf. リ *añs*「それ、彼」, 古イ *ana-*「あの、その」, 古高ド *ēner* = ド *jener*「あの、その」。ギリシャ語中動相 1 人称複数語尾 *-μεθα* (例、現・1・複 *λυόμεθα*「解ける、ほどける」) は、1 人称代名詞語幹 **m-e-* と始原的な不活格活用 2 人称単数語尾 *-tH₂e* = ギ *-θα* (cf. 完・2・単 *οἶσθα*「君は知っている」) から構成された合成内包指標だと見なすべきである ;

完了形及び中動相両方の原形としての始原的な完了活用については、§. 15

参照。古代インド語の1人称複数語尾 *-mahe* (例、中動・現・1・複 *brūmāhe* 「話す」) も、同様の説明がなされるべきであり、この語尾は、*th > dh* の有声化 (原因不明) と古い現在指標 *i* を補った *-me-tha-i* から作ったものである。Cf. 古代インド語中動相〔反射態〕1人称双数語尾 *-vahe < *ue-tha* — この場合の *-tha* (起源的には、不活格活用動詞の2人称語尾である *-tH₂e* から) は、内包指標を補強する役割を果たしている。ギリシャ語中動相1人称複数の完全語尾 *-μεσθα* (アッティカ方言の 現・1・複 *φραζόμεσθα* 「考える」に対して、ホメロスの言語における *φραζόμεσθα* を参照) においては、合成中動語尾 *-me-tha < -me-tH₂e* の1人称指標 *-me* は、多数性 (複数) 指標 *s* (これの起源については、§. 37 参照) による補強を受けたものである。

ヒットイト語中動相1人称複数語尾 *-wasta (-uāšta)* (例、現・1・複 *eswastati (ešūuāšta [ti])* 「座っている」、過・1・複 *arwastat (arūuāštat)* 「立っていた」 参照) は、始原的な内包指標 **ue* 「二つ」 *>* 「君と私」を、複数指標 *s* と始原的な不活格活用2人称指標 *tha < tH₂e* とによって補強したものである。内包・双数的要素 *ue* と不活格2人称語尾 *-tha* の逆配列によって得られたのが、古代インド語中動相2人称複数語尾 *-dhve < -th-ue* (原因不明の *th > dh* の有声化を伴う) である — 次例参照、中動・現・2・複 *bhāradhve* 「君達は自分のために運ぶ」。

-t-the に起源を持つ、ギリシャ語中動相2人称複数語尾 *-σθε* (次例参照、現・2・複 *παίδεσθεσθε* 「君達は教育を受ける」) は、複数2人称語尾 *-te* (次例参照、現・2・複 **ΒΕΡΕΤΕ** = *γιόρετε* 「運ぶ」) の内の *t* の要素を、不活格活用2人称語尾 *-θε (-θα* に代えて) *< -tH₂e* によって補強したものと見なすべきである (ギリシャ語では、能動相2人称複数語尾 *-te* の影響によって、*-tH₂e > -θα* に代わって、*-θε* 語尾が分離独立した; この語尾の起源につい

ては、以下を参照)。ギリシャ語中動相1人称複数語尾 $-\mu\epsilon\theta\alpha$ < $-\mu\epsilon\theta\alpha$ < $-\mu\epsilon\theta\alpha$ 及び2人称複数語尾 $-\sigma\theta\epsilon$ < $-\sigma\theta\epsilon$ < $-\sigma\theta\epsilon$ の起源を解明する上で、有効な類型的対応例となるのが、南アメリカ・インディアンの言語グアラニ語の活格的文法構造であるが、ここでは、不活格活用の2人称指標は接頭辞 $nde-$ 、活格活用2人称複数指標は接頭辞 $pe-$ 、不活格活用1人称複数内包指標は接頭辞 $na-nde-$ であるのに対して、接頭辞 $pe-nde-$ は不活格活用2人称複数指標である。

ギリシャ語1人称複数語尾 $-\mu\epsilon\nu$ (次例参照、現・1・単 $\pi\alpha\iota\delta\epsilon\acute{\upsilon}\omicron\mu\epsilon\nu$ 「私達は教育する」) は、語尾 $-\mu\epsilon\theta\alpha$ とは違って、当初は外包的な意味(彼と私、彼らと私)を持っていたのであり、1人称語幹 $*me-$ とそれに指示的指標 n を加えたものから成っている。この n は、男・単・主 $\omicron\eta\lambda$ < $*o-no-$ 、生 $\omicron\eta\eta\omicron\gamma\omicron$ 、複・主 $\omicron\eta\eta$ の構成要素の n と同一のものである。ヒッタイト語1人称複数語尾 $-wen$ ($-u\acute{e}n$) (例、現・1・複 $epweni$ ($epu\acute{e}ni$) 「私達は取る」、 i は現在指標、§. 27 参照) も、意味的には外包的であって、双数語幹 $*ue-$ に $\omicron\eta\lambda$ の η と同系の指示指標 n を付加したものから成っている。

1人称複数の古い外包的人称代名詞語幹の機能を果たしたのが、双数的な意味も持っていた古い共同形 (социативна форма) $*n\acute{o}$ (§. 5 参照) である。次例参照、双・1・対 $\eta\lambda$ 「私達二人」 < $*n\acute{o}$ 、双・与・造 $\eta\lambda\eta$ < $*n\acute{o}-m\acute{o}$ (§. 32 第4項参照)、複・与 $\eta\lambda\eta$ < $*n\acute{o}-mo-s$ (同所参照)、所 $\eta\lambda\eta$ (§. 32 第3項参照)。双数所格形 $\eta\lambda\eta$ は、生格形としても使われたが (私達の所にあるものは、私達のものである)、 $*n\acute{o}$ に所格的指標 i (§. 31 参照) と双数・複数的指標 u (o 階梯では ou) を加えて得られたものである — cf. 複数所格における u の要素 $*n\acute{o}-s-u$ > $\eta\lambda\eta$, $*u\lambda k^w-o-i-s-u$ > $\eta\lambda\eta$ 。複数対格形 $\eta\lambda\eta$ は、 $*n\acute{o}-n-s$ ($-\acute{o}ns$ > η の変化については、§. 2 参照) から作ったもので、 $-n$ は対格語尾 (§. 38 参照)、 s は複数指標である; cf. ラ 複・主・対 $n\acute{o}s$ 「私達は、私達を」、複・与・

奪 *nōbīs* < **nō-bhi-s* では、-bhi は対置後置詞 (§. 30 参照)、s は複数語尾である。ゴート語対格 *uns* 「私達を」、属 *unsara* 「私達の」等は、**ŋ-s* から作ったもので、s は複数指標である。Cf. 古イ 具 *asmābhiḥ* 「私達と」 < **ŋ-s-mō-bhi-s*, 処 *asmāsu* 「私達の所で」 < **ŋ-s-mō-s-u* では、複数指標を含む語幹 **ŋ-s-* が、1 人称語幹（起源的には、中間語幹、§. 30 参照）**mō-* ないしは **mē-* によって補強されたもの。これは、双数（複数）的な意味も持っていた、**me-* (**mo-*) 語幹の古い共同格である。Cf. レスボス 対 *ἄμμε*, ドーリス *ἄμἐ* < **ŋ-s-me* の *me* は、補強 1 人称語幹。複数主格 *μῆ* 「私達は」は、**mōs* に起源を持ち、**mō-* は双数（複数）的な意味も持っていた古い共同格、s は二次的に付加された複数指標である。Cf. リ 複・主 *mēs* 「私達は」 < **mē-s*。

「君と私、君達と私」の意味を持っていた内包的複数 1 人称代名詞の語幹 **u-e-* は、2 人称複数代名詞語幹としても使われた（次例参照、対 *Б* *У* < **uō-ns*, 主 *БУ* < **uōs*, 双・主・対 *БА* < **uō*, 複・与 *БАМЪ* < **uō-mo-s*, 双・与・造 *БАМА* < **uō-mō*, 複・造 *БАНН* < **uō-mī*; cf. ラ 主 *vōs* < **uō-s*, 対 *vōs* < **uō-ns*, 古プ 対 *wans* < **uō-n-s*, ラ 与・奪 *vōbīs* 等。2 人称複数代名詞の補充法曲用の古い活格は、語幹 **i-u-* から作られたものであり、この場合の *i* は、近接性を表す代名詞語根 (§. 27 参照) であり、*u* は、双数性（複数性）指標である。Cf. ゴ 複・主 *jūs* 「君達」、これと同系のものに、リ *jūs* 「君達」 < **i-ū-s* があるが、この *s* は、多数性（複数）の補足的付加指標であり、語幹は、かつての共同格の形と合一した双数形に見られるように、語幹末母音の延長を伴っている (§. 30 参照)。Cf. 古イ 複・主 *yūyām* 「君達」 < **i-ū-* は、1 人称複数代名詞の形 *vayām* (この起源については、上を参照) から借用した補足的接尾辞 *-yam* を伴う。古代インド語や、リトアニア語では、当初活格だけに特有であった語幹 **i-u* (*i-u-s*) が、曲用全体に一般化するが（次例参照、古イ 具

yuṣmābhiḥ「君達と」 < *i-u-s-mō-bhi-s の接尾辞 -mō は、1 人称複数具格形 asmābhiḥ から借用したもの；リ jumīs < *i-u-m-i-s、§. 32

第2項参照)、スラヴ祖語では、曲用全体に一般化したのは、*uō- 語幹である — cf. 主 **ВѢ** =ラ 主 vōs < *uō-s, 対 **ВѢ** =ラ 対 vōs < *uō-n-s；古プ 対 wans も参照。対格 izwis「君達を」 < *i-s-ue-s タイプの、ゴート語斜格形は、代名詞語根 *i-「近くに」に複数指標 s を加えたものと、語幹 *ue- にこれまた複数指標 s を加えたものの合成である。

代名詞の1 人称単数形を作った中間指標 m (例、生 **МЕНЕ**, 与 **МѢ** **НѢ**, ギ 対 *ἐμ ἐ, μ ἐ*, 与 *ἐμ οί, μ οί*, ゴ 対 mik, 与 mis) に対立したのが、代名詞2 人称単数形 (生 **ТЕБЕ**, 与 **ТЕБѢ**, ラ 与 tibi, 対 tē, ゴ 対 thuk, 与 thus) と指示代名詞形 (男・単・主 **ТѢ**, 生 **ТОГО**, 与 **ТОМОУ**, ギ 対 *τόυ, τ φ*, 古イ 対 tām, 与 tasmai, ゴ 対 thana, 与 thamma 型のもの —

これは、ブルガリア語史の上では、3 人称代名詞形として使われるに至っている) を作る周辺指標 (периферен показател) t である。男・単・主 **ТѢ**, 生 **ТОГО** 型の指示代名詞の原形と2 人称単数代名詞の原形との違いは、語幹にあるのではなくて (語幹は両者とも同じ)、語尾にある。すなわち、語幹 *te- (*to-) は、人称代名詞語尾を伴えば、人称代名詞曲用を行い、指示代名詞語尾を伴えば、指示代名詞曲用を持つに至るのである — 次例参照、男・中・与 **ТОМОУ**「これに、彼に (対して)」 < *t-o-mo-u (§. 32 第4項参照), 与 **ТЕБѢ**「君に」 < *t-e-bhōi < *t-e-bho-ei (§. 31 参照)。

古い指示代名詞曲用の活格は、代名詞純粹語幹 *s-o である — ギ 男・単・主 *ὁ*, 古イ *sá*, ゴ *sa*「その、それ、彼」を参照。当初、s の要素は、動詞活格活用の2 人称単数の語尾でもあった — 次例参照、現・2・単 **ВѢСН** < *uoid-s-, **БЕРЕШН** < *bher-e-s-, cf. 古イ 現・2・単 *bhārasī*, ゴ *baīris*「君は運ぶ」 < *bher-e-s-, ラ *fe*

rs「君は運ぶ」< *bher-s-。Cf. ギリシャ語現在2人称単数語尾 $-\epsilon\iota\varsigma$ 、例えば、 $\acute{\alpha}\gamma\epsilon\iota\varsigma$ < *H_{leg}'-e-i-s の場合は、現在指標 i の後ろに、代名詞要素 s を加えたもの。恐らく、古代ブルガリア語2人称単数語尾 **-CH** (**ВТЧ** 参照) 及び **-Ш** (**БЕРЕШ** 参照) は、中動相現在形に特有の語尾 **-sai** の継承である — cf. 古イ 中動・現・2・単 $b\bar{h}arase$ = ギ $\phi\acute{\epsilon}\rho\epsilon\alpha\iota$ < *bher-e-sai、この場合の i は、古ロ 現・2・単 **БЕРЕШЬ** = 古イ $b\bar{h}arasi$ < *bher-e-si にも継承されている現在指標である。スラヴ祖語の2人称単数語尾 **-sai** の末尾の **-ai** は、古い不活格活用動詞の1人称単数現在から移されたものである — cf. 現・1・単 **ВТАТ** < *uoid-ai, 2 **ВТЧ** < *uoid-s-ai。古代ブルガリア語の現在2人称単数語尾 **-CH** (**-Ш**) に一番近い対応形に当たるのが、古プロシャ語の語尾、例えば、現・2・単 $assai$ = **ECH**「君はある」、 $waissei$ = **ВТЧ**「君は知っている」、 $\acute{e}isei$ 「君は来る」のような形における **-sai** (**-sei**) である。

スラヴ祖語1人称単数現在 *uoid-a-i から現在指標 i (§. 27 参照) を排除すれば、*uoid-a (=古イ 完・1・単 $v\acute{e}da$, ギ $o\acute{\iota}\delta\alpha$ 「私は知っている」) の形が残ることになるが、これは、*uoid-H_æ (§. 3 参照) に起源を持っている。Cf. 古イ 中動・現・1・単 $b\bar{h}are$ 「自分のために運ぶ」< *bher-H_æ-i、この i は現在指標。完了形と中動相の形が、共に始原的な完了活用に起源を持つことについては、§. 16 参照。ギリシャ語の中動相1人称単数現在語尾 $-\mu\alpha\iota$ (例、 $\phi\acute{\epsilon}\rho\omicron\mu\alpha\iota$ 「自分(のため)に運ぶ」) は、不活格活用1人称単数語尾 $-a$ < $-H_2e$ に現在指標 i を補ったものと始原的な活格活用1人称単数語尾 $-m$ との合成だと見なすべきである、cf. 現・1・単 **ЕСМЬ**。この語尾 **-ai** は、始原的な1人称単数の完了ないしは中間受動 (medio-passive) 語尾 **-ai** (**-mai**) から、中動相活用2・3人称単数及び3人称複数にも移された(次例参照、ギ 現・2・単 $\phi\acute{\epsilon}\rho\epsilon\alpha\iota$ < * $\phi\acute{\epsilon}\rho\epsilon\sigma\alpha\iota$, 3・複 $\phi\acute{\epsilon}\rho\omicron\nu\tau\alpha\iota$, 古イ 現・2・単 $b\bar{h}arase$ = **БЕРЕШ**, 3 $b\bar{h}arate$ = $\phi\acute{\epsilon}$

ρ ε τ α ι, 3・複 bhārate = φ έ ρ ο ν τ α ι)。明らかに、もっと古い中動相語尾は、ギリシャ語及び古代インド語の *indicativus praeteriti medi* (直接法中動相〔反射態〕過去)の形に立証されるが(例、2・単 έ φ έ ρ ε ο, έ φ έ ρ ο ν < *έ-φ έ ρ ε σ ο, cf. ラ 中動・2・単 sequere 「君は従う」 < *sek*-e-se, 3・単 ā-bharata = έ-φ έ ρ ε τ ο, 3・複 ā-bharanta = έ-φ έ ρ ο ν τ ο)、ここには補足付加現在指標 *i* は置かれていない。しかし、もっと古い起源を持っているのが、不活格活用2人称語尾 -th を含む、古代インド語の中動相過去2・単 ā-bharathās である。したがって、2人称単数活格語尾 -s は、2人称単数不活格語尾 -t (-th < -tH₂) と対応関係をなしており、それは、始原的な活格代名詞語幹 *so が始原的な不活格代名詞語幹 *to と対応をなしている (§. 33 参照) のと同じである。

恐らく、古イ 中動・現・2・単 bhārase, 3 bhārate, 3・複 bhārate は、*bhere-so-i, *bhere-to-i, *bhero-nto-i の直接的な継承であり、このことは、古ブ 現・2・単 waissei < *uoid-se-i = ВѢСНН のような形に立証されるとおり、2・単・現 БЕРЕШИ が *bher-e-so-i ないしは *bher-e-se-i から引き出され得ることを表している。2人称単数不活格語尾の H₂ 指標は、1人称単数不活格語尾から引き移されたものであり、それは、このようにして2人称単数形と2人称複数形を区別するためである。

2人称単数人称代名詞斜格及びスラヴ祖語の指示代名詞 *t-o- (男・単・主 ТЪ, 生 ТОГО, 与 ТОМОУ を参照)の格形は、代名詞語根 *t- から作ったものである。2人称単数動詞語尾としての、代名詞要素 t は、古い不活格活用形に立証される — 古イ 完・2・単 vēttha = γί ο ι σ θ α, ゴ waist 「君は知っている」 < *uoid-t-H₂e を参照 (§. 15 参照)。ΟΥΜΡΕΤЪ, ΡΑΣΠΑΤЪ のような形の、アオリスト2人称単数語尾 -ΤЪ も、恐らく、同一要素から発生したものであろう。印欧語の2人称複数語尾 -te も同一起源である — 次例参照、現・2・複 БѢ

РТЕ, ギ $\phi \acute{\epsilon} \rho \epsilon \tau \epsilon$, ゴ *baíriθ*, 古イ *bháratha* 「君たちは運ぶ」
 (古い不活格活用 2 人称単数語尾の影響によって、*t* の帯気音化を伴う —
 cf. 古イ 完・2・単 *véttha* 「君は知っている」), ラ *fertis* 「君たち
 は運ぶ」 < **bher-te-s* (この *s* は、補足付加複数指標)。古い 2 人称
 双数語尾が複数語尾と異なるのは、末尾音の階梯 (*-te* に代えて *-to*) だ
 けである — 古イ 2・双 *bhárathah* < **bher-e-to-s* (*t* の帯気
 音化 — これについては上を参照 — と補足付加複数指標 *s*) を参照;
 cf. ゴ 2・双 *baírats* 「君達二人が運ぶ」 < **bher-e-to-s*, リ *vēžat*
a 「君達二人が運送する」 < **ueg'h-o-to*。双数 2 人称 **БЕРЕТА** の語
 尾 **-ТА** は、末尾母音の延長を伴った *-to* から発生したもので、同じ
 ことは、双数の意味も持っていた古い共同格形に見られる (§. 11 参照)。

不活格活用動詞の第一次的な 3 人称単数形は、純粹語幹である — 古イ
 完・3 *vēda* (= ギ $\omicron \iota \delta \epsilon$, ゴ *wait*) 「知っている」 < **uoid-*
e 参照。恐らく、活格活用動詞の純粹語幹を 3 人称単数形として用いるこ
 とも可能であった; cf. 現・3・単 $\phi \acute{\epsilon} \rho \epsilon \iota$ < **bher-e-i* (*i* は、
 古い現在指標、§. 27 参照)。しかし、基本的には、活格活用動詞の 3 人称
 単数形は、周辺指標 *t* を含むものであり、これは、スラヴ祖語の指示代
 名詞の一つ (男・単・生 **Т-ОГО**, 与 **Т-ОМОУ**, 男・複・主 **Т-И** 参照)
 の語根であり、また 2 人称単数人称代名詞 (生 **Т-ЕБЕ**, 与 **Т-ЕБѢ** 参
 照) の語根である。この周辺指標は、現在 3 人称単数形に立証される —
БЕРЕТѢ < **bher-e-t-i* (この *i* は、古い現在指標) を参照; cf. 古イ
 現・3・単 *bhārati* 「担う」= ゴ 現・3・単 *baíriθ*, ギ $\acute{\epsilon} \sigma \tau \iota$
 「彼はある」 < **Hies-t-i*, ラ *vehit* 「運送する」 < **ueg'h-e-t-i*, ヒッ
 タイト *epzi* (*ēpzi*) 「取る」(この *-zi* は、*-ti* の継承)。古代ブルガリア語
 の 3 人称単数現在 **БЕРЕТѢ** と比べて、古代ロシア語の 3 人称単数現在
 形 **БЕРЕТѢ** の方が、原形 **bher-e-t-i* = 古イ *bhār-a-t-i* に近い。
 3 人称単数の予期される語尾 **-ТѢ** に代えて **-ТѢ** が現れたのは、**ОУМ**
РѢТѢ, **РАСПАТѢ** 型の 3 人称単数アオリスト形 (この起源については、

§. 34 参照)の影響であり、また同じく、3人称代名詞としても用いられる 男・単・主 **ТЪ** 代名詞の影響でもある。-Ъ の語尾は、3人称複数現在形としても一般化したのである — cf. 古ブ **ХОДАТЪ** と 古ロ **ХОДАТЪ**。

双数3人称語尾は、-te であった — 現・3・双 **ЕСТЕ, БЕРЕТЕ**, ギ $\acute{\epsilon}\sigma\tau\acute{o}\nu$ 「彼ら二人はある」, $\phi\acute{\epsilon}\rho\epsilon\tau\omicron\nu$ 「彼ら二人は運ぶ」(語末 o 階梯の -to と 男・単・主 **ОНЪ** の要素 n と同系の遠心性指標 [еф е р е н т е н п о к а з а т е л] n を持つ), 古イ stah 「彼ら二人はある」 < *His-te, *His-to, bhārataḥ 「彼ら二人は担う」 < *bher-e-te, *bher-e-to (これに補足付加複数指標 s を付ける)。当初、双数2・3人称語尾は同一であり、また起源的には、2人称複数語尾 -te に一致していた — cf. 現・2・複 **НАЕТЕ** と 3・双 **НАЕТЕ**, 現・2・複 **БХАЕТЕ** と 3・双 **БХАЕТЕ**。-te 語尾は全て、周辺の代名詞指標 t を包摂したのであって、これは、2人称の人称代名詞としても、指示(3人称)代名詞としても用いられた指標である。

いくつかの古代ブルガリア語文献には、双数3人称語尾 **-ТЕ** と並んで、**-ТА** 語尾のものもある — 例、マタイ XXIV-40 **АЪБА БХАЕТЕ** (マリア写本及びアッセマーニ写本) に対して、**АЪБА БХАЕТА** (ゾグラフォス写本及びサヴァの本)。これは、恐らく、3人称人称代名詞としても用いられる指示代名詞双数主・対格 **ТА** 「これら二つ(二人)」 < *t-ō

(§. 11 参照)の影響によって現れたものであろう。Cf. 古イ 未完・3・双 ābharatām 「彼ら二人は担っていた」 < *e-bher-e-tē-n, *e-bher-e-tō-n (ギ 未完・3・双 $\acute{\epsilon}-\phi\epsilon\rho\acute{\epsilon}\tau\eta\nu$ と同系)、この場合の語尾 -tē (-tō) は、周辺(指示)代名詞 *t- の双数・複数形と一致したのであり、n は、古い遠心性指標である (§. 38 参照)。いくつかの古代ブルガリア語例で、また中世ブルガリア語文献では極めて頻発的に、双数女性主語の場合に、3人称双数語尾が、**-ТЪ** となる — 例、ヨハネ XI-3 **ПОСЛАСТЕ** (ゾグラフォス写本、マリア写本、アッセマーニ写本) に対して、

ПОСЛАСТЪ ЖЕ СЕСТРЪ [二人の姉妹は人を遣わした] (サヴァの本) ;
この語尾は、指示代名詞双数女性主格形 **ТЪ** の影響を受けたものである。
中世ブルガリア語の文献例には、双数中性の主語の時にも、双数3人称語尾
として **-ТЪ** を用いるものがある — cf. 双・中・主・対 **ТЪ**。

当初、双数2・3人称語尾は、語末母音 **-te** の階梯の違いによって、2
人称複数語尾とは区別されていた — 次例参照、現・2・複 **БЕΡΕΤΕ** =
ギ $\phi \acute{\epsilon} \rho \epsilon \tau \epsilon$ 「君達は運ぶ」 < *bher-e-te に対して、ギ 2・3・
双 $\phi \acute{\epsilon} \rho \epsilon \tau \omicron \nu$ 「君達二人は運ぶ、彼ら二人は運ぶ」 < *bher-e-to-n
(n は、**ОНЪ** の要素 n と同じ補足付加遠心性指標), cf. 古イ 未完・
2・双 **ābharatam** =ギ $\acute{\epsilon} \phi \acute{\epsilon} \rho \epsilon \tau \omicron \nu$ 「君達二人は運んでいた」。
動詞複数形を形成する場合、n の要素は、語尾 **-men** 及び **-uen** (上を
参照) を持つ1人称複数(双数)の外包形の表徴であり、また同じく、もっ
と後の2人称複数形や2・3人称双数形の基になった同一共通形の表徴であっ
た — cf. ヒッタイト 2・複 **sek-te-n-i** (**šek-te-n-i**) 「君達は知っている」,
ap-te-n-i 「君達は取る」(この i は、古い現在指標) ; 古イ
2・複(命) **hāntana** 「君達は殺す」 < *g^when-e-te-n, **vādathana**
「君達は話す」 < *uod-e-te-n (**ВДЖАЖ**, **ВДАНИШ** [とがめる、動かす、
駆り立てる] と同系) ; cf. ヒッタイト 過・2・複 **kuen-te-n** 「君達
は殺した」。古イ 現・2・複 **vādathana** 「君達は話せ」のような形は、
古イ 未完・2・双 **ābharatam** =ギ $\acute{\epsilon} \phi \acute{\epsilon} \rho \epsilon \tau \omicron \nu$ 「君ら二人は運
んでいた」, 3 **ābharatām** =ギ $\acute{\epsilon} \phi \epsilon \rho \acute{\epsilon} \tau \eta \nu$ 「彼ら二人は運んで
いた」における末尾の m は、弱化した n に由来することを示してい
る (§. 38 参照)。

古代インド語の 中動・未完・2・複 の語尾 **-dhvam** < **-th-ue-n**
(上を参照)、例えば、中動・未完・2・複 **ābharadhvam** 「君達は自分
(のため)に運んでいた」 は、ヒッタイト語 中動・2・複 の語尾 **-tu**
ma-t < **-th-u-n** (双数・複数接尾辞 u のゼロ階梯と先行の u の円唇的
影響によって、遠心性指標 $n > m$ の変化を伴う) と同系である ; 次例参

照、中動・現・2・複 pahhastuma (paḥḥaštuma)「君達は、自衛する」
 (пѧсѧ, пѧсѧшн と同系), 中動・過・2・複 kistumat (kištumat)
 「君達は残った」。古代インド語の、さらに古い n の継承としての語末弱
 化子音 m については、§. 38 参照。古代ブルガリア語には、動詞複数
 2人称及び双数2・3人称の始原的な遠心性指標 n のいかなる痕跡も残っ
 ていない。

§. 36 古代ブルガリア語の生格の起源

古い活格統語構造（活格活用動詞と活格主体を持つ）は、所有の意義を持っていた。再構文 **ul̥kʷos oui nek'et* を検討してみよう。この場合の **ul̥kʷos* (cf. **ВЪЛКЪ**, ラ *lupus*, ギ *λύκος*, リ *vilkas* 「狼」) は、**ul̥kʷ-o* 「狼」の活格で、文法的主体（行為主、行為者）の役割を果しており、一方、**oui* (cf. **ОВЪЦА**, 古イ *avīh*, ラ *ovis*, リ *avis*, ギ *ὄϊς* 「雌羊、羊」) は、絶対格で、活格動詞 **nek'-e-* の文法的客体の役割を果している（活格構造の言語での語順は、通常、主体 — 客体 — 述語 である）。この文の意味は、大体、「狼の・羊・運ぶこと」（**на вълка овценосене то**）であった。活格構造が主格構造（活格が主格に変わる）に転換して以後始めて、この文は、「狼が羊を運んだ」という文に転換するのである。**ul̥kʷos oui nek'et* 「狼の・羊・運ぶこと」型の動詞的所有構文と並行して、**ul̥kʷos ped* 「狼の・足」型の、活格を伴った純粋な名詞的語結合句も可能となった — cf. 古イ 単・主 *pāt*, 与 *padē*, ギ 単・主 *πὸύς*, ドーリス *πῶς*, 与 *πὸδί*, ラ 主 *pēs*, 与 *pedī* 「足」。ヴァン・ヴェイク (N. van Wijk, 1902) は、印欧語の一連の単数主格形が、単数属格形と共通の起源を持ち、かつ属格との差異は、その末尾の階梯にだけ存する、ことを示している — cf. 単・主 **ГОСТЬ** < **ghost-i-s* と 単・生 **ГОСТИ** < **ghost-ei-s*, 古イ 単・主 *av-i-h* 「羊」 < **ou-i-s* と 単・属 *avyah* < **ou-i-es*, ギ 単・生 *ὄϊς* 「羊」 < **ou-i-s* と 単・属 *οἶός* < **oui-os*, 単・主 **СЪНЪ** = 古イ 単・主 *sūnūh*, リ *sūnūs* < **sūn-u-s* と 単・生 **СЪНΟΥ** = 古イ 属 *sūnoh*, ゴ *sunaus*, リ *sūnaūs* < **sūn-ou-s*, ラ 単・主 *pēs* 「足」 < **ped-s* と 単・属 *pedis* < **ped-es* (ギ 単・主 *πὸύς*, ドーリス *πῶς* 「足」 < **pod-s* と 単・属 *πὸδός* と同系)。

本来、s 語尾の生格（属格）形は、同語尾を持つ活格の変異形（variant）であった。古い活格指標 s が、主格語尾に転換する一方で所有的指標（属格語尾）に変わると、この所有的指標は、人称代名詞語幹とは違って物主代名詞を作れない、指示代名詞や疑問代名詞の語幹にも付加され始めた。Cf. 中・単・生 **ЧЕСО** < *kʷ-e-so, 古イ 男・単・属 *tāsya* (=ギリ *τοῦτο* — ホメロスの言語)「そのの」 < *t-o-s-i-o (この場合の i は、指示的要素 i [§. 27 参照] に由来するもので、所有の意の強め指標), ゴ 男・単・属 *this*「そのの」 < *t-e-so。

この所有的語幹 *kʷ-e-s- 及び *t-o-s- (*t-e-s) は、単数斜格の語幹に転換した — 中・単・生 **ЧЕСО**, **ЧЕСОГО**, **ЧЬСОГО**, 与 **ЧЕСОМУ**, **ЧЬСОМУ**, 所 **ЧЕМЬ**, **ЧЕСОМЬ**, ゴ 男・単・与 *thamma*「それに」 < *t-o-s-m-, 古イ 男・単・与 *tāsmāi* < *t-o-s-m-ōi, 処 *tāsmīn*, 奪 *tāsmād* 参照 (この場合の m は、古い中間指標 [§. 30 参照])。スラヴ祖語の指示代名詞斜格は、古い活格指標によって拡張されない代名詞語幹から作ったものである — 例、男・単・与 **ТОМОУ** < *t-o-mo-u (§. 32 第4項参照), 造 **ТѢМЬ** < *t-o-i-mi (§. 31 参照), 所 **ТОМЬ** < *t-o-mi。Cf. 古リ 男・単・与 *tāmui* < *t-o-m-ōi, 造 *tuomī* < *tō-mi (この *tō- は、幹母音の延長を伴う古い共同格形 [§. 10 参照]) ; 中・単・造 **ЧИМЬ** < *kʷ-i-mi も参照、この *kʷ-i (=ポー *czy*) は、古い共同格 — 非延長語幹 *kʷ-i- は、中・主・対 **ЧЬТО** に立証される。

§. 37 古代ブルガリア語の複数形の起源

活格統語構造の言語では、数範疇の発達が弱いため、s 指標を持った古い活格は、単数形にも複数形にも用いられた。古い活格を継承したのは主格であるが、一連の場合、その単数主格形が複数形と区別されるのは、末尾の階梯においてだけである。次例参照、単・主 **ГОСТЬ** (=ゴ gasts) 「客」
 < *ghost-i-s と 複・主 **ГОСТЬЕ** (=ゴ gasteis) < *ghost-ei-es, 古イ 単・主 **avih** (=ギ ð i s) 「羊」 < *ou-i-s と 複・主 **avyah** (ギ o i e s) < *ou-ei-es, ギ 単・主 **π ο ύς**, ドーリス **π ὶς** 「足」 < *pod-s と 複・主 **π ὶδ-ες**。単数も複数も表す古い活格の所有的用法から s 語尾の属格形が発生したが、この属格形もまた当初は単数、複数両用であった。このことを証明しているのが、ヒットイト語の **antuhsas** (antuḥšaš) 「人」 タイプの単数主格形であり、これは、複数属格としても使われる。初めは、s 指標は古い活格形特有の性質を持ち、それは所有的な意義も持つが、単数・複数特徴を表さなかった。スラヴ祖語の代名詞曲用の構築に際して、この指標は、複数生格形に込められた — 複・生 **ТѢХЪ** < *t-o-i-s-on, **НАСЪ** < *nō-s-on, **ВАСЪ** < *uō-s-on 参照、この on は、複数生格用の補足付加指標 (§. 38 参照)。Cf. 1、2 人称複数の物主代名詞 **НАШЪ**, **ВАШЪ** の語幹も、s 指標を伴う古い生格形 (*nō-s-, *uō-s-) に、代名詞語根 *i- (§. 27 参照) に由来する所有指標 io を付加したものに起源を持つ。この所有指標 io については、古イ 単・属 **vŕkasya** (=ギ λ ὶ κ ο ι ο — ホメロスの言語) 「狼の」 < *uŕkʷ-o-s-io を参照。

古い活格統語構造が、主格構造に転換され、不活格活用動詞の主体が絶対格に代わって、主格(古い活格)でもって表されるようになると、有生類名詞(活格活用動詞、不活格活用動詞何れの主体でもあり得る名詞)にだけ特徴的であった s 語尾の古い活格形が、主格形に変わるのである。それは、

不活格構造文の古い絶対格を駆逐し、単数、複数の主格形として使われだしたのである。古い有生類に起源を持つ名詞の単数形と複数形の違いは、末尾の階梯に存する — cf. 単・主 **СЪНЪ** (=古イ *sūnūh*, ゴ *sunus*) < **sūnus* と 複・主 **СЪНОВЕ** (古イ *sūnāvaḥ*, ゴ *sunjus*) < **sūn-eu-es*。例外は、男性 *o* 語幹の名詞及び代名詞である。これらの複数主格形は、*s* ではなく、*oi* で終わるのである — 複・主 **ВЪЦИ** (=リ *vilkaī*, ギ *λύκοι*, ラ *lupī* 「狼達」) < **ul̥kʷ-o-i* と 複・主 **ТН** (= 古イ *tē*, ゴ *thai* 「彼ら、それら」) < **t-o-i* を参照。

ul̥kʷ-o-i* 及び **t-o-i* は、起源的には、指示的小辞 *i* (§. 27 参照) を用いて作られる古い所格形であるが、これは、複数(多数性)の意味を持つ絶対格の形としても用いられた、すなわち、複数の場合の、不活格活用動詞の文法的主体の役割も果たしたのである。後に、ul̥kʷ-o-i* と **t-o-i* は、複数主格形(文法的主体の形)一般としても用いられ始めるのである。

ВЪЦИ (=リ *vilkaī*, ギ *λύκοι*, ラ *lupī* 「狼達」) < **ul̥kʷ-o-i* タイプの複数主格形は、古代インド語の *vṛkāḥ* (=ゴ *wulfos*) 「狼達」 < **ul̥kʷ-o-es* タイプの複数主格形に比べて、古体であり、この語尾の *-es* は、古い有生類名詞を含む他の曲用の複数主格形の類推によって付加されたものである — 次例参照、複・主 **СЪНОВЕ** < **sūn-eu-es*, **ГОСТЬЕ** < **ghost-ei-es*, 古イ *pādaḥ* 「足」 < **pēd-es*。 *o* 語幹名詞複数形の *i* 指標が古いことについては、古代インド語の複数斜格形、例えば、複・与・奪 *vṛkebhyāḥ* 「狼達に、狼達から」 < **ul̥kʷ-o-i-bhi-es* のような形がこれを証明している(この *es* は、後に補われた複数指標)。 *i* 語幹、*u* 語幹名詞の場合は、始原的な所格形が、複数の意味で用いられることはない。それは、代名詞的指標 *i* を含まず、接尾辞の延長階梯を伴う純粹語幹だからである — cf. 単・所 **ГОСТИ** < **ghost-ei*, **СЪНОВУ** (古イ 単・処 *sūnaū*, ゴ 与 *sunau* 「息子に」 と同系) < **sūn-ēu* (スラヴ祖語の接尾辞 *-ou-* の一般化を受ける、

§. 2 参照)。子音幹曲用の場合、スラヴ祖語単数所格形は、i の要素ではなくて、指示的指標 e を含む (cf. 単・所 **КАМЕНЕ, МАТЕРЕ**) のであるが、これは、ギリシャ語 $\mu\eta\tau\acute{\epsilon}\rho\epsilon$ 「二人の母」や $\pi\omicron\iota\mu\acute{\epsilon}\nu\epsilon$ 「二人の牧人」 タイプの双数主・対格形にも立証される (§. 31 参照)。

時が経過すると共に、始原始的な活格語尾 -s に起源を持つ語尾の -es は、古い有生類名詞の複数主格形の一部の特徴を表示し始めた — 次例参照、**СЪНОВЕ** < *sūn-eŭ-es, **ГОСТЬЕ** < *ghost-ej-es, **КАМЕНЕ** < *kā-men-es < *H₂k'-eH₂-men-es。この -es (-s) 語尾は、名詞形の、さらにその後、いくつかの動詞形の、複数一般の語尾に転じて行った (§. 32, 35 参照)。これは、恐らく、次のようにして生成して行ったものであらう。鳴子音に終わる子音幹の始原始的な有生 (活性) 類名詞は、単数主格語尾 -s (例、単・主 **КАМЪ** < *kāmons < *H₂k'-eH₂-mon-s, **МАТН** < *mā-ter-s) と複数主格語尾 -es (例、複・主 **КАМЕНЕ** < *kā-men-es, ギ 複・主 $\mu\eta\tau\acute{\epsilon}\rho\epsilon\varsigma$ = 古イ mātarah < *mā-ter-es-) を持っていた。すなわち、単数主格形も複数主格形も、-s 語尾を持つ同一始原始的な活格の継承であり、それは、元々単数の意味でも複数の意味で使われて来たが、時が経つに連れて、その末尾 (-s, -es) の階梯の違いによって、数も表現し始めたのである。単数主格形において、鳴子音に後続する語末子音 s は脱落し、接尾辞母音が延長したのである — ギ 単・主 $\mu\acute{\eta}\tau\eta\rho$ < *mā-tēr < *mā-ter-s, **КАМЪ** < スラ祖 *kā mūn < *kā-mon-s 参照。いくつかの印欧語では、古い -s 語尾だけでなく、先行鳴子音も脱落している — ラ 単・主 homō = ゴ guma 「人」 < *g'hdom-on-s すなわち「大地の、大地から生まれた」の意、古イ mātā 「母」= リ môté 「妻、母」 < *mā-ter-s 参照。スラヴ祖語においては、鳴子音の脱落が、接尾辞の延長母音の狭めを伴った — 単・主 **МАТН** < *mā-ter-s, **КАМЪ** < *kā-mon-s 参照。Cf. 語末 s の同様の脱落が、先行母音の延長を伴う場合として、古イ 単・主

pāt「足」 < *ped-s (*pod-s), ギ 能動現在分詞・男・単・主 φ
ἐρωυ (= **ΕΡΩΥ**)「運ぶところの」 < *bher-o-nt-s 。

子音幹曲用名詞の一部での、単数主格形語末の s の脱落后、かつての
活性(有生)類の古い活格形の表徴であった -es 語尾は、複数主格指標
に変わった — cf. 古イ 単・主 mātā (次も同系、**МАТИ**, ギ μή
τηρ, ラ māter「母」, リ môtē「妻、母」) に対して、古イ 複・主
mātārah (次も同系、**МАТЕРИ**, ギ μητέρες, ラ mātēs,
リ mōters)。曲用の構築に当たっては、語尾の -es は、他の格にも一般
化し、単数形と複数形の弁別手段となった。次例参照、単・所 **ВЛЦЪ** (=
古イ 単・処 vŕke) < *uŕkʷ-o-i (cf. §.31) に対して、複・所
ВЛЦЪХЪ (=古イ 複・処 vŕkešu) < *uŕkʷ-o-i-s-u (u は、所格
ないしは複数形の補足付加指標 — §.32 第3項 参照); 単・対 **ВЛЪ**
КЪ (=古イ 単・対 vŕkam, リ viŕka, ギ λύκον, ラ lupum
) < *uŕkʷ-o-n (対格語尾 n の起源については、§. 38 参照) に対
して、複・対 **ВЛЪКЪ** (=古イ 複・対 vŕkân, ギ λύκονς,
クレタ λύκονς, ラ lupōs, ゴ wulfans) < *uŕkʷ-o-n-s; ギ
単・与 λύκω, ラ lupō, リ viŕkui < *uŕkʷ-ōi < *uŕkʷ-o-ei
(§. 32 第4項参照) に対して、複・造(起源的には、古い具・与格) **В**
ΛΚЪ (=古イ 複・具 vŕkaiḥ, リ 複・具 vilkaīš, ラ 奪・与 lu
pīs) < *uŕkʷ-ōi-s < *uŕkʷ-o-ei-s (§. 32 第4項参照)。

始原的な、子音語幹、u 語幹、i 語幹名詞の曲用と o 語幹名詞の
曲用の間には原理的な差異が存する。かつての活格の前者型の曲用では、末
尾母音の交替によってのみ、単数主格形(例、**СННЪ** < *sūn-u-s, **ГОСТ**
Ъ < *ghost-i-s, ギ μήτηρ < *mā-ter-s)、単数生格形(例、**С**
ΥΝΟΥ < *sūn-ou-s, **ГОСТИ** < *ghost-ei-s, ギ μητρός <
*mā-tr-os)、及び複数主格形(例、**СΥΝΟΒΕ** < *sūn-eu-es, **ГОСТЪ**
Ε < *ghost-ei-es, **ΜΗΤΕΡΕΣ** < *mā-ter-es) が得られたが、始
原的な o 語幹名詞の場合は、一つの基本の格からこれら諸形を得ること

ができるためには、音交替のメカニズムだけでは、明らかに不十分であった。接尾辞 *-e-* の対応階梯、すなわち、*o* 階梯は、**uļkʷ-o-*「狼」の曲用においては不変のままであった — 同接尾辞の *e* 階梯から得られたのは、動詞非完了幹であり（次例参照、単・主 **ВЛЫКЪ** < **uļkʷ-o-s* に対して、現・3・単 **ВЛЫЧЕТЪ** < **uelkʷ-e-t*、§. 9 参照）、一方、ゼロ階梯であれば、本質的には子音幹曲用である ギ 単・主 **π ο ύ ς** (< **pod-s*)、属 **π ο δ ό ς** (< **pod-os*) 型の非テーマ形になってしまふであろう。始原的な *o* 語幹名詞は、単数生格（属格）と複数主格の形をもっと複雑な方法で形成したのである。*o* 語幹名詞は、生格（属格）として、奪格を利用したり（例、単・生 **ВЛЫКА**=リ 単・生 **vilko** < **uļkʷ-o-ad*、§. 29 参照）、あるいは活格を利用したり、ただし所有的接尾辞 *-io* によって拡張したり（例、古イ 単・属 **vřkasya** =ギ 単・属 **λ ό κ ο ι ο**「ホメロスの言語」 < **uļkʷ-o-s-io*、§. 27 参照）、あるいはまた、所有的接尾辞 *-i-* に一括多数性指標 *H₂* を付加した形によって拡張することもあった（例、ラ 単・属 **lupī** < **uļkʷ-i-H₂*、§. 27参照）。*i* 指標を持つ形は、複数主格の意味（例、複・主 **ВЛЫЦН**=ギ **λ ό κ ο ι**, リ **vilkaĩ** < **uļkʷ-o-i*) を獲得したが、それは、所格の意味も持つものであった（例、単・所 **ВЛЫЦЪ**=古イ **vřke** < **uļkʷ-o-i*、§. 31 参照）。

§. 38 古代ブルガリア語の対格の起源

活格統語構造の主格統語構造への再編以後、活性（有生）類名詞にだけ特有であった、-s 語尾を持つ古い活格は、主格に転じた。それは、不活格活用動詞の文法的主体の役割を果たしていた活性（有生）類名詞の純粹語幹（絶対格）を駆逐したのである。それと並行して、古い活格は、かつての活格的述語構文の枠内で持っていた所有の意味を失った。非述語構文内でのこれの使用（§.36 参照）は、-s 語尾の新しい所有格（属格）の原形となったが、これは主格と同一起源のものである。

古い活格が、人の命名機能も果たす一般的な主体の格に変わると、すなわち、主格としても使われるようになると、活性（有生）類名詞の古い絶対格（純粹語幹）は、名詞の基本形ないしは一般形であることを止めてしまった。古い活格構造文では、活格は、文法的主体（主語）の役割を果たし、一方、絶対格は、文法的客体（直接補語）の役割を果たしていた。古い不活格構造文では、絶対格（純粹語幹）が、主体（主語）の役割を果たしていた。活格構造文の主要部は、述語と絶対格（客体）である。さらにまた、不活格構造文の主要部は、述語と絶対格（主体）である。

主格構造文では、その主要部は、述語と、主語、すなわち、かつての活性（有生）類名詞の活格の継承である主格の名詞である。主格統語構造においては、絶対格（純粹語幹）は、もはや客体関係の表現の用をなさない — 主格文では、客体は、主体に比して、二次的なもの（重要性が劣る）のである。したがって、絶対格（直接補語の役割を果たす）に活格指標 s を補った形から主格の前身である活格を作った、始原的な活格構造文におけると同様のやり方を以て、客体の格（純粹語幹）の形から主体の格（主格）の形を引き出すことはできないのである。かつての活性（有生）類の継承である名詞の場合、語尾 -n を持つ始原的な状況格の一つが客体の格（対格）の役割を果たしたのである。

主格構造文の客体の格（対格）の基になった、-n 語尾の状況格は、本来は、方向指示的、終点指示的（terminative）な意味を持っていた。それは、遠心運動（*еферентно движение* < ラ *ef-ferō* 「持ち出す、運び出す」）による方向と到達点の表現、すなわち、ある人に発して、別の人ないしは別の物に運び及ぼされる運動を表したのである。遠心的な方向指示（中心から周辺へ向けての）を行う場合、n の要素は、遠隔性を表す指示代名詞の意味を持っていた — 男・単・主 **ОНЪ** < *o-no- を参照（この語頭の o は、古い指示小辞であって、**Е-СЕ** [= ラ *ессе*, ギ *ιδού*, ロ *вот*] や ブルガリア語 *е-то* [= ロ *вот*] の e、またロシア語の (в)от の o と同系である）。遠心的なジェスチャーは否定の意味も持っていたのであり、語幹 *n-e は、否定小詞としても使われている — **НЕ**, リ *nè*, 古イ *na*, ラ *ne* (*ne-sciō* 「知らない」における), ゴ *ni* 参照。代名詞語根 *n- からは、前置詞の **НА** も作られたが、これは、所格と共にするとき、遠心的な位置（物の表面ないしは終端における）を表し、一方、対格と共にするとき、遠心的な運動（物の表面、終端へ向けての）を表したのである。遠心運動を伴う、現代（ブルガリア）語の *на!* 「(物を差し出し、指さして) さあ、ほら、そら、取れ」 も、前置詞 **НА** と同系である。

遠心運動の一変種に、移入運動（*илативно движение* < ラ *il-latus* 「運び込まれた、持ち込まれた」）があるが、それを表すが、遠心指標 n と同系の語幹 *en- である。接頭辞および前置詞 **ВЪ**, **ВЪН** (例、アオ・3・単 **ВЪН-НАЕ**, 男・単・対 **ВЪ НЪ** 「その中へ」) も、同語幹から派生しており、これは、古いゼロ階梯 *п* > *ъп* と語頭添加音（prothesis）**В** を含んだものである（この場合のかつての *п* は、超越・内在指標 [*трансцендентен и инесивен показател*] である *и* [au] との混淆のために *ъп* が *ъп* に代わっている；この指標の継承が、内在的・移入的前置詞の **ОУ** であり、それは、否定小詞の意味も持っている — 次例参照、**БОГ**

-**ДТЪ** [富んだ] に対して、**ОУ-БОГЪ** [貧しい])。Cf. ギ ϵ ν (=ゴ in) < *en, ラ in (=リ i) 「の中で、の中へ」 < * η 。移入語幹の o 階梯からは、**ВЪН-Ж-ТРОЪ** (重複語幹 * η -on-) (内部で、内部へ) と **ЖТРОБА** (内蔵、腹、子宮、内部) (グ ψ - θ - η - θ と θ - η - θ - θ) が派生している。移入指標 en は、後置詞としても使われていた — 古イ 男・単・処 *tāsmin* 「そこに、彼のそばに」 (*t-o-s-m-i [§. 36 参照] と古い移入指標 n から) 参照。

遠心指標 n は、動詞語幹と結合すると、受動過去分詞を作った — 次例参照、**РЕЧЕНЪ**、**НЕСЕНЪ**、**БЪРАНЪ**。受動過去分詞は、遠心運動、すなわち、他の人物ないしは事物に発源する行為ないしは運動、の結果たる性質を表した。それ故、受動過去分詞は、原則として、他動詞 (遠心動詞) から形成される。次例、ヨハネ I-6 ソグラフォス写本 **ПОСЪЛАНЪ О ТЪ БА** (神から遣わされている) タイプの受動過去分詞付き受動文を参照、この場合、行為の起点は、**ОТЪ** と生格名詞との離脱的結合句によって表されている。n 指標を持つ受動過去分詞は、古代インド語、古代ゲルマン語の何れにも固有のものであるが (古イ *gīrṇā* 「飲み込まれた」 と 現・3・単 *girāti* 「飲み込む」 — 現・1・単 **ЖЬРЖ**, 2 **ЖЬРЕШИ** [飲み込む] と同系; ゴ *gibana* 「与えられた」 不 *giban* 「与える」 を参照)、作り方は、男・単・主 **ОУБИТЪ** 型の、t 指標を持つ受動過去分詞 (§. 34 参照) に似ている。前者の場合、分詞指標 n は、遠心的、したがって、周指的指示代名詞の語根 *n- と同一である — cf. 男・単・主 **ОНЪ**, リ *añs* 「それ」, 古イ *ana-* 「これ」, 古高ド *ēner* = ド *jener* 「それ、あの」。後者の場合には、分詞指標 t は、周指的代名詞要素 t (§. 34 参照) と同一である。人物 (事物) が、他の人物が行った行為によって得られた特徴を付与され得るのは、その行為が完結している場合だけである。それ故に、n 指標を持つ受動過去分詞も、t 指標を持つ受動過去分詞 (§. 34 参照) も、動詞過去語幹から作られるのである。受動過去分詞の形成にとって最適なのは、他動詞であり、その場

合こそ、行為は他の人物ないしは事物に運び及ぼされるからである。

再構文 *uḷkʷos ouī nek'et 「狼の・羊・運ぶこと」(на вълка овценосенето) 型の構文 (§. 36 参照) においては、絶対格である *ouī に代えて、方向指示格である *ouin を用いることもできた。このような場合の再構文 *uḷkʷos ouin nek'et が表した意味は、「狼の・羊に向けられた〔関わる〕・運ぶこと〔運搬〕」(на вълка носенето, насочено〔отнасящо се〕към овцата) であった。活格統語構造の、主格構造への転換とともに、活格 (*uḷkʷos) は主格に変わり、絶対格 (*ouī) は、方向指示格 (*ouin) によって置換され、それは、客体(対)格に転じた。すでに、古い活格構造文の文脈の中で、(絶対格 + 活格活用動詞)の組み合わせ *ouī nek'et 「羊・運ぶこと」は、所有的な意味「羊の運搬〔運ぶこと〕」(genitīvus objectī [客体の属格]の意味)を持っていた。これは、同じく所有的な意味であるが、ただし、genitīvus subjectī (主体の属格)の意味である、(活格 + 活格活用動詞)の組み合わせ *uḷkʷos (ouī) nek'et 「狼の・(羊)運搬〔運ぶこと〕」とは、対照的である。Cf. 古代インド語の tatpuruṣa (限定複合語)型の構文 (§. 27 参照)、例えば、rājāputra- 「王子、(逐語的には、王-息子)」においては、第一要素 rājā- (絶対格、純粹語幹)は、所有者を表すのに対して、語形(屈折)変化指標を含む第二要素は、所有されるものを表している。

活格構造文における絶対格に取って代わった、-n 語尾の方向指示格も、所有的な意味を獲得した — *ouin nek'et は、*ouī nek'et と同じように、初めは、genitīvus objectī の意味での「羊の・運ぶこと(運搬)」(носенето на овцата)を表したのである。*ped ouin 「羊の・足」型の名詞的所有構文も、*ouin nek'et (*nek'et ouin) 「羊の・運搬」型の動詞的所有構文をモデルにして、構築された。当初は、所有的意味を持つ二つの格形が存在したのであり、一つは、古い活格指標 -s を含むもの、今一つは、古い方向指示(遠心)指標 -n を含むもので

ある。この古い状態の痕跡は、ヒッタイト語が残しており、そこでは、属格に *-as* と *-an* という二つの異なる語尾がある。これらの語尾を以て形成される形は、単数にも複数にも使われている。その他の印欧諸語の名詞語尾の生成の場合は、*-es (-s)* 語尾の所有形は、単数属(生)格形となり(例、単・生 **ΜΑΤΕΡΕ** < **mā-ter-es*, ギ *μητρός*, ラ *mātris*, リ *mōters*; 単・生 **СҮНΟΥ** = 古イ *sūnōh*, リ *sūnaūs*, ゴ *sunaus* < **sūn-ou-s*)、一方、*-en (-n)* 語尾の所有形は、複数属格形になった(例、複・生 **ΜΑΤΕΡΨ** < **mā-ter-on*, ラ *mātrum*, ギ *μητέρων*; 複・生 **ΓΟСТҢИ** < **ghost-ei-on*, 次も同系 ラ *hostium* 「敵達の」 < **ghost-i-on*; 複・生 **ΒΛΨΚΨ** < **ul̥kʷ-o-n*, 次も同系 ギ *λύκων*, 古イ *vřkān-ām* 「狼達の」)。古代インド語やギリシャ語の形は、複数属格語尾 *-on* が、子音幹曲用から *o* 語幹に引き移され、それが先行幹母音 *o* 及び *e* と融合して、*ō* となったことを示している(次例参照、ギ 複・属 *λύκων* < **ul̥kʷ-o-on*) ; 同様にして、複数主格語尾 *-es* も、子音幹曲用から *o* 語幹に移されたのである — 古イ 複・主 *vřkāḥ* = ゴ *wulfos* 「狼達」 < **ul̥kʷ-o-es* を参照 (§. 37 参照)。古代インド語の複数属格 *vřkānām* 「狼達の」は、重複の格指標 *ān* < *-o-on* を含んでいるが、複数主格 *vřkāsaḥ* 「狼達」が、重複格指標 *es* を含んでいるのと同じである。このようにして得られた複数属格語尾 *-ōn* は、その後、全ての複数属格形に一般化したのである — ギ 複・属 *μητέρων* 「母達の」, *οἰῶν* < **óFιῶν* 「羊達の」, *πήχεων* < **πήχεFων* 「肘の、前腕の」参照。スラヴ祖語は、この逆の現象 — 複数生格語尾の、全曲用の生格語尾への一般化 — について証明している。それ故、ウムブリア方言に対応形を持つ (§. 21 参照)、**ΜΑΤΕΡΨ** < **mā-ter-on*, **СҮНОВΨ** < **sūn-eu-on*, **ΓΟСТҢИ** < **ghost-ei-on* 型の規則的な複数生格形と並行して、複・生 **ΒΛΨΚΨ** < **ul̥kʷ-o-n* (ギ 複・属 *λύκων* < **ul̥kʷ-o-on* に対して) の様な多数の古い形も、複・生 **ЖЕНΨ**

< *g^wen-on (ギ 複・属 χ ω ρ ō ν 「国々の」 — 語尾 -ō ν
 < -ā-on の語尾を持つ; cf. 単・主 χ ὠ ρ ᾱ 「国、地方」 — に
 対して) のような新しい形も存在したのである。

一般に、始原始的な複数属格語尾と単数対格語尾は、-m であるとされて
 いる。この再構は、古代インド語とラテン語の文献に基づくものであって、
 そこでは、これらの格形の語末子音は、常に、m である — 例、ラ
 単・対 lupum, 複・属 lupōrum (これは、複・生 ВЛЫКЪ や ギ
 複・属 λ ὠ κ ω ν と同系の、より古い形 *lupum < *uļk^w-o-n あ
 るいは *uļk^w-ō-n に取って代わったもの); ラテン語の語尾 -ōrum
 は、語尾 -ōs-on の継承である — cf. 始原始的な二つの所有語尾 -es
 (-os) と -on 語尾の合形成である 複・属 eō-rum 「彼らの」 <
 *ei-o-os-on。さらに、次例参照、古イ 単・対 vřkam < *uļk^w-o-n,
 複・属 mātṛṇām 「母達の」、この場合、-n 語尾を持つ古い属格形
 *mā-tṛ-n- (ヒッタイト語の単数・複数属格語尾 -n と同じ語尾) が、所
 有語尾 -ōm < -ōn によって補強されたものであり、これは、例えば、
 ギ 複・属 λ ὠ κ ω ν < *uļk^w-o-on に立証される。*mā-tṛ-n と
 *uļk^w-o-on > *uļk^w-ōn における所有語尾の結合から、合成的複数属
 格語尾 nōn > nām が現れたのであり、この語尾は、古代インド語の
 ほとんど全ての曲用で一般化したのである — 例、複・属 vřkanām 「狼
 達の」、āvinām 「羊達の」、sū-nū-nām 「息子達の」、ただし、複・属
 padām 「足の」(ギ 複・属 π ο δ ὠ ν, ラ 複・属 pedum と同系)。

単数対格語尾と共通の起源を持つ、複数属格の始原始的な語尾は、-m で
 はなくて、-n である。印欧語の大部分では、語末の位置にあって、例え
 ば、ギリシャ語では n 調音が一般化し、ラテン語や古代インド語では、
 文字上 m を以て示される弱化した鼻音調音が一般化したように、二つの
 鼻子音 m と n は、弱化するか、あるいは発音面で均等化した。一連
 のラテン文法家達 (クインティリアヌス、大ロンゴス、プリスキアヌス) の
 伝えるところから明らかなように、語末では m は発音されず、ある弱化

鼻子音の曖昧調音であった。後続語が母音で始まる場合は、ウェリウス・フラクスは、M を書かず、M の前半分を思わせるような特別な文字記号を書き、また、同位置で、カトー・ケーソリウスは、回転した M 、すなわち Σ を利用したが、クインティリアヌスは、これを E と見なしている³⁰。一連の古いラテンの碑文では、語末の M が抜け落ち、ある箇所では N が記されている。古代インド語の語末子音の m も、似たような曖昧調音であった。その複数属格と単数対格の始原的な鼻音指標は、m ではなくて、n であった。このことについては、ヒッタイト語の単数・複数属格語尾 -n や古代インド語の所有語尾 -nām 及び -ān-ām (複・属 mātṛnām 「母達の」、vṛkānām 「狼達の」) 以外にも、次の諸事実が証明している：

1. スラヴ祖語 -iā 語幹名詞の単数生格語尾 -A。単・生 БОУРА, АΟΥША, ЗЕМЛА を参照、この場合の幹母音 ā は、始原的な不活性(無生)類名詞の集合性語尾 -ā < -e-H₂ (§. 10 参照) と同系である。単数生格語尾 -A は、語尾 -iāns の継承であり、この s は、古い活性(有生)類から借用した所有の補足付加指標である — cf. 単・生 МАТЕРЕ < *mā-ter-es, 単・生 НОШТИ < *nokʷt-ej-s。これに対応する ā 語幹の語尾は、-āns である — 単・生 ЖЕНЬ < *gʷen-ā-n-s 参照 (-āns > Ъ 及び -iāns > A の推移については、§. 2 参照)。ā (iā) 語幹名詞における所有指標 n は、他の印欧諸語に立証される所有指標 s (次例参照、リ 単・生 rañkos 「手の」、ギ 単・生 χῶρ ᾱς 「国の」、ゴ 単・生 gibos 「贈り物の」) よりも自然である。始原的な不活性(無生)類名詞の集合性語尾 -ā (-eH₂) ないしは -a (H₂) に関係する ā 語幹名詞 — 例、複・主 ИГА < *iug-e-H₂ (ギ 複・主・対 ζυγά, ラ iu-ga 「くびき」 < *iug-H₂ と同系) — は、-s 語尾所有形の発展の基となるべき -s 語尾の活性(後の主格)を持たなかったのである — 次例参照、単・主 ЖЕНА < *gʷen-ā < *gʷen-e-H₂, cf. 古イ 単・主 ásvā = ラ equa

「雌馬」, ギ $\chi \acute{\omega} \rho \acute{\alpha}$ 「国、地方」, リ ranka = ρᾱκα, ゴ giba 「贈り物」。古代インド語の単数属格 āsvāyāḥ 「雌馬の」型の、-s 語尾を含む形は、明らかに、二次的なものである — ここでは、古い所有指標は、ya < io であり（これに起源については、§. 27 参照）、これは、古イ 単・属 vṛkasya (= ギ λύκοιο — ホメロスの言語) 「狼の」 < *uḷkʷ-o-s-i-o (io でもって拡張した、所有的意味の古い活格形) や **пророчъ** < *pro-rok-i-o 型の物主形容詞、における io 指標と同一である。

2. 1人称単数人称代名詞生格 **мене** < *me-n-es (この -es は、所有の補足付加指標) の表徴となっている接尾辞 -n-。属格形は、印欧語の曲用の生成過程における最も古い斜格形であった。その他の斜格形、例えば、所格、共同格（具格）、奪格は、今なお状況語副詞の意味を持っていた。それ故に、属格形は、他の斜格の形成基盤にもなった — 例、古イ 男・単・与 tasmai 「それに、彼に」 < *to-s-mo-ei, 奪 tasmāt 「彼から、それから」 < *to-s-mo-ad, 処 tāsmin 「彼の所で」 < *to-s-m-i-n (この *tos は、古い所有形であり、m は古い中間指標 [§. 30 参照] である)。Cf. ギ 単・属 τίνος 「誰の」 < *kʷ-i-n-os, 与 τίνι < *kʷ-i-n-i, 対 τίνι < *kʷ-i-n-ŋ (この *kʷ-i-n は、古い対格形であり、この形は所有の意味 [genitīvus objectī の意味] も持っていた)。1人称単数人称代名詞形の場合にも、*men- の語幹 (n は古い所有指標) が、与格、造格、所格形に一般化したのである — 与 **мѣнѣ**, 対 **мѣноу**, 所 **мѣнѣ** を参照。

3. 印欧語の中性不規則 (heteroclitē) 名詞の斜格の表徴であった接尾辞 -n-。次例参照、古イ 単・主 áhar, 属 áh-n-as 「日、昼」, 単・主 údhar, 属 údh-n-as 「(動物の) 乳房」(cf. 単・主 ギ οὐθαρ, 属 οὐθατος 「(動物の) 乳房」 < *oudh-ŋ-t-os), 単・主 yákr t, 属 yak-n-ás 「肝臓」(cf. ギ 単・主 ἥπαρ, 属 ἥπατος 「肝臓」 < *iēkʷ-ŋ-t-os), 単・主 ásrk, 属 as-n-ás 「血」, ギ 単・

主 $\upsilon\delta\omega\rho$, 属 $\upsilon\delta\alpha\tau\omicron\varsigma$ 「水」 < *ud-n-t-os。n 指標は、本来、所有指標であり、これを使って属格形が形成された。後に、古い属格語幹が、曲用の全斜格に一般化した（第2項参照）。この不規則名詞は、始原的な不活性（無生）類名詞の継承であって、-s 語尾の活格を持たず、したがって、同語尾の始原的属格形も持たない。古代インド語の yak-n-ās やギリシャ語の $\eta\pi\alpha\tau\omicron\varsigma$ 「肝臓の」は、後になって、別の曲用の影響で付け加えられたものである。

4. リトアニア語の人称及び再帰代名詞単数生格形における n 指標 — manęs < *mo-n-en-s 「私の」, tavęs 「君の」, savęs 「自分の」。ここに挙げた形は、新しく形成されたものであるが、古い所有指標 n を包摂しており、これに、他の曲用の影響によって、一般的な属格語尾 -s が付け加えられたのである。

5. いくつかのゲルマン諸語の ā 語幹名詞の複数属格形における n 指標 — 古高ド gebono, アングロ・サクソン gebono 「贈り物の」 < *ghebh-ā-n-ōn 参照。語尾の -ānōn は、ā 語幹名詞の古い所有語尾 -ā-n から得られたもので、それが、o 語幹から借用した所有指標 ōn によって補強されたものである。古代インド語の複数属格語尾 -nām 及び -ānām の起源を参照。

この古い所有指標 n と同系なのが、ГРАДИНА < ГРАДЪ, ИСТИНА < ИСТЪ, ОТЪЧИНА < ОТЬЦЪ, ХРАМИНА < ХРАМЪ のような派生名詞における接尾辞 -n- である。Cf. ラ rēgīna 「女王」（逐語的には、「王に属する、王に関係する（女）」の意, cf. ラ 単・主 rēx, 属 rēgis, 古イ rāj- 「王」; rēgīna は、*rēg'-i-H₂-n- に由来する。ī < i-H₂ の起源と意味については、§. 27 参照。*rēg'-n-i-H₂- に由来する 古イ rājñī 「女王」における接尾辞 -ī- と -n- の置き換えも参照⁽¹⁶⁾。これと同類の接尾辞 -in- は、ВЪРЪНЪ < ВЪРА, ВЪТЪРЪНЪ < ВЪТРЪ, НЕБЕСЪНЪ < *nebh-es- (単・生 НЕБЕСЕ の語幹), ЖИТЪНЪ < ЖИТО のような関係形容詞に立証される。こ

これらの形容詞にあっては、i 指標は **ГРДАННА** やラテン語 *rēgina* 「女王」型の女性名詞の場合のような、一括多数性指標 H_2 による拡張を受けない。

有生類名詞の対格 (ラ 単・対 *lupum*, ギ $\lambda \acute{\upsilon} \kappa \omicron \nu$, 古イ *vřkam*, **ВЛЫКЪ** < $*u\lambda k^w-o-n$) を作り出す基になる、古い方向指示 (遠心) 格の語尾も、-n であって、-m ではない。このことについては、ゴート語 *wulfans* < $*u\lambda k^w-o-n-s$ 型の複数対格形が証明している — cf. 古プ 複・対 *deiwans* 「神々を」、クレタ 複・対 $\nu \acute{\omicron} \mu \omicron \nu \varsigma$ 「諸法を」。これは、 $*u\lambda k^w-o-n$ 型の古い方向指示形に由来するものであり、それは、最初は、単数、複数両方の意味を持っていた。後に、これに多数性 (複数) 指標 s (この起源については、§. 37 参照) が付け加えられたのである。複数対格語尾 -ns は、いくつかの印欧諸語 (例えば、*wulfans* 「狼達を」型) の複数対格形が存するゴート語) において、 s 前の m が、 n に変わるのではないから、-ms から引き出してくることはできない。

スラヴ祖語とバルト祖語の $\bar{a}$ 語幹単数対格語尾 - $\bar{a}n$ は、幹母音 $\bar{a}$ と o 語幹の古い単数対格語尾 - $o-n$ (単・対 **ВЛЫКЪ** = リ *vilka* < $*u\lambda k^w-o-n$ 参照) との融合から得られたものである。このことについては、移動アクセント・パラダイムを持つ $\bar{a}$ 語幹曲用の名詞が証明している。すなわち、単数主格では、幹母音の鋭 (acute) 音調によって、アクセント (力点) は、幹母音 - $\bar{a}$ - < - $e-H_2$ - の上に引きつけられるが、単数対格では、- $\bar{a}-on$ > - $\bar{a}n$ の縮約によって、語尾 - $\bar{a}n$ が曲 (circumflex) 音調を受けるために、アクセント (力点) は語根の上に留まるのである。次例参照、単・主 **БРДАДА** (ロ *борода*, セ *брадă*, リ *barzda* 「顎ひげ」) に対して、単・対 **БРДАЖ** (ロ *бѡроду*, セ *брăду*, リ *bařzda*) ; **РЖКА** (ロ *рука*, セ *рукă*, リ *ranka*) に対して、**РЖКЖ** (ロ *рѣку*, セ *рêку*, リ *raĩka*) ; **ГЛАВА** (ロ *голова*, セ *главă*, リ *galvā* 「頭」) に対して、

ГЛАВЖ (г ò л о в у, セ г л ā в у, リ gálva) ; **ЗИМА** (□ з и
 ма, セ з и м ā, リ žiemā 「冬」) に対して、**ЗИМЖ** (□ з и̇ м у,
 セ з и̇ м у, リ žiēmā) ; **НОГА** (□ н о г ā, セ н о г ā, リ
 naga 「ひづめ」) に対して、**НОГЖ** (□ н ò г у, セ н ò г у, リ nāg
 ā)。ギリシャ語の、τ ῆς στρατιᾶς 「軍隊の」 型の単数属格
 形の曲アクセントは、語尾 -āς (- ῆς)、が、幹母音 ā と子音幹曲用
 から借用した単数属格語尾 -es あるいは -os (単・主 κ ó λ α ξ, 属
 κ ó λ α κ - ος 「おべっか使い」, 単・主 **КАМЫ**, 生 **КАМЕНЕ** <
 *kā-men-es 参照) との融合から得られたものである、ことを示している。
 例、ギ 単・属 τ ῆς (ドーリス τ āς) は、*tā-os あるいは *t
 ā-es から出たもので、この語幹の *tā- は、*t-e-H₂ の継承である (§.
 10, 24 参照)。ギリシャ語の ā 語幹の全ての複数属格形の曲アクセ
 ント(τ ῶν χωρῶν 「国々の」) は、ā 語幹名詞の語尾の -ῶν が、
 幹母音 ā と属格語尾 -ōn との縮約によるものであることを示している
 (χωρῶν < *χωρ-ā-ων)。これらの事実は、ā 語幹名詞の曲
 用は、より遅い時期に発生したものであることを証明しているのである。

§. 39 古代ブルガリア語の中性の起源

活格統語構造の、主格構造への再編以後、活性（有生）類名詞の古い -s 語尾活格は、主格としての再解釈を受け、一方、活性類名詞の古い絶対格（純粹語幹）は、-n 語尾の方向指示格に置換され、それは、対格として再解釈を受けた。対格の方向指示的な意義は、依然として、ラ *Rōmam tōta Italia convenit* 「イタリア中が、ローマに集まった」、ギリ *κνίση δ' οὐρανὸν ἴκε* 「そして、生け贄を燃やす煙は、天に達した」、**ΠΡΗΛΕ ΧΣЪ НЕБЕСЬСКЪА АВЪРΗ**（キリストは、天の扉に着いた）（古代ブルガリア語原本の比較的遅い時期の写し）のような文例に現れている。

活格は、不活性（無生）類名詞には存在せず、その絶対格（純粹語幹）は、活格構造文では、文法的客体の役割を、また不活格構造文では、文法的主体の役割を果たした。換言すれば、不活性類名詞にあっては、客体の形（活格構造文内の）と主体の形（不活格構造文内の）が一致していたのである。このことの結果が、始原的な不活性類の継承である中性名詞の主・対格形の一致である — 主・対 **ИГО**, ラ *iugum*, ギ *ζυγόν*, 古イ *yugám*, ヒットイト *jugan (iukan)* 「くびき」を参照。活格統語構造では、活格構造文での活性（有生）類名詞の客体の格（＝絶対格、純粹語幹）は、不活格構造文での不活性（無生）類名詞の主体の格（＝絶対格、純粹語幹）と一致した。また一方、不活格構造文での不活性類名詞の主体の格は、活格構造文での同名詞類の客体の格の職能も務めたのである。古い活格構造文の活性類名詞の絶対格が、新しい主格構造文にあって、-n 語尾対格によって置換されて以後、古い不活性類の継承である中性名詞の一部には、その主・客体の形を有生類名詞の新しい客体の形に合わせたものもある。何れの格の形も、元々、活格統語構造における絶対格、すなわち、純粹語幹であるという点での同等性を持っていたからである。

この均等化現象に関わったのは、o 語幹名詞だけであって、しかもこれは、恐らくいくつかの印欧語だけのことであろう — 古イ 男・単・対 $v\check{r}kam = \text{ギ } \lambda \acute{o} \kappa o \nu$, ラ $lupum < *ul\check{k}^w-o-n$ 「狼を」と 古イ 中・単・主・対 $yugám = \text{ギ } \xi \upsilon \gamma \acute{o} \nu$, ラ $iugum$ 「くびきを」における共通語尾を参照。他の語幹の名詞、例えば、u 語幹名詞の場合は、このような均等化は発生していない — -n 語尾は、男性名詞単数対格形を表徴したにすぎず、中性名詞単数主・対格の特徴は表示していない：例えば、古イ 男・単・対 $sūnám = \text{リ } sún\eta$ 「息子を」に対して、古イ 中・単・主・対 $mádh\eta$ 「蜂蜜を」 = ギ $\mu \acute{\epsilon} \theta \upsilon$ 「(純精)酒を」。古代ブルガリア語の 単・主・対 HFO 型の -o 語尾中性名詞は、絶対格（純粹語幹 -o）の継承であって、例えば、単・主・対 $\text{CLOB} \circ < *k'leu-os$ あるいは $\text{BPTMA} < *bher-men$ が、絶対格（純粹 -es、-men 語幹）の継承であるのと同じである。古代ブルガリア語の HFO の形は、古イ 中・単・主・対 $yugám = \text{ギ } \xi \upsilon \gamma \acute{o} \nu$ や ラ $iugum$ 「くびきを」の原形 $*iug-o-n$ から法則的に引き出すことはできない。このような場合には、語尾の -o-n は、 TL になったであろうから（cf. 単・対 $\text{BALKTL} < *ul\check{k}^w-o-n$ ）、ここでは、n は、二次的に付加された指標なのである。

活性類と不活性類名詞に代わることができ、時を経るにしたがって、性の特徴を獲得した代名詞の曲用は、名詞曲用をモデルにして、生成されて行った。例えば、絶対格の職能を務めた代名詞語幹 $*t-o-$ は（活格の役割を果たしたのは、補充法語幹 $*s-o$ である、これについては、§. 33 参照）、方向指示指標 n の助けを借りて対格形を作った — cf. 男・対 $\text{TL} = \text{ギ } \tau \acute{o} \nu$, ゴ $thana$, 古イ $tám$, リ $tā$ 「これを、彼を」 $< *t-o-n$ 。属格は、名詞曲用から借用した s (so) 指標を以て形成された：いくつかの言語では、この指標は、所有指標 i（この意義については、§. 27 参照）によって、補強を受けている。Cf. 古イ 男・単・属 $tá sya = \text{ギ } \tau o \acute{\iota} o$ (ホメロスの言語) $< *t-o-s-i-o$, ゴ $this <$

*t-e-so 。 **ТОГО** 及び **ЕГО** 型の男性・中性属格形は、go の指標の助けを借りて作られたが、この本来の意義は完全には明かではない（この指標の正常階梯 **ЖЕ** < *ge は、前接的な [enclitic] 接続詞である）。ゲルマン系では、g (go) 指標の助けを借りて、人称、再帰代名詞の単数対格形が作られている — 例、ゴ 1・単・対 mik < *me-g-「私を」、sik < *se-g-「自分を」。これは、対格と属格 (genitīvus objectī) の意義が元々近似性を持っていたことを確認させるものである。

指示代名詞中性主・対格の役割は、純粹語幹（古い絶対格）が、果たすはずであった。ところが、極めて早期に、*t-o 型の純粹語幹は、移動指標

d による補強を受けた (§. 29 参照)。この指標は、この代名詞が、不活性類名詞に属するものであって、それは、行為の真の主体や客体にはなり得ないものであり、単に行為の起点ないしは終点であり得るにすぎないことを強調したのである。このようにして、絶対格（純粹語幹）*t-o と後にその代替を務めた対格 *t-o-n は、活格構造文の活性（有生）の客体を表し、一方、拡張語幹 *t-o-d は、不活格構造文の不活性（無生）の主体を表したのである。起源的に疑似主体と疑似客体の形である *t-o-d（この語尾は、奪格語尾 -d と同一のもの、§. 29 参照）の継承が、中性単数主・対格 **ТО** = 古イ tat, ギ τό < *τοδ, ゴ thata 「それ」である — cf. ラ 中・単・主・対 id「それ」及び quid「何」

における語尾 -d 。さらに次例参照、古ラ 対 mēd「私を」、tēd「君を」、sēd「自分を」及び 奪 mēd「私から」、tēd「君から」、sēd

「自分から」、恐らく、これらの形は、*m-e-ad, *t-e-ad, *s-e-ad から出たものであろう； cf. 古イ 奪 mād「私から」、tvād「君から」、これらは、*m-e-d ないしは *m-o-d 等から得られたものである。リュキア語²⁷では、移動語尾 -d は、代名詞曲用から名詞曲用へ移され、o 語幹の中性主・対格形の表徴となった。代名詞曲用の影響の下に作られた名詞形は、スラヴ祖語にも存在したかもしれないが（中・主・対 **НГО** は、*iug-o-d から引き出すこともできる）、このような仮定が、古代ブルガリ

ア語の *o* 語幹中性単数主・対格形の説明に必要なというのではない。この形は、恐らく、古い絶対格（純粹語幹）の直接的な継承であろう。**m-e-n*, **t-e-n*, **s-e-n* から得られた、古代ブルガリア語の対格形 **МА**, **ТА**, **СА** は、かつて、絶対格の機能を持ち、後には対格の機能を持つ（cf. ギ 対 *μέ* 「私を」, ドーリス *τε* 「君を」）ことになった、スラヴ祖語代名詞の純粹語幹 **me*, **te*, **se* が移動指標 *d* の代わりに、方向指示指標 *n* による補強を受けたことを示している。古代インド語の対格 *mām* は、**me-on* あるいは **me-en* に由来するものである。

始原的な活格統語構造が、主格統語構造へ再編され、始原的な活格が主格に変わると、活格指標 *s*（すなわち、始原的な代名詞語根 **s-*）は、有生類名詞の主格指標に転じた。いくつかの場合、無生類名詞（中性発達の基となった）の指標となったのは、不活格指標（すなわち、指示代名詞の絶対格 **t-o* の基になった始原的な代名詞語根 **t-*）である。次例参照、古イ 中・主・対 *yákr̥t*, 属 *yaknás* 「肝臓」, *sákr̥t*, 属 *sáknas* 「牛の排便」, ギ 中・単・主・対 *δόρυ*, 属 *δόρατος* < **dorū-t-os* 「槍」, *ρόνυ*, *ρόνατος* 「膝」, *οὔθαρ*, *οὔθατος* 「(動物の) 乳房」, *οὔς*, *ώτός* 「耳」, *σῶμα*, *σώματος* 「身体、物体」, *μέλι*, *μέλιτος* 「蜂蜜」。恐らく、**БРѢМА**, **СѢМА**, **БРѢМА**, **ВѢМА** (ギ *οὔθαρ* と同系), **ПЛѢМА**, **ЧИСМА**, **ПИСМА**

のような古代ブルガリア語の中性 *men* 語幹名詞は、トルベツコイ (N. Trubetzkoy, 1922) が推定しているように、かつての単数主・対格形に *t* 指標を持っていた可能性がある。すなわち、**БРѢМА** は、**bher-men-t* (*t* は、始原的な不活格指標) の継承かも知れないのである。ただし、次例参照、古イ 中・主・単 *bhárma*, ギ *φέρμα* 「重荷、積み荷」(**БРѢМА** と同系) < **bher-m̥*, ギ *γνώμα* 「しるし」(**ЗНАМА** と同系) < **g'nō-m̥*, ラ *sēmen* 「種」(**СѢМА** と同系) < **sē-m̥*。一方、古イ *nāmā* 「名」や ゴ *namo* 「名」(**ИМА** と同系) のような中性単数主・対格形は、**no-mon-t* あるいは **no-men-t* から、

t の脱落以後の o あるいは e を延長して、引き出すことができよう。
 Cf. リ、šelmũð (中性に代えて、男性)「屋根の棟木」 — この -mu
 ð の語尾は、おそらく、-mon-t > -mōn の継承であろう (リ šelmũ
 ð は、**сѣлмѣ**「丸太、梁材」及び ギ σέλμα, 属 σέλματος
 «「漕ぎ手が座る太い横板、腰掛け」 < *k'sel-mŋ-t- と同系)。中性の
 men 語幹に対して t 指標が付加されたことを間接的に示しているのが、
 ラテン語の次のような対応形である — augmen : augmentum 「増加」,
 fundāmen : fundāmentum 「基礎、土台」, sēmen 「種子」(**сѣмѣ** と同
 系) : sēmentis 「播種」, strāmen : strāmentum 「藁、藁床」(ギ σ
 τρώμα, 属 στρώματος「藁床」 と同系)。

§. 40 古代ブルガリア語の動詞アスペクトの起源

活格活用動詞の完了体と不完了体への二極文化は、始原的には、一括多数性指標 H_2 の存否に規定されるものであった。この指標を介して、発話時以前に完遂、完了、終止した行為を表す動詞語幹が作られたのである (§. 10 参照)。 H_2 指標を持つ活格活用動詞からは、次第に、アオリスト (ми на ло свършено време [完了過去時制] — aorist) 形が発達して来るのであり — 例、1・単 **БЪРАХЪ** < *bher-e- H_2 -s-, **НЕСОХЪ** < *nek'- H_2 -s-、また、 H_2 指標を持たない活格活用動詞からは、非完了 (infectum) 活用の形が発生してくるのである (§. 14 参照)。この非完了活用からは、後に、現在時制の形 (例、3・単 **БЕР-Е-ТЪ**, **НЕС-Е-ТЪ**) と始原的なインパーフェクト (未完了過去) が得られることになり、それは、さらに後に、単純アオリスト (例、3・単 **НЕСЕ** < *nek'-e-t) として再解釈を受けることになる。始原的な不活格活用からは完了 (パーフェクト) 活用が発生した (§. 18 参照) のであるが、これの基本的な意義が (ただし、最古の意義ではないが)、過去性 (претеритност) であることから、時を経るにしたがって、完了活用動詞の一部も、一括多数性指標 H_2 を獲得したのである。これは、例えば、次のようなギリシャ語完了形に現れている — 例、1・単 $\lambda \acute{\epsilon} \lambda \upsilon \kappa \alpha$ 「解いた、ほどいた」、 $\pi \epsilon \phi \acute{\upsilon} \tau \epsilon \upsilon \kappa \alpha$ 「植えた」、 $\eta \chi \alpha$ 「導いた」 < * H_2 e- H_2 eg'- H_2 -, $\tau \acute{\epsilon} \tau \rho \omicron \phi \alpha$ 「向きを変えた、回した」 < *te-trop- H_2 (§. 13 参照)。

以上により、不完了体は、初めの内は、非完了的動詞幹 e 語幹に等しく、そこから、古代ブルガリア語の現在時制と単純アオリストが発生して来るのであるが、完了体は、一括多数性指標 H_2 付きの動詞幹に等しく、そこからは、古代ブリガリア語のシグマ・アオリスト形 (1・単 **БЪРАХЪ** < *bher-e- H_2 -s-, **ПАСЪ** < *pen- H_2 -s-, 3・単 **НЕСОХЪ** < *nek'- H_2 -s-) やギリシャ語完了形の一部 (例、1・単 $\lambda \acute{\epsilon} \lambda \upsilon \kappa \alpha$ 「解いた、

ほどいた」, $\eta\chi\alpha$ 「導いた」 < $*H_2e-H_2eg'-H_2$ ）、アオリスト形（例、
 $\epsilon\theta\eta\kappa\alpha$ 「置いた、据えた」 < $*dheH_1-H_2$ ）が発生して来るのである。
 後に、非完了活用は、分化して、一つは、過程的な非過去に（例、3・単・
 現 **БЕРЕТЪ, НЕСЕТЪ**, ギ $\phi\acute{\epsilon}\rho\epsilon\iota$ 「運ぶ」）、今一つは、過程的
 な過去（例、スラ祖 3・単・未完 $*neset$ > アオ **НЕСЕ**, ギ
 3・単・未完 $\epsilon-\phi\epsilon\rho\epsilon$ 「運んでいた」）に変わるのである（§. 19 参
 照）。スラヴ祖語では、ギリシャ語とは違って、過程的な過去（古いインパー
 フェクト [未完了過去]）は、その過去の意味を失い、アオリストに転化
 するのである。それ故に、始原的な不完了体の直接的な継承は、スラヴ祖語
 の接頭辞の付かない現在幹 e 語幹でけである — cf. 3・単・現 **БЕ
 РЕТЪ, БЪЕТЪ** < $*bhej-e-$, **НЕСЕТЪ, ЗОВЕТЪ, БОДЕТЪ, ВЕД
 ЕТЪ, ВЕЗЕТЪ** 「輸送する」, **ВЛАДЕТЪ, АЪЕТЪ** < $*dheH_1-e-$, **КЛ
 ЪНЕТЪ, ВЛЪЧЕТЪ** < $*uelk'-e-$, **МОЖЕТЪ, ГНЕТЕТЪ, МЪРЕТЪ,
 ЖЕНЕТЪ, ЖИВЕТЪ, БЛЮДЕТЪ** < $*bheudh-e-$, **ЖЪРЕТЪ, ВЪЕ
 ТЪ** < $*uej-e-$, **ЖЪДЕТЪ, ЧЪТЕТЪ, КЛАДЕТЪ, ТЕПЕТЪ, КРЪЕ
 ТЪ, РАСТЕТЪ, ИДЕТЪ, ЖЕЖЕТЪ** ; **ПО-ЧЪЕТЪ** < $*kej-e-$, cf.
 ギ $\kappa\epsilon\acute{\iota}\mu\alpha\iota$ 「横たわっている」, 集約的対応形 **ЧДЕТЪ** < $*k\acute{e}i$
 $-e-$ も参照。例外は、完了体の **РЕЧЕТЪ, ПАДЕТЪ** < $*p\acute{o}d-e-$ （語根
 母音の延長対応階梯を伴う、このような階梯は、始原的な過去活用に見られ
 るものである — §. 10 参照）, **ИМЕТЪ** 「取る、つかむ」 < $*b$
 $m-e-$ （疑似他動詞 [始原的な不活格動詞] **ИМѢТИ** と同系、§. 18 参
 照）である。

始原的な、動詞アスペクトの分化に、最初に重大な変化が始まったのは、
 起動的 (inchoative) 接尾辞 $-ne-$ を持つ非過去語幹や（3・単・現 **СТ
 АНЕТЪ, КОСНЕТЪ, АВНГНЕТЪ, ГЪБНЕТЪ** 参照）、また同じく、
 起動的接中辞 (infix) n を持つ非過去語幹（次例参照、3・単・現 **С
 АДЕТЪ, ОБ-РАШТЕТЪ, ВЪЗ-ЛАЖЕТЪ, БЖДЕТЪ** に対して、3・
 単・アオ **СЪАЕ, ОБ-РЪТЕ, ВЪЗ-ЛЕЖЕ, БЪСТЪ** ; cf. 3・単・

現 **ПРИ-САЖЕТЪ**「手を伸ばす」に対して、リ 不 *sègti*「締める、留める」、**И-САКНЕТЪ**「止む、終わる」に対して、リ 不 *sèkti*「減少する、衰える、尽きる、なくなる」が、完了体に算入されるに至ったときである。接中辞 *n* の起源については、§. 14 及び §. 17 第2項を参照。起動的接尾辞（接中辞）*n* の起源は、遠心・方向指示指標 *n* (§. 38 参照) と同一である。非完了活用を持つ動詞幹 *e* 語幹においては、遠心・方向指示指標 *n* は、前進的展開行為 (*проградиентно действие* < ラ *gradior*「歩行する、前進する」) を表したのであり、その行為の起点を現在とし、したがって当然未来に向けられた行為を表したのである。それ故に、起動接尾辞（接中辞）*n* を持つ非完了動詞形は、スラヴ祖語の時期に、未来時制の意義を持って使われ始めるのである。

スラヴ祖語の *ne* 語幹も、また接中辞 *n* を持つ語幹も、原則的には、自動詞であって (§. 18 参照)、語根母音の延長階梯を含むことが多いが (次例参照、3・単・現 **ПО-БѢГНЕТЪ** に対して、ギ 1・単・現 *φ é β ο μ α ι*「逃れる、驚いて逃げる」< **bhegʷ-*、**ПО-ГЪВНЕТЪ** に対して、**ГЪВНЕТЪ**「曲げる」、**ТЪКНЕТЪ** に対して、**ТЪЧЕТЪ**、**ГАСНЕТЪ** < **gʷōs-* に対して、ギ 1・単・現 *σ β é ν ν ū μ ι* (消す) < **sgʷes-nu-*、**ПО-СТЪДАНЕТЪ**)、このことは、これらが古い不活格活用と関連性を持っていることを示している。ゴート語の起動動詞、例えば、不 *and-bundan*「解ける、ほどける、自由になる」、*gahailnan*「健康になる、全快する」、*mikilnan*「大きくなる、増える」のような動詞も、自動詞的な意義を持っており、これらは、新しい状態への移行を示すもので、ウルフイーラ (Wulfila)* の新約聖書訳では、しばしば、ギリシャ語中動相形に相当するものである。ゴート語の *-ne-* 接尾辞を持つ起動動詞の過去形が、一括多数性指標 *H₂* の始原的な存在について証明している (例、1・単・現 *fullna*「一杯になる」< **p ʔ ln-no-* に対して、1・単・過 *fullnoda* < **p ʔ ln-ne-H₂*) のに対して、スラヴ祖語の現在幹 *ne*

語幹動詞の過去形は、補充法的非完了幹 *e* 語幹から作られるか (例、3・単・現 **ДВИГНЕТЪ** に対して、3・単・アオ **ДВИЖЕ**, cf. ギリシア語 1・単・現 $\delta\epsilon\lambda\kappa\nu\bar{\nu}\mu\iota$ 「こわす、砕く」に対して、1・単・アオ $\xi\alpha\xi\alpha$)、あるいは、接尾辞 *u* を介して作られており (例、3・単・アオ **ДΟΥНЖ** < スラ祖 **dou-no-n-* < **dhou-no-u-*, cf. §. 17 第2項)、これは、当初は、行為が、視界外でなされたものであることを表し (§. 25 参照)、過去時制の指標の一つに容易に転化し得る可能性を持ったのである — cf. 能過分・女・単・主 **НЕСЪШИ** < **nek'-u-s* 及び ラテン語 完・1・単 *doc-u-i* 「教えた」、*audi-v-i* 「聴いた」。ギリシア語の接尾辞 *-nu-* (*-neu-* のゼロ階梯) は、過去指標として独立していない。この接尾辞の延長階梯 *-nū-* は、単数形と複数形を区別した : 1・単・現 $\delta\epsilon\lambda\kappa\nu\bar{\nu}\mu\iota$ 「示す」、2 $\delta\epsilon\lambda\kappa\nu\bar{\nu}\varsigma$, 3 $\delta\epsilon\lambda\kappa\nu\bar{\nu}\sigma\iota$ に対して、1. 複 $\delta\epsilon\lambda\kappa\nu\nu\mu\epsilon\nu$, 2 $\delta\epsilon\lambda\kappa\nu\nu\tau\epsilon$, 3 $\delta\epsilon\lambda\kappa\nu\bar{\nu}\alpha\sigma\iota$; cf. 1・単・現 $\phi\eta\mu\iota$ 「言う、話す」、2 $\phi\eta\varsigma$, 3 $\phi\eta\sigma\iota$ に対して、1・複 $\phi\alpha\mu\acute{\epsilon}\nu$, 2 $\phi\alpha\tau\acute{\epsilon}$, 3 $\phi\alpha\sigma\iota$ 、§. 35 も参照。

いくつかの完了体第一次動詞、また現在幹に接尾辞 *-ne-* を持つ起動動詞に対応するのが、接尾辞 *-i-* を持つ不完了体派生動詞の現在形である。この *-i-* は、スラヴ祖語の反復 (iterative) 動詞の形成にも与るものである (§. 17 第5項参照)。派生動詞のいくつかは、語根母音に別の階梯を持つか、あるいはまた、別の原語根を持つ — 例、不完・1・単・現 **ДАЖ**, 2 **ДАЕШИ** < **deH₃-i-e-* と 完・1・単・現 **ДАМЪ** < **deH₃-dH₃-mi* (完了 [パーフェクト] 型の始原的重複語幹で、後に、完了体動詞に算入された) ; **ВЪ-СТАЖ**, **ВЪ-СТАЕШИ** < **steH₂-i-e-* と **СТАНЖ**, **СТАНЕШИ** ; **ЕМЛЖ**, **ЕМЛЕШИ** 「取る (ブ *вземам*)」 < **H₁-em-i-e-* と **ИМЖ**, **ИМЕШИ** 「取る (ブ *взема*)」 < **H₁-ьm-e-* ; **ГЪБЛЖ**, **ГЪБЛЕШИ** と **ГЪБНЖ**, **ГЪБНЕШИ** ; **КАПЛЖ**, **КАПЛЕШИ** と **КАНЖ**, **КАНЕШИ** 「滴る」 ; **ДВИЖЖ**, **ДВИЖЕШИ** と **ДВИ**

ГНЖ, ДВИГНЕШИ ; КЛНЧЖ, КЛНЧЕШИ と КЛНКНЖ, КЛНКНЕШИ ; ТАЖЖ, ТАЖЕШИ と ТАГНЖ, ТАГНЕШИ 。これらの動詞のアオリスト語幹は、 eH_2 から得られた接尾辞 **-а-** を含んでいる — **ИМАТИ, ГЪБАТИ, КАПАТИ, ДВИЗАТИ, КЛНЦАТИ, ТАСАТИ, АДАТИ, ВЪСТАТИ** (最後の二形は、二次的な母音間のヨット [j] 化を伴う) を参照。 **ПЛЮЖ, ПЛЮЕШИ**, $< *pieu-i-e-$, 不 **ПЛЪВАТИ** $< *piu-eH_2-$ (**БЪВАТИ** $< *bhū-eH_2-$ と同じように、二次的な **В** を伴う) と **ПЛИНЖ, ПЛИНЕШИ** $< *piū-ne-$ も参照。

合成 (テーマ付加) 接尾辞 **-i-e-** (構成要素 **-ei-** のゼロ階梯と幹母音の **e** 階梯 — **ДАЖ, ДАЕШИ** $< *deH_3-i-e-$ 参照) に代わって、さらによく用いられるのは、テーマを付加しない (単純) 接尾辞 **-ei-** (構成要素 **-ei-** の **e** 階梯と幹母音のゼロ階梯) であり、これを用いて、古代ブルガリア語の使役 (causative) 動詞が作られている (§. 6 第2項, §. 17 第5項参照)。Cf. 1・単・現 **ЛАГЖ, 2 ЛАЖЕШИ** に対して、**ПО-ЛОЖЖ, ПО-ЛОЖИШИ** ; **САДЖ, САДЕШИ** に対して、**НА-САЖАЖ, НА-САДИШИ** ; **СТАНЖ, СТАНЕШИ** $< *steH_2-ne-$ に対して、**СТАВЛАЖ, СТАВИШИ** $< *steH_2-e-i-$ (**СТОЖ, СТОИШИ** $< *stH_2-ei-$, 不 **СТОТИ** $< *stH_2-ē-$ における語根母音のゼロ階梯を参照、cf. **МЪНЖ, МЪНИШИ, МЪНТИ**) ; **БХАЖ, БХАДЕШИ** $< *bhu-n-dh-$ に対して、**БАВЛАЖ, БАВИШИ** $< *bhōu-ei-$; **ГЪБНЖ, ГЪБНЕШИ** に対して、**ГОУБАЖ, ГОУБИШИ** ; **ТАГНЖ, ТАГНЕШИ** に対して、**ТЖЖЖ, ТЖЖИШИ** ; **И-САКНЖ, И-САКНЕШИ** に対して、**И-СЖЧЖ, И-СЖЧИШИ** ; **ПО-ГРАЗНЖ, ПО-ГРАЗНЕШИ** に対して、**ПО-ГРЖЖЖ, ПО-ГРЖЖИШИ** ; **ИС-ЧЕЗНЖ, ИС-ЧЕЗНЕШИ** に対して、**ИС-КАЖЖ, ИС-КАЗИШИ** ; **ГАСНЖ, ГАСНЕШИ** に対して、**ГАШЖ, ГАСИШИ** ; **ВЪС-КРЪСНЖ, ВЪС-КРЪСНЕШИ** $< *krips-$ に対して、**ВЪСКРЪШЖ, ВЪСКРЪСИШИ** $< *kroips-$; **ТОНЖ, ТОНЕШИ** $< *top-ne-$ に対して、**ТОПАЖ, ТОПИШИ** 。いくつかの場合、起動動詞に対応しているの

が、使役動詞なのか、古い接尾辞 *-ei-* の付いた名詞派生動詞なのか、明瞭ではないことがある — 例、**СЪХНѢ**, **СЪХНѢШИ** に対して、**СОУШѢ**, **СОУШѢШИ** ; **МРЪКНѢ**, **МРЪКНѢШИ** に対して、**ПО-МРАЧѢ**, **ПО-МРАЧѢШИ** ; **СВѢНѢ**, **СВѢНѢШИ** 「夜が明ける」 < *k'uit-ne- に対して、**СВѢШТѢ**, **СВѢТѢШИ** 。 §. 17 第5項には、いわゆる *verba causativa* (使役動詞) が、本質的には、第二次的な *verba transitiva* (他動詞) であることを、示した。

次のような、不完了体 *i-e-* 語幹動詞は、起動動詞の対応形を持たない — 1・単・現 **КОЛѢ**, 2 **КОЛЕШИ**, 不 **КЛАТИ** ; **ЖЬНѢ**, **ЖЬНѢШИ**, **ЖАТИ** ; **БОРѢ**, **БОРЕШИ**, **БРАТИ** ; **МЕЛѢ**, **МЕЛЕШИ**, **МАТѢ** **ТИ** ; **ПИШѢ**, **ПИШЕШИ**, **ПЪСАТИ** ; **МАЖѢ**, **МАЖЕШИ**, **МАЗАТИ** ; **КАЖѢ**, **КАЖЕШИ**, **КАЗАТИ** ; **КЖПАѢ**, **КЖПЛЕШИ**, **КЖПАТИ** ; **ИШТѢ**, **ИШТЕШИ**, **ИСКАТИ** ; **ВАЖѢ**, **ВАЖЕШИ**, **ВАЗАТИ** ; **ОРѢ**, **ОРЕШИ**, **ОРАТИ** 。 これらの *i-e-* 語幹の一部 (**БОРѢ**, **ЖЬНѢ**, **ОРѢ**) は、始原的な完了 (不活格) 活用に関連する、かつての非テーマ動詞に起源を持っている。 Cf. 非テーマ動詞完了幹 1・単・現 **ТМЪ**, 2 **ТСИ** ; **АДМЪ**, **АДСИ** ; **ВТМЪ**, **ВТСИ** 。

始原的な、動詞アスペクトの分化に二度目の重大変化が始まったのは、完了体動詞に、接頭辞付きの非完了活用 *e* 語幹動詞が、算入されるに至ったときである — 不完・1・単・現 **ИДѢ**, 2 **ИДЕШИ** に対して、完・1・単・現 **ОТИДѢ**, 2 **ОТИДЕШИ**, **ИЗИДѢ**, **ИЗИДЕШИ**, **ПРИДѢ**, **ПРИДЕШИ**, **СЪНИДѢ**, **СЪНИДЕШИ** 。初めの内は、接頭辞は、状況語的な意味を持った *adverbia* (副詞) であり、それが、次第に、動詞語幹と融合したのである (また、その形容付加的 (*adnominal*) 用法から、前置詞が発生した — **ВЪ** と **ВЪНИДЕТЪ**, **СЪ** と **СЪНИДЕТЪ**, **ПРИ** と **ПРИДЕТЪ**, **ИЗ** と **ИЗИДЕТЪ** を参照 cf. ギリシャ語前置詞と接頭辞 $\epsilon\varsigma$, $\kappa\alpha\tau\acute{\alpha}$, $\acute{\alpha}\pi\acute{o}$, $\acute{\alpha}\nu\acute{\alpha}$ は、副詞 $\epsilon\varsigma\omega$, $\kappa\acute{\alpha}\tau\omega$, $\acute{\alpha}\pi\omega$ - $\theta\epsilon\nu$, $\acute{\alpha}\nu\omega$ に対応している)。この融合の結果として、始原的

な非完了動詞幹からは、verba terminativa [終止相動詞] (すなわち、空間的限界行為の名称) が発生し、それが、完了体に算入され、起動相動詞と同じく、未来の意義で用いられるに至ったのである。

二次的不完了体動詞の現在幹は、接尾辞 $-ā-i-e$ (§. 17 第3項参照) と、また普通は、語根短母音の延長によって、作られた：

a) 起動相動詞から : 完・1・単・現 **АРЪЗНЖ**, 2 **АРЪЗНЕШИ** : 不完・1・単・現 **АРЪЗАЖ**, 2 **АРЪЗАЕШИ** ; **ВЪЗАЪХНЖ**, **ВЪЗАЪХНЕШИ** : **ВЪЗАЪХАЖ**, **ВЪЗАЪХАЕШИ** ; **БЖАЖ**, **БЖАЕШИ** < *bhu-n-dh-: **БЪВАЖ**, **БЪВАЕШИ** < *bhū-eH₂。

b) 接頭辞によって作られる二次的完了体動詞から : 不完・1・単・現 **ТЕКЖ**, 2 **ТЕЧЕШИ** : 完・1・単・現 **МИМОТЕКЖ**, 2 **МИМОТЕЧЕШИ** : 1・単・現 **МИМОТЪКАЖ**, 2 **МИМОТЪКАЕШИ** ; **КЛЪНЖ**, **КЛЪНЕШИ** : **ЗАКЛЪНЖ**, **ЗАКЛЪНЕШИ** : **ЗАКЛИНАЖ**, **ЗАКЛИНАЕШИ** ; **ВЪТМЪ** < *uoid-mi, **ВЪТСИ** : **ПОВЪТМЪ**, **ПОВЪТСИ** : **ПОВЪДАЖ**, **ПОВЪДАЕШИ** ; **ВЛАДАЖ**, **ВЛАДАЕШИ** : **ОБЛАДАЖ**, **ОБЛАДАЕШИ** : **ОБЛАДААЖ**, **ОБЛАДААЕШИ** ; **ОУЧЖ**, **ОУЧИШИ** : **НАОУЧЖ**, **НАОУЧИШИ** : **НАОУЧАЖ**, **НАОУЧАЕШИ** ; **ТВОРЖ**, **ТВОРИШИ** : **ЗАТВОРЖ**, **ЗАТВОРИШИ** : **ЗАТВАРЪЖ**, **ЗАТВАРЪЕШИ** ($-ei-ā-$ > $-ī-ā-$ > $-iā$ > $-Ъ-$ の変化を伴う) ; ただし、次を参照、**ВЪЗЛОЖЖ**, **ВЪЗЛОЖИШИ** に対して **ВЪЗЛАГАЖ**, **ВЪЗЛАГАЕШИ**、**ОУГОТОВАЖ**, **ОУГОТОВИШИ** に対して **ОУГОТОВАЖ** **ОУГОТОВАЕШИ**、**НАСТЖПАЖ**, **НАСТЖПИШИ** に対して **НАСТЖПАЖ**, **НАСТЖПАЕШИ**、**ОМОЧЖ**, **ОМОЧИШИ** に対して **ОМАКАЖ**, **ОМАКАЕШИ** は、二次的不完了体派生語幹に、接尾辞 $-ei-$ > $-ī-$ > $-i-$ の痕跡がない。

1・単・現 **ВИТАЖ**, 2 **ВИТАЕШИ**, **ВЪЛАЖ**, **ВЪЛАЕШИ** 「波まかせに行く」 < *ul- (**ВЛЪКЖ**, **ВЛЪЧЕШИ** < *uel-k* と同系), **ЖЕЛАЖ**, **ЖЕЛАЕШИ**, **КОПАЖ**, **КОПАЕШИ** は、imperfectiva tantum [絶対不完了体] (完了体根源動詞がない) である。

二次的な *verba durativa* [継続相動詞] (不完了体語幹から作る) として、次のものがある — 1・単・現 **БЛНЦАЖ**, 2 **БЛНЦАЕШИ** (**БЛЪШТЖ**, **БЛЪШТИШИ** に対する), **ЛЪТАЖ**, **ЛЪТАЕШИ** (**ЛЕШТЖ**, **ЛЕТИШИ** に対する), **ВАЛЪЖ**, **ВАЛЪЕШИ** (**ВАЛЖ**, **ВАЛИШИ** 「転がす」に対する), **МЪШТАЖ**, **МЪШТАЕШИ** (**МЪШТЖ**, **МЪСТИШИ** に対する), **МЕТАЖ**, **МЕТАЕШИ** (**МЕШТЖ**, **МЕШТЕШИ** 「投げる」に対する), **НЖЖДАЖ**, **НЖЖДАЕШИ** (**НЖЖАЖ**, **НЖАИШИ** に対する)。

現在時制 (3・単 *nek'-e-ti > **НЕСЕТЪ** を参照) と古い未完了過去 (インパーフェクト) (3・単 *nek'-e-t > **НЕС-Е** を参照) であったが、後者はアオリストとして再解釈を受けることになる。これら二つの非完了時制の共通起源については、§. 19 参照。

7. ラテン語の bene (benē), longē 型の副詞は、古い所格形に起源を持つ **ЗЪЛЪ, ДОБРЪ, ЛЮТЪ** 型の副詞とは同系関係を持たない。このことは、第二次口蓋化の例 — **ГОРЪЦЪ, КРОТЪЦЪ, СЛАДЪЦЪ, ТЛЖЪЦЪ** — から明らかである。

8. ロシア語の二音節不定詞と比べる場合、次のことを考慮しておかなくてはならない。始原的な語末アクセントは、語根短母音の不定詞に残っている — 例、местѣй=**МЕСТИ**, вѣстѣй=**ВЕСТИ**, нестѣй=**НЕСТИ**, плестѣй=**ПЛЕСТИ**。Cf. セ・ク мѣсти, вѣсти (**ВЕЗЖ, ВЕЗЕШИ** と同系), нѣсти, плѣсти (この短上昇アクセント [˘] は、アクセントの一音節前進を示す)、また チ mĕsti, vĕsti (**ВЕДЖ, ВЕДЕШИ** と同系), vĕzti (**ВЕЗЖ, ВЕЗЕШИ** と同系), nĕsti, plĕsti (アクセント直前音節における長音の発生を証するもの) も。スロ miest', viest', viezt', pliest' も、同様のことを示しているが、このことは、ウクライナ мѣсти, вѣсти, вѣзти, нѣсти, плѣсти の、アクセント位置が、スラヴ祖語のものではないことを表している。逆に、セ・ク мòħи=**МОШТИ**, пèħи=**ПЕШТИ**, тèħи=**ТЕШТИ** ; チ tĕci, pĕci ; スロ piect', tiect' ウクライナ мочѣй, печѣй, течѣй は、ロシア語の мочь, печь, течь が、アクセント的に見て、より新しいものであることを証明している。長母音を持つ不定詞、例えば、**ПАСТИ** = セ・ク пãсти, ꙗу-пãсть, **ЛѢСТИ** = ꙗлезть, **КРАСТИ** = Се・Крãсти, ꙗкрасъ においては、アクセントは、スラヴ祖語期にすで不定詞語尾前にあった。

9. 例、女性指標にも転化した、一括多数性指標 H₂ (§. 24 参照) は、

かつては、被限定語ではなく、限定語（同格語 [apposition]、形容詞）にのみ付加されたのである。このことを示しているのが、中・複 *ūdhar divyāni* 「神の乳房」型の古代インド語の構文であり、 H_2 の継承である（§. 3 参照）、この中性複数語尾 *-i* は、形容詞にのみ付加される。名詞が、かつてのその（限）定語に常に一括多数性指標 H_2 を含むような場合、そのような名詞が、女性名詞としての再解釈を受けたのである。

10. ウムブリア方言で、語尾 *-ōm* は、*-um* になったかもしれない。しかし、ラ 複・属 *deum* 「神々の」からは、ラテン語の古い複数属格語尾が、*-ōm* であるか *-om* であるかは、決定できない。ラテン語では、*-ōm* は短縮して、*-om* > *-um* になっているからである。

11. Cf. *u* 語幹、*i* 語幹の形容詞では、男性、女性間の差異がないゲルマン諸語 — 例、ゴ 男・女 *hardus* 「硬い」、中 *hardu* ; 男・女 *hrains* 「清潔な」 < **hrain-i-s*, 中 *hrain* < **hraini*。単数女性に別の形を持つ、古代インド語やギリシャ語の *u* 語幹、*i* 語幹形容詞の方が、より新しいタイプのものである — 例、ギ 男 *ῥδύς* 「甘い」、女 *ῥδεῖα* < **ῥδεF-ι-α* < **svēd-eu-i-H_2* ; 古イ 男 *svādúḥ*, 女 *svādvī* < **svēd-u-i-H_2* (女性名詞の接尾辞 *-i-* については、§. 27 参照)。この二分法（有生と無生）は、印欧語の始原的な疑問代名詞にも関わっている — ギ 男・女 *τίς* < **kʷ-i-s*, 中 *τί* < **kʷ-i-d*, ラ 男・女 *quis*, 中 *quid*。

12. さらに次を参照、ギ *ὅσῑτος* 「穀物、穀類」、複 *τὰ σῑτα*, ラ *iocus* 「冗談、しゃれ、娯楽」、複 *ioca*, *clīvus* 「傾斜、勾配、丘」、*clīva*, また、同じく、*στόροζ*, 複 *στοροζὰ*, *γόλος*, *голосὰ*, *γόροδ*, *городὰ*, *лес*, *лесὰ*, *луг*, *лугὰ*, *хлеб*, *хлебὰ* (ただし、ブ 単 *крак*, *рог* に対する、複 *кракὰ*, *рогὰ* は、起源的には、古い双数形である)。Cf. *блѣст* と *лѣсто*, *лѣсти* と *лѣстὰ*。集合多数性から、女性単数への変化につ

いては、ギ $\kappa \acute{\alpha} \lambda \alpha \mu \omicron \varsigma$, 古高ド halm, ラト saĩms 「穀草の茎」
 < *k'olHm-o-, 古ブ **сѡама** < *k'olHm-e-H₂, ゴ 男 laufs,
 古高ド 女 loupa 「ひさし、軒、陰のある場所、夏に蓄えた家畜の冬用
 樹葉の小枝」のような形が、証明している。印欧語の、原則として女性であ
 る樹木の名称において、接尾辞 -o- と -ā- < -eH₂ の間で揺れがあ
 るときに、より古いのは、明らかに、o 語幹の形の方である — 次例
 参照、ギ $\phi \eta \gamma \acute{\omicron} \varsigma$, ドーリス $\phi \acute{\alpha} \gamma \acute{\omicron} \varsigma$ 「オークの木」, ラ fāgus
 「ブナ」 < *bhāg-o-, ゴ boka 「ブナ」 < *bhāg-ā ; ラ quercus
 「オークの木」 < *perk'-o-, 古高ド forhe 「松」 < *perk'-ā 。
 樹木の名称における、集合多数性名詞とそれに対応する有生（活性）類名詞
 の対立は、初めは、樹木の果実と樹木自体を区別するものであった — ギ
 $\eta \kappa \acute{\epsilon} \delta \rho \omicron \varsigma$ 「西洋スギ」と $\tau \grave{\alpha} \kappa \acute{\epsilon} \delta \rho \alpha$ 「西洋スギの実」,
 $\eta \kappa \acute{\epsilon} \rho \alpha \omicron \omicron \varsigma$ 「桜の木」と $\tau \grave{\alpha} \kappa \acute{\epsilon} \rho \alpha \sigma \alpha$ 「さくらんぼ」,
 $\eta \pi \rho \omicron \upsilon \mu \nu \omicron \varsigma$ 「スモモの木」と $\tau \grave{\alpha} \pi \rho \omicron \upsilon \mu \nu \alpha$ 「スモモ」,
 ラ 女 pirus 「梨の木」と pira 「梨」参照。単数の意義の中性 o
 語幹の形も、集合多数性名詞を基にして、さらに後に作られたのである —
 例、ギ $\tau \grave{\alpha} \kappa \acute{\epsilon} \delta \rho \omicron \nu$ 「西洋スギの実」, $\tau \grave{\alpha} \kappa \acute{\epsilon} \rho \alpha \omicron \omicron \nu$
 「桜」, $\tau \grave{\alpha} \pi \rho \omicron \upsilon \mu \nu \omicron \nu$ 「スモモ」, ラ pirum 「梨」。ただし、
 全ての印欧語においてではない。スラヴ諸語では、果樹とそれに対応する果
 実の名称は一致している — 例、ブ круша 「梨の木、実」, сл
 ива 「スモモの木、スモモ」, череша 「セイヨウミザクラの木、実」。
 このような名詞の場合、いくつかの他の -a 語尾女性名詞の場合と同様、
 ブルガリア語では、副詞 много をおくことができる — мног
 о круша, много ябълка, много мечка (多
 数の熊)。

13. 天の水分（露）を絞り出す石、すなわち、製粉所（製粉器）[ブ м
 елница] の原型（主・単 жръны, 生 жрънѣве [石臼、挽き
 臼] と 古イ grāvan-「ソーマを挽き砕く石」の同系関係については、上

を参照)と雷神がその敵を打ち砕く武器である稲妻〔*б мълния*〕との関連性については、次の語の共通の語根も、これを証明している — *мльньи* < **ml̥-dh-n-*, 古*б mealde*「稲妻」, 1・単・現 *мелъ*, 2 *мелешн*, 不 *млъти*, 古アイスランド *myln*「火、稲妻、天の火」, 古アイスランド *Mjöllnir*〔ミョッルニル〕「神トールが世界の蛇を打ち破るときの大槌(ハンマー)」, *млатъ* < **mol-to-*「大槌(ハンマー)」。「二羽の鷲が合い戦って、白い泡を吹き出す」(*два орла се бият, бяла пяна пушат.*) (水車とそれが挽く粉)といったブルガリアの謎かけも参照。鷲(水車)は、ブルガリア民間信仰によれば、雷雲の告知者でありかつその先導者であり、一方、白い泡のように流れ出す大量の粉は、大地が穀物を産み出すべく大地を肥沃にする天の水(分)の隠喩である。〔訳注、神トール(ソール)は、スカンジナビア神話の主要神の一。雷と嵐と豊饒の神。巨人と怪物からの、神々と人々の守り手。戦闘用のハンマーで武装した赤毛の勇士として画かれる — БСЭ 等による〕

14. 原始スラヴ的発想では、虹は、大地が豊饒の水を受けた、つまり天(天の雨)が母なる大地を肥沃にしたことの印である;ブルガリアの諺、「雨降って、お天動様の熱ければ、悪魔の奴の嫁取りだ」(*Дъжд вали, слънце грей, дяволът се жени.*)は、天と地の、天界の婚礼を祝う遠い昔の異教の祭の余韻を残したものであり、ロシア語の虹の名称 *радуга* あるいは *весёлка* もこれに起源を持つ〔訳注、*весёлка*「虹」は、ロシア方言 — プスコフ、スモレンスク州等 — *Словарь русских народных говоров, вып. 4*〕。

15. 双数(本質的には、古い共同格)二個の単語を含む、古代インド語の構文 *dvandva*〔並列合成語 *copulative compound*〕(この名称は、主・対 *дъва*, 生 *дъв-о-ю* と同系の **du-o-* の重複語幹を含んだものである)は、極めて興味深い — 例、*Mitrā-Vāruṇā* 「ミトラとヴァル

ナ」, *dyāvā-prthivī* 「天と地」, *uṣāsā-nāktā* 「朝と晩」(訳注 34 参照)。

Mitrā-Vāruṇā, *dyāvā-prthivī*, の本源的な意味は、「と(一緒に)ミトラ、と(一緒に)ヴァルナ」(*Митра с, Варуна с*)、「と(共にある)天、と(共にある)地」(*небето с, земята с*)であった — *Mitrā* 「ミトラとヴァルナ」, *dyāvā* 「天と地」のような、*dvandva* の、いわゆる省略形 (*elliptical dvandva*) [訳注、常時並び挙げられる名詞の一方が略される場合 — 辻直四郎、サンスクリット文法、p.226、岩波全書、1976] は、古典的な古代インド語文法の観点からすれば双数であるが、双数の始原的共同格的用法、あるいはまた、同じことであるが、共同格の始原的双数用法に起源を持つものである。

16. 物主形容詞(所有と起源の形容詞)も、接尾辞 *-in-* を以て作られる。次例参照、ラ *haedinus* 「山羊の」 < *haedus* 「小山羊」, *bovinus* 「牛の」 < *bōs*, 属 *bovis* 「牛」, *fāginus* 「ブナの木」 < *fāgus* 「ブナ」, ゴ *staineins* 「石の」 < *stains* 「石」, 古高ド *guld in* 「(黄)金の」(cf. ゴ *gulth* 「(黄)金」); ゴート語の、単・属 *meina* 「私の」, *seina* 「自分の」 の原形から作った、物主代名詞 *meins* 「私の」 < **mīn-*, *seins* 「自分の」 < **sīn-* も参照。接尾辞 **-инъ** の付いた古代ブルガリア語の物主形容詞については、§. 27 参照。短い *i* は、ギリ *φῆγινος* 「オークの木」 < *φηγός*, ドーリス *φᾶγός* 「オークの木」, *ἄνθρωπινος* 「人間の」 < *ἄνθρωπος* 「人間」, **ЖЕЛѢЗЪНЪ** < **ЖЕЛѢЗО**, **МѢДЪНЪ** 「青銅の」 < **МѢДЪ** に立証される。

引用文献

Н. Д. Андреев. Из проблематики индоевропейских ларингалов. — Доклады и сообщения института языкознания Академии наук СССР, XII, 1959.

М. Бахтин. Творчество Франсуа Рабле и народная культура Средновековья и Ренессанса. М., 1965.

В. В. Иванов, В. Н. Топоров. Исследования в области славянских древностей. М., 1974.

E. Benveniste. Origines de la formation des noms en indo-européen. Paris, 1935.

E. Benveniste. "Être" et "avoir" dans leurs fonctions linguistiques. — Bulletin de la société Linguistique de Paris, LV, 1960.

K. Brugmann. Grundriß der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen. 2 Aufl. Straßburg, II, I, 1906.

A. Gaters. Indogermanische Suffixe der Komparation Demunitivbildung. — Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen, LXXII, 1954.

W. Havers. Eine syntaktische Soderstellung griechischer und lateinischer Neutra. — Glotta, XIV, 1925.

P. Kretschmer. Das nt-suffix. — Glotta, XIV, 1925.

H. Kuhn. Ablaut, *a* und Altertumskunde. — Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen, LXXI, 1954.

J. Kuryłowicz. *ə* indoeuropéen et *h* hittite. In : Symbolae grammaticae

in honorem J. Razwadowski. Crakoviae, I, 1927.

J. Kuryłowicz. L'apophonie en indoeuropéen. Wrocław, 1956.

A. Leskien. Der Ablaut der Wurzelsilben im Litauischen. — Abhandlungen der Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften, IX, No. 4, 1884.

E. Lewy. Zum Dual und zum Toharischen. — Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen, XLV, 1913.

A. Martinet. Le couple *senex-senātus* et le "suffix" -k-. — Bulletin de la Société linguistique de Paris, LI, 1955.

E. Sapir. Indo-European Words for "tear". — Language, XV, 1939.

J. Schmidt. Die Pluralbildung der indogermanischen Neutra. Weimar, 1889.

W. Streitberg. Der Genitive Pluralis und die baltisch-slavisches Auslautgesetze. — Indogermanische Forschungen, I, 1892.

N. Trubetzkoy. La forme slave du nominatif-accusatif singulier des thèmes neutres en -n-. — Mémoires de la Société de linguistique de Paris, XXII, 1922.

N. van Wijk. Der nominale Genitiv Singular im indogermanischen in seinen Verhältnis zum Nominativ. Zwolle, 1902.

訳 注

1. 古代ギリシャ語は、東ギリシャ方言と西ギリシャ方言に大別され、前者には、イオーニア・アッティカ方言 (Ionic-Attic)、アルカディア・キュプロス方言 (Arcado-Cyprian)、アイオリス・レスボス・テッサリア (Aiolis-Lesbos-Thessalia) の方言群、ボイオーティア方言 (Boiotia) が、また、後者には、北西ギリシャ方言 (Lokris, Phokis, Delphoi, Aitolia 等の方言)、ドーリス方言 (Korinthos, Argolis, Lakonia 等のペロポネーソス半島より、Melos, Thera, Kreta, Rhodos 等のエーゲ海南部の諸島の方言) が数えられるという。なお、本書の記述に出てくる、「イリアス」と「オデュッセイア」(BC 9 世紀) の作者とされる「ホメーロスの言語は、イオーニア方言とアイオリス方言との混淆体に多少アルカディア・キュプロス方言の語彙を含んだものであって、西ギリシャ方言の要素は皆無である」という (高津春繁、印欧語比較文法、岩波全書 ; 同、比較言語学、同全書 ; 同、比較言語学入門、岩波文庫 等による)。

2. 本書では、古代インド語なる用語が使われている。古代インド語は、古代インドの文学語で、これは、ヴェーダ (Veda) 語と古典サンスクリット (Sanskrit) 語に大別され、前者は、リグヴェーダを最古とし、ウパニシャットの最古層を最新とする聖典文学の言語で、紀元前千年以前より紀元後数世紀までの時代に属するものであり、また古典時代の古代インド語たるサンスクリット語は、紀元前 4～5 世紀に文学語として固定したが、次第に日常会話語より遊離し、ために変化しなかったが、これと並存して日常会話語としてのプラークリット語があった、とされる (高津春繁、同書による)。

古代イラン語は、二つの言語によって伝えられ、一つは、古代ペルシャ帝国の言語で、諸王が残した碑文の楔形文字 (BC 520-350) によって、もう一つが、古代ペルシャ語とは異なる方言に属するアヴェスタ聖典の言語 (最古層は BC 1000-600、その他は BC 500-300)、とされる (高津春繁、同書による)。

紀元前4・3世紀、イタリア半島に行われていたイタリア語派の言語は、ラテン・ファリスキ方言（ラテン語はこれに属する一小方言群）、オスク・ウムブリア方言等に分類される、という（高津春繁、同書による）。

3. Cimbri。紀元前一千年紀中期に、ユトランド半島北部に居た北ゲルマン民族。前2世紀末、チュートン人と共に南下。BC 102年、ローマに移動、北部イタリア全土を占めたが、BC 101年、ローマ軍マリウス（Gaius Marius, BC 157-86）将軍によって打ち破られた（Б С Э 及び Б ъ л г а р с к а е н ц и к л о п е д и я による）。

4. 訳注 2 参照。

5. スラヴ祖語では、一般に、語末では、語中とは違った変化の発生が認められることがある。例えば、語末閉音節（非破裂子音 -n-, -s- 前）では、早くから、a, o 母音は、拡散性（diffuse）を発達させた（例、単・主 dōros > dōrus, 複・対 dōrons > dōruns）。また、長い二重母音（diphthong と diphthongoid）は、一般的には、かなり早くから短縮傾向を持っていたが（例、ēi > ei, āu > au, ār > ar 等）、語末（鼻子音前）の短母音は、逆に長母音化している。このような長母音化は、通常、緊張性の拡散音、つまり u, i の母音に発生するものであったが（例、複・対 dōruns > dōrūns, gostins > gostīns）、方言によっては、このような傾向が -ens > -ēns にも広がったのである。複・対 [nozi-ans > nozi-ens > nozi-ēns > nozi-ē > nozi-ě > **НОЖ-ѣ** [古代ロシア] に対して、古代ブルガリア語、つまり古スラヴ語では、このような長母音化は起こらず、nozi-ens > nozi-e > **НОЖ-а** となっている — なお、nozi-ans > nozi-uns > nozi-ins > nozi-īns > ***НОЖИ** とはならない。-ans > -uns のような拡散性の発達よりも、嬰音調（sharp）の i に後続する変音調（flat）の音（a, u）の円唇性喪失（嬰音調性強化）傾向（例、iu > ii, ia > ie 等）の方が早かったからである（Г. А. Хабургаев, Старославянский язык, Просвещение, М., 1986 等に

よる)。

6. 現代イラン語の一。「現代イラン語は、現代ペルシャ語、クルド語、コーカサスのオセト語、アフガニスタンのアフガン語、バルチスタンのバルチー語及び、パミル高原に行われているいくつかの弱小の言語よりなる」(高津春繁、比較言語学、比較言語学入門による)。

7. 訳注 1 参照。

8. ドナウ川右岸支流のサヴァ (C a v a) 川流域をいう。ベオグラード — ザグレブ — リュブリャナを通っている。

9. セルビア・クロアチア語は、ロシア語の что (= what, that) に相当する代名詞のどれを使うかに従って、シトー (што) 方言、チャ (ча) 方言、カイ (каj) 方言に分かれる。セルビア・クロアチア語の大部分は (セルビア、ヴォエヴォヂナ、ボスニア、ヘルツェゴヴィナ、モンテ・ネグロ、またダルマチア、スラヴォニアの大部分、そして北西クロアチアの一部)、シトー方言が占めるが、チャ方言とカイ方言は、クロアチアに広がり、前者はアドリア海沿岸地域及び諸島、後者はシトー方言に次いで大きな方言であり、北西クロアチアで行われ、クロアチアの首都ザグレブはカイ方言である。さらにまた、シトー方言は、かつての Ћ (ѣ) の反映の仕方によって、エ方言群、イエ方言群、イ方言群 (例、дед, река; дје д, ријека; дид, рика) に分かれる。カラジッチ (Вук Караџић, 1787-1864) は、ユーゴスラヴィアの中心部のシトー方言 (いわゆる新シトー方言 новостокавские говоры) の担い手 (セルビア、モンテ・ネグロ、クロアチア人) の民謡、俚諺、説話等のフォークロアの言語を標準語の規範とするよう提案したが、ここに、新シトー方言を基礎にした今日のセルビア・クロアチア語が成立するのである。しかし、今日の言語情勢は、政治によって大きく左右されかねない複雑な環境にあると言えよう (Славянские языки, Из-во М ос. ун., 1977; М. Степановић, Савремени српскохрватски језик I, Научна књиг

а, Београд, 1981 等による)。

10. 発生的には、過去時制（厳密には、完了形）であるが、現在の意味で用いられる動詞。完了形で現在時を表す動詞は、ギリシャ語やラテン語にも見出されるが、特に顕著なのは、ゲルマン諸語であり、ここでは、古い現在形をゲルマン祖語の時代に失い、古い強変化過去形を新しい現在形として用い、過去の意味を表すにはこれに基づく新しい弱変化形を用いる。近代英語の *can, dare, may, must, ought, shall, will* や近代高地ドイツ語の *dürfen, können, mögen, müssen, sollen, wissen* 等がこの類である（イエスペルセン、半田一郎 訳、文法の原理、岩波書店 及び 現代言語学辞典、成美堂 等による）。

11. 訳注 1 参照。

12. 訳語については、泉井久之助、ラテン広文典（白水社）の、「最上級を、比較の相手を省いて用いるとき、比較を絶する意味があつて、これを揚意的な用法 (*elativus*) という」に依った。

13. ギリシャ語動詞の受動相アオリストには、第Ⅰ、第Ⅱの別があるが、動詞幹に時称接尾辞 $-\theta\eta-$ ($-\theta\epsilon-$) を付したものは第Ⅰ受動幹（例、 $\pi\alpha\iota\delta\epsilon\upsilon-\theta\eta-$ [$-\theta\epsilon-$])、これに代えて $-\eta-$ ($-\epsilon-$) を当てるものが第Ⅱ受動幹（例、 $\gamma\rho\alpha\phi-\eta-$) である ($-\theta\eta-$, $-\eta-$ は、直接法と不定詞で、 $-\theta\epsilon-$, $-\epsilon-$ は、接続法、希求法、分詞の時に使用される) : 例、現・Ⅰ・単 $\pi\alpha\iota\delta\epsilon\acute{\upsilon}\omega$, Ⅰアオ・受動・Ⅰ・単 $\acute{\epsilon}-\pi\alpha\iota\delta\epsilon\acute{\upsilon}-\theta\eta-\nu$; 現・Ⅰ・単 $\gamma\rho\acute{\alpha}\phi\omega$, Ⅱアオ・受動・Ⅰ・単 $\acute{\epsilon}-\gamma\rho\acute{\alpha}\phi-\eta-\nu$ (田中美知太郎、松平千秋、ギリシャ語入門、岩波全書 等による)。

14. ラテン語文法は、伝統的に、動詞を第Ⅰ活用から第Ⅳ活用までの四種に分類している。例、第Ⅰ $am-\bar{o}$ (Ⅰ・単), $am-\bar{a}-s$ (Ⅱ・単、現在幹 $-\bar{a}-$), $am-\bar{a}-re$ (不定詞) ; 第Ⅱ $mon-e\bar{o}$, $mon-\bar{e}-s$, $mon-\bar{e}-re$; 第Ⅲ $reg-\bar{o}$ ($rege + \bar{o}$), $regis$ (現在幹 $-\bar{e}-$), $reg-\bar{e}-re$; 第Ⅳ $ven-i\bar{o}$, $ven-\bar{i}-s$, $ven-\bar{i}-re$ (呉茂一、ラテン語入門、岩波全書 ; 田中秀央、初等ラテン語文典、研究社による)。

15. 訳注 14 参照。

16. 印欧語の一。トラークア語と同系関係にあった。プリュギア人は、紀元前1200年前後にトラークアの地より、イリュリア人の大移動に押されて、小アジアのプリュギアに移動し、これがヒッタイト帝国崩壊の原因となった。二つの年代の異なる碑文 — ギリシャ文字を多少改編した文字を使い、紀元前7～6世紀の古プリュギア語と紀元後最初の数世紀のもので、ギリシャ文字を使う新プリュギア語 — が知られるという（高津春繁、印欧語比較文法による）。

17. プラエネステー (Praenestē) — Latium の町 (現 Palestrina) — の前6世紀の碑文 (高津春繁、印欧語比較文法 参照)。

18. ムラデーノフ (Стефан Младенов) によれば、ブルガリア語史は、主として、格変化形 (曲用) の維持ないしは衰退の程度によって、三つの時期に分けられる。すなわち、文献出現 (9世紀) 以前のブルガリア語前史の時期に次いで、古代ブルガリア語期 (9～11世紀 старобългарски период) — 極めて豊かな曲用を有する時期 ; 中世ブルガリア語期 (12～15世紀 среднебългарски период) — 次第に格変化形が統合・簡略化され、古代ブルガリア語文法に反するような写字生の誤りが顕著になってくる時期 ; 新ブルガリア語期 (14世紀以後 новобългарски период) — 古い曲用体系の片鱗だけが残る時期である。

今日の方言区分については、古代ブルガリア語の **Ѣ** の反映の仕方に基づいて、二大方言が区別される。ブルガリア北部のニコポリ (Никопол) ブルガリア、ルーマニア国境線であるドナウ川に面する町) とギリシャのサロニキ (ブルガリア名 ソールン Солун) を南北に結ぶ線以東の方言をブルガリア東部方言 (източнобългарски диалект)、この線以西のものブルガリア西部方言 (западнобългарски диалект) という。概して、前者では (特に南部では)

Ѣ > 'а (ă)、後者では **Ѣ** > е が普通であるが、両方言とも全

て一様と言うわけではない (Стефан Младенов, История на българския език, София, 1979, Издателство на българската академия на науките [Geschichte der bulgarischen Sprache, 1929] による)。

19. エンゲルスの「家族、私有財産および国家の起源」(村井康男、村田陽一 訳、大月書店)では、イロクォイ人、ギリシャ人、ローマ人の「フラトリア」が詳しく研究されているが、そこでは、「兄弟団体」と訳されている。同一種族中の二氏族またはそれ以上の氏族が、社会的、宗教的機能を負って有機的に連合したもので、氏族よりは大きく、種族よりは小さい組織。例えば、セネカ・イロクォイ種族の八氏族は、動物の名をつけた二つのフラトリア (第一フラトリア — 1 くま、2 おおかみ、3 ビーバー、4 海がめ; 第二フラトリア — 5 しか、6 しぎ、7 さぎ、8 たか) に包括されていた。エンゲルスは、「これらのフラトリアは、たいてい種族が最初に分裂して行ったもとの氏族を表していることがわかる。というのは、氏族内部の通婚が禁止されているのだから、各種族は、自立的に存続できるためには、少なくとも必ず二つの氏族を含まなければならなかったからである」と書いている。同じフラトリアの諸氏族は互いに兄弟であり、他のフラトリアの諸氏族に対して従兄弟である。

20. ラテン語 *lëvir* 「夫の兄弟」より。子のない寡婦を、亡夫の兄弟と再婚させる習慣。群婚の名残である逆縁婚制は、氏族制のもとで広く行われていたが、コーカサス、中央アジア、ユダヤ人等の間では、氏族制崩壊期、階級社会に入っても長期にわたって残存した (Большая Советская Энциклопедия 等による)。

21. ギリシャ語動詞は、現在語幹と語根の相関関係によって、八種類に分けられる。この内、第Ⅰ類、第Ⅱ類、第Ⅲ類は、正則類と呼ばれる。その他は、語根と現在幹とのかなりの不統一のため非正則類とされる。この場合、語根は、アオリストに最もよく現れる。

第Ⅰ類 — 現在語幹と語根の一致するもの: 主として、母音幹 $\lambda\acute{o}\omega$,

νικᾶω 等であるが、子音幹 γράφω 等もある。

第Ⅱ類 — 唇音 (β, π, φ) に終わる語根を持つ動詞、現在幹では τ を加える: βλάπτω (語根 βλαβ-, 末 βλάφω) 等。

第Ⅲ類 — 前舌、後舌子音、鳴子音に終わる後根を持つ動詞、現在幹は、歴史的には、j を付加したもの: γυμνάζω (γυμναδ-j-ω), πράττω [πρασσω] (πραγ-j-ω) 等。

第Ⅳ類 — 語根母音の延長によって現在幹を作るもの: λείπω (λιπ-, ｱ έλιπον) 等

第Ⅴ類 — 現在幹に鼻音接中辞を持つもの: λαμβάνω (λαβ-, ｱ έλαβον) 等

第Ⅵ類 — 語根に -σκ- を加えた現在幹を持つもの: διδάσκω (διδαχ-, ｱ έδιδαξα) 等

第Ⅶ類 — 単純語幹と -ε- (-η-) による拡張語幹が交替するもの: γίγνομαι (γεν-, γν-), 末 γενήσομαι 等。

第Ⅷ類 — 異なる語根から作るもの (補充法): λέγω, ｱ ελπινον; έσθίω, ｱ έφαγον 等。

(А. Э. Козаржевский, Учебник древнегреческого языка, Из-во Мос. ун-та, 1975 による)。

22. 「オフリドの使徒」は、12世紀末の中世ブルガリアの文献。キリール文字によるもの若干、多くはグラゴール文字による。112葉の羊皮紙に書かれる。新約聖書からの抜粋を含む。ロシア人スラヴィストであるグリゴロヴィチ (В. И. Григорович) によって、オフリド (現在、マケドニア・ギリシャ国境近くのオフリド湖北の町) で発見された。現在、モスクヴァに収蔵。クリバーキン (С. М. Кульбакин) によって、出版された。

クリメント (840-916) は、キュリロス、メトディオスの高弟であり、モラヴィア伝導使節のメンバーであり、885 (886) 年、ブルガリアに戻ると、

主教（эпископ）に叙任された。クリメントの仕事の一つは、ギリシャ語からの教義の旺盛な翻訳活動であったが、今一つ特筆すべきは、彼自身による50に上る作品の執筆活動である。その中でも特に有名なのが、正教会の英雄、活動家達に対する一連の「礼賛」ものである。

（Българска Енциклопедия, Издателство на българската академия на науките, София, 1974 及び В. Д. Андреев, История българской литературы, М., Высш. школа, 1987 による）。

23. 訳注 12 参照。

24. $\pi\omicron\lambda\lambda\acute{\alpha}$ は、 $\pi\omicron\lambda\acute{\upsilon}\varsigma$ 「多くの」の中性複数。 $\acute{\alpha}\pi\acute{\omega}\lambda\epsilon\tau\omicron$ は、 $\acute{\alpha}\pi-\acute{\omicron}\lambda\lambda\acute{\upsilon}\mu\iota$ 「滅びる、死ぬ」の中動相第Ⅱアオリスト3人称単数形。なお、ギリシャ語は、シグマ〔s〕の要素を包摂するアオリストを、第Ⅰアオリストないしはシグマ・アオリストと呼び、この要素のないものを第Ⅱアオリストと呼んでいるが、本書で言われている、古代ブルガリア語の第Ⅰシグマ・アオリスト（1人称単数で、 χ あるいは ς 要素のあるの：例、**БЪР-Δ-Χ-Ъ**, **НЪ-ς-Ъ**）、第Ⅱシグマ・アオリスト（1人称単数で、 $\omicron\chi$ の要素が現れるもの：例、**НЕС-ΟΧ-Ъ**, **ПАД-ΟΧ-Ъ**）は、歴史的にはどちらもシグマの要素を含むアオリストの別であり、シグマを含まないアオリストは、単純アオリストと呼称されている、ことに注意しなければならない。序でながら、ラントは、アオリストを、語根アオリスト（root-aorist）とシグマ・アオリスト（sigmatic aorist）に分け、後者を、s アオリスト、 χ アオリスト、 $\omicron\chi$ アオリストに分類しており（Horrace G.Lunt, Old Church Slavonic Grammar）、木村彰一氏の「古代教会スラヴ語入門」（白水社）も亦同じである。また、これまでソヴィエトで発行されて来た一連の古スラヴ語（старославянский язык）やロシア語歴史文法（историческая грамматика русского языка）の教科書類の場合は、単純アオリ

スト (простой аорист) とシグマ・アオリストを分け、さらにこれを、古 (非テーマ型) シグマ・アオリスト (сигматический аорист старого [архаического] типа [нетематический]) と新 (テーマ型) シグマ・アオリスト (сиг. аор. нового типа [тематический]) に分けている。そして、前者は不定詞語幹に直接シグマの要素を付加するものを (1 人称単数で χ 及び ϵ の要素の現れるもの)、後者はテーマ母音 ($\omicron$) を介してシグマの要素の要素が現れるもの ($\omicron\chi$ のもの) で、これは比較的遅い時期にアナロジー的に現れてくるものだという解説が普通である。こうした点で、ラリンガル・モデルによる本書の解釈とは大きな差異が存在する。

25. 紀元前二千年紀から紀元前一千年紀にかけて、小アジア (アナトリア) に行われていた印欧語 (アナトリア語派) には、ヒッタイト語、パラー語、(楔形文字) ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語、ミリア語、リュディア語、の七つが確認され、このうち、ルウィ、象形文字ルウィ、リュキア、ミリア語は、年代こそ違え言語的には密接な関係にあることから、アナトリア語派の下位区分として「ルウィ語群」を形成する、という。また、ヒッタイト語以外は、互いに共通する言語特徴があることから、「西アナトリア語群」という下位区分を立てることもあるという (大城光正、吉田和彦、印欧アナトリア諸語概説、大学書林; 高津春繁、印欧語比較文法 による、なお、後者では、「ルヴィア語」である)。

26. 訳注 3 参照。

27. 訳注 2 参照。

28. 現代ブルガリア語 ДОБЫТЪК は「家畜 (集合)」の意。

29. 訳注 19 参照。

30. Δημιουργός, Δημιουργός 「職人、創造者、造物主」の意。プラトンは、「ティマイオス」篇で、世界をつくる巨人にこの名を与えた。世界を無から創造したキリスト教の神とは違い、このデミウル

ゴスは、世界をつくるに当たっての手本（アイデア）と材料（場所）とがあらかじめ与えられていた。プラトンのこの神話的宇宙発生論は、彼以前のイオニアの自然哲学が唯物論的な宇宙を展開していたのと比べて対照的である（森宏一、古在由重編、哲学辞典、青木書店 等による）。

31. 逐語的には、「ゼウス（神）の子供達」の意。ギリシャ神話に登場するゼウスとレダの子、カストルとポリュデウケスのこと。前者は馬術の、後者は拳闘術の達人として知られ、後、天のふたご座になったという。本来、スパルタの地域神であったが、歴史時代に入って、スパルタ国家の守護神となった（Б С Э 等による）。

32. 西部ブルガリアの都市キュステンディールとその州。西は、ユーゴスラヴィアに接する。古くからの温泉保養地で、2世紀からローマ人達を利用した（Б ъ л г а р с а е н ц и к л о п е д и я による）。

33. 1人称単数の代わりに、1人称複数を用いるのは、「我」を拡大して権威、威厳を示す場合と、逆に、自己を聴衆や読者、あるいは自分の一党の後ろに隠すことによって、これらの人々との共同責任において主張する意味あいの場合がある。前者を「威厳の複数」、後者を「抑遜の複数」（*plūra lis modestiae*）という（泉井、上掲書等による）。

34. 印欧祖語期より、新しい概念を表す方法として合成語が盛んに造られたという。そして、合成名詞には、「母と父」（古イ *mātārā-pitārā*）のように、二つ以上の語を単に並置した並列合成語（*dvandva*, *copulative compound*） — 原注 15 参照 — と第一要素が第二要素を限定する限定合成語（広義の *tatpuruṣa*, *determinative compound*）等があり、限定合成語はさらに名詞的合成語と動詞的合成語に分かれ、前者が、サンスクリットで言うところの *karmadhāraya* (*appositionally defined compound* 同格限定合成語) — 例、ギ *ἰατρού-μαυτίς* 「医者で予言者」、古イ *rāja-putrā* 「王の子、王子」（§. 28 参照）等 — であり、後者は、ラ *iū-dex, -dic-is* 「裁判者」（*dīc-ō* 「言う、示す」）のように、第二要素に動詞語根あるいはこれを *e/o* によって拡大したものが

用いられる、という（高津春繁、印欧語比較文法；辻直四郎、サンスクリット文法、岩波全書 等による）。

また、status cōstructus（構成位相）とは、シリア語をはじめとするセム諸語で、属格構造を表す時に取る名詞の特別な形式をいう。例えば、「王の本」という表現において、シリア語では、sefrā「本」と malkā「王」を組み合わせて、sefar malkā となるが、このような場合の、sefar をその名詞 sefrā の構成位相という（大阪外国語大学アジア・アフリカ講座高階美行先生による）。

35. 訳注 34 (§. 27) 参照。

36. ウェリウス・フラクス (Verrius Flaccus) — アウグストゥス (Augustus = Gaius Julius Caesar Octavianus, BC 63 -AD 14) 及び ティベリウス (Claudius Nero Tiberius, BC 47 -AD 37) 時代のローマの文法家。カトー・ケンソーリウス (Cato Cēnsōrius) — Marcus Porcius Cato (BC 234 -149)。ローマ最古の散文、「農業論」の著者。ローマの作家、政治家。ローマ貴族の中の名門ではなく、homo novus (新しい人) であった。第二ポエニ戦争に参加した。執政官 (cōnsul)、観察官 (cēnsor) を歴任したが、この時の厳格さから、cēnsōrius の異名を取った。ロンゴス (Λογγος) — 2～3世紀のギリシャの物語作家。牧歌物語「ダフニスとクロエ」の作者 (Краткая литературная энциклопедия, Том 3, Из-во Сов. Энци., ; И. Х. Дворецкий, Латинско-русский словарь, Из-во Русский язык М., 1976 等による)。

37. 訳注 25 参照。

38. Wulfila (Ulphilas) [< wulfs 「狼」の指小形] (311—383)。

西ゴート人、341年コンスタンチノポリスで、アリウス派（キリストの神性を否定した）の主教として、「ゴート人の主教」の位階に任ぜられて後、ゲルマン人の間で活発な伝導活動を行なった。ゴート語アルファベットの創始者であり、ギリシャ語よりゴート語への聖書の翻訳者であると考えられて

いる（研究者の中には疑義を持つ者もあるが）。この翻訳は、ゴート語の最古の文献資料である（BCΘ 及び 高津春繁 印欧語比較文法 等による）。

あとがき

本書がソフィアで発行（2700部）されたのは、1982年であるから、発行から数えてすでに、11年余が経過しようとしている。そして、私がナウカ書店を通して本書を手にしたのは、1985年2月のことである（序でながら、これは、日本では、木村彰一氏の「古代教会スラヴ語入門」の初版が白水社より発行された年月でもある）。怠け者の私は、本書を入手した時点から、その内容の重要性に気がついていない訳ではない。それからしばらくの間、私は本書を本棚に放り込んだまま、その存在については忘れていた。1984年には、旧ソヴィエトのグルジア、トビリシ大学から、ヤコブソンの序言のついたガムクレリゼ、イヴァノフの共著「印欧語と印欧人」（5000部）が発行され、その内容に圧倒され、かつまた半ば呆気にとられつつ、時々ページをめくっているときに、本書の存在を思い出したのである（1986－1987年頃のことである）。やがて、「序」に述べた、京都大学の山口巖先生の1989－1990年の論文発表を迎えるのである（それに先立って、同先生の「類型学」についての草稿を見る機会を得たのであるが）。

日本で発行されている言語関係の月刊誌の類には、度々高名な言語学者による「能格言語」についての発言が見られるにもかかわらず、そこに「活格言語」についての記事を目にすることはないように思われる。「活格言語」という訳語タームの登場は、同先生の論文が最初であろう。こうして、それまでも噂には聞いていたが、一向に記憶に残らなかったクリモフ（Г. А. Климов）他ソヴィエトが産んだ、偉大な言語学者の名前も、嫌が上にも私の脳裏に刻み込まれることになった。このように考えてみると、あまりにも大きな欠陥を持った政治・経済体制としてのソヴィエト体制（敢えて、社会主義体制とは呼ばない）は崩壊したが、ソヴィエト言語学は、紆余曲折を経つつも、巨大な不滅の業績を残したことに気付くのである。それは何故か、このことを深く問うことは、今日流行のマス・メディア的論調とは全く逆に、今までにもまして一層重要な意義を持っているように思うのである。

古スラヴ語関係の書物は、日本ではともかく、欧米やスラヴ語圏では、数も種類も豊富であるが、本書ほど私を熱中させた本はない。それは、恐らく、形が、形式間の関係が意味 (signifié) をもって記述されていく魅力であろう。ソシュール以来の言語学が、客観性と科学性をより一層重視する方向に進んできたこと自体は、科学の方向性一般の傾向として当然のことであろうが、言語を自然科学的な対象としてのみ、ないしはそれと同様に扱う風潮を、私はかねてから違和感を持って眺めて来た。そうした点からみれば、これは大変興味深い形態論である。

上述のように、本書の発行以来すでに11年が経過しているが、その内容は未だ十分に有効である。本書は、ガムクレリゼ、イヴァノフの「印欧語と印欧人」のような大部な著書ではないが、小さな容量の中に、近年における印欧語や古スラヴ語研究の成果がよく凝縮されており、そうした意味で類書にない魅力を持っているように思う。ただ、ドブレフ氏の印欧語構想には論争点も多く、構想の全てが認知されている訳ではない。そのため、山口先生からは、論証されていないものについては、注を付した方がよいという御助言をいただいたが、原稿募集規定により、最初原稿の大幅な変更はできないため、新たな注については断念せざるを得なかった。この課題の遂行については、別の機会（例えば、「ロシア・ソビエト研究」誌等）に譲りたい。なお、本書の副題「語幹論」の語幹は、原語幹、ないし原（語）基とも言うべきものであるが、ここでは、あえて一般的な用語法に則ったことを断わっておきたい。

今回、1990年から始まった学術研究双書のシリーズの一冊として出版する機会を与えてくださった学術出版委員会の諸先生方、また、抽選とはいえ、御自分の「ルーマニア語史概説」の出版に代えて私に出版の機会をお譲りくださった伊藤太吾先生、またセム語（訳注 34）のことを教えてくださった高階美行先生、そして佐藤光夫氏をはじめとする附属図書館の関係各位に対して深い感謝の意を表するものである。また、本学大学院修士課程の赤井規晃君（ロシア語学専攻）には校正全般をお願いした。同君の校正内容は特筆

すべきものがあり、印欧諸語について旺盛な好奇心と知識を持った同君の援助がなければ、多くの誤りを見過ごすところであった。特に記して深い感謝の意を表する次第である。

1993年 3 月

著書紹介

イヴァン・ドブレフ・ドブレフ (Иван Добрев Добрев)
 1938年スリヴェン市 (Сливен ブルガリア南西部の都市) に生まれる。1962年より、ソフィア大学に勤務。1984年 博士号取得。1986年ソフィア大学教授。主著に、「古代ブルガリア語文法—語幹論」(Старобългарска граматика, Теория на основите, Наука и изкуство, 1982, София)、「スラヴ祖語子音幹・二重音幹曲用の起源と意義」(Произход и значение на праславянското консонантно и дифтонгично склонение, Издателство Българската Академия на науките, 1982, София)。主論文に、「グラゴール文字を守るために」(В защита на глаголическите писмена, 1969)、「ブルガリア—南方言の古い特徴」(Старинна черта на един южен български говор, 1974)、「印欧語語根の子音構造」(Консонантната структура на индоевропейския корен, 1992) 等がある。

訳 者 紹 介

石 田 修 一 (いしだ しゅういち)

1938年 松山に生まれる。1963年 神戸市外国語大学ロシア学科卒業。1965年 京都大学大学院文学研究科修士過程(言語学専攻)修了。1968年同博士過程中途退学。1968年 香川大学教育学部に勤務。1970年 大阪外国語大学ロシア語学科に転任、1991年同教授。ロシア語学専攻。関係論文:「ロシア語所有パーフェクトについて」(ロシア・ソビエト研究 15号、大阪外大ロシア語研究室、1989)、「類型学的にみたスラヴ語過去時制とブルガリア語パーフェクトの動向」(大阪外国語大学学報 76-1・2号、1988)、「ロシア語史概説(序説) 1-4」(大阪外国語大学学報 77号、1988、同論集 2号、3号、6号、1989-1991)。日本ロシア文学会会員。日本古代ロシア研究会会員。

大阪外国語大学学術研究双書 8

1993年 3月30日発行

訳 者 いしだ しゅう いち
石 田 修 一

発 行 者 〒562 箕面市粟生間谷東8丁目1番1号

大阪外国語大学学術出版委員会

印 刷 所 〒531 大阪市北区中津6丁目13番20号

(株)ア イ ジ イ

I S B N 4 - 9 0 0 5 8 8 - 0 8 - 3

無断転載を禁ずる。

- | | |
|--|----------------------------------|
| 1. レフ・トルストイと革命運動 (1990) | エルヴィン・オーバーレンダー著
法 橋 和 彦 監訳・解説 |
| 2. ロシア語アクセント研究 (1990) | 神 山 孝 夫 著 |
| 3. 社会言語学 (1991) | フリチョフ・ハーガー 等著
乙 政 潤 訳 |
| 4. Dwelling Space in Eastern Asia (1991) | Richard ZGUSTA 著 |
| 5. ラ・アラウカーナ (第一部)(1992) | 吉 田 秀太郎 訳 |
| 6. 私の精神鑑定集 (1992) | 志 水 彰 著 |

